

第Ⅳ章 弥生時代後期～古墳時代前期

はじめに

1. 八里向山遺跡群では第Ⅱ章での報告のとおり、A、C、D、G遺跡から弥生時代終末期・古墳時代前期の遺構が確認されている。この章では、これらを遺跡毎に報告するものである。各節においては、遺構単位に報告するものとし、全体遺構図及び遺跡配置図は第Ⅱ章を参照されたい。発掘調査は樫田氏における精度の高い調査のため、記録・観察等が豊富であり、なるべくそれを活かす形で遺構の報告を主に行うものとする。
2. 土器に関しては、実測可能と思われる遺構遺物に関しては実測を行った。谷部及び包含層資料に関しては、良好な残りのもののみ掲載している。観察表は本章末にまとめて掲載している。
3. 石器に関しては、使用痕跡が観察できたものに関してはすべて図化している。ただし、石錘に関しては、住居内から出土しているものの当該時期に比定できるかどうかは不明であり、第Ⅲ章でまとめて報告している。なお、水晶に関しては、八里向山遺跡群ではどの尾根からもみつかっており、A遺跡 SI02 出土以外、どの時期につくものであるかは確定できず、玉関連資料になるかも半成品の出土もなく不明である。よって、写真のみによる掲載で留めることを了承されたい。なお、石材の表記は、第Ⅲ章に準拠するものである。観察表は本章末にまとめて掲載している。
4. 鉄製品に関しては、林大智氏に実測図の作成を行っていただき、所見に至るまでご教授いただいている。

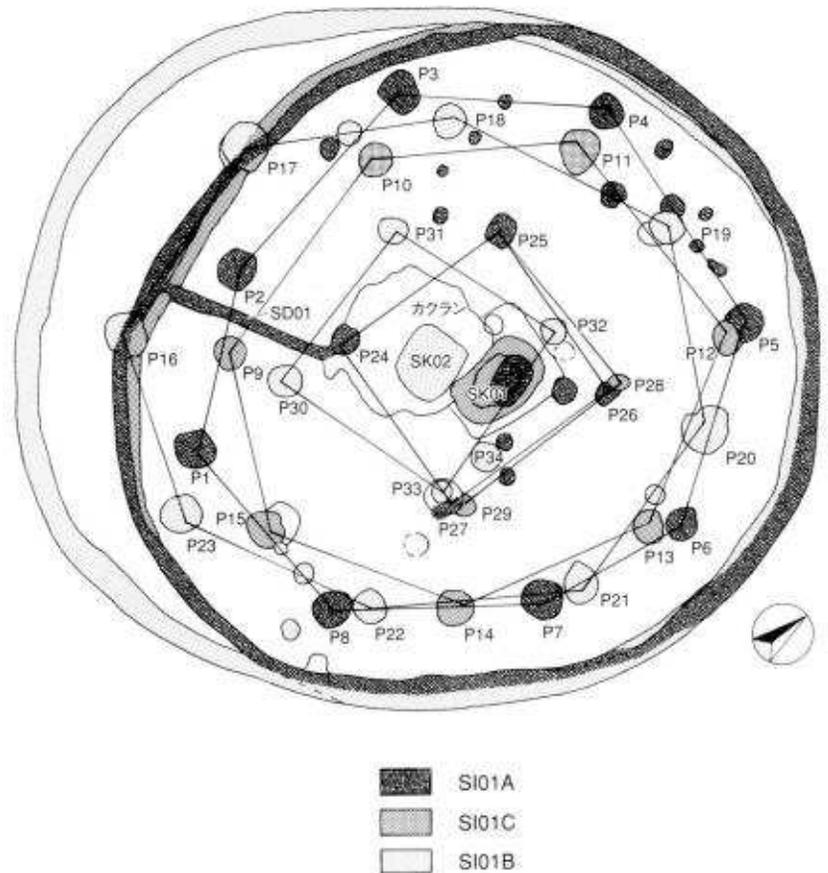
第1節 A遺跡の遺構と遺物

第1項 竪穴住居跡

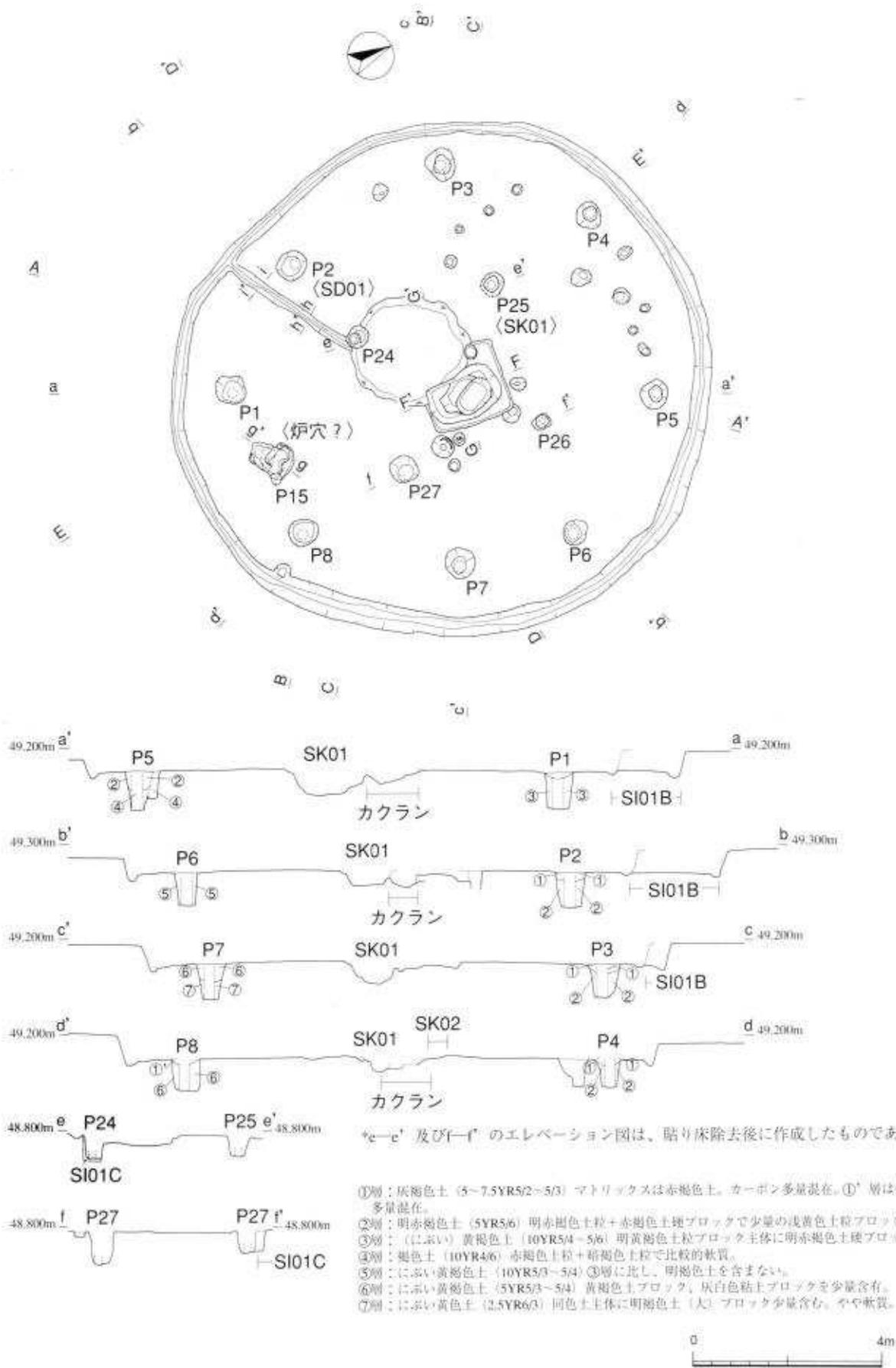
1. SI01 (第48図～第63図)

(1) 遺構

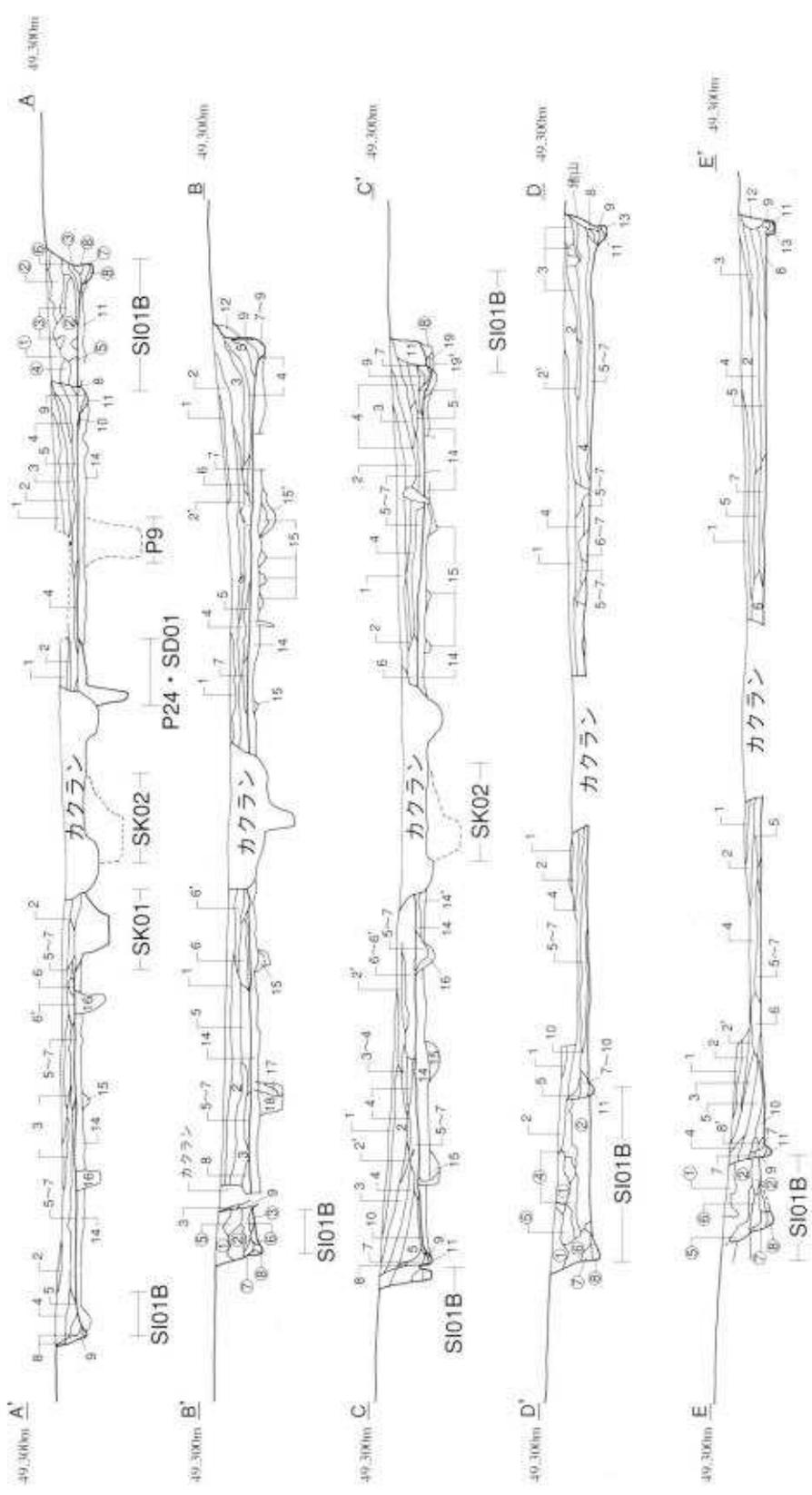
遺跡内の北東端に位置している。全形は楕円形を呈し、主軸長13.2m、短軸長11.2mを測る。遺跡群の中でもっとも大きい竪穴住居跡である。現況からくぼみがみられ、円形状に耕作土は堆積しており、南東側には半月状に粘土ブロックを伴う地山質に近い土が検出していた。そこで、セクションベルトを楕円の長軸に設定し、それに応じて横軸、斜軸を4本設定した。掘削を進めるに従い、焼失家屋であること、張り床除去後、三回立て替えていることが判明した。第48図は、SI01の全体の配置図を示したものである。築造順序はSI01B→SI01C→SI01Aで造られたと考えられる。



第48図 SI01 全体配置図 (S=1/120)

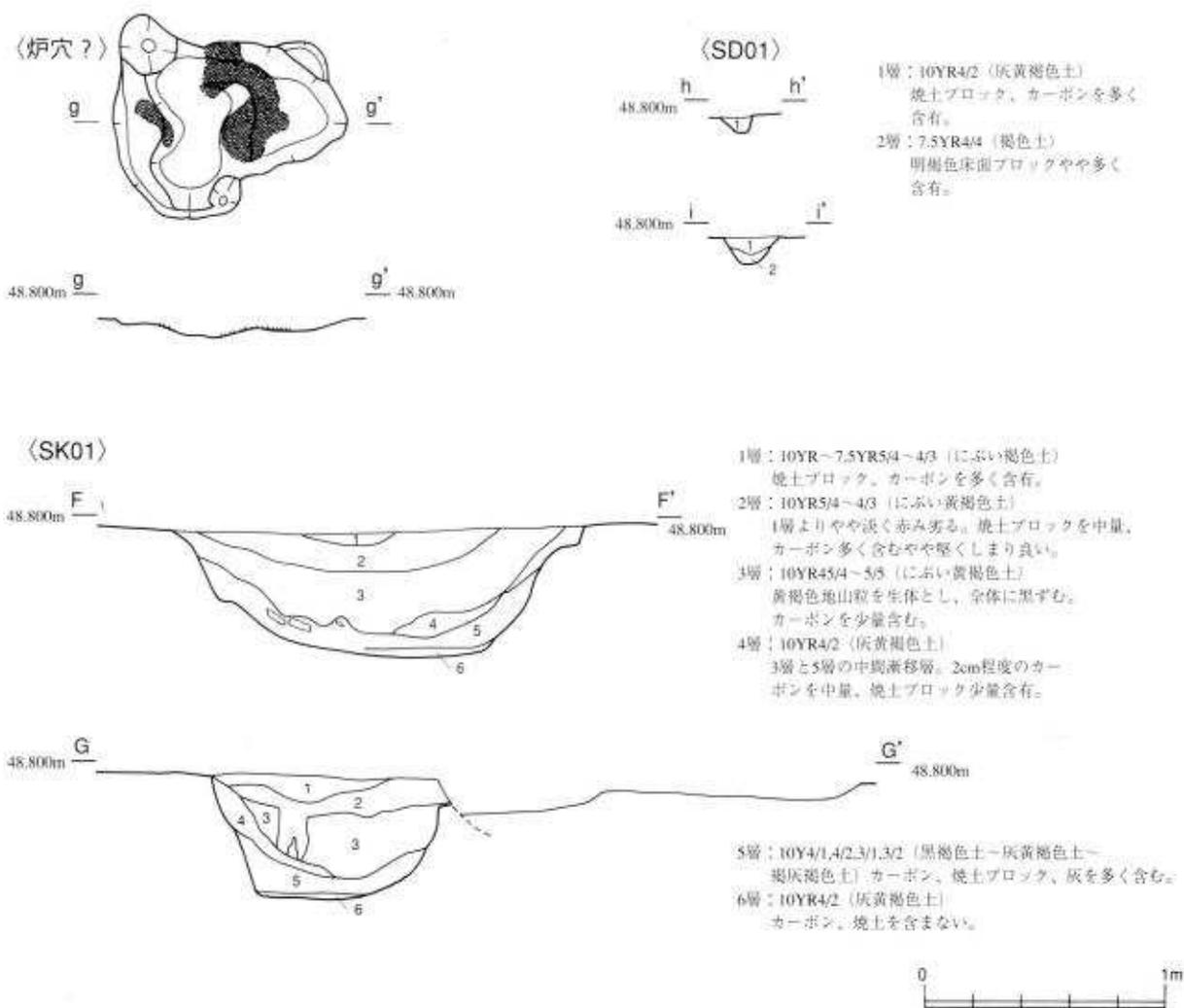


第49図 SI01A・平面・エレベーション図 (S=1/120)



- 1層：深褐色黄褐色土 (10YR4/2) 褐色～黒褐色プロック。土中に少量の黄褐色土が混入している。土質は粘り気がある。
- 2層：黒～暗褐色土 (10YR3/2～3/3) 褐色土が少なく、カーボンを含む。土質は粘り気がある。土中に少量の黄褐色土が混入している。
- 3層：褐色土 (7.5YR4/3) 炭化物全体に少量含有。4層に比しやや多量含有。土質は粘り気がある。
- 4層：(暗)褐色土 (10YR 4/3～3/3) 炭化物全体にやや多量含有。黒褐色～暗褐色土プロックを全体に多く含む。
- 5層：(暗)褐色土 (7.5YR～10YR 4/3～3/3) 4層より黒～暗褐色土プロックがやや多く、炭化物も多量含有。
- 6層：(暗)褐色土 (7.5YR～10YR 4/3～3/3) 堆土粒、硬土プロック多量混入。
- 7層：黒～暗褐色土～灰黄褐色土 (10YR3/2～3/3) 4/2～4/3) 堆土粒、硬土プロック少量及び炭化物・炭化物多量含有。
- 8層：褐色土 (7.5YR4/3) 堆土粒が多く、カーボンを含む。12層に類似。
- 9層：暗褐色土～褐色土 (10YR4/2～4/3) 堆土粒、硬土プロック少量及び炭化物・炭化物多量含有。土質は粘り気がある。土中に少量の黄褐色土が混入している。
- 10層：(暗)黄褐色土 (10YR5/4) 堆土粒、硬土プロック少量及び炭化物・炭化物多量含有。土質は粘り気がある。
- 11層：褐色土 (7.5YR5/4) 土中に少量の黄褐色土が混入している。土質は粘り気がある。
- 12層：(暗)黄褐色土 (10YR5/4) 堆土粒、硬土プロック少量混入。
- 13層：(暗)黄褐色土 (10YR5/6) 堆土粒、硬土プロック主体に黒くしまりが多い。
- 14層：7層のフタ土の混入とともに、5YR5/8赤褐色土、2.5YR7/6明黄褐色土、2.5YR5/8明赤褐色土等の堆土プロックで構成される。(山岳)
- 15層：(暗)黄褐色土～褐色土 (10YR5/4～7.5YR4/6) 掘り方では基本的に14層と同質。堅固な土質の層である。しまりが良く硬質。
- 16層：(暗)黄褐色土 (10YR5/4～7/8) 15層よりやや明るい。堆土粒、硬土プロック少量及び炭化物含有。
- 17層：褐色土 (7.5YR4/6) 堆土粒、硬土プロックを多量含有。
- 18層：7.5YR5/6～7.5YR5/8 褐色土～黄褐色土 (10YR5/6) 堆土粒、硬土プロック少量及び炭化物含有。
- 19層：SI01Bの層 色調はSI01A、Cの層と同じ。ややBの層は褐色土のフタ土の混入が多く見られる。
- 20層：19層より堆土プロックの混入が少なくなり、やや明らめ (15層と同質)。
- 21層：褐色土 (10YR5/6) 比較的均質な堆土土質を主体とする。
- 22層：(暗)黄褐色土 (10YR5/4) 土中に少量の黄褐色土が混入している。
- 23層：黒～暗褐色土 (10YR3/3～3/4) カーボン含有。
- 24層：(暗)黄褐色土 (10YR5/6) 明黄褐色土 (7.5YR5/6) 明黄褐色土 (10YR5/6) 明黄褐色土 (10YR5/6) の堆土プロックが混入。

第50図 SI01土層断面図 (S=1/80)



第51図 SI01A炉穴?平面・エレベーション図,SK01・SD01土層断面図 (S=1/30)

a) SI01A (第49図~第53図)

形態

平面形はやや楕円形で、長軸長 11.2m、短軸長 10.6m を測る。壁周溝は、ほぼ全周、幅は概ね 15 cm~20 cm に収まり、深さは 6 cm~14 cm となっている。床面積は約 98 m² であり、床面は中央がもっとも高く、壁周溝に向かい緩傾斜を成す。主柱は 8 本で、P1~P8 が該当する。柱間寸法は、2.5m~4m と差があるものの、ほぼ八等分した配置である。柱穴は、直径約 60 cm で、深さは、P1・P5 が 80 cm ともっとも深く、残りは、60~70 cm に収まる。P1・P5 が深いのは、ちょうど長軸に沿っていることと関係はあるのだろうか。柱根部分の覆土は、軟質で、カーボンを下底まで含んでおり、掘り方との差は明瞭であった。下底には、円形に著しい硬化がみられる。なお、P5 の柱根下半は空洞になっており、柱根が残存していた可能性が高い。掘り方の覆土は、色調で区分するとさまざまであるが、一貫して地山ブロックの混入がみられる。これらの色調の違いは、柱穴を掘り込む際、地山がどの色調の層まで、達していたかの違いによるものと思われる。支柱穴は、P24~P27 が該当し、SK01 を囲うように 4 本配置されている。柱穴は直径約 40~50 cm で、深さは、P27 が 70 cm ともっとも深く、他の三つは 40~50 cm に収まる。ただし、これらの計測値は張り床除去後の床面からの高さであるため、実際は、主柱穴と同様の深さと考えられる。柱穴の覆土は主柱穴同様で、柱根部分には焼土・カーボンを伴い、掘り方には地山ブロックの混入がみられる。

施設等

第 53 図は焼土・炭化材及び床面遺物の検出状況である。炭化材は、ボロボロで残りが悪かったものの、主に外区に多く残存し、主柱を想定するのは困難であった。部材以外の棒状のものや茅、その他板状のものは、P6

～P7間であつた。橙色の焼土ブロックは、炭化材及び床面出土土器の上に堆積しており、屋根材の焼土化と考えられる。床面の焼結面は暗赤化してあり、極めて堅く、橙色の焼土ブロックは覆わないため、露出状態で焼結したのだろうか。なお、焼土範囲は外区付近まで分布するが、焼結面は支柱穴内に収まっている。火所を示しているのだろうか。炉穴の可能性のあるのは、P15（SI01Cの支柱穴）上面であり、焼結面がみられる。SI01Cの支柱穴の窪みを利用したのであろうか。中央土坑にあたるSK01は、一部攪乱にかかっている。方形の浅い段を持ち、その中央に掘り込みを持つ。覆土1、2、3層は、焼土・カーボンを伴い、覆土堆積層からの流れ込みである二次的堆積層がみられる。5層は、カーボン（木材・建築部材）を含み、焼土・灰を多く含むため、焼失時の一次堆積土と考えられる。4層は3層と5層の中間惨移層である。6層は、カーボン・焼土を含まず、軟質で、焼失前の堆積土と考えられる。SD01は、攪乱に係っており、中央土坑と繋がるものかは不明である。中央から壁周溝に向かって、やや深く掘り込まれている。1層は一次堆積土と考えられ、2層は焼失前の堆積土と考えられる。溝は排湿の意味も備えながらも、住居外に続く溝が確認されないため、間仕切り溝の可能性が高い。床は、暗褐色土をマトリックスとする地山土硬質ブロック主体の貼り床で、5cm～12cmの厚みをもつ。硬化が著しく隆起する箇所は中央部分でみられる。

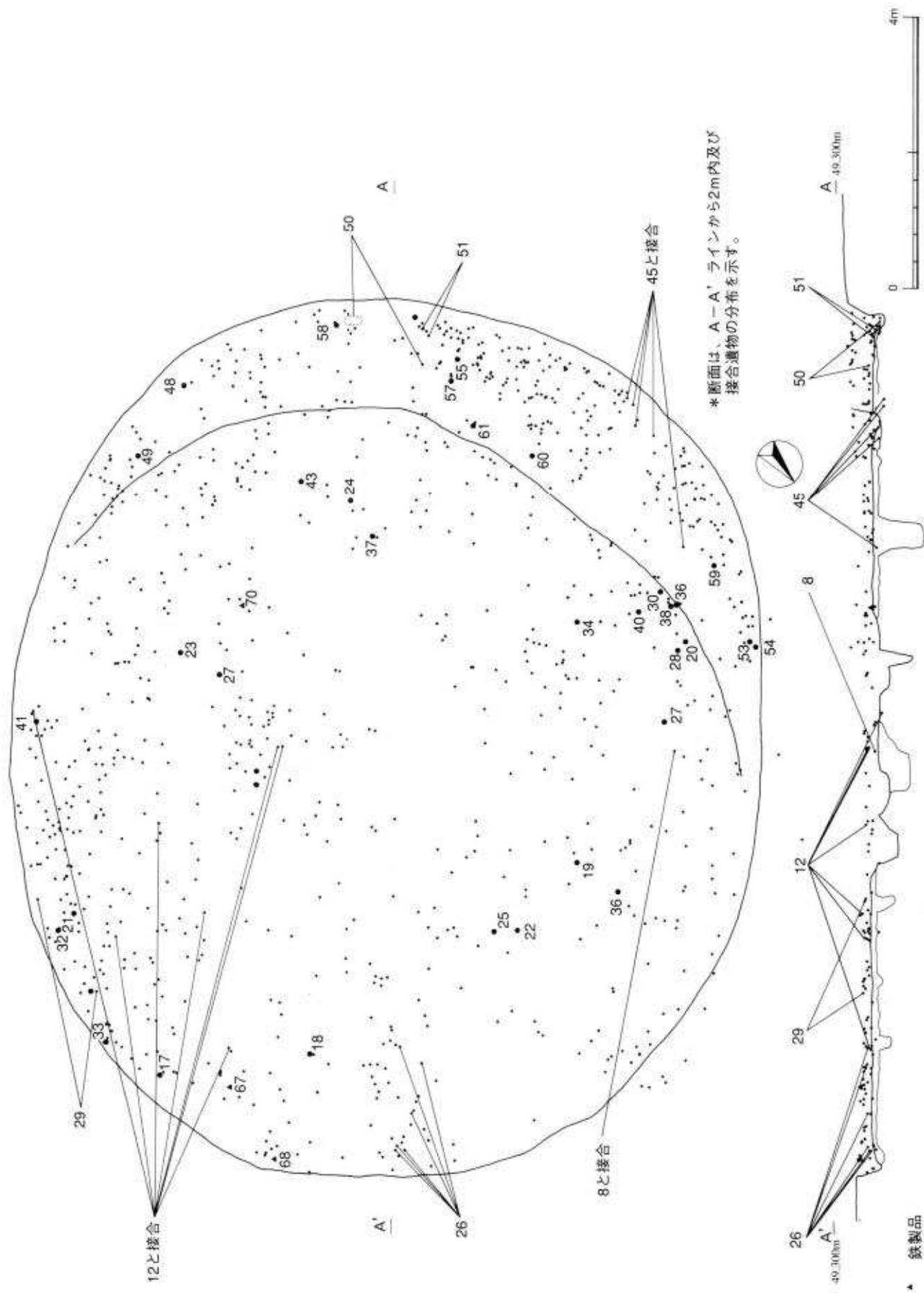
遺物出土状況

覆土遺物は、SI01B範囲に広がる遺物及び耕作攪拌層に伴うと考えられる上層遺物を抜かして、最終段階であるSI01Aより概ね後出のものと考えている。第53図は床面の遺物の状況を示しているものである。ただし、15、7は土器の下に炭化物がみられたため、焼失後の投棄になることをお断りしたい。また床面遺物は脆く、遺物の取上の際に、接合面が欠損し、完全復元できなかったものも多い。床面遺物は一箇所に固まることなく分散しており、鉢13、14はP3の付近の壁周溝で2個体揃っている。高坏11はP1付近の壁周溝に1個体完存し、9、10は坏部みの破片が分散し、P6～P7間に広がる。特殊器台12は、脚部は欠失し、坏部はP4とP6～P7間分散して出土している。ただ、9、12はドットでの取上遺物からも接合遺物が見つかり、分散傾向を示す。完存する甕は、3個体出土している。5はP2付近、4はP7～P8間、復元不可能であった8はP1～P8間で出土している。5は被熱を受けており、土を除去することは不可能であり、現地で図化したものを掲載している。煮炊具である甕が、炉穴跡と考えられる付近から出ていることは興味深く思われる。底部が残存しない3は、P4付近に出土している。小型壺15がP8付近で、P6付近の壁周溝で16が出土している。山陰系甕1は、完全個体とその場で潰れたものと考えられ、その上位には、大型甕2が半分に分れて分散している。この状況が設置していたものが横転した状態を示すなら、山陰系甕は掲載実測図を逆にした状態で、上に大型甕を置く形となる。礫は二箇所に集中し、P3～P4間には5cm～20cm程度の礫が出土し、磨石、敲石がみられる。P6～P7間には、砥石でも大型の部類の62がみられる。被熱を受けた破片が、周囲に散乱する。62は床に設置された「施設」的役割があったものと考えられる。なお、鉄製品が4点出土している。位置が押さえられるものとしては、3点あり、出土地点は炉穴付近で鉄錐、P6付近で不明鉄製品と袋状鉄鑿が出土している。すべて覆土からの出土であり、使用時の位置を示すかは不明瞭である。

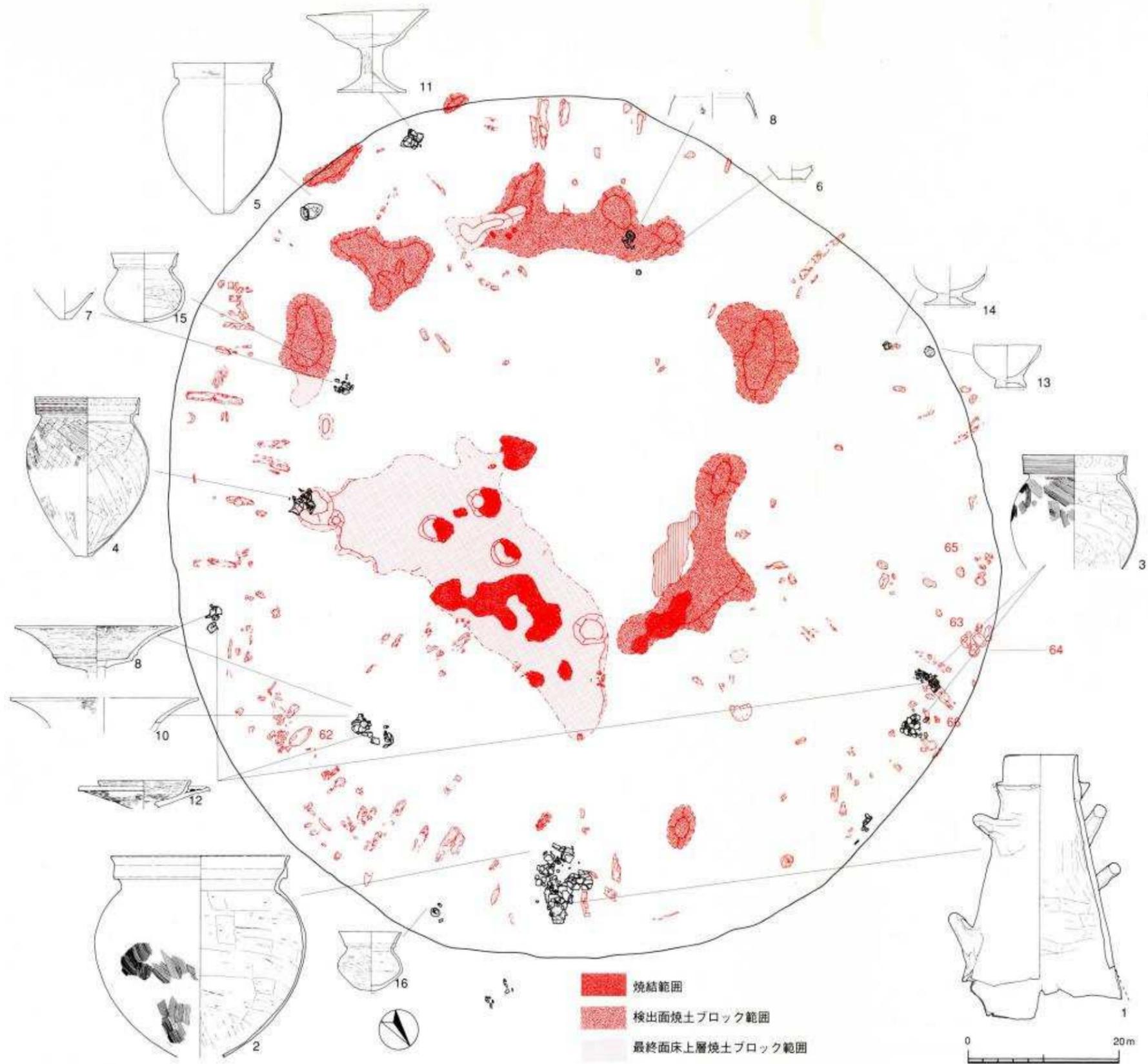
b) SI01C (第54図)

形態

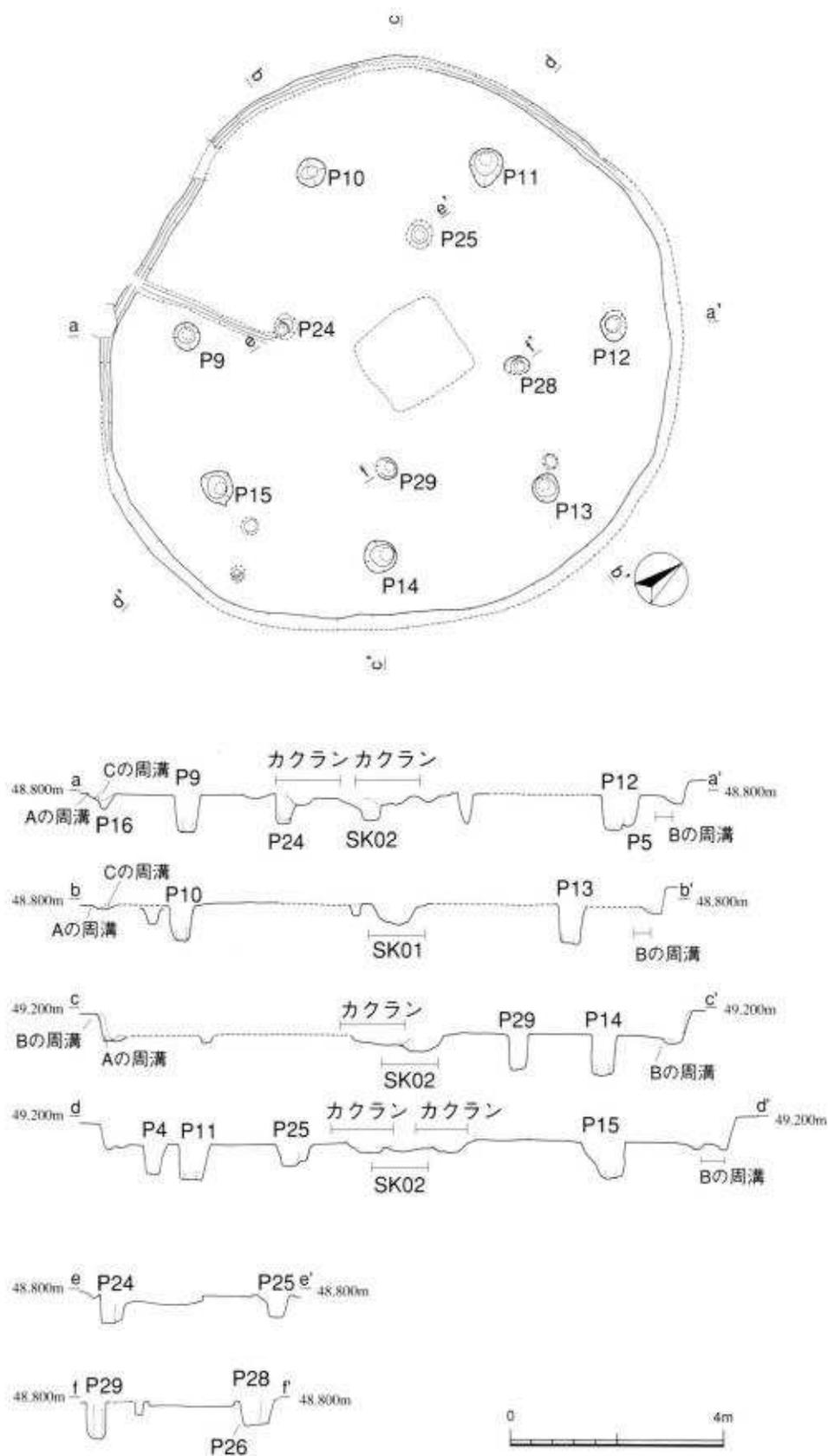
平面形はやや楕円形で、壁周溝はSI01Aと比べると西側がやや中に入る。長軸長11m、短軸長10.6mを測る。壁周溝はほぼ全周、幅はSI01Aにきられてない箇所で概ね20cmに収まり、深さはSI01Aの貼り床面除去後の高さから4cmである。床面積は約98㎡であり、支柱は7本でP9～P15が該当する。柱間寸法は3m～4mと差があるものの、ほぼ七等分した配置である。柱穴は直径約50cm、深さは70～80cmで、P14がもっとも深い。支柱穴はSI01A同様SK01を囲うように4本配置されていたと考えられ、P28、P29が該当し、P24、P25はSI01Aと重複している。柱穴は直径約40cmで、深さはP29が60cmともっとも深く、他は40～50cmに収まる。ただし、これらの計測値はSI01A張り床除去後の床面の高さであり、SI01Cの生活面からの高さは不明である。SI01Aの貼り床が残存した状況でオチコミが確認されたものは、P9、P10、P12、P15である。覆土はSI01A同様の上面覆土を除去すると、5cm程度の整地面（SI01Aの貼り床）が検出した。さらに下層は、全て地山ブロック混じりの覆土で構成される。掘り方と柱根埋土は、軟質か堅緻かで区別ができた。また、柱根下底面には、円形に硬化している箇所がみられた。



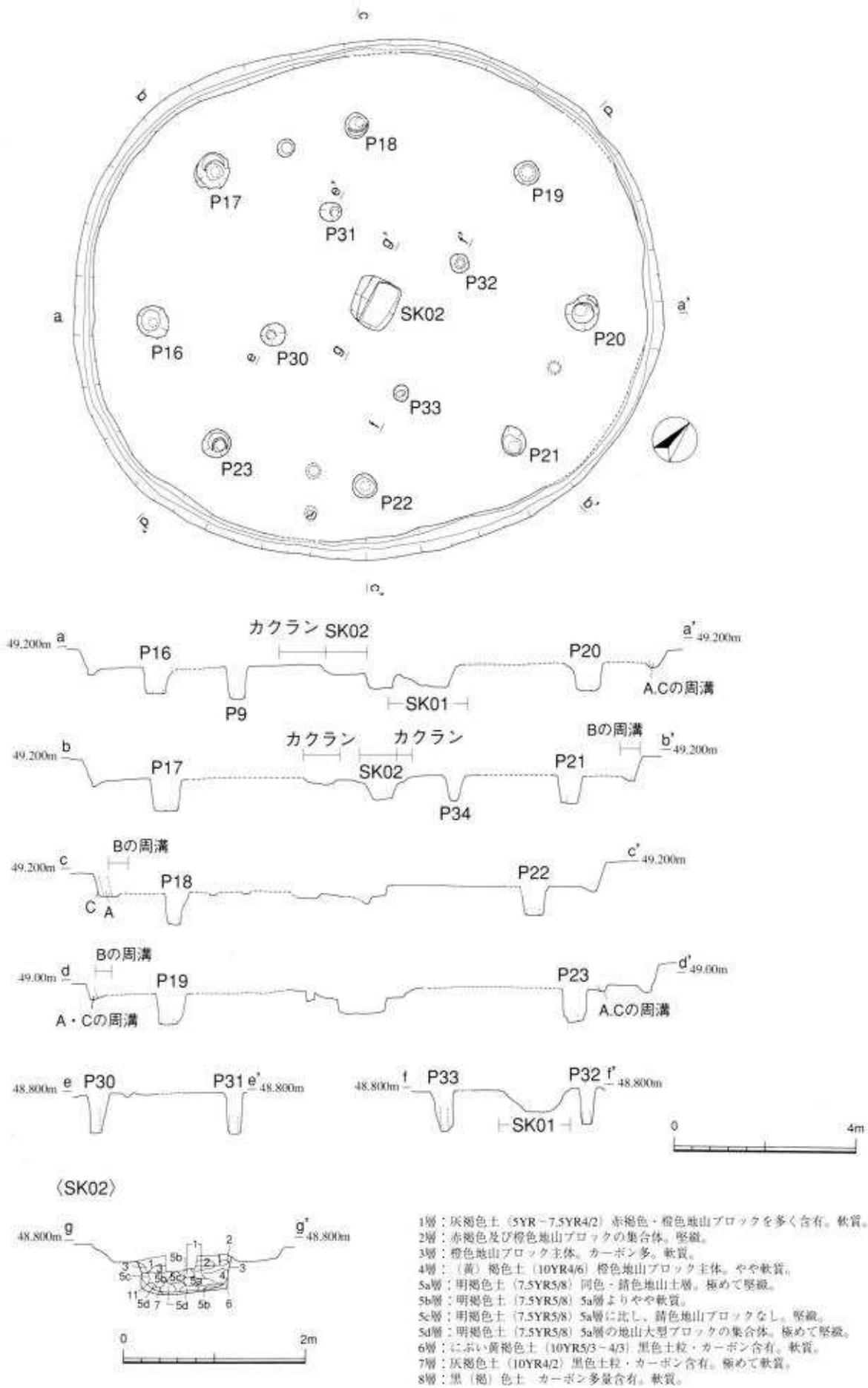
第52図 SI01 遺物出土状況 (S=1/80)



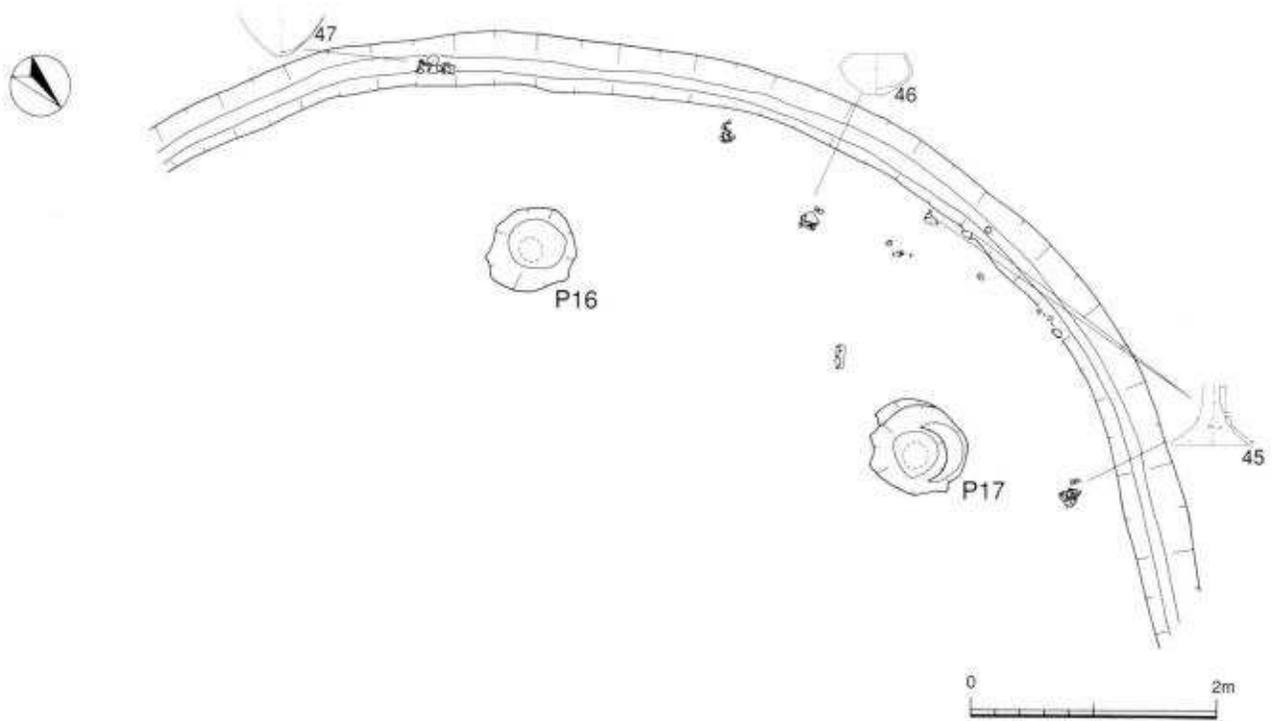
第53図 焼土・炭化材及び床面遺物出土状況 (S=1/60)



第54図 SI01C平面・エレベーション図 (S=1/120)



第55図 SI01B平面・エレベーション図 (S=1/120), SK02土層断面図 (S=1/60)



第56図 SI01B床面遺物出土状況 (S=1/60)

施設等

SI01A とほぼ同一位置であるため、SK01 は SI01C の際から利用されていたものと考えられる。また、SD01 に関しては、SI01C 段階から存在するかは不明である。

遺物出土状況

SI01A と重複しない箇所は、柱穴と一部の壁周溝であるが、遺物は出土せず、この段階の遺物は不明である。

c) SI01B (第55図～第56図)

形態

平面形は楕円形で、長軸長 13.2m、短軸長 11.2m を測り、最大規模である。覆土は地山ブロック主体であり、人為的に埋めたものと考えられる。壁周溝はほぼ全周、幅は SI01A と重複しない南西側で概ね 40 cm に収まり、深さは 10 cm である。床面積は約 114 m² であり、主柱は 8 本で、P16～P23 が該当する。柱間寸法は、3m～4m と差があり、P18～P19 間がもっとも広い。柱穴は直径約 50～70 cm、深さは 60～70 cm である。支柱穴は SK02 を囲うように 4 本配置されていたと考えられ、P30～P33 が該当する。柱穴は直径約 40 cm、深さは 80～90 cm と主柱穴より深く掘り込まれている。ただし、これらの計測値は SI01A 張り床除去後の床面の高さであり、SI01B の生活面からの高さは不明である。柱穴の覆土は SI01A・C の壁周溝にかかる柱穴を除いて、上面は水平に整地されており、掘り方埋土は、SI01C と比較して橙色が強い。柱根埋土は軟質か堅緻かと地山ブロックの混入度合いで区別ができた。また、柱根下底面には、円形に硬化している箇所がみられた。

施設等

中央土坑にあたる SK02 は、攪乱の中に位置する。しかし、攪乱より深かったため残存しており、形状が確認できた。1～5 層は、柱穴埋土と類似した状況を示し、地山ブロックが主体で、人為的に埋められている。6～8 層は、黒色土粒及びカーボンが含有し、軟質であるが、使用時のものかは不明である。貼り床は不明である。

遺物出土状況

第 56 図が床面遺物の検出状況である。実測可能な遺物は 3 個体のみであった。高坏もしくは器台の脚 45 は P17 付近から出土している。鉢 46 はほぼ完形で、P16～P17 間より出土している。甕 47 は、有段口縁の甕で、口縁まで残存したが、脆く復元には至らず、底部のみの図面掲載である。なお、その他の SI01B 範囲に広がる遺物は、耕作攪拌層に伴うものと考えられ、住居につかないものと考えられる。

(2) 遺物 (第 57 図～第 63 図)

a) SI01A 床面出土土器 (1～16)

山陰系甕 (1) 裾部が一部欠失するが、ほぼ復元ができた。口径 12.6 cm、突帯径 17.0 cm、残存高 46.3 cm を測る。把手が二段付くが、上方は同一で、下方は位置がずれる。なお、左側側面には、右側側面に付く位置と同様の高さの部分にケズリ後ナデられた凹凸がある。おそらく把手を接着しようとしたものをやめ、その部分に粘土を足したためであろう。把手は環状の円棒が張付方法で付けられている。外面調整は摩耗が激しくハケ調整が縦方向に施された部分がかすかにみえる程度である。内面も摩耗が激しい。上から 25 cm 程度下は横方向にケズられ、そこから上は突帯付近まで縦方向に強いナデが施されている。煤の付着等の使用痕跡は不明である。

甕形土器 (2～5・7・8) 2 は大型の甕である。有段口縁は、内外面横方向にナデ、下方はやや突出する。体部外面の調整はハケ調整であるが、剥離が激しく、体部上半は不明である。内面調整は、底部付近は斜め上方向に、体部から頸部にかけては横方向にケズられている。内外面には煤の付着がみられない。4、5、8 はいずれも擬凹線を施す有段口縁の甕である。5 に関しては、内外面器壁が荒れており、口縁外面にかすかに擬凹線が施されたのがわかる程度である。内面の調整は、土が除去できなかつたため、不明である。8 は、検出状況では口縁も残存していたが、復元不可能で体部だけの図面になっている。3、4 はもともと良好に残っていたものである。口縁はほぼ直立で、外面には貝もしくは櫛状工具による 5 本一組の条線が面に施される。口縁内面は横方向にナデられた後、指頭圧痕が均等にめぐる。外面体部調整は、斜め方向のハケ調整であり、頸部には横方向にハケ調整が施される。内面は、体部最大径下は急な斜め上方向に、体部最大径から上は、横方向にケズられている。いずれも 5 mm をきる薄い作りの土器である。

高坏形土器 (9～11) 9、10 は坏部のみ残存する。9 の坏部は完存しており内外面丁寧な横方向のナデ調整である。脚部は中実で接合法である。10 は残存率も低く、数値や傾斜角度は不明確である。外面は横方向のミガキ、内面はミガキ調整と思われるが、方向は不明瞭である。11 は完存する唯一の個体である。坏部は内外面ミガキ調整を行い、脚柱部は縦方向に裾部は横方向にミガキ調整、脚内面は横方向のナデ調整である。

結合器台 (12) 受け部に甕の口縁状のものが付く。内外面丁寧な横方向のミガキ調整である。

鉢形土器 (13・14) 13 はほぼ完存し、外面は剥離が激しく調整不明である。内面はナデである。台部外面は、成形時の指頭圧痕が残る。14 は内外面剥離が激しく調整不明である。台部には 13 同様、指頭圧痕が残る。

壺形土器 (6・15・16) 6 は直口壺の底部と思われる。内外面ナデ調整が施され、底面はやや上げ底になる。15、16 は有段口縁の壺である。ほぼ完存している。口縁内外面は横方向にナデ、外面は横方向のミガキ、内面は横方向にケズリ調整が施されている。底部は、15 はやや上げ底であり、16 は平底である。

b) SI01 出土土器

甕形土器 (17～25) 17～21 は擬凹線を施す有段の甕である。口縁は 17、20 がやや外傾するものの、ほぼ直立し、貝もしくは櫛状工具を使用し、4～5 本一組で施されている。口縁内面に指頭圧痕が残るのは 19 のみである。22～25 は無文の有段甕である。内外面横方向にナデ、口縁端部はやや先細りの感はある。

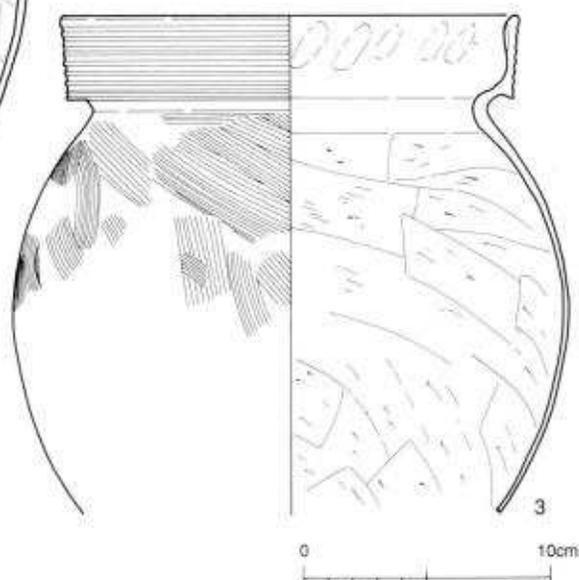
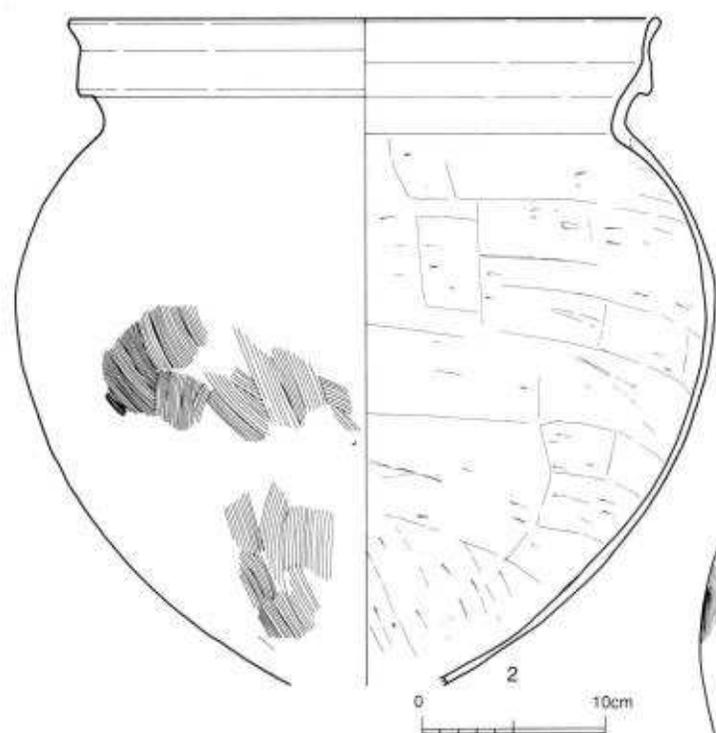
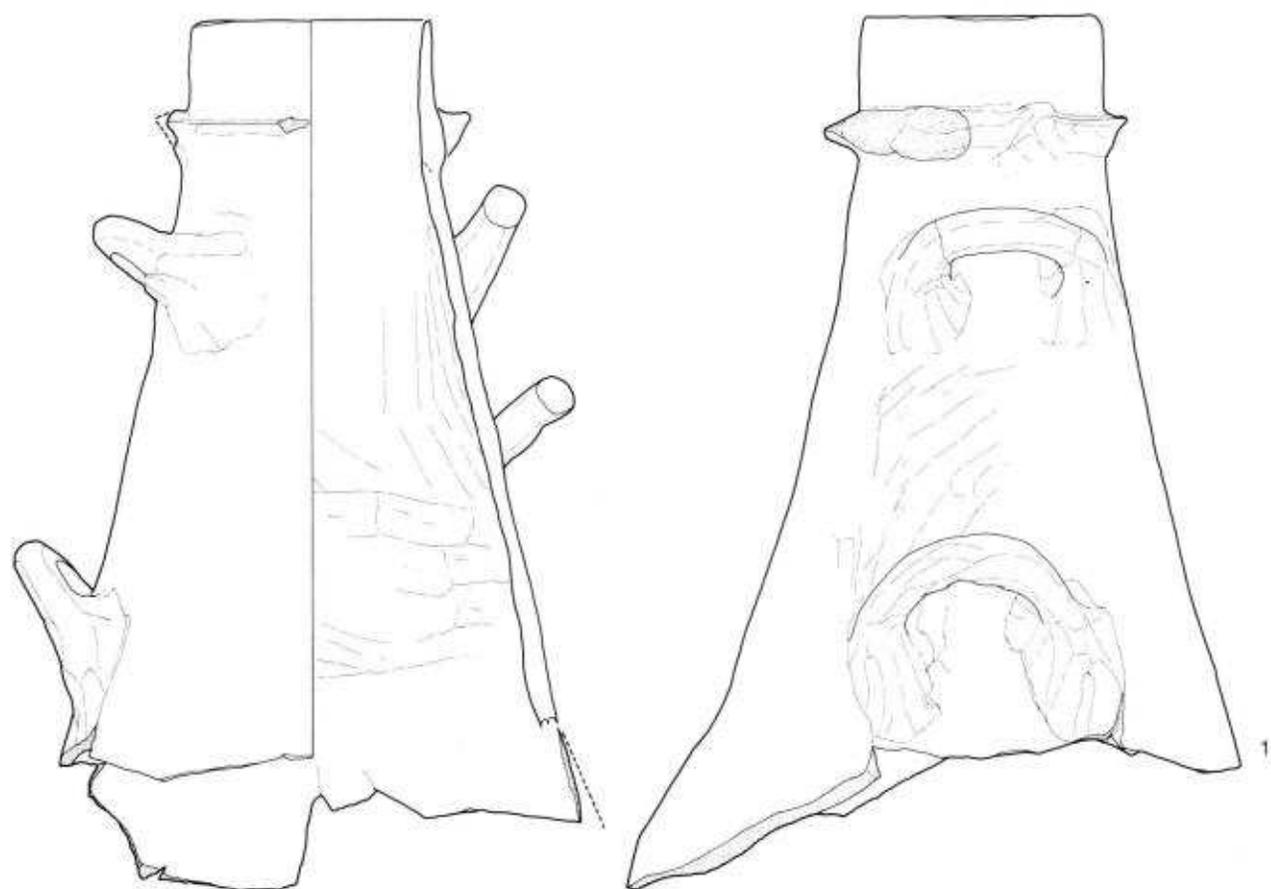
鉢形土器 (26・29・32・33) 26 は碗状の鉢である。内外面剥離が激しく、内面及び底部のみナデ調整であることがわかる。底面は指押さえによりやや上げ底である。29・32 は有段口縁鉢である。内外面剥離が激しく調整不明である。

高坏・器台形土器 (30・31・40～44) 30 は内外面ミガキ調整で赤彩が施されている。31 は碗形の坏部をもつ。内外面の調整は剥離が激しく不明である。40、41、43 は円板充填法で坏部と結合する脚である。外面は縦方向のミガキ調整が施され、40 の内面裾部には横方向のハケ調整が施されている。また、40 は透孔が残存しており、4 方向に穿たれている。44 は中実で接合法である。外面は縦方向のミガキ調整が施される。42 は、脚頂部が残存しないため、器台か高坏かは判断できない。

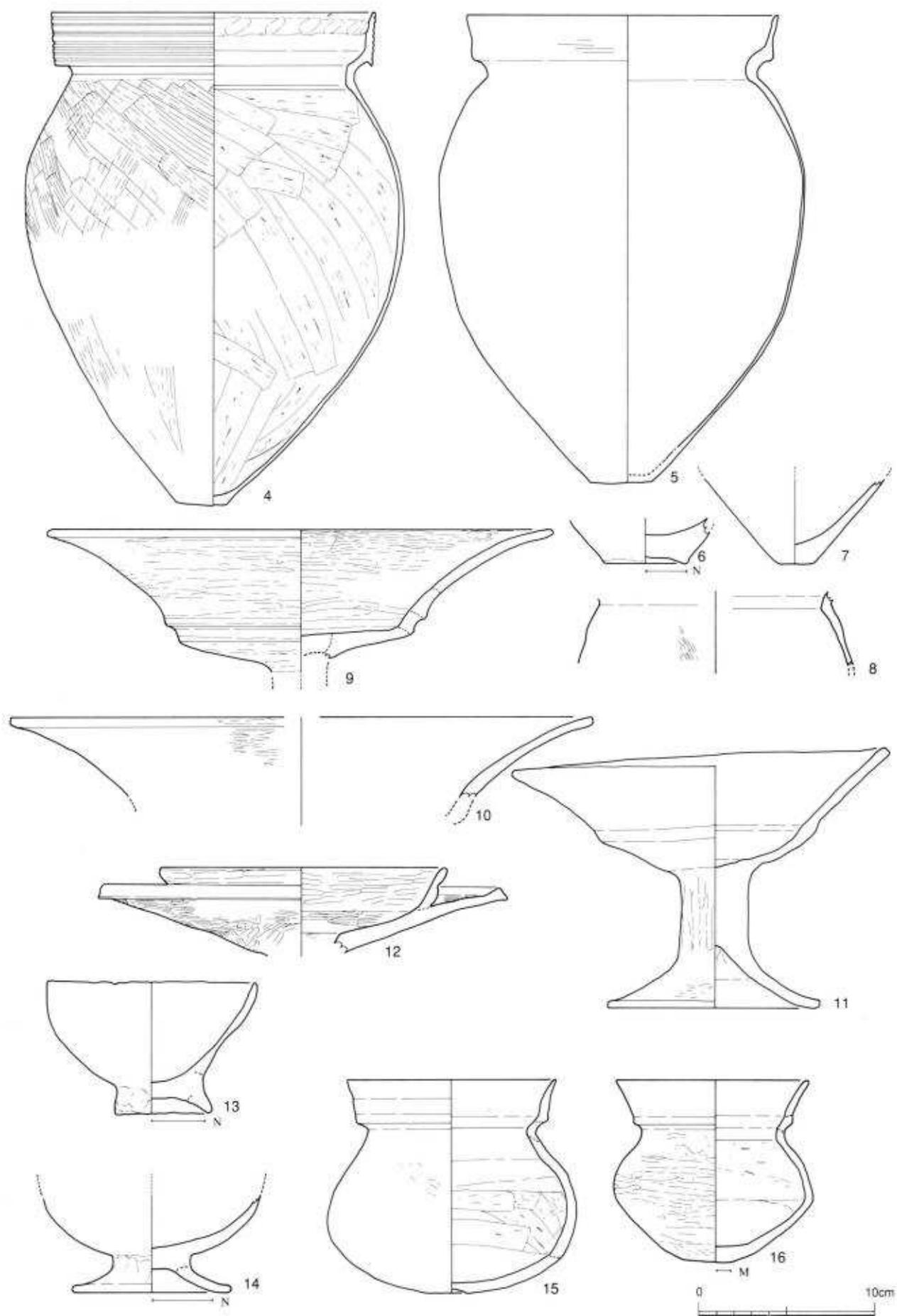
台付及び底片 (27・28・36) 27 は甕もしくは壺につくものと思われる。外面はナデ、内面はケズリ調整、台部内面は指ナデ後横方向のハケ調整が施されている。28 は小型壺の底部と思われる。内外面ナデ調整である。36 は鉢の底部と思われ、内外面及び底面はナデ調整が施されている。

蓋形土器 (37～39) 小型であり、壺用のものと考えられる。内外面は、剥離が激しく調整不明である。

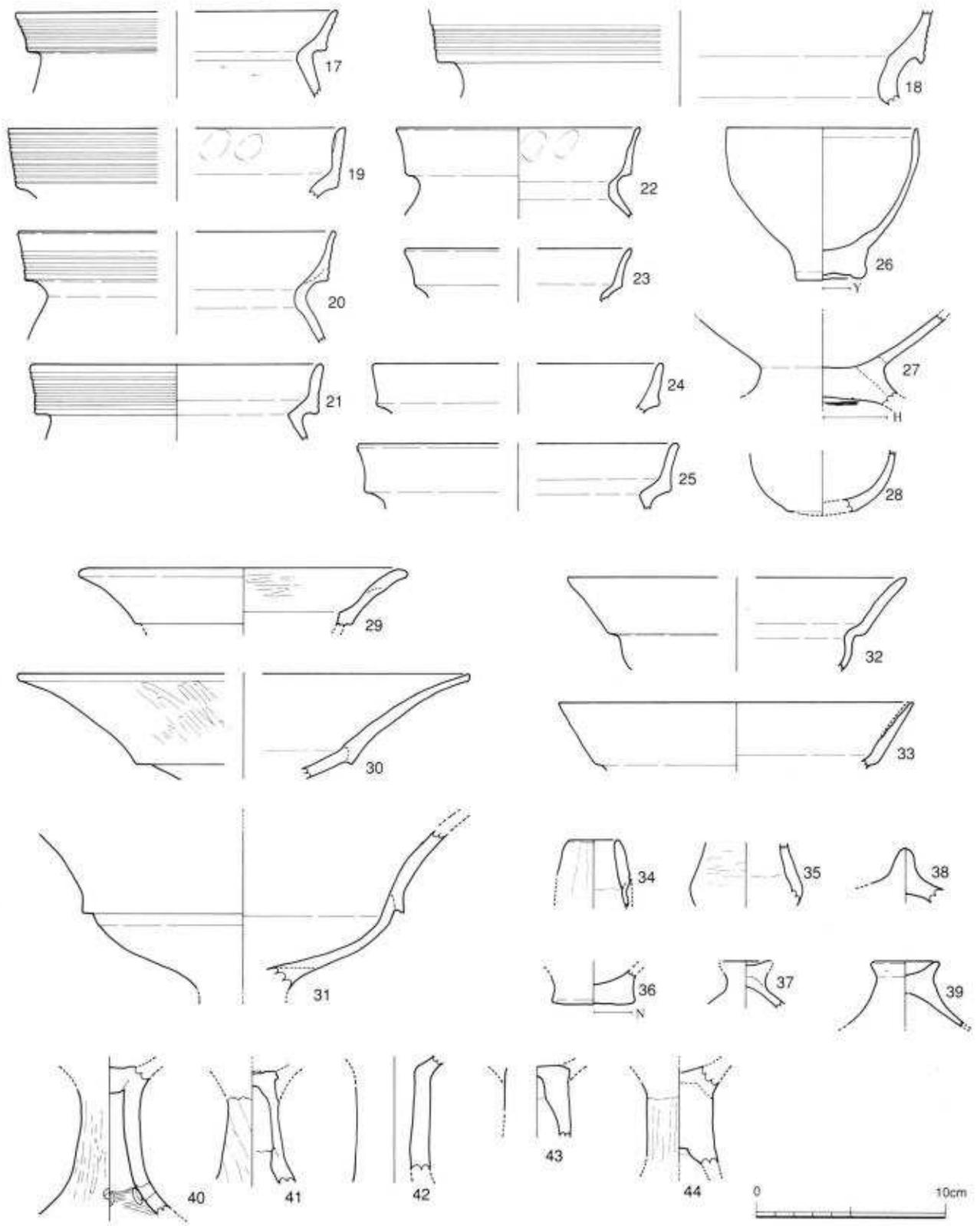
小型容器 (34・35) 34 は口縁部から胴部のみ残存しやや内傾する。外面は縦方向のナデ調整、内面には輪



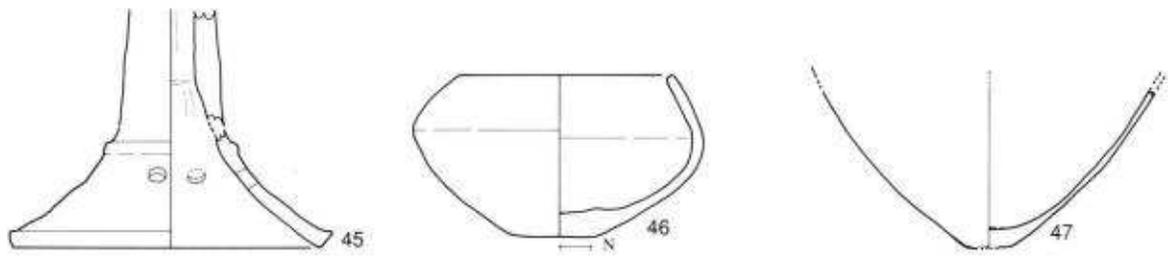
第57図 SI01A床面出土土器 1 (1・2 : S=1/4, 3 : S=1/3)



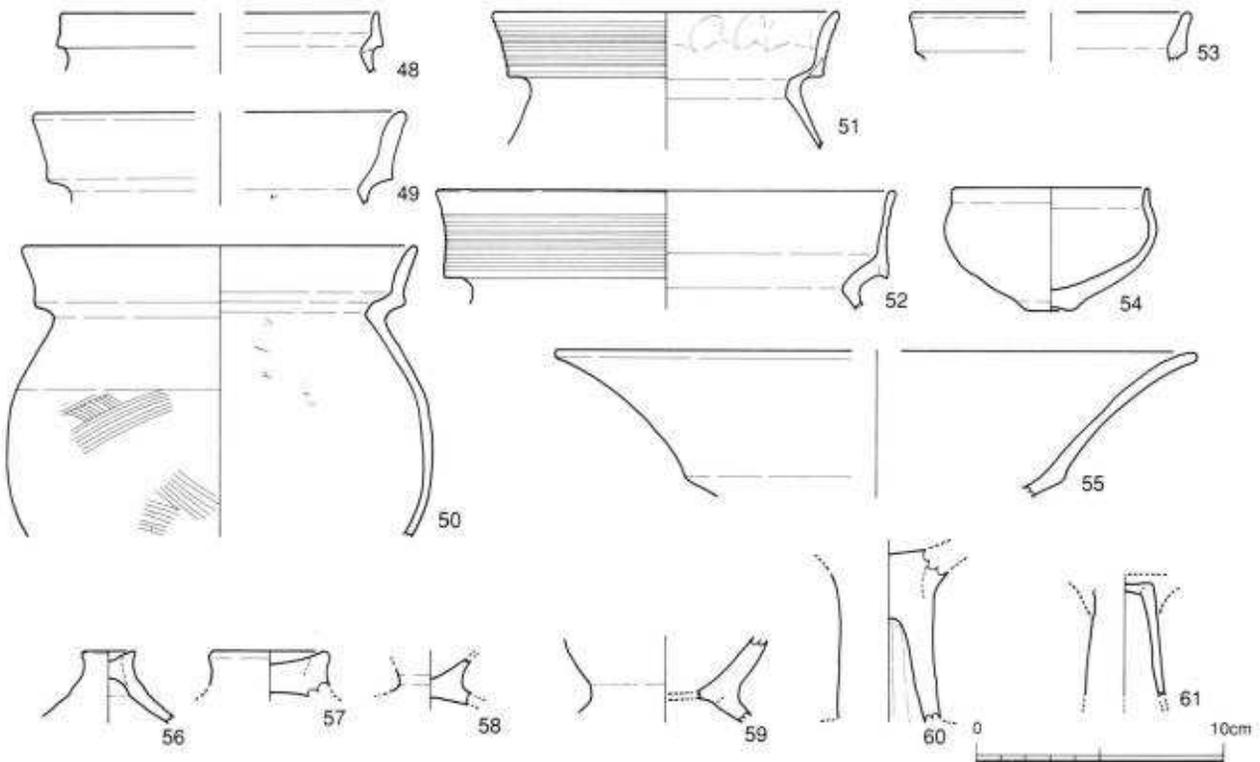
第58图 SI01A床面出土土器 2 (S=1/3)



第59圖 SI01出土土器 (S=1/3)



SI01B 床面出土土器



第60図 SI01B出土土器 (S=1/3)

積み痕が残る。35は体部のみ残存。外面は板ナデ後横方向のミガキ、内面は横方向にナデ調整が施される。

c) SI01B 床面出土土器 (45~47)

高坏・器台形土器 (45) 脚頂部が欠損するため、どちらかとは判断しにくい。外面はミガキ調整と思われるが不明瞭。内面脚柱部にはやや絞り痕が残る。透孔は3方向に穿っている。

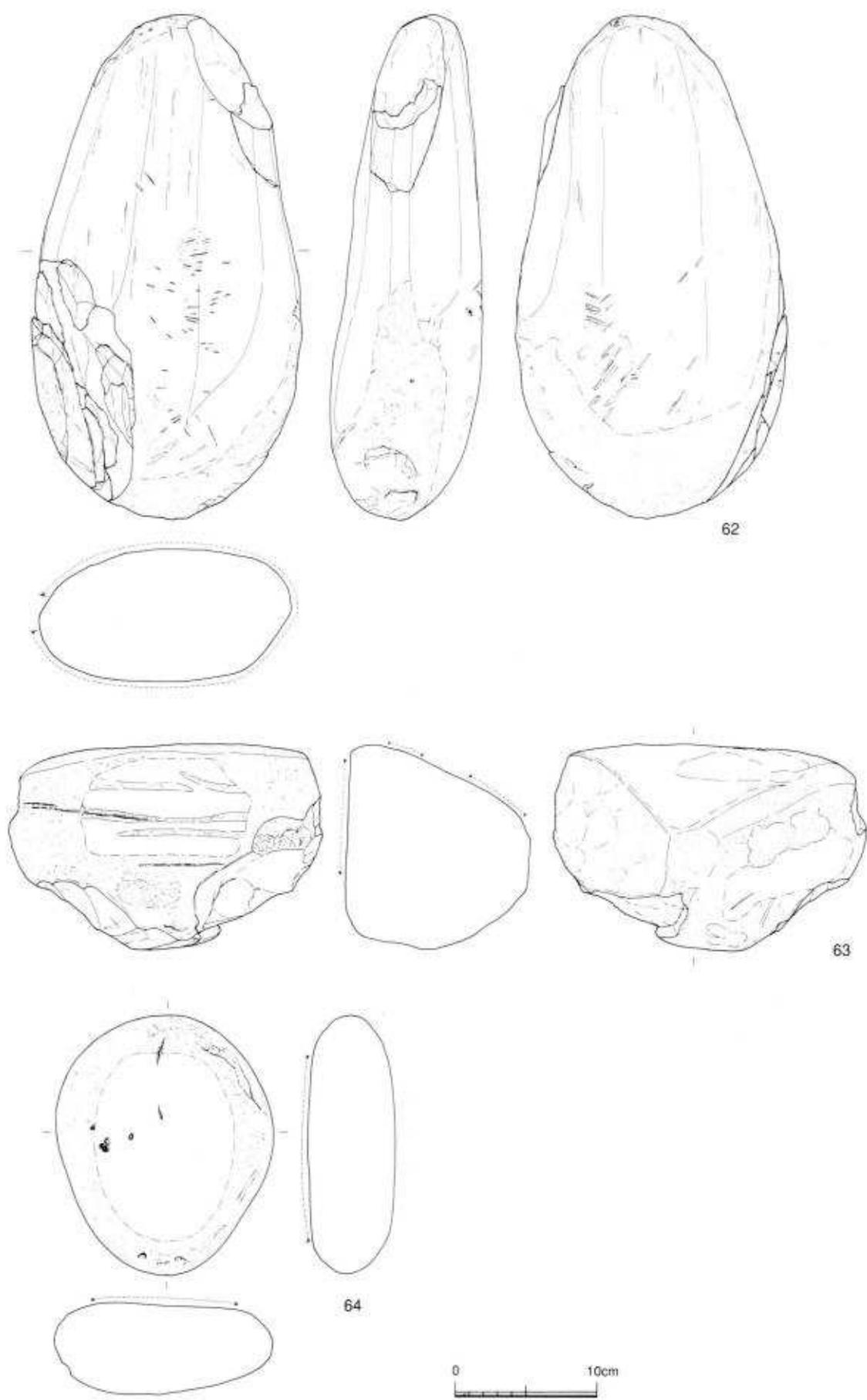
鉢形土器 (46) 口縁が内彎する椀状の土器である。内外面は剥離が激しく調整は不明である。

底片 (47) おそらく甕の底部と考えられる。内外面摩耗が激しいが、外面は一部煤の付着とハケ調整がみられる。内面はケズリ調整と思われるが方向は定かでない。

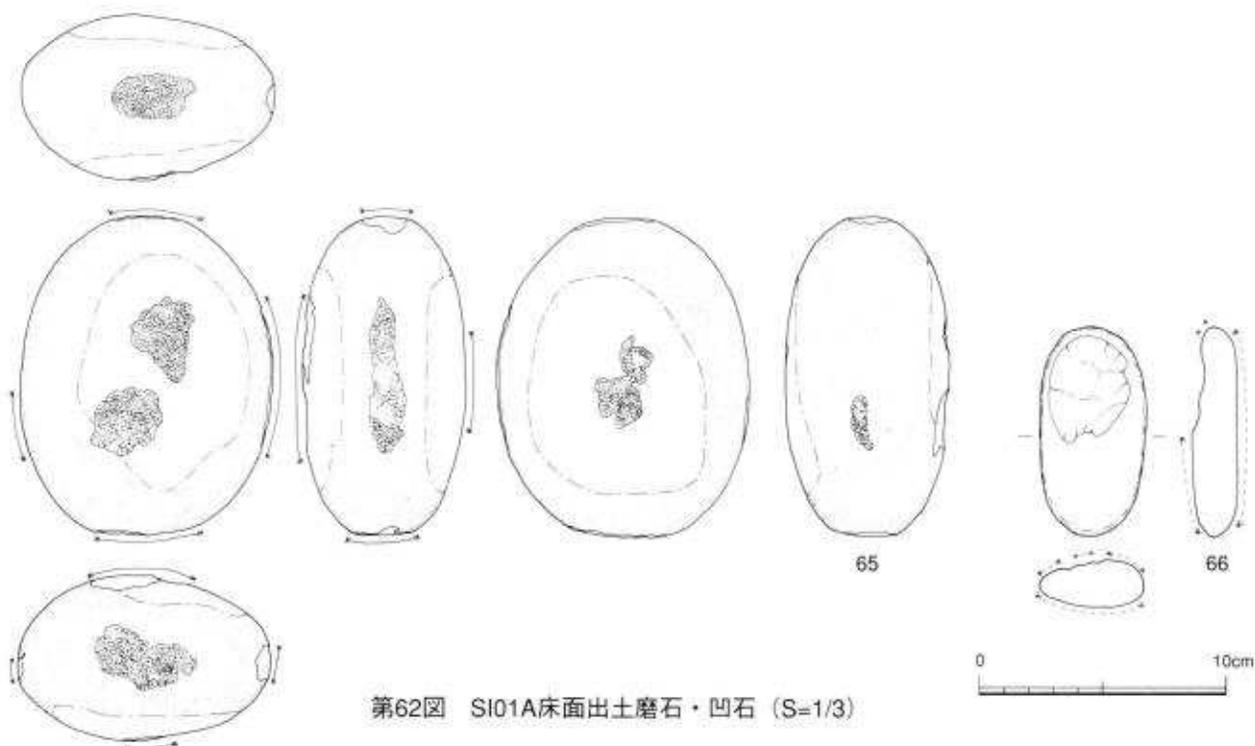
d) SI01B 上層土器 (48~61)

甕形土器 (48~53) 48~50、53は有段無文の甕である。48は口縁がやや内傾し、53は外反気味に短く立ち上がる。49、50は前者と比し、拡張し、口縁端部は丸く、やや厚みがある。内外面横方向のナデ調整が施されている。50の体部外面は、あたりの弱い斜め方向のハケ調整が施され、体部上半から上は横方向にナデられている。体部内面は横方向のケズリ調整が施されている。

鉢形土器 (54・59) 54は口縁端部が直立する椀状の小型鉢である。内外面は摩耗が激しく、調整は不明である。底部は上げ底である。59は台が付く。口縁は残存しない。内外面剥離が激しく調整不明である。



第61图 SI01A床面出土砥石・磨石 (S=1/4)



第62図 SI01A床面出土磨石・凹石 (S=1/3)

高坏形土器 (55・60・61) 55は高坏坏部のみ残存する。内外面摩擦が激しく、調整は不明。60は、外面は摩擦が激しくミガキ調整であることが、部分的に確認できる。内面には、絞り痕が残る。61は、脚頂部は剥離してる。内外面摩擦が激しく調整不明である。

蓋形土器 (56~58) 56~58はすべて内外面剥離しており、調整は不明、つまみ部上面は窪む。

e) SI01A 床面出土石器 (62~66)

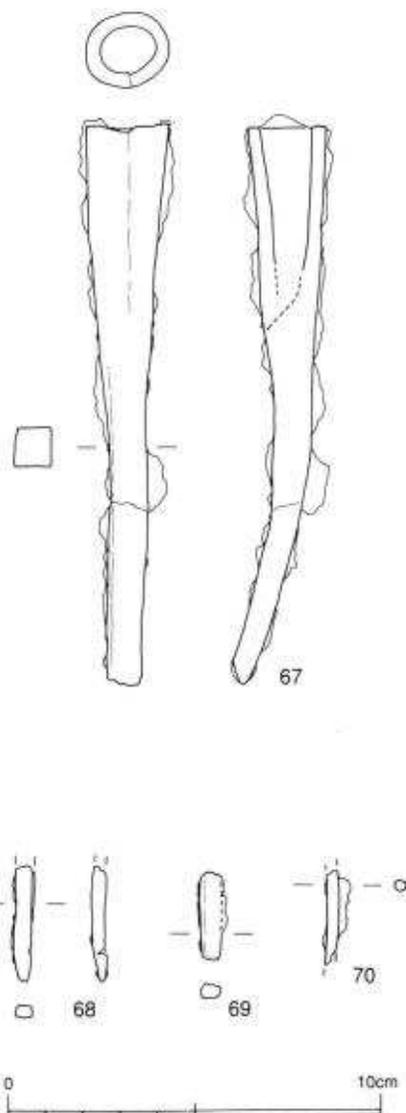
砥石・磨石 (62~64・66) 62は大型品で、床面設置タイプの台石であり、一部の側面と、上下縁部以外砥面がみられる。部分的に鼠歯状痕がみられ、工具のあたり痕跡が残存するものと思われる。また、上下縁部は破損しており、それらの破片は被熱を受けている。63は62同様に床面設置タイプで、砥石と考えられる。砥面は、筋状ないしは円形にくぼむ形で自然面が残存する。64は、片面は磨面をもち、平らな形状をもつが、片面は自然面のままで使用されていない。66は、両面磨面を持ち、片面は被熱を受けて剥離している。

凹石 (65) 全周に敲打痕をもち、上下縁部の形状はやや平らな面をもつ。なお、両面に磨面がみられる。

f) SI01 出土鉄製品 (67~70)

袋状鉄鑿 (67) 全長 14.85 cm、刃部幅 0.95 cm、刃部厚 0.62 cm、身部厚 1.05 cm、袋部径 2.2×2.0 cm、袋部厚 0.4 cm、重量 76.2g を測る。断面円形の袋部をもち、閉じ合わせは密着している。朝鮮半島からの舶載品である可能性が高い。

不明棒状鉄製品 (68~70) 68は上端欠損しており、かなりの錆びぶくれがみられる。下端はやや尖っているようにも思われる。69は錆びぶくれが著しく、断面は不整形である。70は両端部とも欠損しており、断面は円形を呈す。3点とも残りが悪いため不明瞭であるが、68・70に関しては錐状のものである可能性も考えられる。



第63図 SI01 出土鉄製品 (S=1/2)

2. SI02 (第64図～第81図)

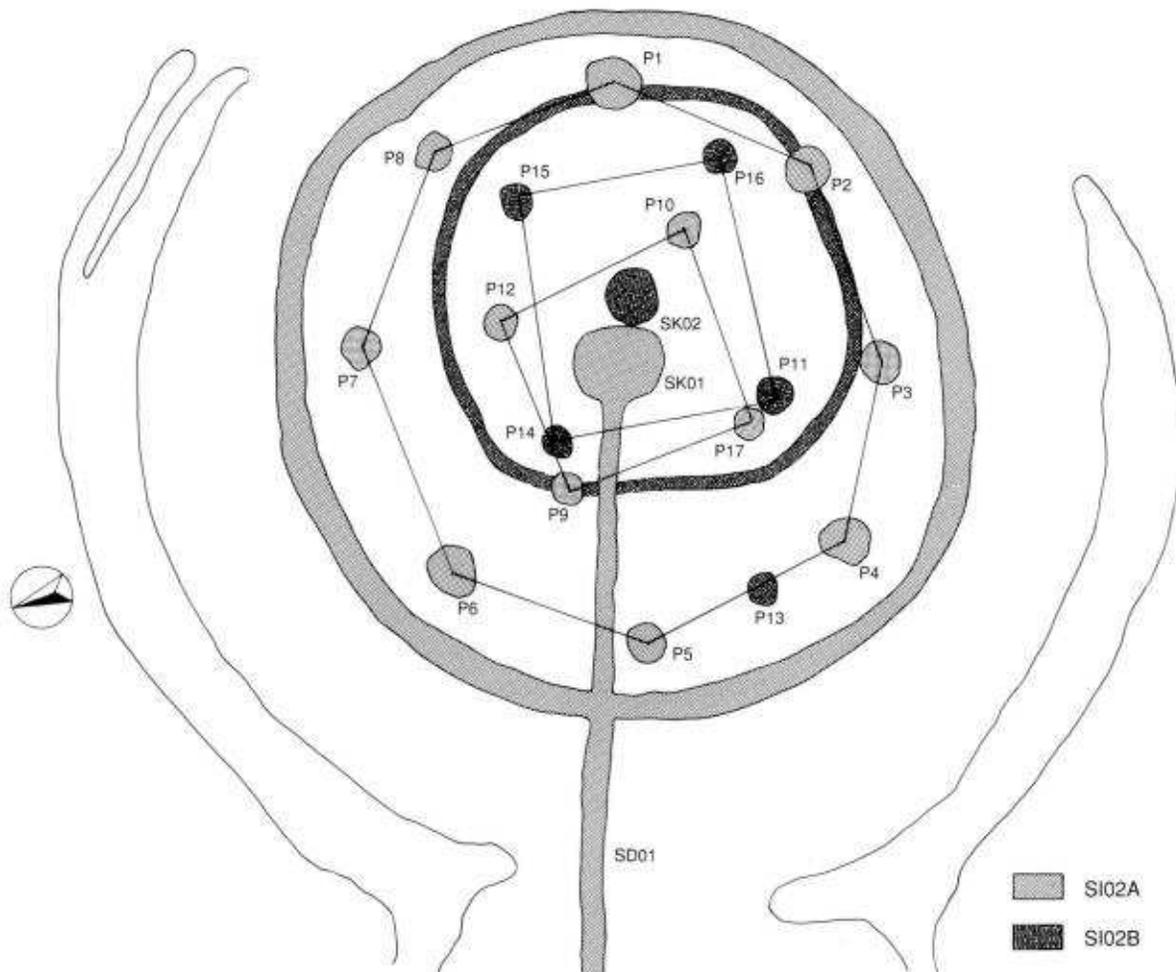
(1) 遺構

遺跡内の西端に位置している。全形はほぼ円形を呈し、これを囲むように周溝が付随する。現況では、削平を受けた後、客土が覆っていたようである。ただし、床面は辛うじて、削られず、残存していた。周溝は、標高地が高い東側が切れており、谷部に向かうに従い、徐々に深くなる。周溝の間には土層断面等から、周堤があったものと考えられ、残存するのは西方にあたる谷側のみであった。地山面を基準とした壁高は、東側で45 cm、西側(谷側)で盛土面から40 cmを測る。セクションベルトは周溝の外形を考慮して、主軸を決め、十字に設定した。貼り床除去後、二回立て替えていることが判明した。第64図は、SI02の全体配置図を示したものである。最初に検出した住居をSI02Aとし、貼り床除去後確認した住居をSI02Bとし、検出順序で説明を行う。

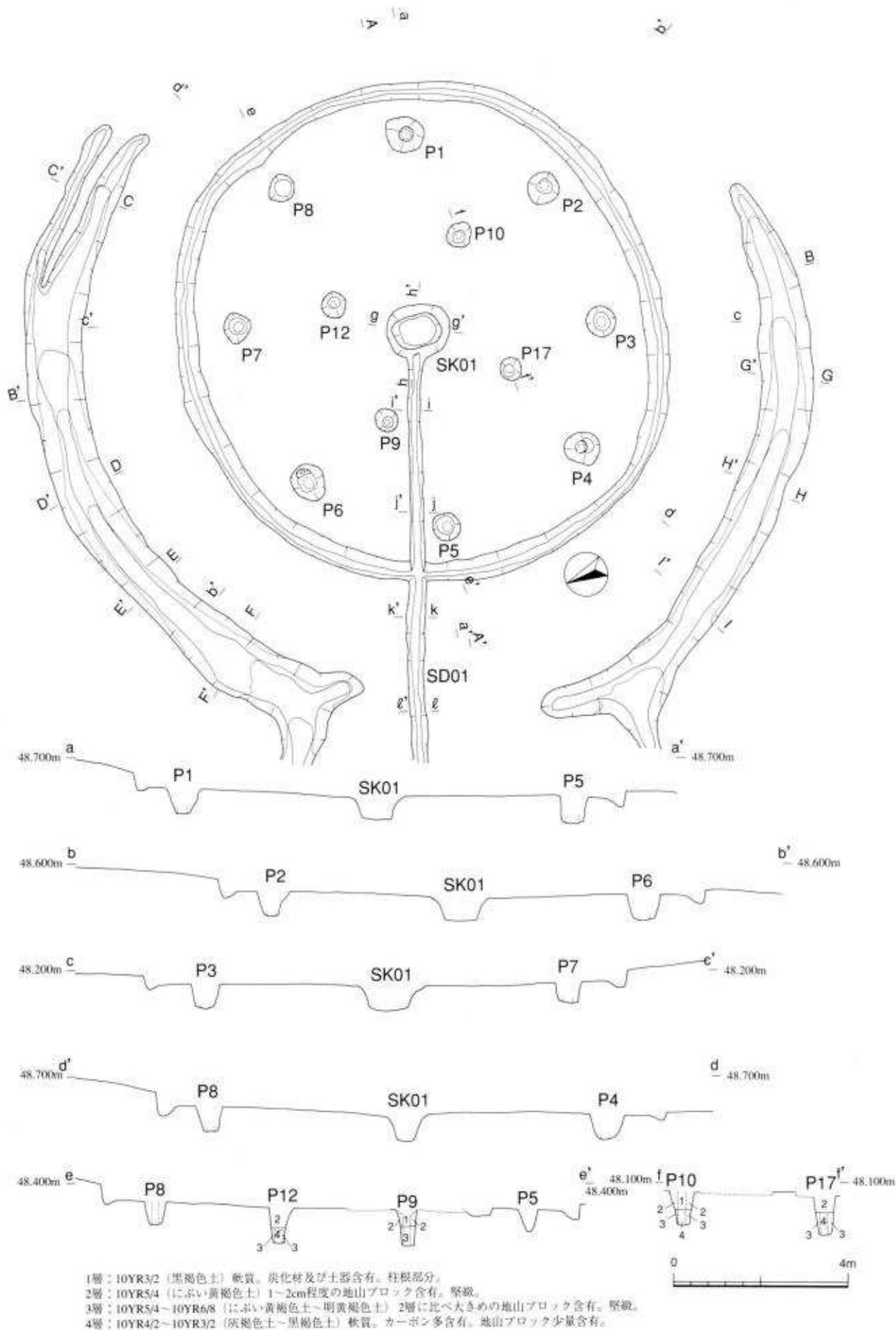
a) SI02A (第64図～第69図)

形態

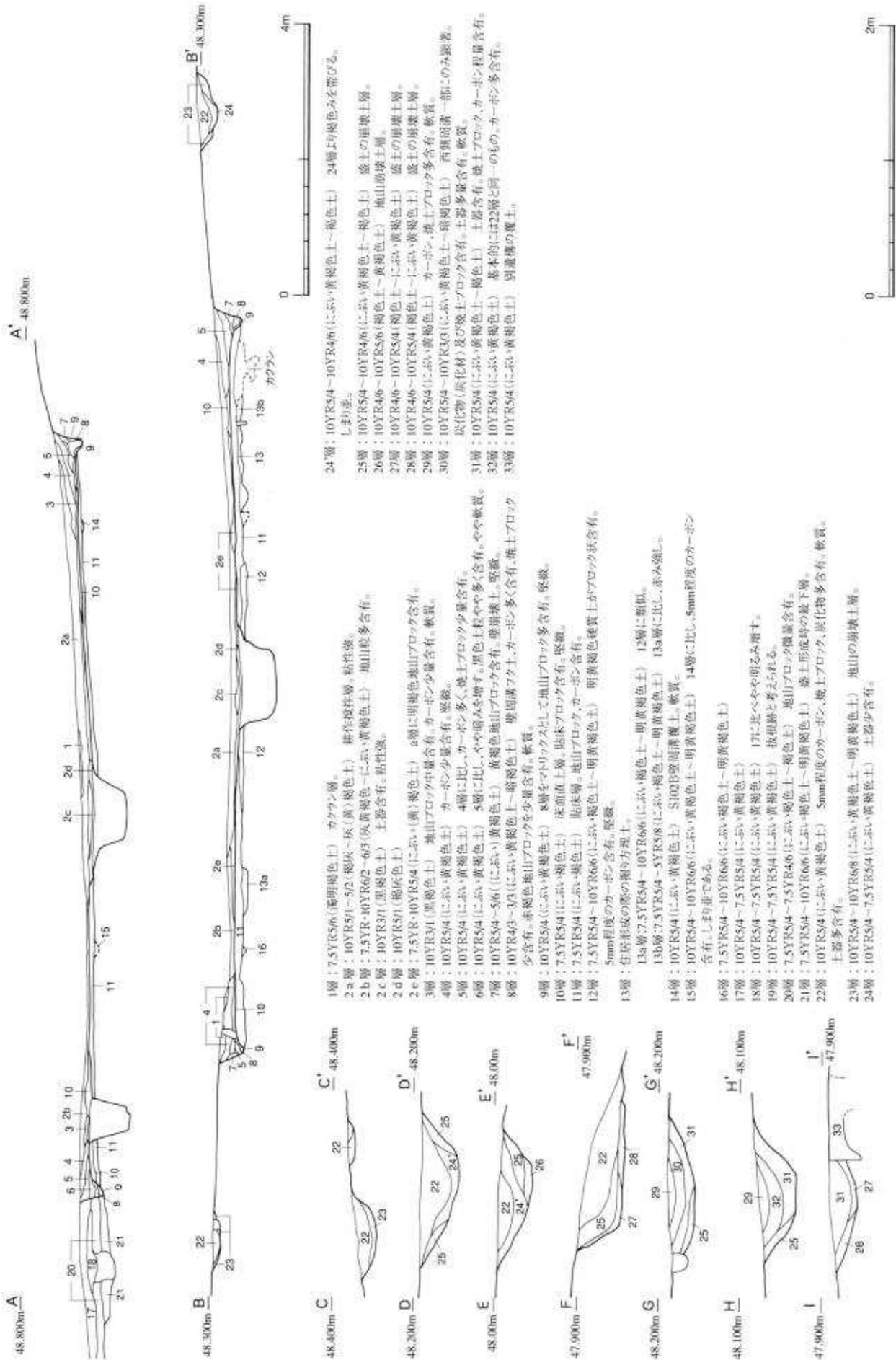
平面径はほぼ円形で、11.2mを測る。壁周溝は、ほぼ全周、幅は20～30 cmに収まり、深さは10～16 cmである。床面積は約98 m²であり、東側が高く西に向かうに従い緩傾斜を成す。支柱は8本で、P1～P8が該当する。柱間寸法は、3m～3.4mの間に収まり、ほぼ八等分した配置である。柱穴は直径60 cm～80 cmで、深さは50 cm～60 cmに収まる。SI01と比較するとやや浅い。柱穴覆土は、柱根が明確に確認できたものがP1、P2、P5、P8の4つである。柱は全て抜き取られ、プランがゆがむほどの抜き取りが行われたと考えられるものが、P4、P6、P7であり、そのため柱根が確認しづらかったものと思われる。また、柱穴内からは、P1、P2、P6、P7から土器が出土している。なお、すべて下底面には円形の硬化面が確認でき、柱根範囲を確認することができた。支柱穴は、P9、P10、P12、P17が該当し、中央土坑であるSK01を囲むように4本配置されている。柱穴は直径50 cm～60 cmに収まる。深さは貼り床除去後の高さで80 cmを測り、支柱穴より深く掘り込まれている。SI01Bと類似した形態である。柱穴埋土は、すべて二層に分かれ、下層部分に柱根が明確にみえたものは、P12、P10、P17である。



第64図 SI02全体配置図 (S=1/120)



第65図 SI02A平面・エレベーション図 (S=1/120)

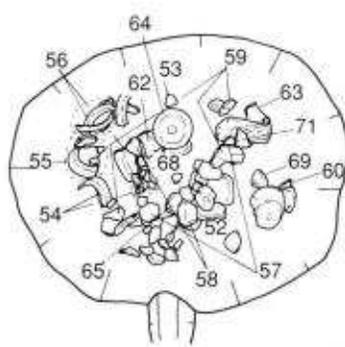


24層：10YR5/4～10YR4/6(におい、黄褐色土～褐色土) 24層より褐色みを帯びる。
 25層：10YR5/4～10YR4/6(におい、黄褐色土～褐色土) 盛土の崩壊土層。
 26層：10YR4/6～10YR5/6(褐色土～黄褐色土) 地山の崩壊土層。
 27層：10YR4/6～10YR5/4(褐色土～におい、黄褐色土) 盛土の崩壊土層。
 28層：10YR4/6～10YR5/4(褐色土～におい、黄褐色土) 盛土の崩壊土層。
 29層：10YR5/4(におい、黄褐色土) カーボン、焼土プロック多含有。軟質。
 30層：10YR5/4～10YR3/3(におい、黄褐色土～暗褐色土) 西側河溝一部にのみ顕著。
 炭化物、炭化材及び焼土プロック含有。土器多量含有。軟質。
 31層：10YR5/4(におい、黄褐色土～褐色土) 土器含有。焼土プロック、カーボン少量含有。
 32層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 基本的には22層と同一のものの、カーボン多含有。
 33層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 別層様の層土。

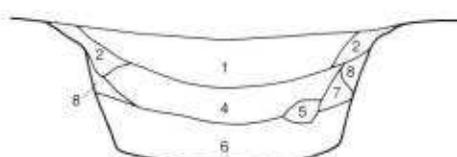
1層：7.5YR5/6(薄明褐色土) カタラン層。
 2a層：10YR5/1～5/2(緑灰～灰、黄)褐色土) 耕作硬仕層、粘性强。
 2b層：7.5YR～10YR6/2～6/3(灰黄褐色～におい、黄褐色土) 地山粘多含有。
 2c層：10YR3/1(黄褐色土) 土器含有。粘性强。
 2d層：10YR5/1(暗褐色土)
 2e層：7.5YR～10YR5/4(におい、黄褐色土) a層に明褐色地山プロック含有。
 3層：10YR3/1(黒褐色土) 地山プロック中に少量含有。カーボン少量含有。軟質。
 4層：10YR5/4(におい、黄褐色土) カーボン少量含有。堅緻。
 5層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 4層に比し、カーボン多く、焼土プロック少量含有。
 6層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 5層に比し、やや暗みを増す。黒色土粒やや多く含有。やや軟質。
 7層：10YR5/4～5/6(におい、黄褐色土) 黄褐色地山プロック含有。壁面硬土。堅緻。
 8層：10YR4/3～3/1(におい、黄褐色土～暗褐色土) 壁面溝フタ土。カーボン多含有。焼土プロック少量含有。赤褐色地山プロックを少量含有。軟質。
 9層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 8層をマトリックスとして地山プロック多含有。軟緻。
 10層：7.5YR5/4(におい、褐色土) 床面直上層。粘床プロック含有。堅緻。
 11層：7.5YR5/4(におい、褐色土) 粘床層。地山プロック、カーボン含有。
 12層：7.5YR5/4～10YR6/6(におい、褐色土～明黄褐色土) 明黄褐色硬質土がプロック状含有。
 5mm程度のカーボン含有。堅緻。
 13層：住居形成の際の掘り方現土。
 13a層：7.5YR5/4～10YR6/6(におい、褐色土～明黄褐色土) 12層に類似。
 13b層：7.5YR5/4～5YR5/8(におい、褐色土～明黄褐色土) 13a層に比し、赤み強し。
 14層：10YR5/4(におい、黄褐色土) S102B壁面溝溝壁土。軟質。
 15層：10YR5/4～10YR6/6(におい、黄褐色土～明黄褐色土) 14層に比し、5mm程度のカーボン含有。上層非である。
 16層：7.5YR5/4～10YR6/8(におい、褐色土～明黄褐色土)
 17層：10YR5/4～7.5YR5/4(におい、黄褐色土)
 18層：10YR5/4～7.5YR5/4(におい、黄褐色土) 17に比べやや明るみ増す。
 19層：10YR5/4～7.5YR5/4(におい、黄褐色土) 抜根跡と考えられる。
 20層：7.5YR5/4～7.5YR4/6(におい、褐色土～褐色土) 地山プロック微量含有。
 21層：7.5YR5/4～10YR6/6(におい、褐色土～明黄褐色土) 焼土形成時の最下層。
 22層：10YR5/4(におい、黄褐色土) 5mm程度のカーボン、焼土プロック、炭化物多含有。軟質。土器多含有。
 23層：10YR5/4～10YR6/8(におい、黄褐色土～明黄褐色土) 地山の崩壊土層。
 24層：10YR5/4～7.5YR5/4(におい、黄褐色土) 土器少含有。

第66図 SI02 土層断面図 (S=1/80)、外周土層断面図 (S=1/40)

〈SK01〉

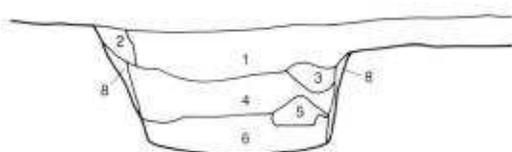


48.00m g 48.00m g'



- 1層:10YR5/4 (にぶい黄褐色土)5mm程度のカーボン、焼土ブロック含有。小片の土器含有。
- 2層:10YR5/4 (にぶい黄褐色土)堅緻。
- 3層:10YR5/4~10YR3/3 (にぶい黄褐色土~暗褐色土)2層に比し、しめり悪い。カーボン、焼土ブロック含有。
- 4層:10YR5/4~10YR3/3 (暗褐色土)カーボン及び焼土ブロック多含有。土器多含有。軟質。
- 5層:5YR6/8~5YR2/1 (棕色~黒褐色土)焼土ブロック層。
- 6層:10YR5/4~10YR5/2 (にぶい黄褐色土~灰黄褐色土)カーボン含有。軟質。土器多含有。
- 7層:10YR5/4~10YR5/2 (にぶい黄褐色土~暗褐色土)軟質。
- 8層:10YR6/8~10YR5/4 (明黄褐色土~にぶい黄褐色土)地山崩壊土。堅緻。

48.00m h 48.00m h'



〈SD01〉

48.00m i 48.00m i' 48.00m j 48.00m j'



48.00m k 48.00m k' 47.80m ℓ 47.80m ℓ'



- 1層:SK01と同一。
- 2層:10YR5/4~10YR6/8 (にぶい黄褐色土~明黄褐色土)1層に比べやや明るみを増す。
- 3層:10YR5/4~10YR6/8 (にぶい黄褐色土~明黄褐色土)地山流失層(最下底のたま土)。
- 4層:10YR5/4~7.5YR5/4 (にぶい黄褐色土~にぶい褐色土)基本的には1層と同一層。やや褐色を帯びる。
- 5層:7.5YR5/4~7.5YR3/4 (にぶい褐色土~暗褐色土)カーボン、地山ブロック含有。軟質。
- 6a層:7.5YR5/4~7.5YR3/4 (にぶい褐色土~暗褐色土)5層に比し、やや褐色が強い。
- 6b層:6a層に比べカーボンの混じりが多含有。
- 7層:7.5YR5/4~7.5YR3/4 (にぶい褐色土~暗褐色土)。5層に対し、褐色みを帯びる。
- 8層:7.5YR5/4 (にぶい褐色土)地山の流失層である。堅緻。



第67図 SI02内SK02遺物出土状況・土層断面図, SD01土層断面図 (S=1/30)

P9、P10は、上層柱根部分に土器が埋められており、人為的に埋められたものと考えられる。すべて柱の抜き取りが行われているが、P9以外は下層部分に柱根が残存していたと考えられる。

施設等

住居の中央に楕円形の土坑（SK01）があり、それと連結した形で排水溝（SD01）が壁周溝を突き抜けて谷側に向かっている。おそらく床面外は周堤をトンネル状に掘り込まれていたものと考えられる。SK01は明瞭な段ではないが、浅い段の中央に深く掘り込まれる形状である。埋土は、1、3、4層は一次堆積土と考えられ、カーボン・焼土ブロックが含有する。2、7、8層は地山崩壊土である。6層には大型の土器・石器など、人為的に投げ込まれたものが多くみられた。なお、6層床下には5m程度の薄い灰層がみられ、床面直上には炭層がみられた。SD01は、中央土坑（SK01）から離れるに従い深くなる。1、2層は土坑と同様、一次堆積土であり、3、8層は最下底の溜まり土と考えられる。K、Lラインの土層は、床面外にあたる部分である。4～6層は天井の崩壊土と考えられ、4層は周堤盛土、5、6層は成形時の天井部分と想定できる。また堅穴の周囲には、周堤及び外周溝がめぐる。溝は全周するわけではなく、北側と南側に分離している。東側は両者とも浅く、谷側（西側）に向うに従い深くなり、円形にやや伸びるものと、谷側に向かうものと二股に分かれている。なお、谷側に伸びるものは、削平を受けているため、どこまで伸びるのかは不明である。外周溝堆積土は、北溝はDラインから、南溝はHラインから盛土崩壊土がみられ、堅穴の西半分には、周堤があったことが伺われる。

遺物出土状況

第68図がSI02のドット図、第69図が床面遺物の状況、第67図が土坑（SK01）内遺物検出状況を示す。なお、第68図の投影図は接合遺物及びA-A'ラインを中央とし、1m幅のみすべての遺物を表示している。

住居内の中央部は、堆積土が削平されていたためか数は少なく、遺物は西壁周溝集中して散布する。外周溝と周堤からも遺物は出土している。北溝からは、ほとんど上層である22層から出土しており（第66図参照）、南に行くに従い遺物の量は増加し、管玉も肉眼で、数点見つかっている。南溝からは、溝の中央にあたる箇所から、焼土、カーボンが多くみられ、多量に土器が見つかっている。これらは、床に近い部分から出土しており、人為的に廃棄されたものと思われる。周堤内は、検出の際、堆積土と盛土の区別がつかず、土器も区別はできていない。土器は破片が多く、鉄製品が2点出土している。外周溝と堅穴住居内の遺物は、接合するものが2点みられる。堅穴住居床直上では、短頸直口壺がもっとも多く、鉢が次いでみられ、甕の出土は少ない。ほとんどは近隣で接合するのにも関わらず、4は南北両方に分散してみられる。完存するものは35の器台を除いてなく、住居廃絶時に破損し、廃棄したものと思われる。また、1は接合土器が谷部から出土しているが、丘陵上面を削平した際の土の移動によるものかもしれず、遺物廃棄時に広範囲に分布したかは不明である。石は散乱しており、砥石は西側で2点近くにみられる。磨石は、北東側からこぶし大のもの3点が、出土している。土玉は、2点みられる。一つはP2の近く、もう一つはSD01とP6間である。支柱穴P1、P2、P6、P7からは土器が出土している。P1は頸部まで残存する壺（46）と、壺の底部（47）がみられる。P2は蓋（49）と高坏もしくは器台の脚（50）が、P6は頸部までの壺（48）が、P7は高坏坏部（51）がみられる。排水溝（SD01）からの遺物は細片のみである。中央土坑（SK01）からは土器が多量に、石が数点廃棄されており（第67図参照）、4、6層にかけて多くみられた。土器は、隙間なく埋められており、土器が脆く、良好な状態で取り上げることができなかった。支柱穴・中央土坑（SK01）の遺物は、床直上同様、住居廃絶時のものであろう。

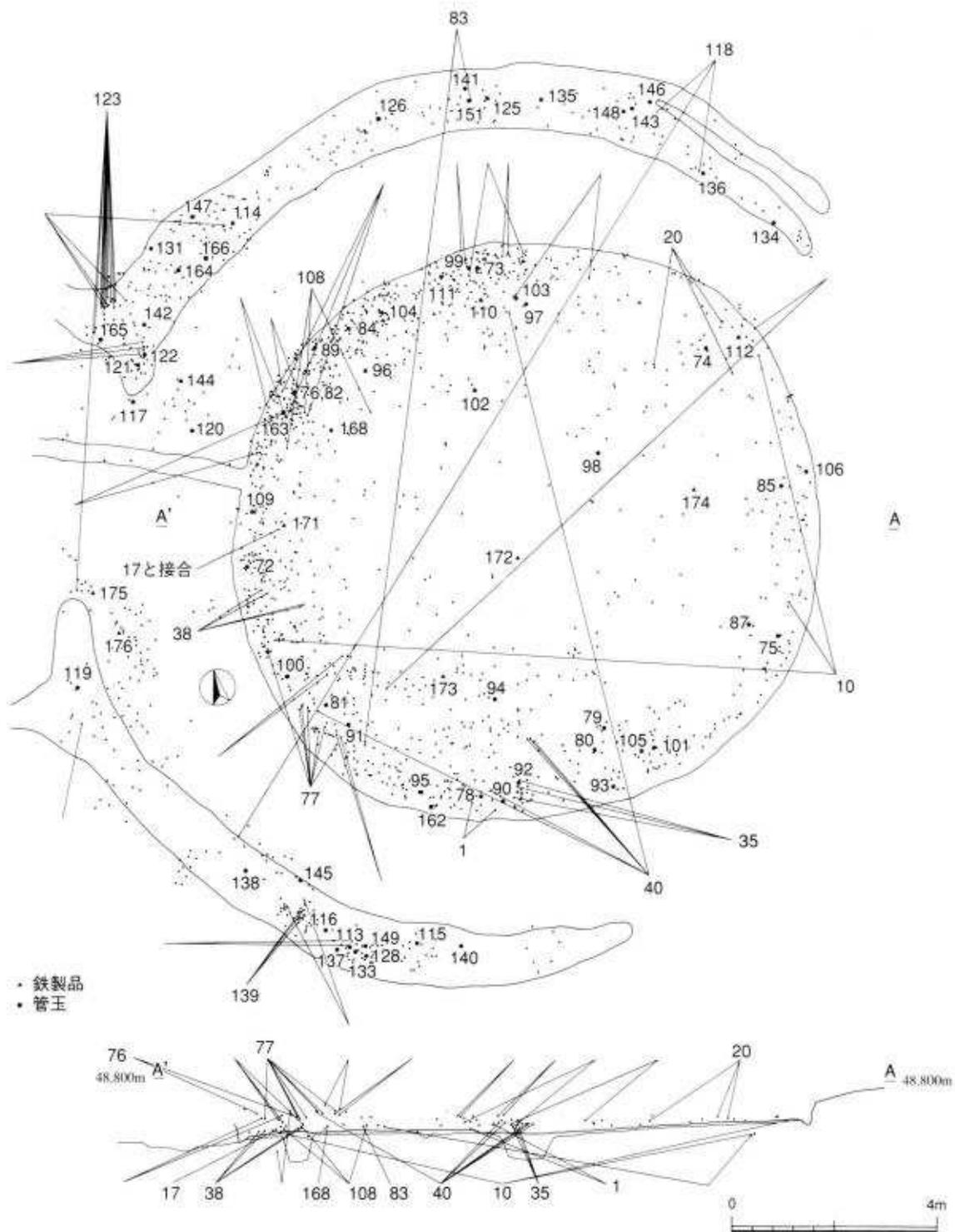
b) SI02B（第70図）

形態

平面形は隅丸方形で、SI02A内に収まる大きさである。径約6.8m、床面積は約36㎡を測る。壁周溝は幅はほぼ20cmで、浅くしか残存せず、SI02A貼床除去後の高さから5cm程度である。支柱は4本でSK02を取り囲む形で、P11、P14～P16が該当する。柱間寸法は東西方向がいずれも約4mで、南北方向が3.4mと長方形になる。柱穴は直径約60cm、深さは60～70cmである。ただし、これらの計測値はSI02A張り床除去後の床面の高さであり、SI02Bの生活面からの高さは不明である。柱根埋土は軟質か堅緻かと地山ブロックの混入度合いで区別ができた。また、柱根下底面には、円形に硬化している箇所がみられた。

施設等

中央土坑にあたるSK02は、SK01の東側、支柱穴の中央に位置する。形状は隅丸長方形であり、規模は、長

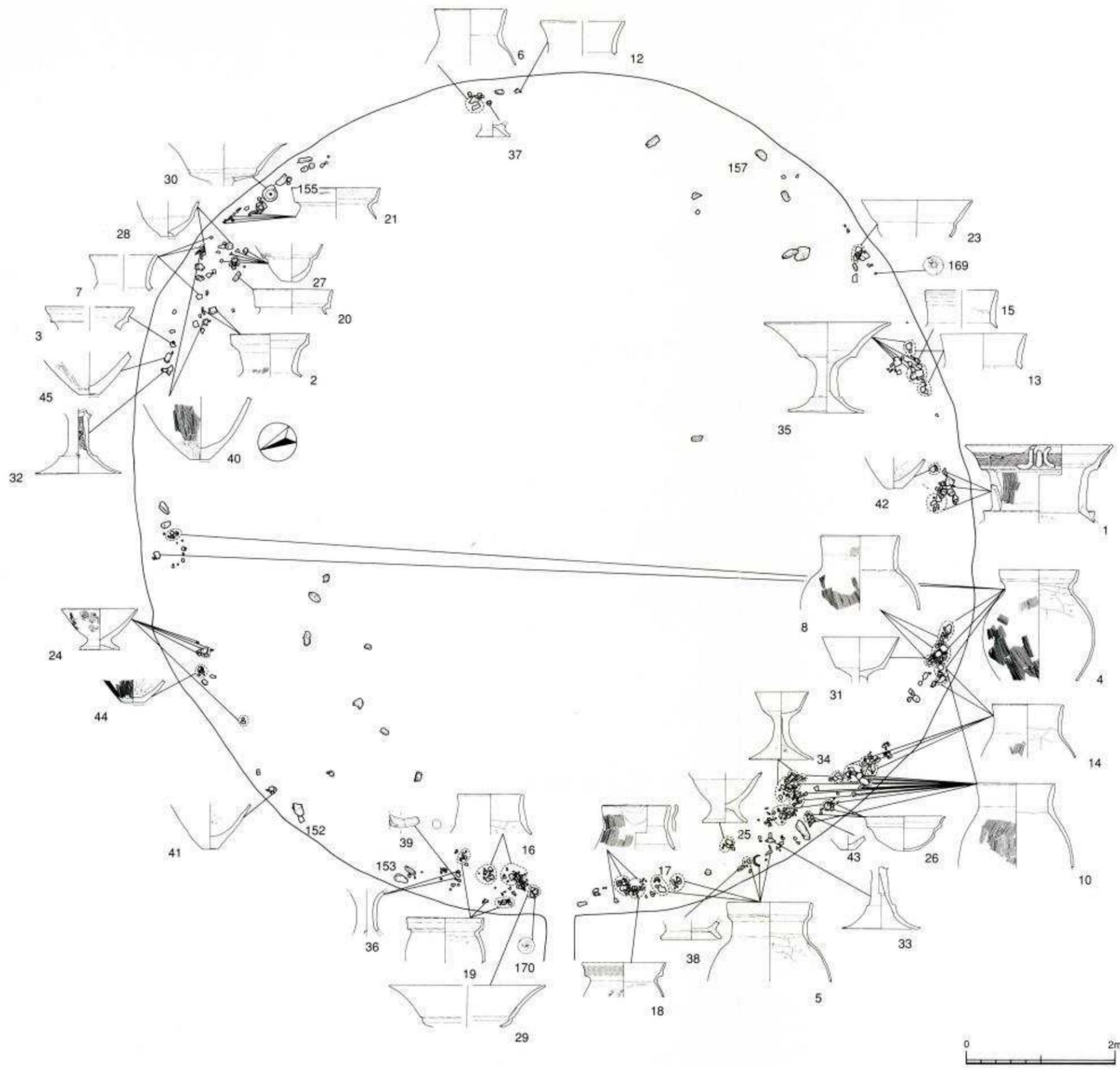


第68図 SI02遺物出土状況 (S=1/120)

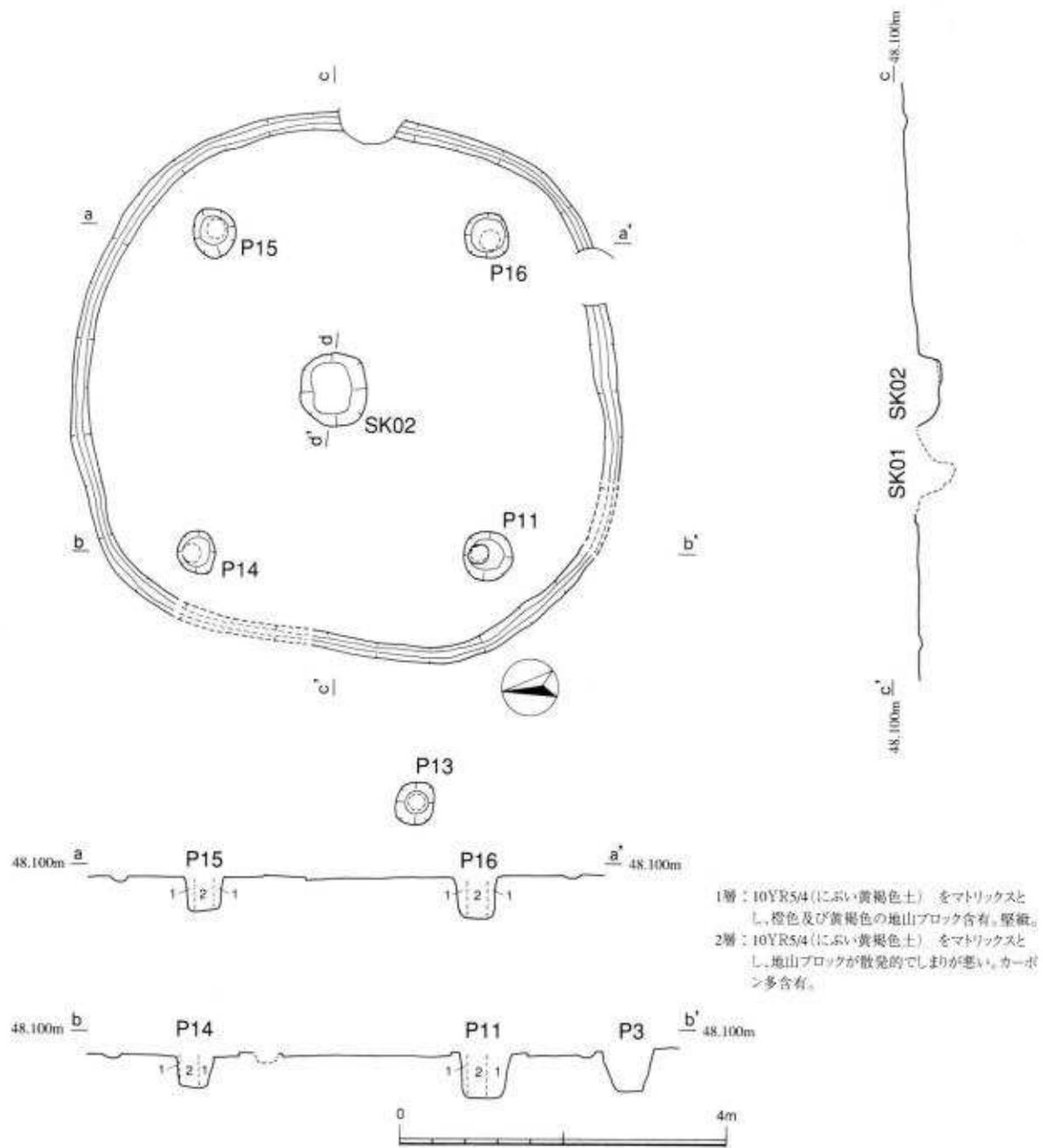
軸長 0.9m×短軸長 0.8m である。深さは、約 0.3m と比較的浅い。土層は、1～3層は地山ブロックを主体とした埋土で、5、6層は地山崩壊土である。7層は掘り方埋土を示しており、その上層にあたる4層は水平堆積した炭だまり層である。基本的に1～3層は、柱穴と類似した状況を示し、人為的に埋められたものである。

遺物出土状況

SI02A が全面再利用しているため、重複しない箇所はなく、柱穴、壁周溝、土坑からも出土遺物はみられなかった。よって、この段階に伴う遺物は不明である。ただし、外周溝が、当住居時から掘削されていたかは不明瞭であるが、出土している土器は、時期幅をもつように思われる。それらの古相を示す土器が、SI02 の存続時期を示しているのかもしれない。



第69図 SI02床直上遺物出土状況 (S=1/60)



第70図 SI02B 平面・エレベーション図 (S=1/80), SK02 土層断面図 (S=1/40)

(2) 遺物 (第71図～第81図)

a) SI02A 床直上出土土器 (1～45)

壺形土器 (1～17) 1は有段をもち擬凹線を施す壺である。頸部外面は、縦方向のハケ調整で、頸部と体部との境に貼付突帯を持つ。内面は横方向のナデ調整で、一部残存する体部は時計逆回りでケズられている。口縁外面は、擬凹線を施し、3本の浮文が付く。内面は頸部同様、横方向のナデ調整である。2～5は無文の有段口縁をもつ壺である。2は直立した頸部を持ち、5は2よりも短く、4は屈曲部のみである。3のみが口縁に、屈曲した有段部を持つ。調整は、体部外面ハケ調整で、内面は横方向のケズリである。口縁内外面は横方向にナデられている。6～17は短頸直口壺である。口縁端部丸いもの(7・9・12・16)と先細りなもの(8・10・11・13・14)と凹線をもつもの(15)、注ぎ口をもつもの(17)がみられる。器形は、内側に直立するもの(16)を除き、やや外反さみである。調整は体部外面は、ハケ調整であり、内面は磨耗が激しく凶化できないが、ケズリ調整である。

甕形土器 (18～22) 18、21は擬凹線を施す有段口縁の甕である。18は、体部にはおそらく貝による刺突が施され、口縁の擬凹線もおそらく同一工具と思われる。21は口縁外面が摩滅しており、擬凹線がかすかに残るのみである。口縁内面には指頭圧痕がみられる。19、20、22は無文の有段口縁を施す甕である。19の口縁外面には、指による横方向のナデが2条施され、真ん中に稜が残る。22は、口縁内外面横方向にナデ調整が施され、内面には、やや段が残る。

鉢形土器 (23～28) 23は有段口縁をもつ鉢である。内外面剥離が激しく調整不明である。24、25は小型の台付鉢である。24は外面ハケ調整の後ミガキ調整、内面の調整は不明である。25は、内外面磨耗が激しく、調整不明である。口縁は欠けて残存しないが、口縁との境に緩い屈曲をもつ。両者とも脚の接合は、接合法と思われる。26～28は、有段口縁をもつ小型鉢である。26は無文の口縁であり、内外面に、横方向のナデ調整が施される。体部内外面磨耗して不明瞭であるが、内面はおそらくケズリ調整と思われる。27は、口縁外面に擬凹線を施す。内外面、磨耗が激しく調整不明である。28は口縁端部が欠損する。外面には緩い段をもち、底面は上げ底状を呈す。

高坏形土器 (29～34) 29、30は磨耗が激しく調整は不明瞭である。30は口縁端部欠損するものの、ほぼ器形は維持しているものと思われる。32、33は有段をもつ脚である。32は4方向に透孔をもち、内面には棒状工具の筋が残る。33は無孔で、内面には、粘土接合痕の段が残る。粘土の積上げ方から、倒立して作っているものと考えられる。31、34は小型の高坏である。31は坏部のみであり、34に比し、やや大型である。34は完存ではないが、全形がわかる資料である。坏部は明瞭な段をもたない。外面脚部は、縦方向の後、ミガキ調整が施され、内面は、棒状工具で押圧することにより脚を中空にし、裾部は板ナデ調整である。

器台形土器 (35・36) 35、36は有段をもつ器台で、36は脚柱部のみ残存する。35は内外面磨耗が激しく、かろうじて、脚柱外面は縦方向のケズリの後、縦方向にミガキ調整が施されていることと、外面及び内面坏部に赤彩が塗布していることがわかる。なお、透孔はおそらく4方向と思われる。

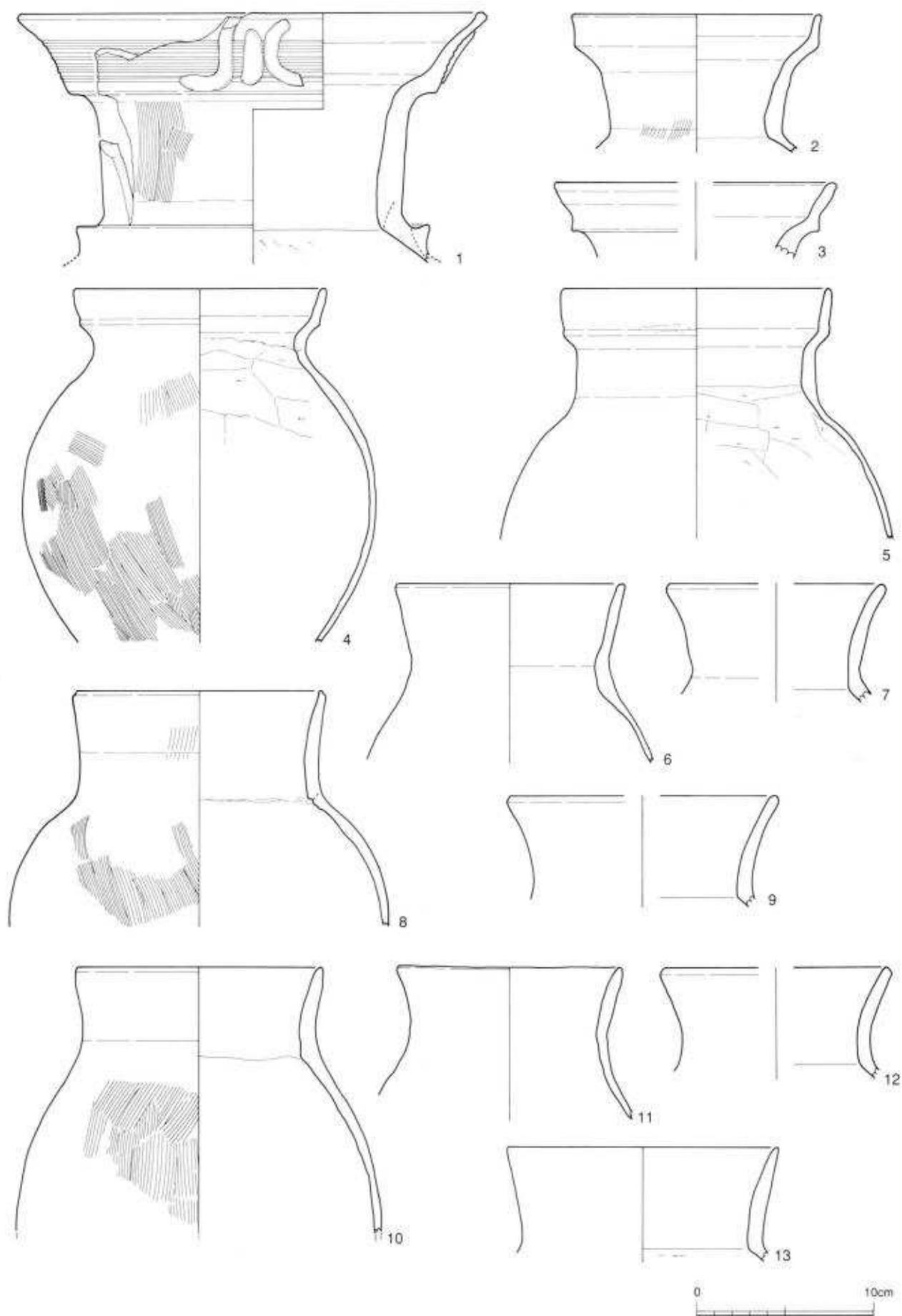
台付 (37・38) 37は鉢の台、38は壺か甕の台と思われる。両者、剥離が激しく、調整不明である。

把手 (39) 断面は丸く、図上の左側一方に、剥離痕がみられるので、半環状でなく、棒状に付すものと思われる。鉢状のものにつくのだろうか。

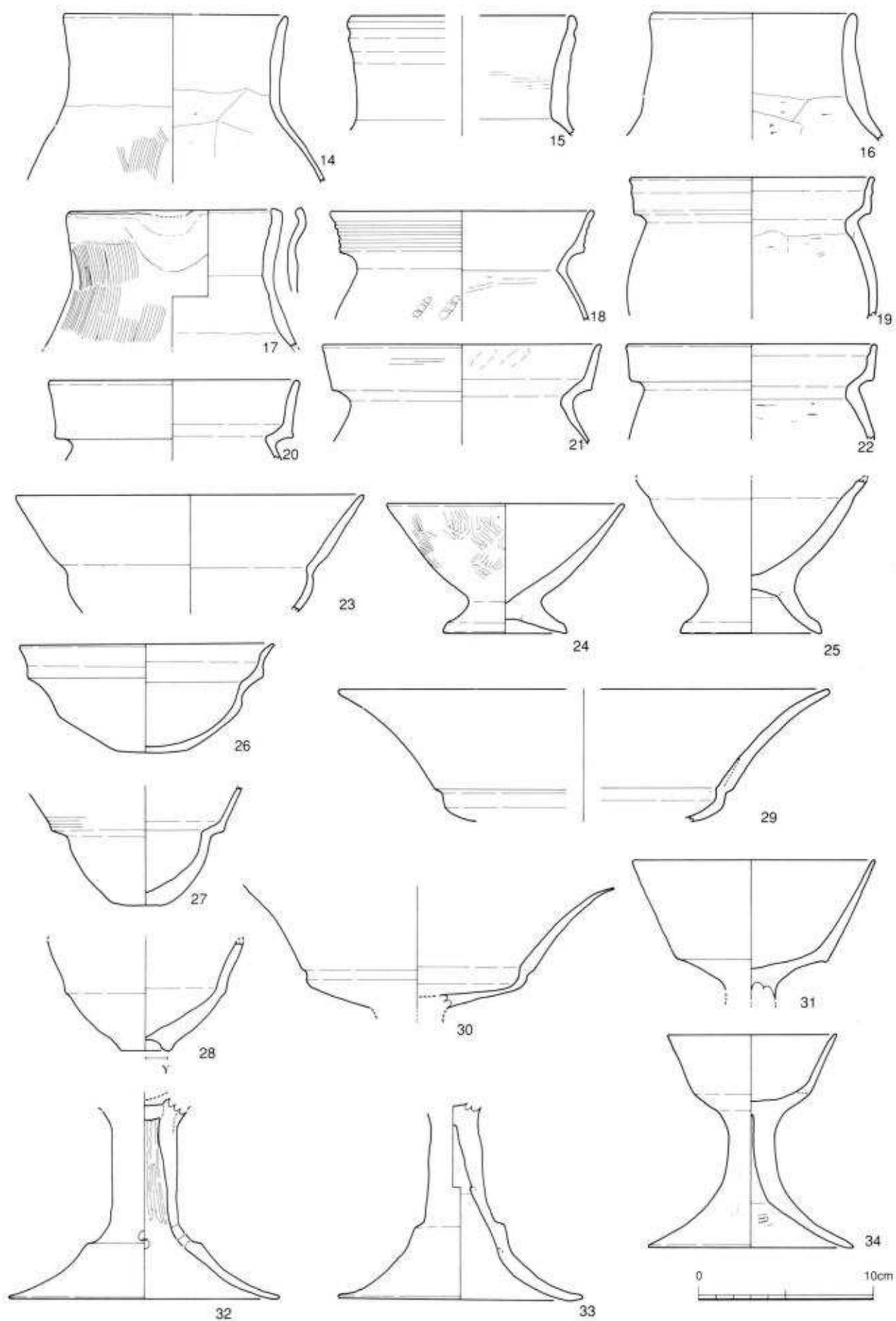
底片 (40～45) 40、44、45は壺の底部と思われる。外面は、縦方向にハケ調整を行う。40は下半のみケズった後、ミガキ調整が施されている。内面はすべてケズリ調整と思われるが、磨耗しており、明確にわかるものは44のみである。

b) SI02A 内柱穴出土土器 (46～51)

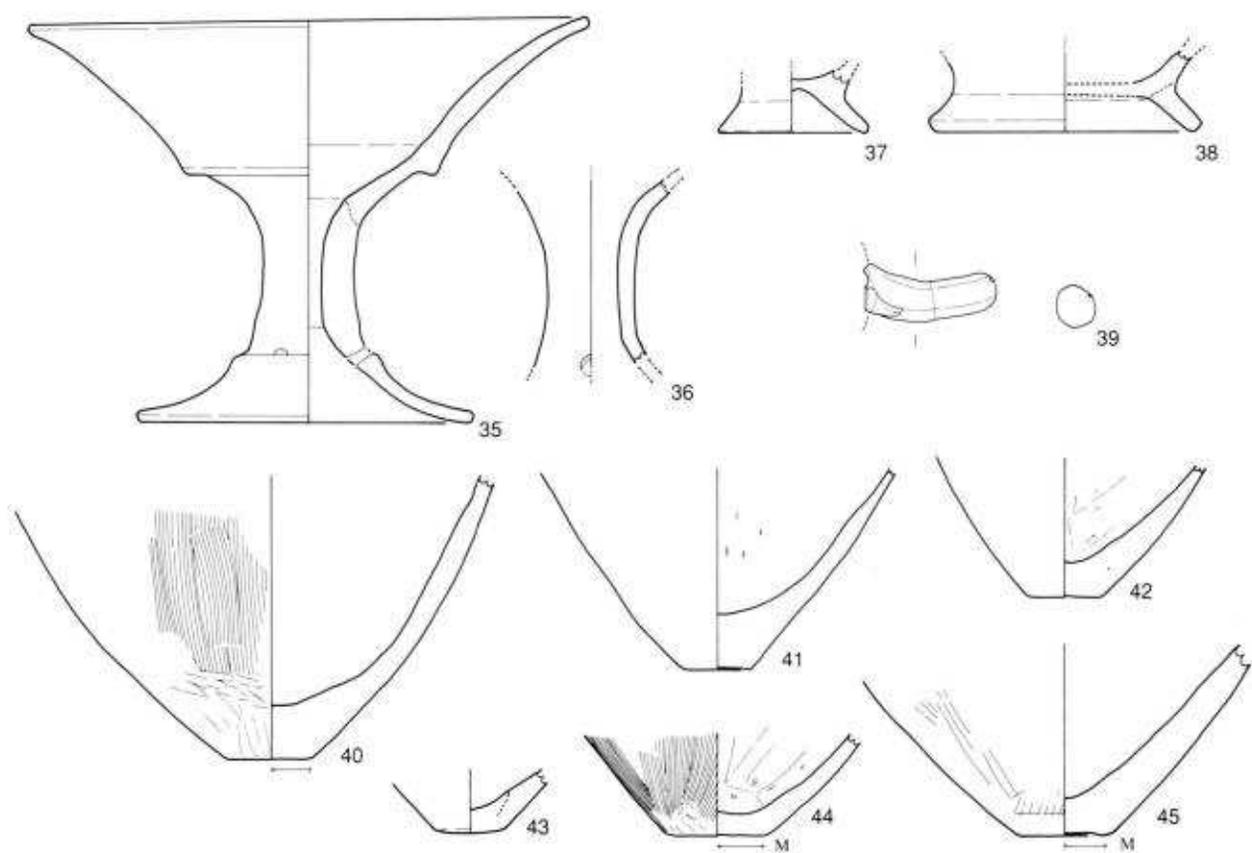
46、47はP1出土土器である。46は内外面剥離が激しく調整不明である。47は、46と同一個体かは不明であるが、壺の底部である。外面は縦方向の強い板ナデ調整が施され、内面はケズリ調整である。49、50はP2出土土器である。49は蓋と思われ、50は高坏もしくは器台の脚である。両者とも内外面剥離しており、調整不明である。48はP6出土土器である。頸部まで残存し、口縁端部はつまみ上げられている。内面は体部への屈曲部から横方向にケズられている。51はP7出土土器である。内外面剥離が激しく調整不明である。但し、内面にはかすかに赤彩が残っており、内外面赤彩が施されていたものと思われる。



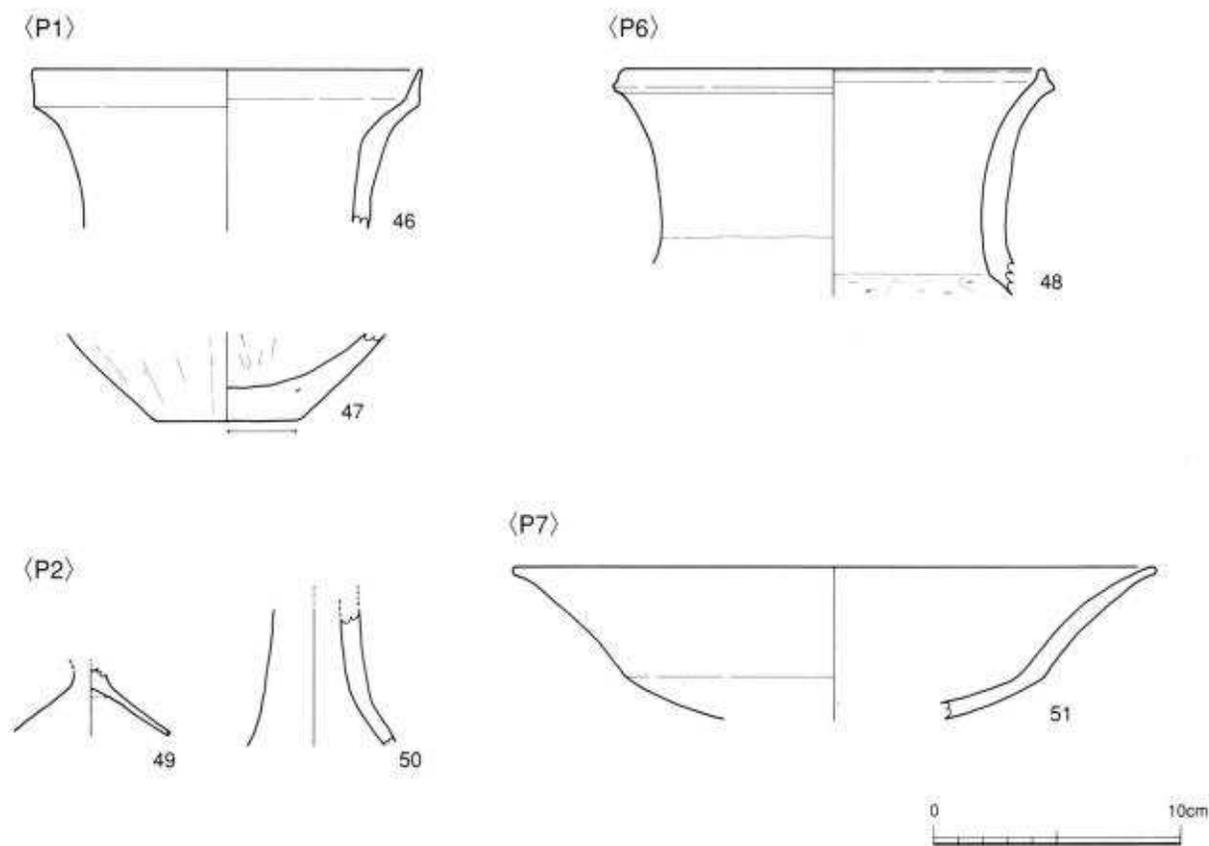
第71図 SI02A床直上出土土器1 (S=1/3)



第72図 SI02A床直上出土土器 2 (S=1/3)



第73図 SI02A床直上出土土器 3 (S=1/3)



第74図 SI02A内柱出土土器 (S=1/3)

c) SI02 内 SK01 出土土器 (52~71)

壺形土器 (52・53・58・59) 52、53は短頸直口壺である。53は口縁端部欠損するが、52と類似したものと思われる。外面縦方向にハケ調整を行い、内面は横方向にナデられている。58はおそらく脚がつくものと思われる。また、体部には把手の貼付後が残存していた。59は、復元はかなわなかったが、有段口縁をもつ小型壺である。剥離が激しく内外面調整不明である。

甕形土器 (54~56) 54、55は擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁内面には、指頭圧痕はない。頸部は、54は面をもつが、55は屈曲している。56は、無文の有段口縁で口縁端部欠損する。

鉢形土器 (57) 無文の有段口縁をもつ鉢である。ゆがみがある土器であるが、反転し凶化復元している。内外面剥離しているが、かろうじて、外面底部はミガキ調整がわかる。

高坏形土器 (60・63) 60は有段高坏で、口縁端部内面はやや、面をもつ。内外面は、剥離が激しく調整不明である。63は、脚のみ残存し、坏部との接合部分も欠損する。

器台形土器 (61) 天地の判断に苦慮したが、内面にはミガキ調整が施されておらず、径も小さいため、脚と判断した。外面は、磨耗が激しいが、擬凹線が施されていることが確認できる。

台付及び底片 (62・64~68) 62は甕もしくは壺の台と思われる。結合部が残存するが、内外面調整不明である。脚は内面横方向のナデ調整である。64、65は壺もしくは甕の底部である。外面縦方向のハケ調整が施され、内面はケズリ調整である。66は壺の底部であり、底面はナデられている。内外面磨耗しているが、内面はおそらくケズリ調整と思われる。67は小型壺の底部と思われ、68は甕の底部である可能性が高い。

小型土器 (69) 輪積みであるが、ゆがみのある土器である。内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

脚 (70・71) 高坏もしくは器台の脚と考えられる。両者とも剥離が激しく、かろうじて70の外面にミガキ調整がみえるだけである。

d) SI02 出土土器 (72~112)

壺形土器 (72・73・84) 72は短頸で有段をもつ壺である。段は明瞭ではなく、強いナデにより作られている。口縁に一部つまむ箇所があり、注ぎ口になるのであろうか。73は短頸壺で、小型のものである。83は剥離痕が2点みられることから、縦方向に把手がつくものと思われる。口縁短部及び底部は欠損する。

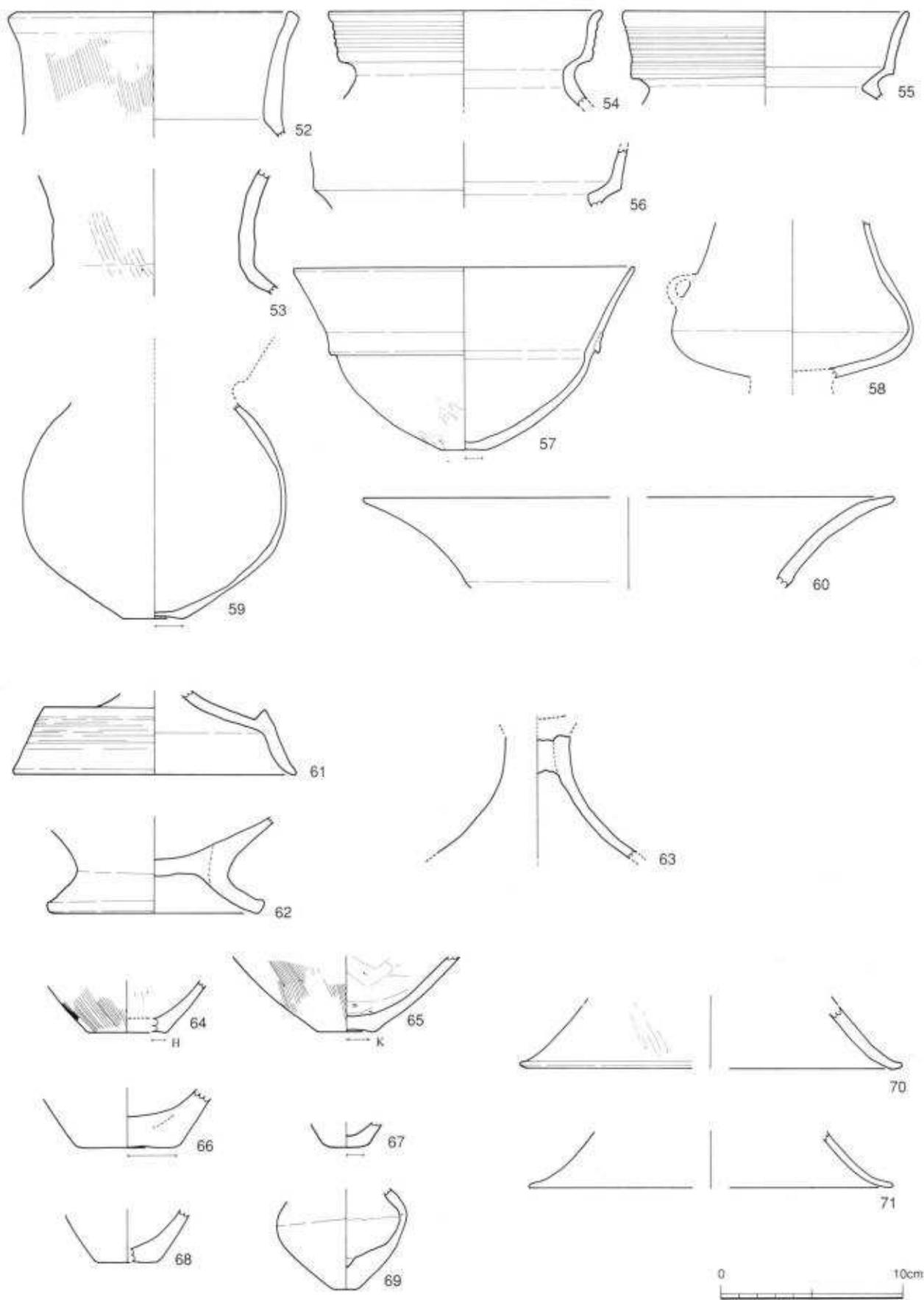
甕形土器 (74~79) 74~77・79は擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁は75以外ほぼ直立気味に立ち上がり、口縁短部は先細りである。77、79は磨耗が激しいが、かろうじて擬凹線が施されていたことが確認できる。79のみが頸部に面をもち、口縁内面には、指頭圧痕がみられる。78は内外面赤彩が施され、外面には横方向のナデによるゆるい段が残る。器形から甕と判断したが、煤は付かず、赤彩がみられることを考慮すると、貯蔵具として使用されていた可能性が高い。

鉢形土器 (80・81・85) 80はおそらく有段口縁をもつ鉢であろう。内外面横方向にミガキ調整が施されている。81はゆるい有段をもつ鉢である。外面は剥離が激しく、内面は横方向のナデ調整が確認できる。85は小型の鉢である。凶上復元しており、実際は、ゆがみが激しい土器である。内外面、磨耗が激しく、調整不明である。

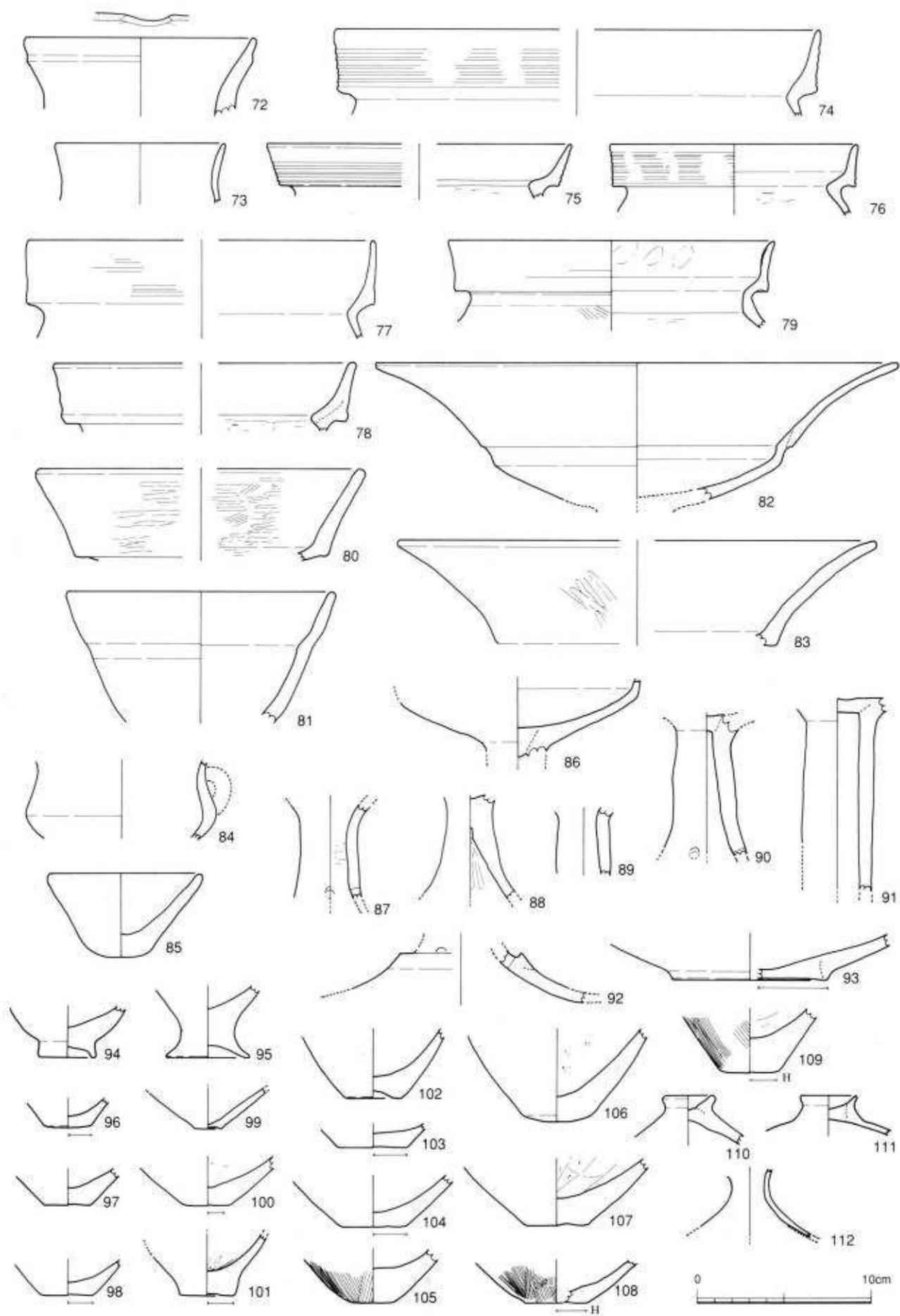
高坏・器台形土器 (82・83・86・87~92) 82、86は有段をもつ高坏である。82は脚との結合部は残存せず、86は有段部より上が欠損する。83はおそらく、器台であろう。有段の部分から下が欠損し、外面縦方向のミガキ調整である。87は器台の有段をもつ脚と思われる。透孔は4方向穿たれており、孔の部分から、段になる部分が欠損するものと思われる。88、90、91は高坏の脚である。88は脚内面に、棒状工具のすじが残る。90はおそらく有段をもつ脚で、段の部分が欠損しているものと思われる。透孔は3方向に穿たれている。91は棒状の脚で外面縦方向のミガキ調整が確認できる。また、内面の充填部には、円形の棒状圧痕がみられる。89、92は、器台もしくは高坏の脚で、92は外面横方向のミガキ調整である。

底片 (93~109) 93は大型壺の底部と思われる。94、95、101は鉢であり、96、102、103、106、109は壺の底部と思われ、103は外面に赤彩が施されている。108は甕の底部と考えられ、外面縦方向にハケ調整が施され、底面にもハケ調整が施される。それ以外に関しては、器種の判断がつかない。

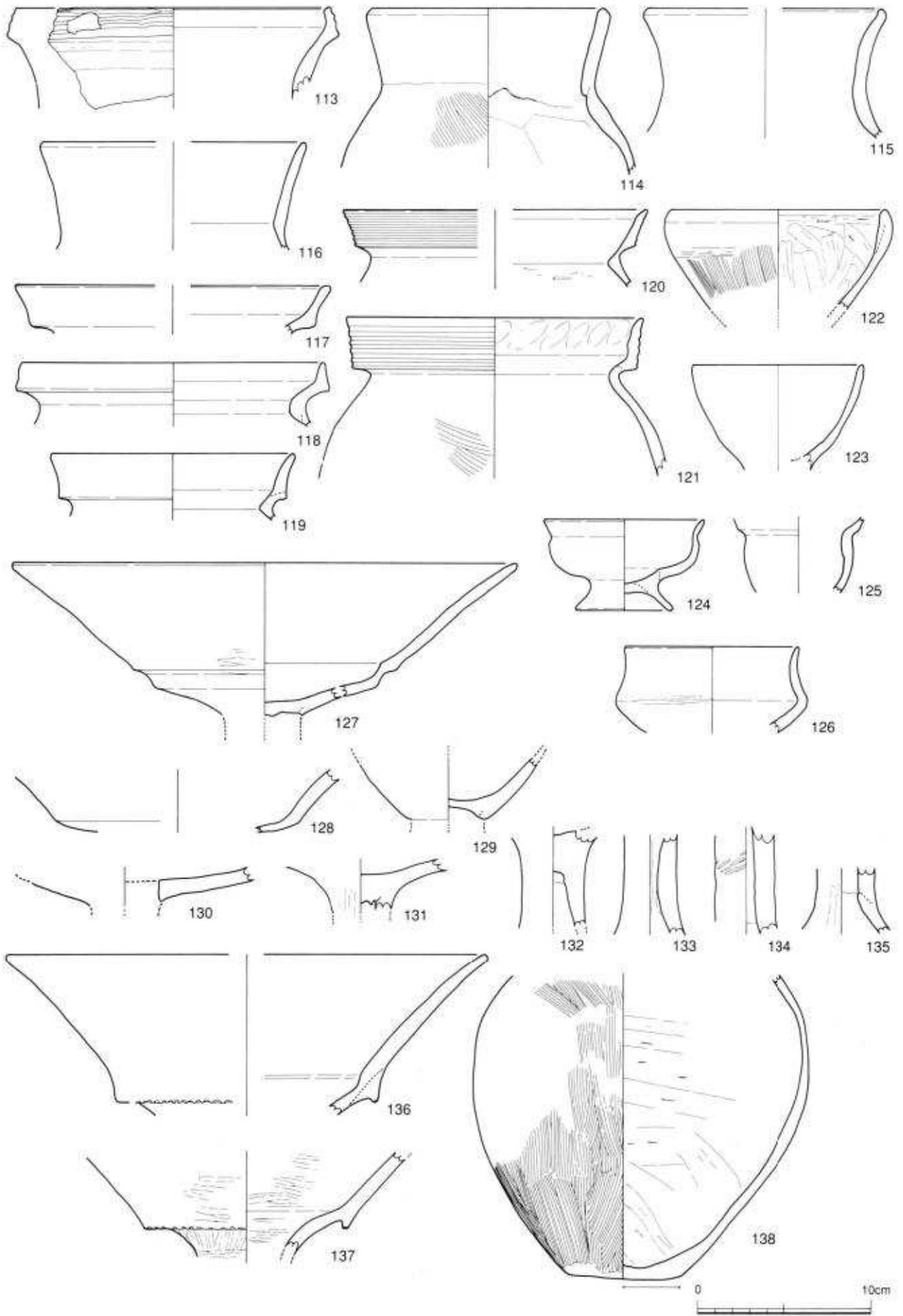
蓋形土器 (110~112) 110、111は頂部が無孔のものであるが、112は剥離が激しく、充填されるのか、有孔かは判断できない。



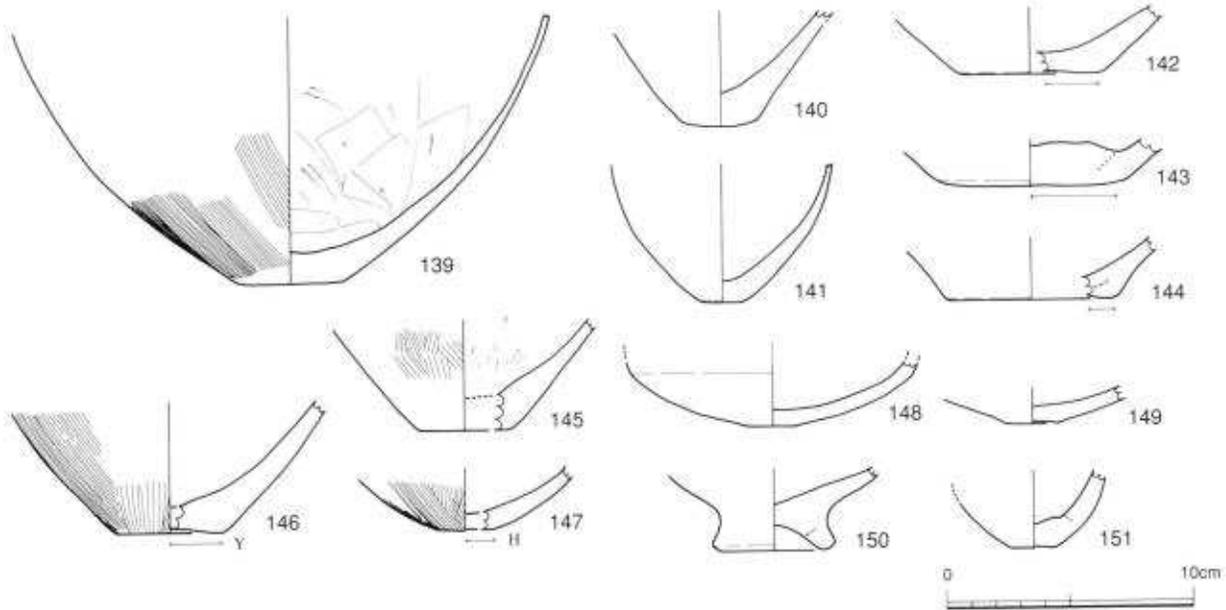
第75図 SI02A内SK01出土土器 (S=1/3)



第76図 SI02出土土器 (S=1/3)



第77図 SI02外周溝出土土器1 (S=1/3)



第78図 SI02外周溝出土土器 2 (S=1/3)

e) SI02 外周溝出土土器 (113~151)

壺形土器 (113~117・126・138) 113は有段口縁をもつ短頸壺である。残存率は低く、口径も推定である。口縁外面には貝であろうか、屈曲が明瞭な擬凹線が施されている。頸部は横方向のナデ調整である。114~116は短頸直口壺である。114は器壁は厚く、口縁端部は丸い。外面体部はハケ調整で、内面には明瞭な粘土接合痕が残り、その下からはケズリ調整が確認できる。126は底部欠損する。内外面剥離しているが、かろうじて外面体部最大径付近は横方向のミガキ調整がみられる。138は頸部から上が欠損する。ゆがみのある土器で、成形後、底面を整えた感を受ける。外面縦方向のハケ調整で、内面は時計逆周り斜め方向のケズリ調整である。

甕形土器 (117~121) 117~119は無文の有段口縁の甕である。118は立ち上がりが短く、それに比し、117、119は拡張している。口縁内外面横方向のナデ調整である。120、121は擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁端部内面は両者とも先細りで、121は指頭圧痕がみられる。口縁外面は、貝かどうかは判断つかないが、両者とも屈曲が明瞭な擬凹線が施されている。

鉢形土器 (122~125) 123は底部が欠損する。124は台との接合は接合法と思われる。薄い作りで、口縁は外反する。125は口縁端部、底部が欠損する。小型の有段鉢と思われる。

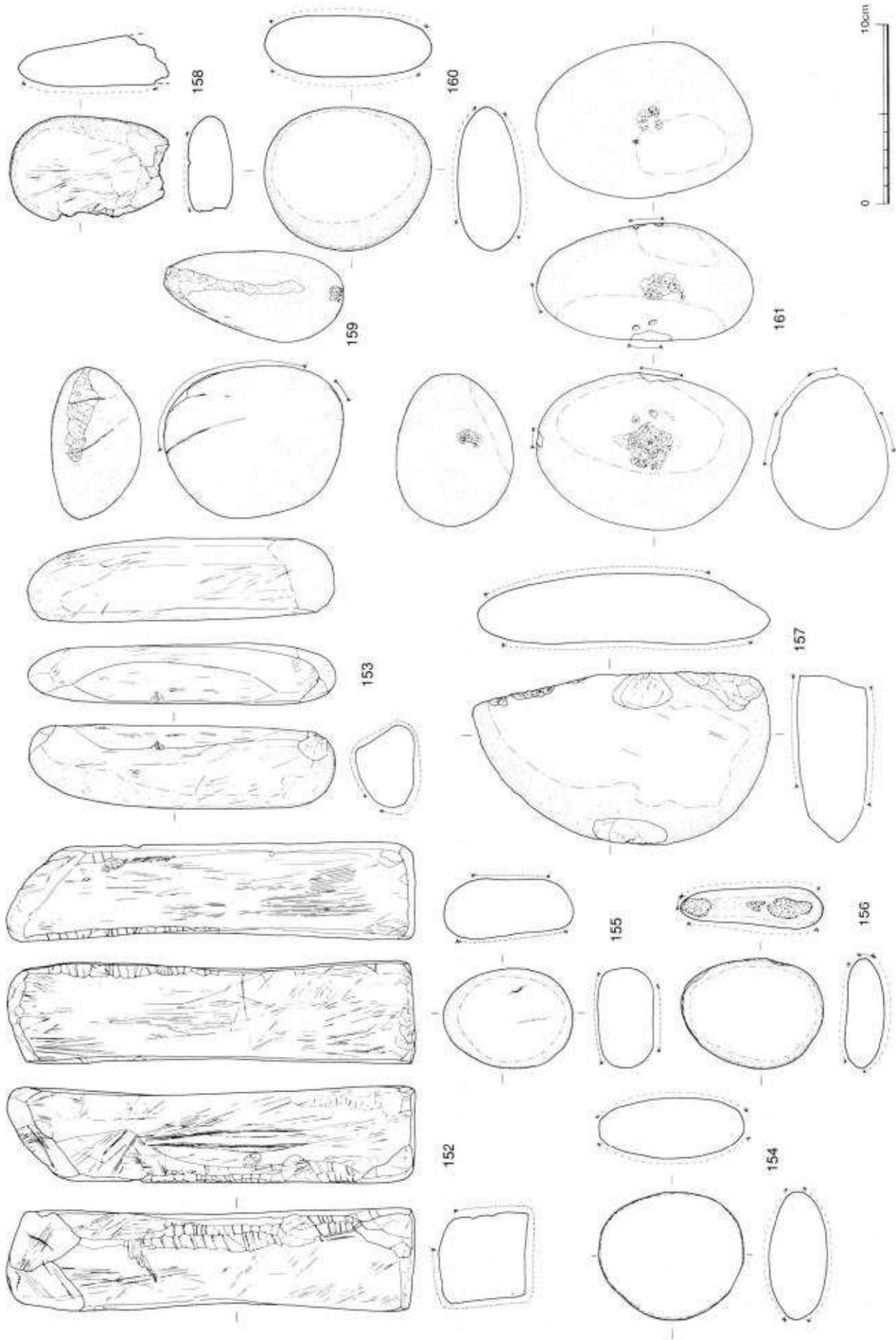
高坏・器台形土器 (127~137) 127は脚部と坏部と図上復元している。内外面剥離が激しく外面横方向のミガキが部分的に確認できるのみである。128は口縁、脚接合部が欠損するが、高坏坏部と考えられる。129は、SI02A 床直上出土土器 (31、34) と類似したもので小型高坏と考えられる。130、131は高坏脚部との接合部分と考えられる。132は高坏脚部であるが、133~135は器台もしくは高坏の脚部としか判断できない。133は内面に絞り痕が残り、134は外面脚柱部に板目のあたりが何点かみられる。整形時のものだろうか。136、137は器台の坏部と考えられ、両者とも有段突出部に連続した刻みが施されている。137は調整の残りが良く、内面は横方向のミガキ、外面坏部は横方向、脚にかけて縦方向と横方向のミガキ調整が確認できる。

底片及び台付 (139~151) 139は壺の底部であり、外面ハケ調整、内面ケズリ調整である。また、底面にX字のヘラ工具による跡がみられる。142~144は底面を広く持ち、すべて底面はナデ調整が施されている。広口壺で球胴状を呈するものの底部と思われる。148、149は小型の有段口縁壺もしくは鉢の底部と思われる。150は台付鉢の台部で、151は小型土器の底部である。それ以外の底部に関しては、器種の判断がつかない。

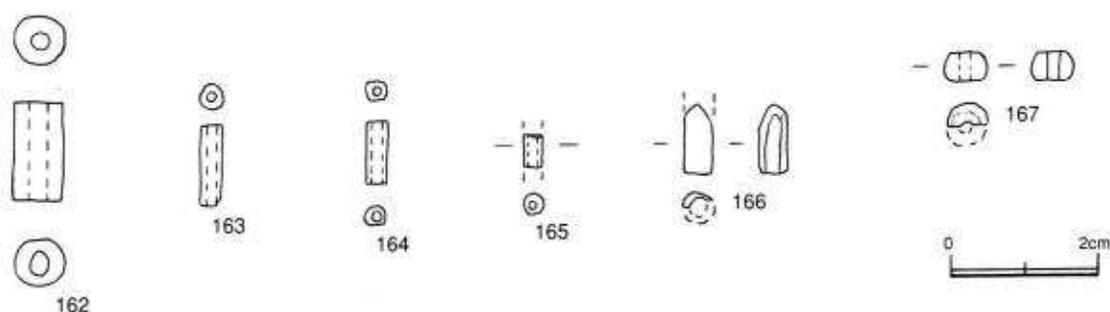
f) SI02 出土石器 (152~161)

SI02A 床直上遺物 (152~155・157)、外周溝出土土器 (158) SK01 内出土石器 (159~161) である。

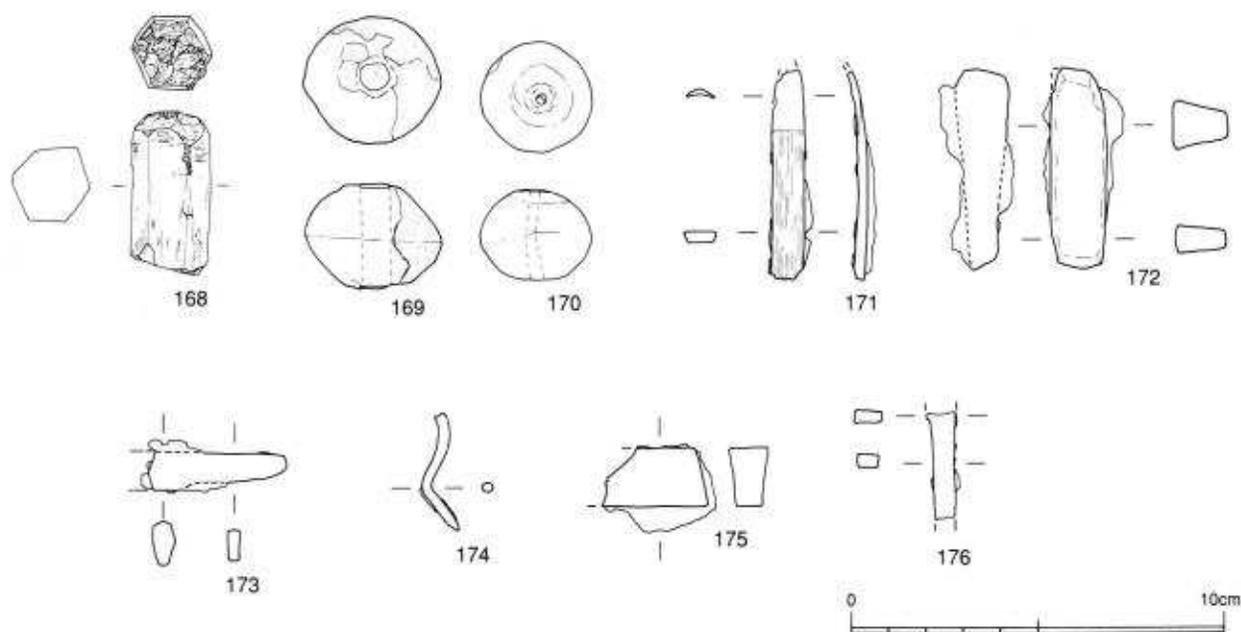
砥石・磨石 (152~158・160) 152、153は、上下縁部を除き、すべての側面が砥面であり、鉄と思われる筋状痕跡がみられる。また、152の側面角には鑿であろうか、加工痕跡が明瞭に残る。158は、片側のみに砥面



第79図 SI02出土石器 (S=1/3)



第80図 SI02 出土管玉・ガラス玉(S=1/1)



第81図 SI02 出土水晶・土玉・鉄製品(S=1/2)

がみられ、鉄と思われる筋状痕跡がみられる。図化表現ないが、被熱を受け、全体に亀裂が入り破損している。154～157、160は、両面に磨面がみられ、とくに155は、緩いくぼみをもつほど磨れている。156は片面に敲打痕がみられる。

敲石・凹石(159・161) 159は、一側面に敲打痕がみられる。161は、下縁部を除いてすべてに敲打痕がみられ、両側面に磨面をもつ。

g) 玉類(162～170)

管玉はすべて緑色凝灰岩製で淡く青みが弱い。162、163が竪穴住居内、164～166が外周溝から出土している。162がもっとも大きく、次いで166が大きく、164、165は形状が類似する。167のガラス玉は、床面精査の際、P6～P7間から出土した。欠損し、半分が残存するのみである。色調は淡青色である。168は紫水晶である。側面は旧状を保つが、上縁部は切断されているものと思われる。169、170は土玉である。169は孔径が0.8cmあるのに対し、170は0.3cmと小さく、両側穿孔である。また外面に赤彩が施されている。

h) 鉄製品(171～176)

171はヤリガンナである。刃部先端と柄が欠損する。柄部の断面形は逆台形を呈し、刃部は薄く華奢な作りである。173は錆ぶくれのため、旧形状の推定は困難であるが、X線写真から判断すると、刃部の大半は欠損した刀子である可能性が高い。175は、鉄刀の茎である。厚みは錆ぶくれのため旧形状を示していない。172、174、176は不明棒状鉄製品である。172の断面は矩形であるが、錆ぶくれ、ひび割れが著しく、旧形状の推定は困難である。これらの様相は北陸の鑿に特徴的なので鑿の可能性も考えられる。174は、断面円形の細長い棒状のものである。先端が細く尖ることから、鉄錐の可能性も考えられる。176は、断面は矩形で、両端欠損する。

3. SI03 (第 82 図～第 83 図)

(1) 遺構

遺跡内の北西、SI01 と SI02 とのほぼ中間に位置する。全形は隅丸長方形を呈し、主軸長約 3.6m、短軸長約 2.8 m を図る。そこで、十字にセクションベルトを設定して掘削を行った。掘り込みは深いところで 15 cm 程度であり、壁は垂直に立つのではなくだらかに掘り込まれている。床面には、主柱穴、壁周溝、貼床をもたず、周囲にもこれといった柱穴はみつからなかった。埋土は、1 層が二次的埋土、2 層が一次的埋土に相当し、3、4 層は地山崩壊土である。5、6 層は SI03 をきる別の遺構埋土と考えられる。竪穴住居跡に含めたが、本来、住まいというよりは、作業場的なものであったのかもしれない。

遺物検出状況

遺物のほとんどは 1 層から出土しており、床面からは浮いた状態である。よって、廃棄後、すぐにはなく、2 層が溜まった後、遺物廃棄が行われたものと考えられ、直接この遺構に付く土器は不明である。土器の破片は、全体に散布するが、原型を留めるものは少なく唯一まとまっていた(1)、(8)の壺であるが、剥離が激しく、(1)は底部までの復元にはいたらず、8 は、土器片の図が描かれているものが、同一個体でもあるが、体部破片は接合には至らなかった。

(2) 遺物

壺形土器 (1・7・8) 1 は、頸部から底部までが欠損するが、接点はなかったものの、検出状況、胎土質感等を考慮すると、7 と同一個体である可能性が高い。両者とも、内外面剥離が激しいが、底部内面には、単位までは分からないが、ケズリ調整が施されている。8 は壺の底部と思われる。外面縦方向のハケ調整、内面には縦方向のケズリ調整がみられる。また底部には、ハケ調整の上に、布目圧痕が付着している。

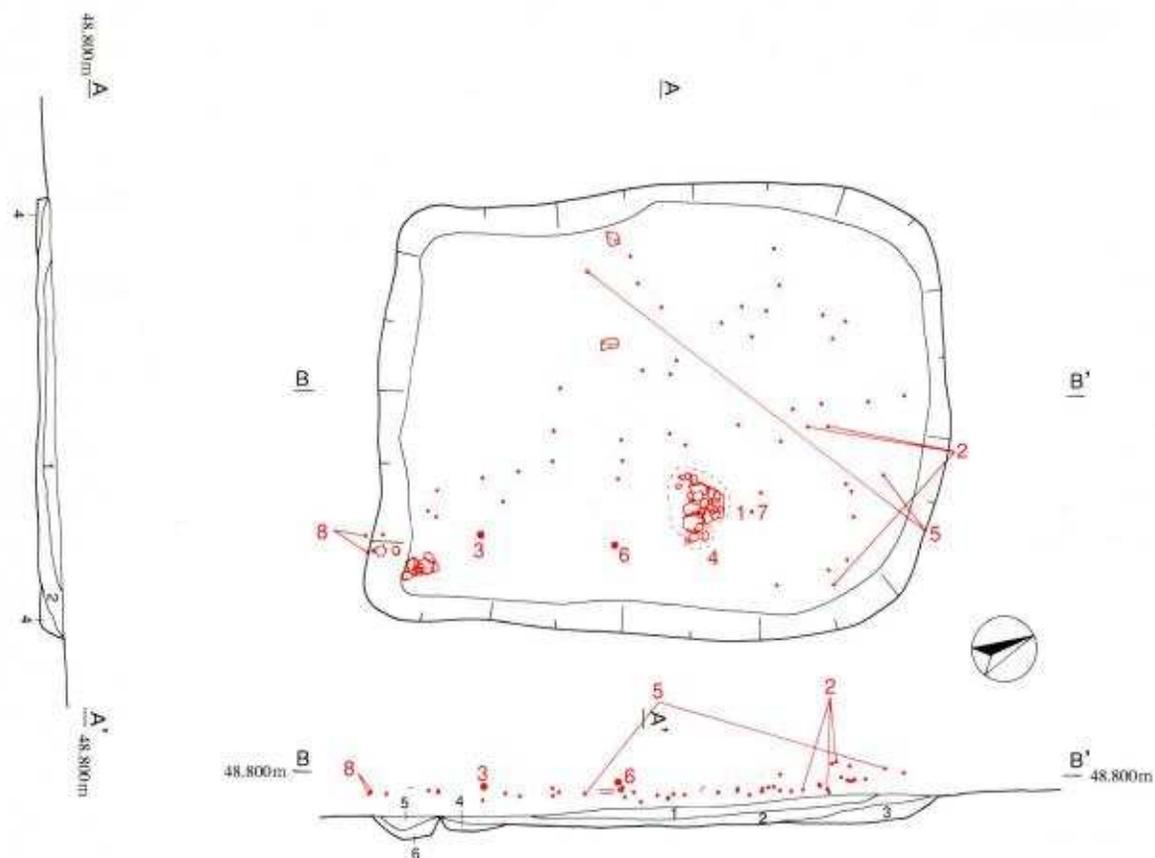
甕形土器 (2・3) 擬凹線を施す有段口縁の甕である。残りが悪く、推定の口径で図化している。口縁内面にはかすかに指頭圧痕がみられる。3 は、甕の底部と考えられる。両者は離れた地点から出土しているが、2 は破片が散布しており、3 も同一個体である可能性が高い。

鉢形土器 (4) 有段口縁をもつ鉢である。口縁端部欠損し、底部も残存しない。内外面磨耗するため、調整は不明である。

高坏・器台形土器 (5・6) 5 は高坏もしくは器台の坏部と思われるが、推定復元した径はさほど大きくなく立ち上がるため、器台の可能性が高い。内外面磨耗のため調整不明である。6 は、高坏もしくは器台の脚と思われる。

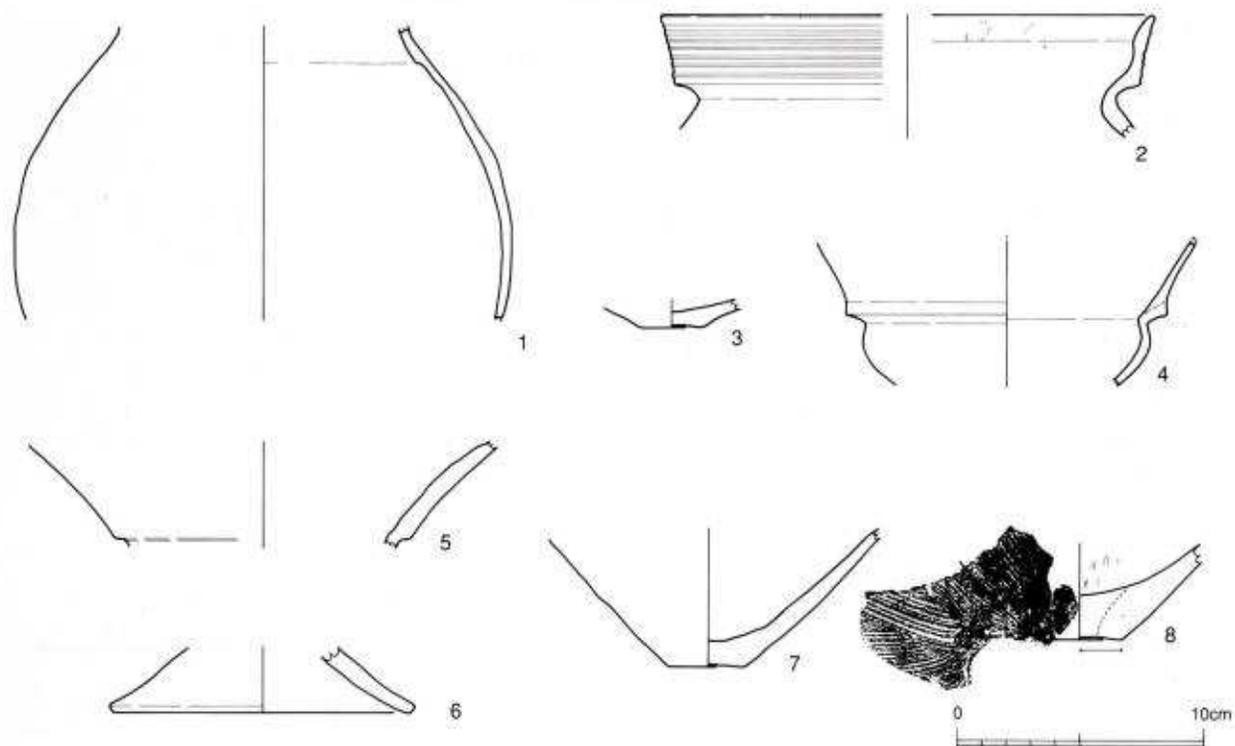


SI03 遺物出土状況 (南東方から)



- 1層：10YR3/3(暗褐色土) カーボン多含有。土器出土。
 2層：10YR5/4(にぶい黄褐色土) カーボン含有。軟質
 3層：10YR5/6(黄褐色土) 地山質に近似。堅硬。
 4層：7.5YR-10YR5/6(褐色-明褐色土) 地山崩壊土。カーボン少含有。
 5層：10YR5/4(にぶい黄褐色土) SI03をみる別遺構。
 6層：10YR5/6(明褐色土) 地山質に近似。カーボン少量含有。

第82図 SI03 平面・土層断面図 (S=1/40)



第83図 SI03出土土器 (S=1/3)

第2項 掘立柱建物跡

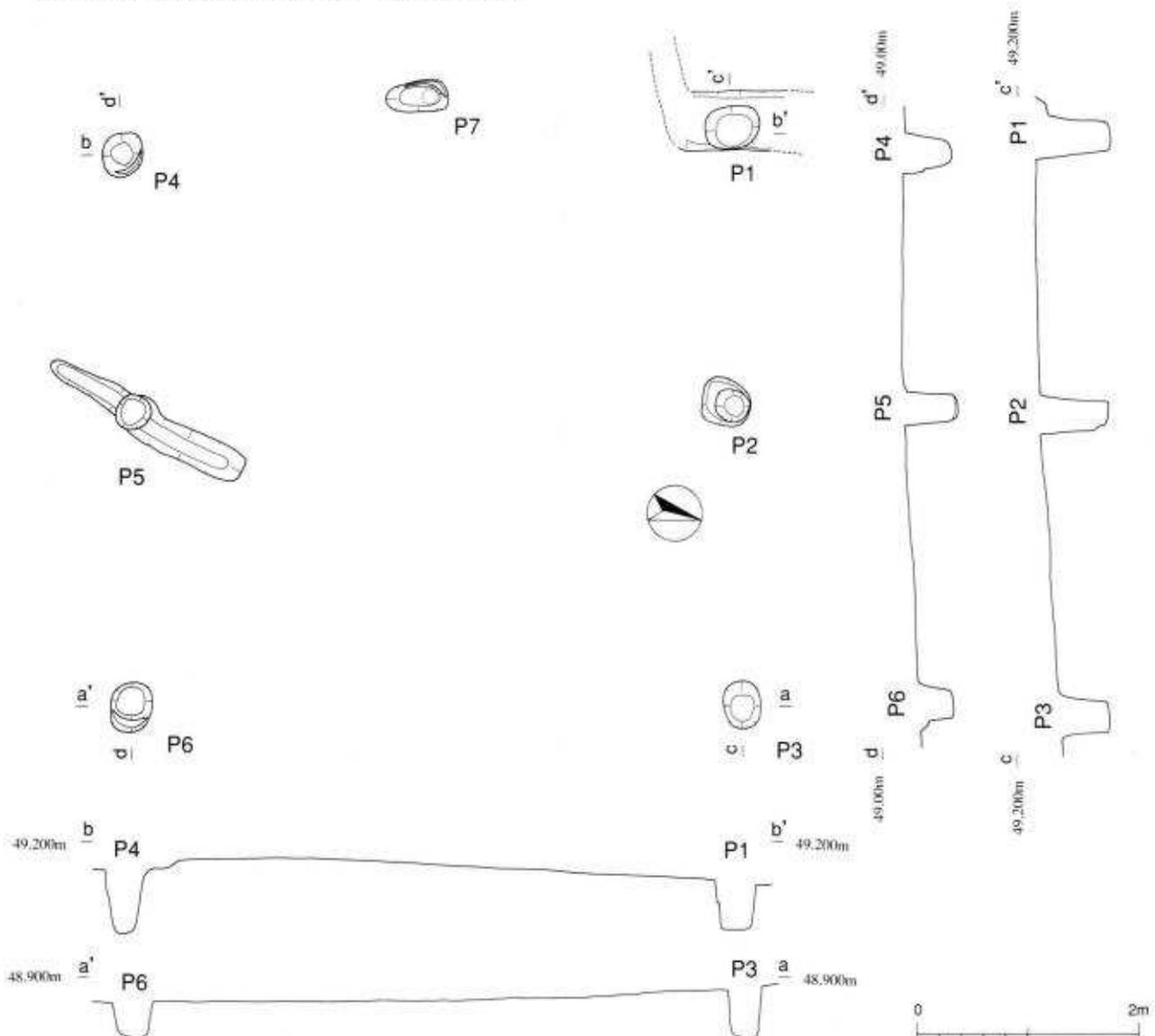
1. SB01 (第84図)

遺構

SB01は、竪穴住居からは離れた南に位置する。ちょうど、谷部に入る手前の見晴らしの良い場所である。SD07をはさみ、北川と南側に分けると、南側は削平が激しい。よって、SB01が立地する箇所は、20~30cm程度の削平を受けているものと思われる。柱穴掘削時には建物が組まれておらず、エレベーション図のみ掲載している。SB01は、第84図には一緒には掲載していないが、東側一方に溝を有する(第6図参照)。片側だけに有するのは意味があるのだろうか。規模は、1間5.5m×2間4.9mである。柱間寸法は、P1-P2間とP4-P5間が約2.4mで、P2-P3間とP5-P6間は約2.6mとやや広い。また、P1-P4間中央、並びからずれたところに、同様の柱穴P7があり、P7は棟持柱になる可能性が高い。柱穴の大きさは、直径35~45cmに収まり、ほぼ同一の深さまで掘り込まれている。柱穴埋土は、7.5YR4/4~4/6(褐色土)を基調とし、地山ブロック含有する。柱根部分にあたる下底面には硬化面がみられる。

遺物出土状況

P3の柱根部分より、壺形土器が1点出土した。



第84図 SB01平面・エレベーション図 (S=1/60)

2. SB02 (第 85 図)

遺構

SB02 は、遺跡のほぼ中央に位置する (第 6 図参照)。SB02 も SB01 同様、20~30 cm 程度の削平を受けているものと思われる。柱穴掘削時には建物が組まれておらず、エレベーション図のみ掲載している。規模は、1 間 4.2 m×3 間 4.8 m である。柱間寸法は 1.5~1.7 m に収まる。柱穴の大きさは、直径 30~50 cm に収まり、P2、P3、P6 が小さい。床面からの高さは少しずれがあり、b-b' 間は P2 が浅く、それ以外はほぼ同じ深さである。a-a' 間は P5 がもっとも深い、それ以外はほぼ同じ高さである。柱穴堆積土は、7.5YR4/6 (褐色土) を基調とし、5 mm 程度のカーボンが含有する。なお、P4、P7 は 10 cm ほどの厚さで、硬化した埋土がみられた。柱の高さの調節のためであろうか。

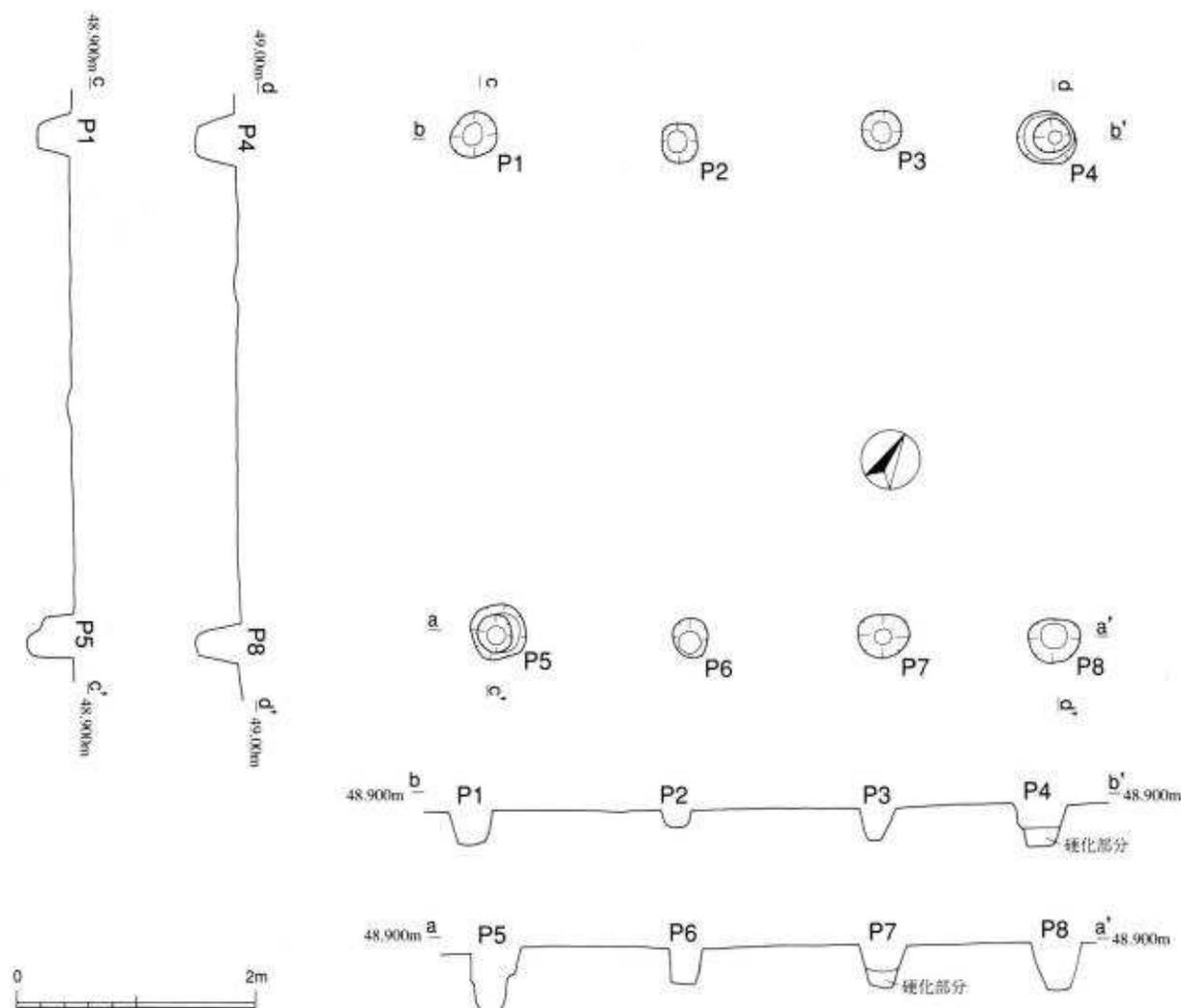
遺物出土状況

どの柱穴からの遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

3. SB03 (第 86 図)

遺構

SB03 は、SB01 の東側に隣接する。第 86 図には一緒には掲載していないが、東側一方に溝を有する (第 6 図参照)。規模は、1 間 5.4 m×2 間 5.3 m で、柱間寸法は、P1-P2 間と P4-P5 間が約 2.2~2.3 m で、P2-P3 間と P5-P6 間は約 3~3.1 m と広い。また、P1-P4 間中央に柱穴 P7 があり、P7 は、SB01 同様、棟持柱になる可能性



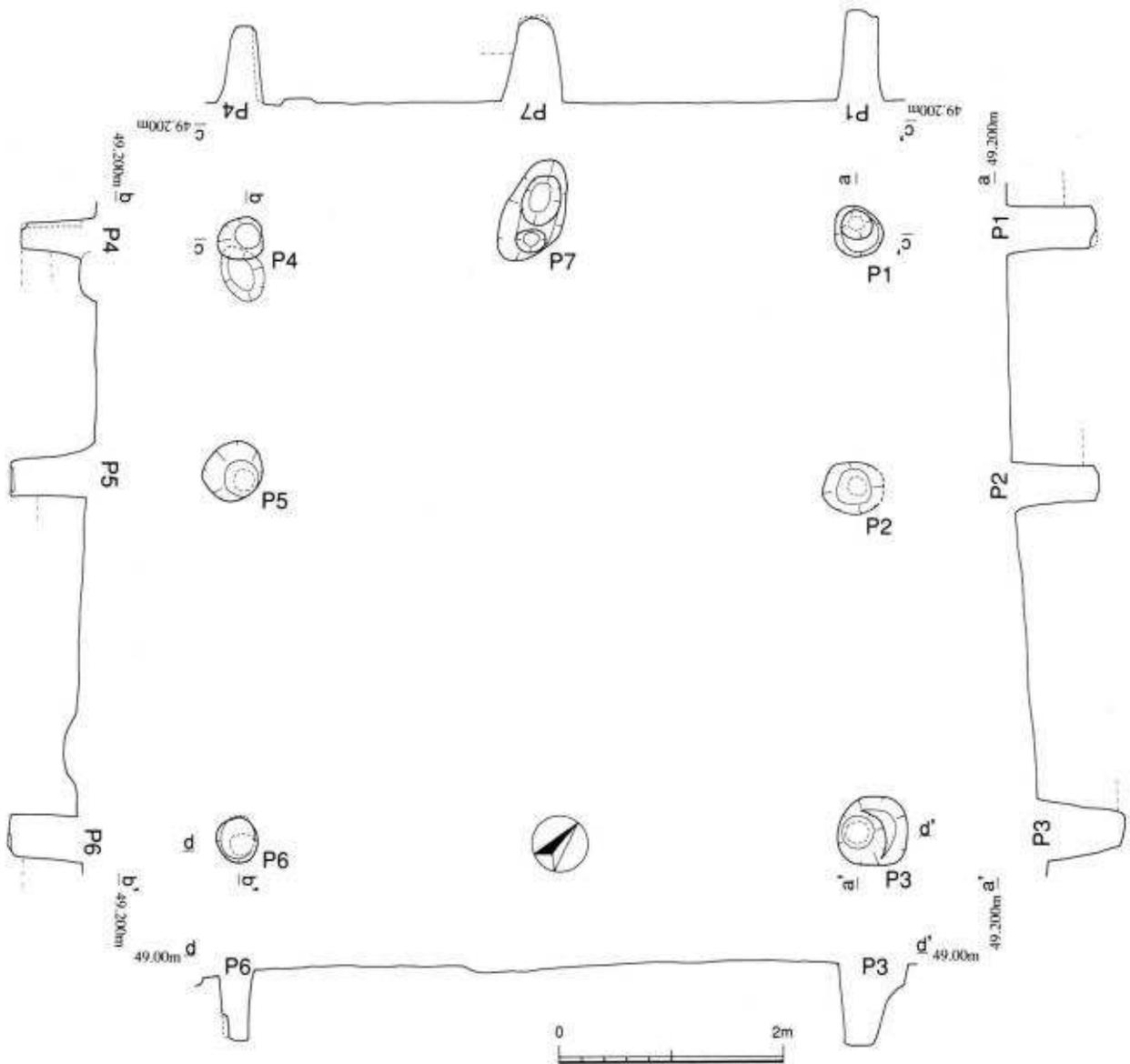
第85図 SB02平面・エレベーション図 (S=1/60)

が高い。柱穴の大きさは、P3がもっとも大きく60cmで直径40~50cmに収まり、P7は並びに直交して長く、90cmを測る。床面からの高さは、d-d'間はc-c'間よりも10cm程度深く、掘り込みの深さは、60~70cmである。柱穴埋土は、掘り方は7.5YR4/6(褐色土)を基調とし、地山ブロックが含有する。柱根部分は、暗褐色土を基調とし、しまり悪く、カーボン、炭化材、焼土塊ブロックが含有し、掘り方との差は明瞭であった。なお、柱根部分の下底面には、硬化面がみられる。

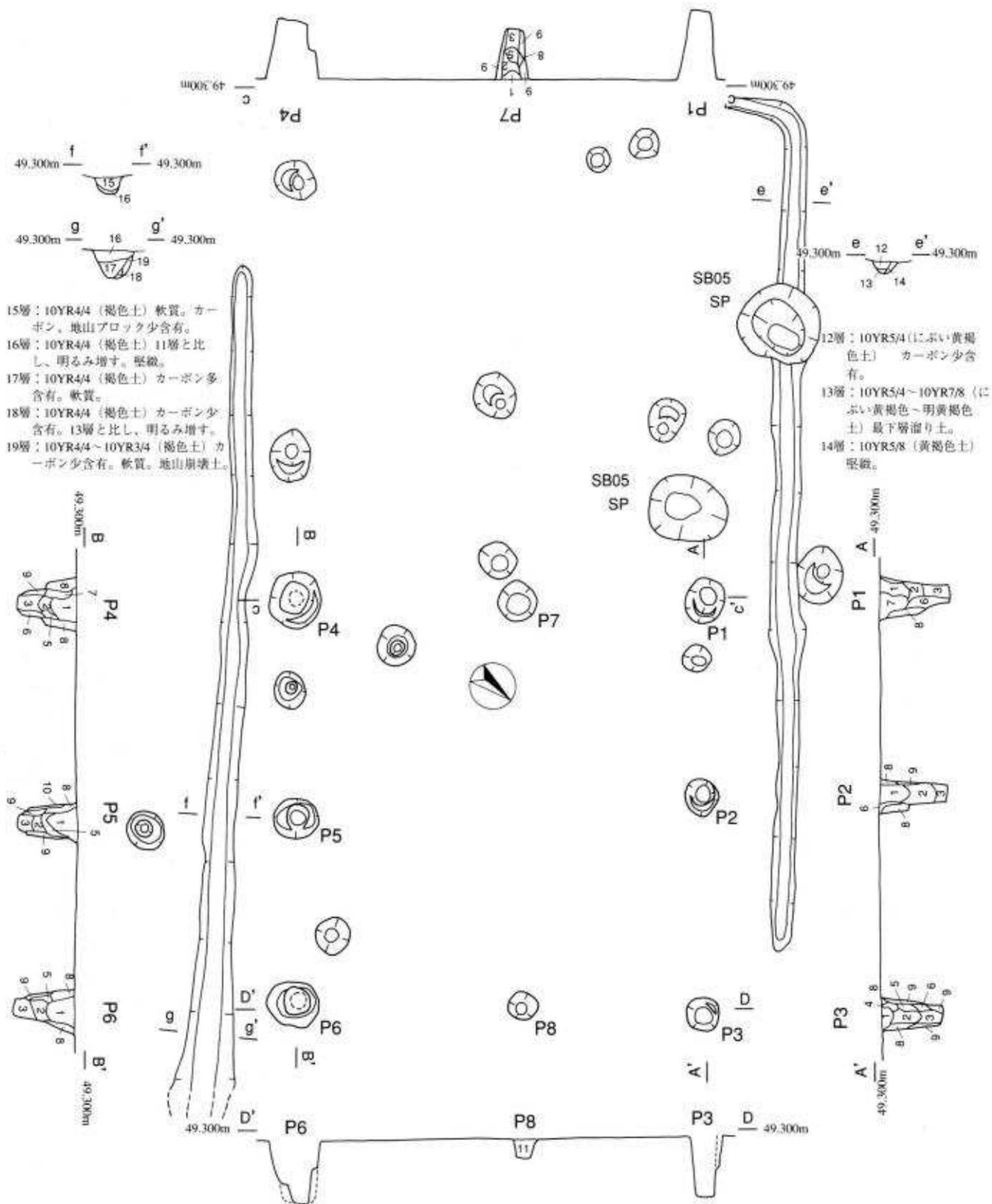
遺物出土状況

柱穴からは、P2を除き、遺物が柱根部分もしくは上層より出土している。P1、P4からは、破砕した砥石片が出土している。P3は、小片の土器と糊付きの炭化米(形状6cm×9cm程度)が、P5からは、2個体の壺が、床より50cm程度と上方から、重なって出土している。P6からは、小片の土器のみ出土し、図化不可能であった。

総じて、遺物の出土状況からSB01は柱を抜き取り、中には柱根が残ったもの(P5)もみられ、廃絶時に遺物埋納を行ったものと考えられる。形状は溝が、桁と梁と違う場所にあるもののSB01と類似している。また、A遺跡の中で片溝を有し、棟持柱を片側のみにも有するのは、この2棟だけである。これらが近隣箇所で見出され、建物の近接具合から考慮すると、SB03からSB01の移行が考えられるのではないかと。



第86図 SB03平面・エレベーション図 (S=1/60)



1層：10YR5/4～4/4（にぶい黄褐～褐色土）黄褐～明黄褐色硬質ブロック（地山ブロック）、カーボン多含有。
 2層：10YR～7.5YR4/4（にぶい暗褐色土）黄褐～明黄褐色硬質ブロック（地山ブロック）1層と比し、少量。軟質。
 3層：7.5YR4/3（暗褐色土）カーボン多含有。硬質ブロック（地山ブロック）少量含有。軟質。
 4層：10YR4/1（暗褐色土）黒色味強。カーボン多含有。堅緻。
 5層：10YR4/6（褐色土）カーボン、明褐色ブロック（地山ブロック）多含有。掘り方埋土。
 6層：10YR4/6（褐色土）5層より赤味強。明褐色ブロック（地山ブロック）多含有。掘り方埋土。堅緻。

7層：10YR5/4～5/6（にぶい黄褐色土）1層に類似。黄褐色ブロック（地山ブロック）多含有。掘り方埋土。堅緻。
 8層：10YR4/6（褐色土）カーボン少含有。マトリックスに細かい溝がみられる。堅緻。
 9層：10YR4/6（褐色土）8層に比し、暗みなし。堅緻。
 10層：10YR5/8（黄褐色土）堅緻。
 11層：10YR5/4（にぶい黄褐色土）堅緻。カーボン少含有。



第87図 SB04 平面・エレベーション・土層断面図 (S=1/60)

4. SB04 (第 87 図)

遺構

SB04 は、SI01 のちょうど西側に位置する (第 6 図参照)。SB04 は周囲に溝がめぐり、コの字に溝は、確認できなかったが、北側の溝は L 字状を呈する。南溝は SI01 に向かうに従い不明瞭になり、SI01 側の末端の形状も不明瞭である。規模は、2 間 4.4m×2 間 4.4m で、ほぼ正方形の柱配置をもつ。ただし、周囲の溝は、梁側で溝の端から端で 6m を測り、桁側は不明瞭であるが、北溝を考慮すると、L 字部分から端までが、8.8m を測る。また、P1 から L 字に曲がる箇所までは、約 5m の空間をもつものと思われる。桁の柱間寸法は、P1-P2 間と P5-P6 間が約 2.1m で、P2-P3 間と P4-P5 間は約 2.3m とやや広く、P2、P5 の中央の柱穴位置がずれる。梁の柱間寸法は、P1-P7 間、P3-P8 間は 2m、P7-P4 間、P8-P6 間は 2.4m を測り、ほぼ同様の幅である。柱穴の大きさは、A-A' ラインは 40 cm 程度で、B-B' ラインは 50~60 cm 程度と大きい。P8 は、もっとも小さく 30 cm である。床面の高さは、P8 を除いて、5 cm 程度のずれしかみられなく、ほぼ同じ高さに掘り込まれている。柱穴埋土は、1~3 層が柱根覆土を示し、4~10 層が掘り方埋土で、地山ブロックを含み、比較的しまりが良い。柱根部分にあたる下底面には硬化面がみられる。溝は幅約 30 cm、深さ 14~30 cm である。溝の覆土は、南北違いをみせ、北溝がにぶい黄褐色土を基調とするのに対し、南溝は褐色土を基調とする。おそらく、掘り込まれた地山の色の差と考えられる。

遺物出土状況

P5、P6、周溝から土器が出土しているが、いずれも残りは悪い。

5. SB05 (第 88 図)

遺構

SB05 は、遺跡の東側に位置し、SB04、SB10、SB14 に隣接する SB04 に伴う溝をきっていることから、SB04 以降につくられたものと考えられ、SB10 の柱穴 P3 が SB05 の柱穴 P1 をきっているため、SB04・SB05・SB10 の順序でつくられたことがわかる。しかし、出土遺物では、さほど時期差が見出せない。なお、SB05 の b-b' 間の柱穴は、掘り進めるに従い、硬化面が二つみられ、建替えが行われていることがわかった。よって、最終段階と思われるものを SB05A とし、それ以前を SB05B と分けて順に説明を行う。

a) SB05A

規模は、1 間 2.8m×2 間 4.4m で、柱間寸法は、すべて約 2.2m である。P4 は硬化面が二つ明瞭に分かれ、心柱部分で、南西側に 40 cm のずれがみられる。当初、建替えの際に、南側だけにずれが生じていると考えていたが、P3 の形状を考慮すると、どちらとも SB05B の段階より若干北にふれているものと思われる。柱穴の大きさは、建替えのゆがみがないものでは、P1 で 60 cm、P2 で 70 cm と大型である。床面の高さは、5 cm 程度の差ではほぼ同一の深さまで掘り込まれており、検出面の高さから約 0.9~1m と深い。柱根部分は暗褐色土を呈し、ややしまりが劣る。掘方は、7.5YR5/6 (明黄褐色土) を基調とし、地山ブロックが含有する。地山ブロックは、どの地山層まで掘削しているかで、含有する土の差がでていようである。

また、建物の区画内に土坑 (SK06) がみられる。建物に伴うものであろうか。

遺物出土状況

P3 の柱根部分より、甕形土器の口縁が 1 点出土し、P4 より、器台もしくは高坏の坏部と被熱を受けた磨石が出土している。

b) SB05B

規模は、1 間 2.5m×2 間 4.1m と SB05A に比し、やや小さい。柱間寸法は、約 2~2.1m である。エレベーション図は、南側のみ図化しており、e-e' がそれに該当する。柱穴の大きさは、SB05A 同様の大きさをもつものと思われる。床面の高さは、P6 が浅く、10 cm 程度の差をもつ。

6. SB06 (第 89 図)

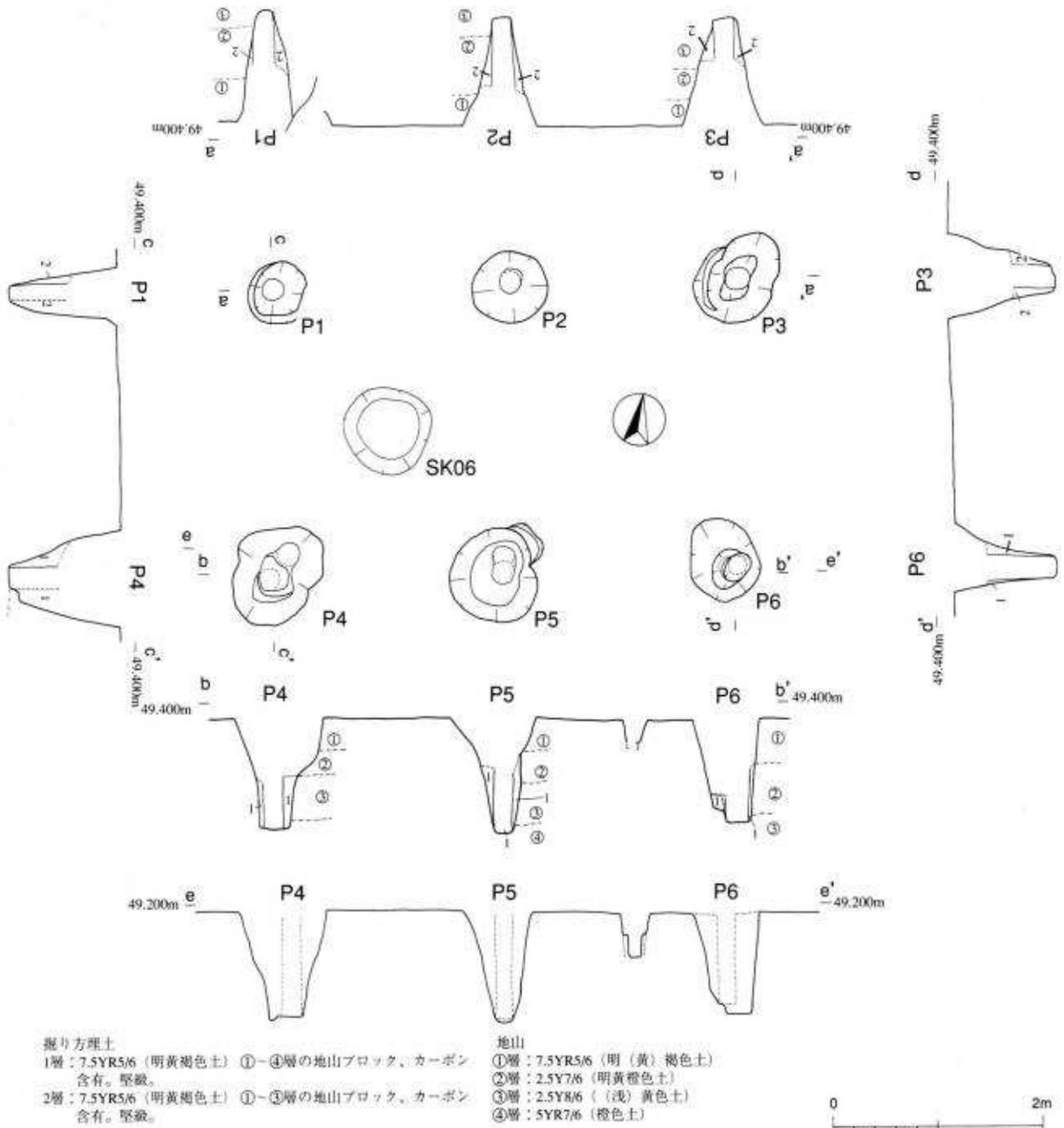
遺構

SB06 は、遺跡のちょうど高台、SB07 の隣に位置する (第 6 図参照)。SB06 は布掘建物であり、A 遺跡内にあ

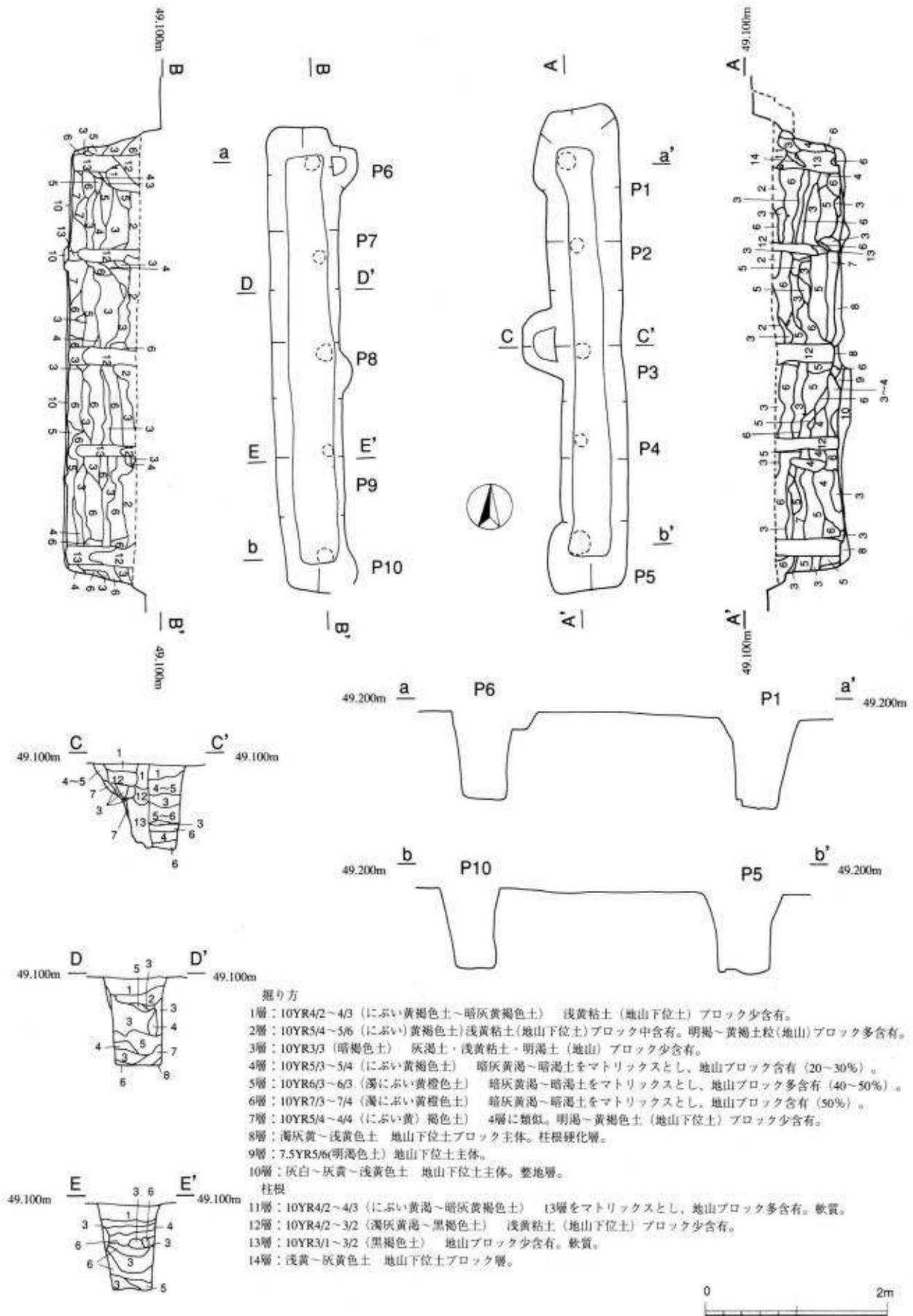
る2棟のうちの1棟である。規模は1間2.8m×2間4.2mであるが、支柱穴の間に小さい柱穴がみられた。柱根部分は20cm程度掘削し、確認することができた。それに合わせて、縦と横にセクションを3本設定した。ただ、支柱穴の中間に位置する小さな柱穴は、セクションラインからややずれており、東西とも東寄りに配置されている。掘り込み溝の形状は、柱穴が中央ではなく内側にずれ、柱穴部分はふくらみをもつ。床面の高さは、西側は比較的平面で掘りあげられているが、東側は、凸凹で床面を整地しているようである。長軸長5~5.2m×短軸長は0.8mで、検出面からの深さは約1mである。柱根下底面は、すべて溝の掘り方埋土よりも上で検出され、硬化面を確認することができた。桁の柱間寸法は支柱穴間で、A-A'ラインは2間とも約2.1mで、P4-P5間は2m、P5-P6間は約2.2mである。

遺物出土状況

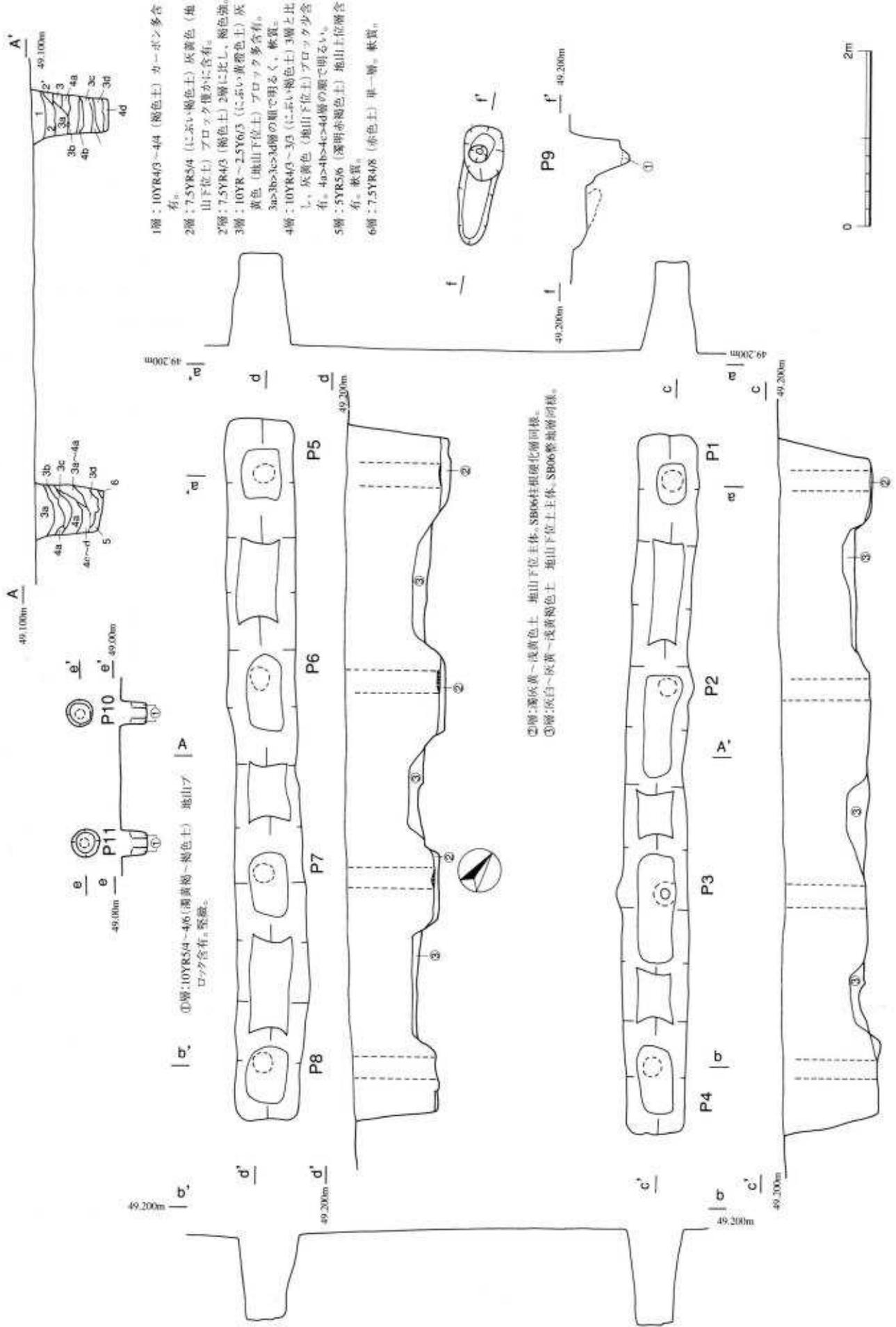
P1、P4の柱根部分から遺物が出土している。P1からは高坏もしくは器台の脚1点と棒状鉄製品1点、P4からは、甕の口縁と体部が出土している。



第88図 SB05平面・エレベーション図 (S=1/60)



第89図 SB06 平面・エレベーション・土層断面図 (S=1/60)



第90図 SB07平面・エレベーション・土層断面図 (S=1/60)

7. SB07 (第90図)

遺構

SB07は、遺跡のちょうど高台、SB06の隣に位置する(第6図参照)。SB06同様、布掘建物であり、A遺跡内にある2棟のうちの1棟である。規模は1間4.6m×2間6.8mで、北側に棟持柱をもち、南側は道路状遺構(SD07)があるため、両側に伴うかは不明である。また、西側P6-P7間に溝縁から1.7m離れたところに、小さい柱穴が二つある。おそらく、これらもSB07に伴う施設の一部と考えられ、位置的に梯子のようなものを想像する。SB07の主柱穴は、検出面で確認できず、横に1本セクションラインを設定し、掘削を行った。溝の床面は、柱が位置する部分のみ30cm程度掘り込みは浅く、整地面からの高さも踏まえると、西溝は50cm程度の差をもつ。また柱の下底面は硬化していることから、柱の位置を確定することができた。溝の規模は、長軸長7.9m×短軸長は0.8mで、検出面からの深さは約1mである。桁の柱間寸法は主柱穴間で、d-d'ラインは3間とも約2.2~2.3mに収まり、c-c'ラインは、P4-P3間は2.0mと狭く、P1-P2間、P2-P3間は約2.4mである。棟持柱は、溝から2m離れたところに位置し、建物の長軸方向に長く掘り方をもつ。西側に伴う二つの小柱穴は径30cmで、床面の高さは同一である。検出面からの掘り込みは30cmと浅い。

遺物出土状況

検出面から確認できたものが2点、P2-P5の柱根部分から遺物が出土している。P2からは高坏もしくは器台の坏と脚1点とP3からは高坏の脚、壺の底部1点づつ、P4からは、壺が2点出している。

8. SB08 (第91図)

遺構

SB08は、遺跡の高台、SB07の西側に位置する。規模は1間2.8m×2間4mで、柱間寸法は、すべて約2mである。柱穴の大きさは、小さいもので(P2、P3)60cm、大きいもので(P4、P5)80cmと大型である。床面の高さは10cm程度の差で掘り込まれており、硬化面が隆起する柱穴もあることから、床面を整地し、隆起させ、柱の高さを調節しているものと考えられる。検出面の高さからは約0.7mと深い。柱根部分は暗褐色土を呈し、ややしまりが劣る。掘り方は、褐~赤褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。地山ブロックは、どの地山層まで掘削しているかで、含有する土の差がでていようである。なお、エレベーション図の柱穴内に記載してある点線は、柱根の輪郭が明瞭にみえたラインを示す。

遺物出土状況

細片の土器が出土している。

9. SB09 (第91図)

遺構

SB09は、遺跡の高台、SB06、07の北側に位置する。規模は1間2.6m×2間4mで、柱間寸法は、すべて約2mである。柱穴の大きさは、50~60cmに収まる。床面の高さは5cm程度の差で、ほぼ同一の高さに掘り込まれているが、P3は10cm程度の硬化層をもち、他の柱穴に比しやや浅くなる。検出面の高さからは約0.7mと深い。柱根部分は暗褐色土を呈し、しまりが劣る。掘り方は褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。

遺物出土状況

細片の土器が、P6から出している。

10. SB10 (第92図)

遺構

SB10は、遺跡の東側に位置し、SB05、SB14と重なる。規模は1間3.4m×2間4.3mで、柱間寸法は、すべて約2.2mである。柱穴の大きさは、40~50cm内に収まる。床面の高さは、どちらの並びも中間の柱跡が浅く、両端と20cm程度の差をもつ。両端の柱穴の検出面からの高さは70~90cmと深い。柱根部分は掘り方部分より下がり、硬化面をもつことから、ほとんど整地せず掘り込みの形状のまま、建てられていることがわかる。柱根部分は暗褐色土を呈し、ややしまりが劣る。掘り方は、明褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。

遺物出土状況

P6 から甕の口縁と底部が出土している。

11. SB12 (第 92 図)

遺構

SB12 は、遺跡の高台、SB08 の西側、SX01 の東側に位置する。規模は 1 間 3.6m×片 2 間・片 3 間 5.4m と柱数に違いをみせる。柱間寸法は、3 間になる東側 a-a' ラインが、すべて 1.8m の間隔であり、2 間になる西側 b-b' ラインが、P5-P6 間は 2.8m、P6-P7 間は 2.6m で、両端の距離のつじつまは合っている。ただし、3 間になる東側の柱穴 P4 は、ややラインからずれる。柱穴の大きさは 60~70 cm に収まり、大型である。床面の高さは、西側はほぼ均質に掘り込まれており、東側は P2 のみ、やや浅い。また全体的に、尾根側である東側のほうが浅く、西側と 10 cm 程度の差をもつ。検出面の高さからは、深いところで、約 1m と深く掘り込まれている。柱根部分の下底面には、すべて硬化面が確認できた。柱根部分は暗褐色土を呈し、ややしまりが劣る。掘り方は、黄褐~赤褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。

遺物出土状況

P6 の柱根部分から高坏もしくは器台の脚が出土している。

12. SB11 (第 93 図)

遺構

SB11 は、遺跡の北西側の平坦面、SX02 の東側に位置する(第 6 図参照)。周囲にコの字状に溝がめぐり、SB04 に類似した形状である。規模は、1 間 3.5m×2 間 4.0m で、柱間寸法は、ほぼ 2m と等間隔である。周囲の溝は、梁側で溝の端から端で 5m を測り、桁側は西溝で 9m、東溝で 8.3m で西側のほうが長い。また、区画される溝縁から柱穴縁までの箇所までは、約 2.3m の空間をもつものと思われる。柱穴の大きさは、35~50 cm 内で収まる。ただ、P2~P4 は柱根を抜取りのため、プランが広がったものと思われる。床面の高さは、5 cm 程度のずれしかみられなく、ほぼ同じ高さに掘り込まれている。柱穴埋土は、柱根部分は暗褐色土を呈し、しまりが悪く、掘り方埋土は黄褐~褐色土を基調とし、地山ブロックを含み、比較的しまりが良い。柱根部分にあたる下底面には硬化面がみられる。溝は幅約 30 cm、深さ 10~30 cm である。

遺物出土状況

周溝から高坏もしくは器台の脚裾部が出土している。

13. SB13 (第 94 図)

遺構

SB13 は、遺跡の高台、SB10 の北側に位置する(第 6 図参照)。規模は 1 間 3.7m×1 間 4.5m である。柱穴の大きさは、35 cm 程度と小型である。床面の高さは、5 cm 程度の差しかなく、ほぼ均質に掘り込まれている。検出面の高さからは、深いもので約 50cm と比較的浅い。柱根部分の下底面には、P2 を除いて硬化面が確認できた。柱根部分は暗褐色土を呈し、しまりが劣る。掘り方は黄褐~褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。

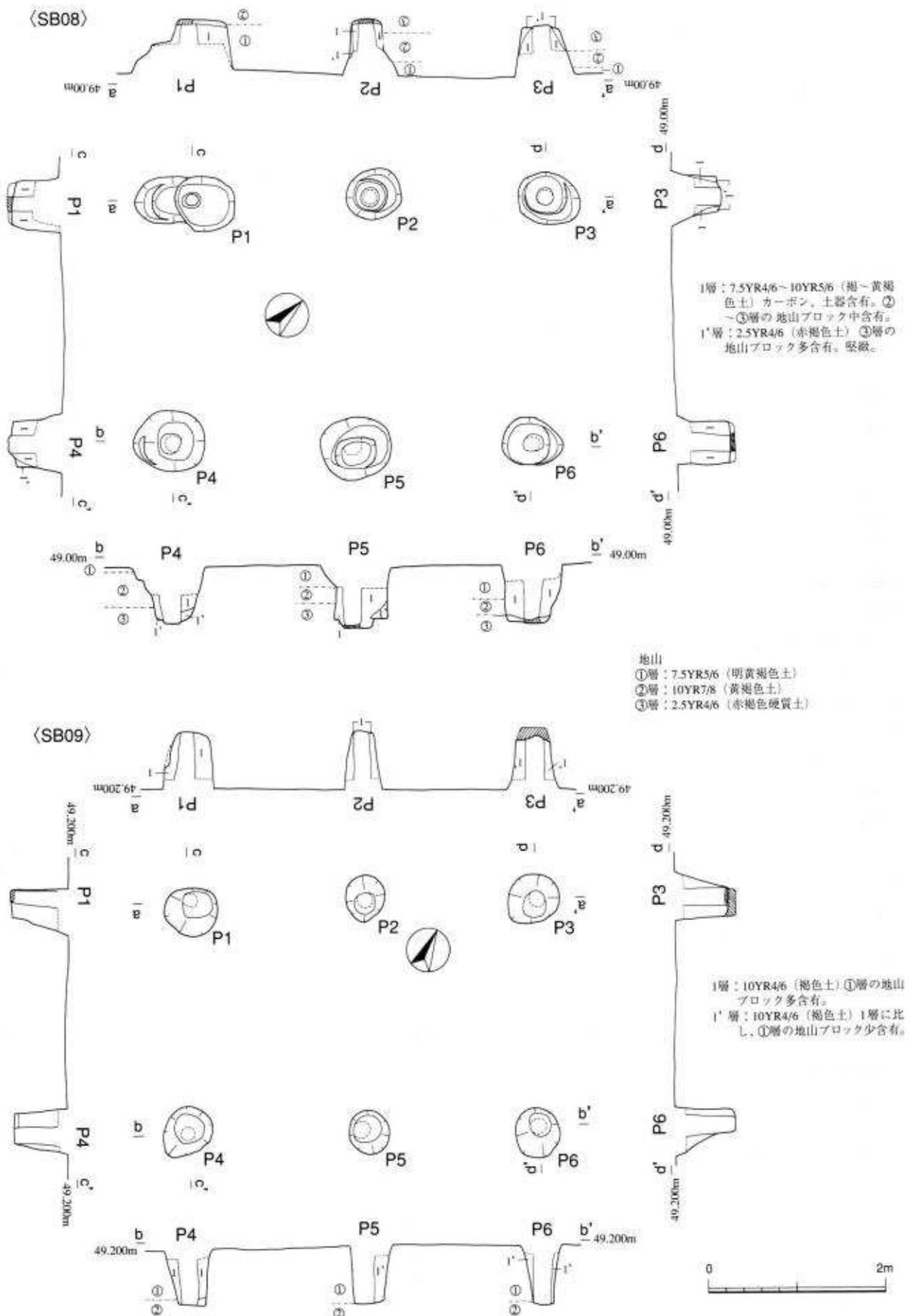
遺物出土状況

細片のみの遺物しか出土していない。

14. SB14 (第 94 図)

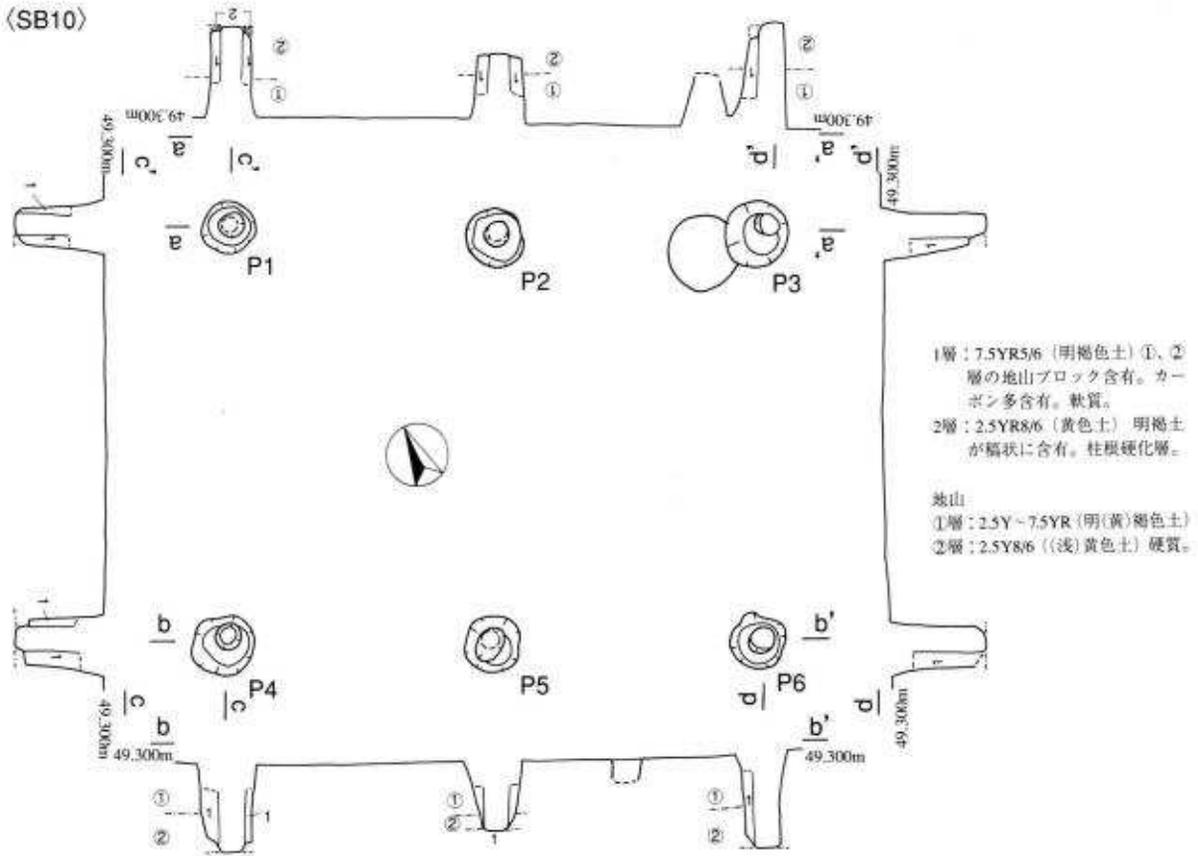
遺構

SB14 は、SB10 と重複した箇所に位置する。規模は 1 間 3.5m×1 間 4.3m と方形に近い。柱穴の大きさはすべて 35 cm 程度と小型で、SB13 と同程度である。床面の高さは、P4 は比較的深いが、残りはほぼ同一である。検出面の高さからは、深いところで、約 55cm と比較的浅い。柱根部分の下底面には、すべて硬化面が確認することができた。柱根部分は暗褐色土を呈し、ややしまりが劣る。掘り方は、黄褐~褐色土を基調とし、地山ブロックが含有する。

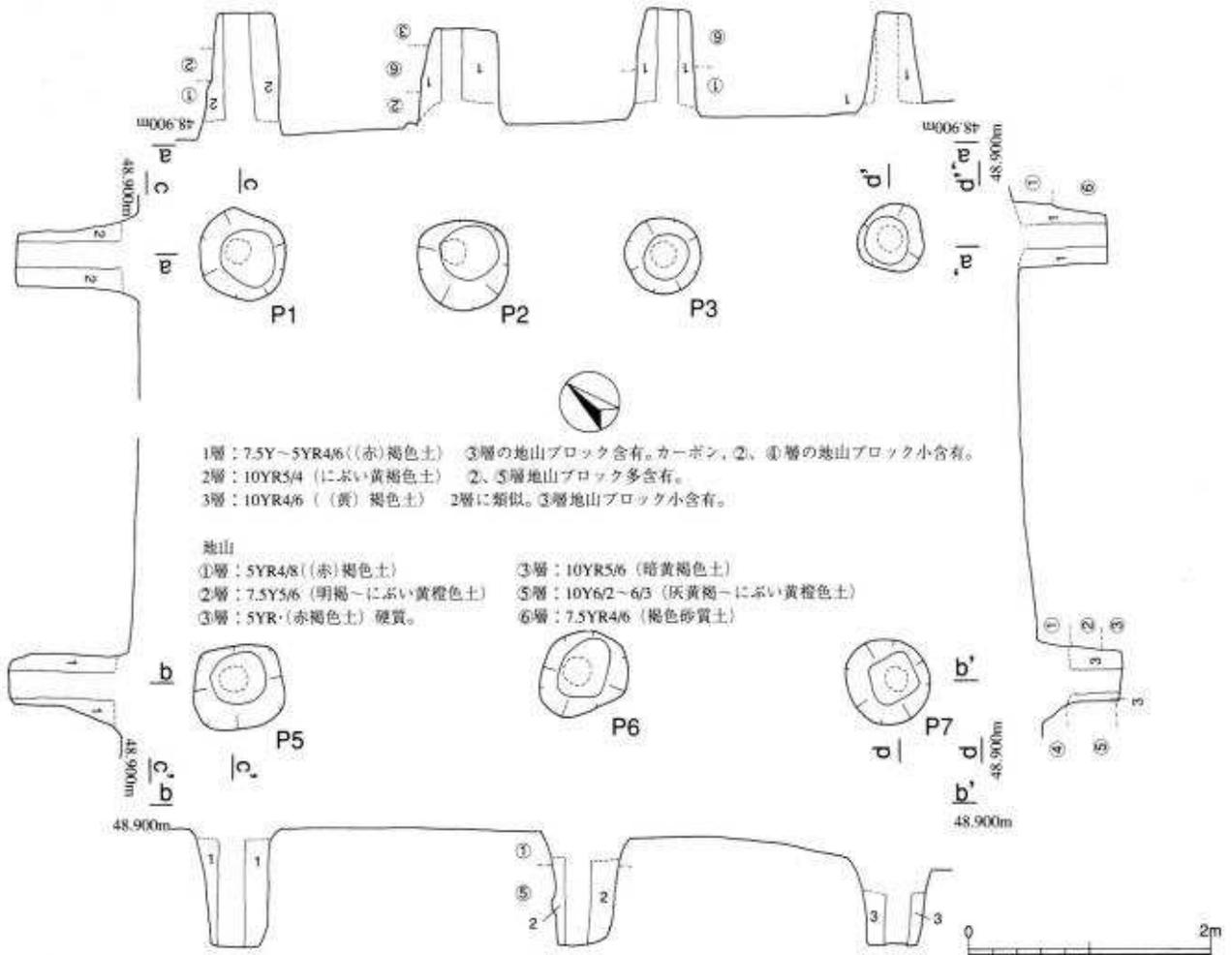


第91図 SB08, 9平面・エレベーション図 (S=1/60)

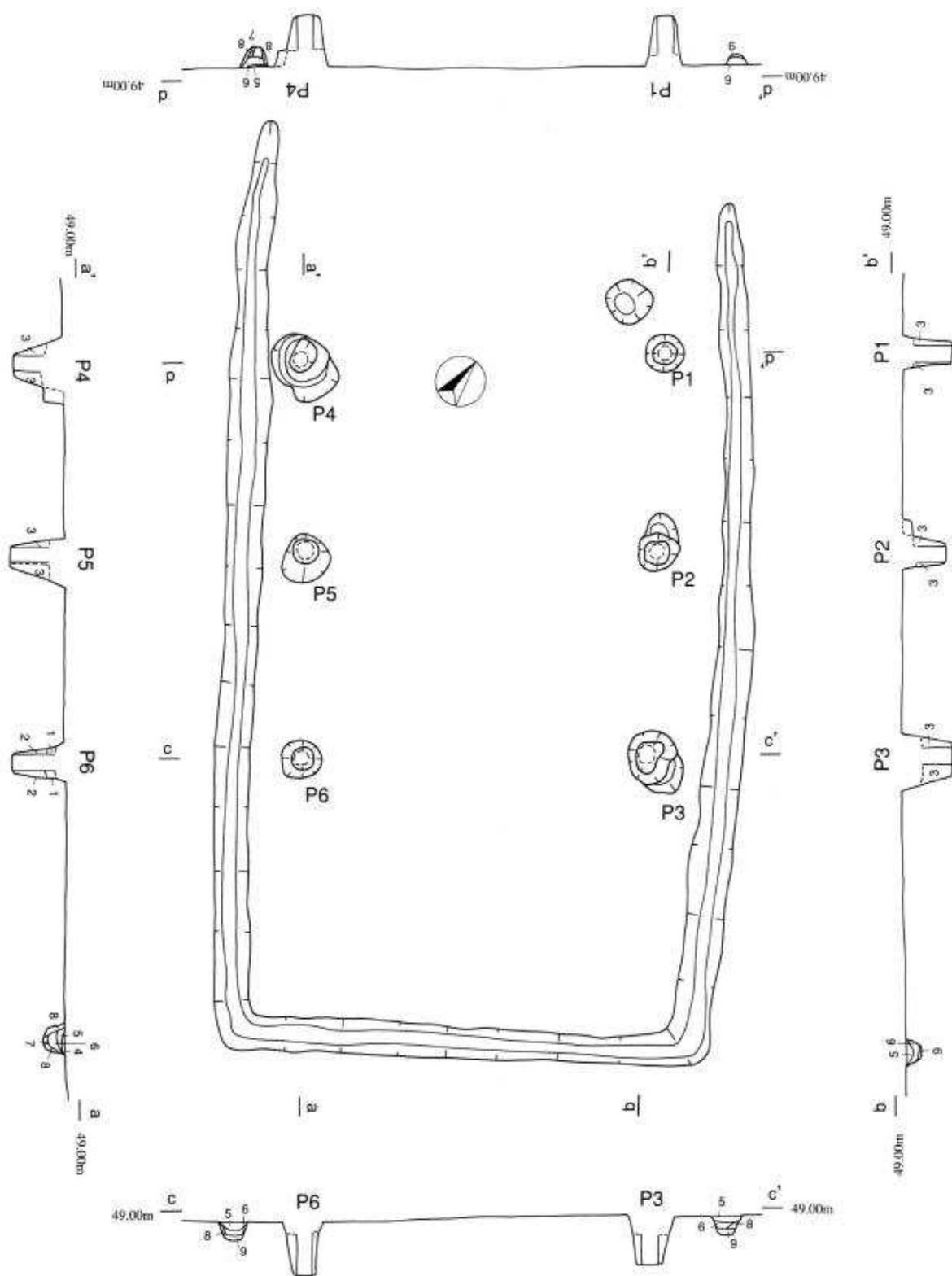
(SB10)



(SB12)



第92図 SB010, 12 平面・エレベーション図 (S=1/60)



掘り方

- 1層：10YR4/4（褐色土） 明褐色（地山）土を多含有。
- 2層：10YR~2.5Y6/3~6/4（にぶい黄（褐）色土） に
ぶい黄~黄褐色（地山）土を多含有。
- 3層：10YR5/4（にぶい黄褐色土） 1、2層混在層。

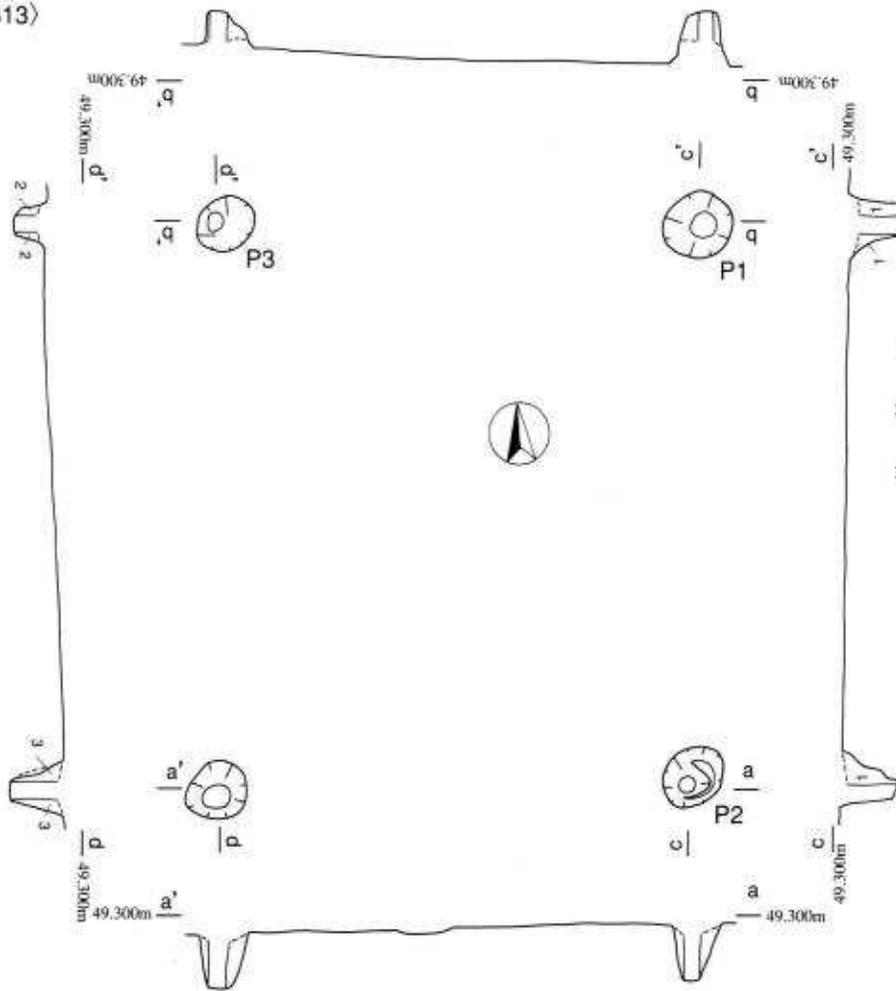
面溝

- 4層：7.5YR4/2（灰褐色土） 黒味強。カーボン多含有。
- 5層：7.5YR4/3（褐色土） カーボン中含有。
- 6層：7.5YR4/3~5/3（褐色土） 5層に比し明るい。地山ブロック多含有。
- 7層：7.5YR4/2（暗）灰褐色土） 6層に類似。暗み増す。軟質。
- 8層：7.5~10YR5/3~5/4（にぶい（黄）褐色土） 地山ブロック主体。カーボ
ン少含有。
- 9層：10YR3/4~5/6（黄褐色土） 地山ブロック主体。



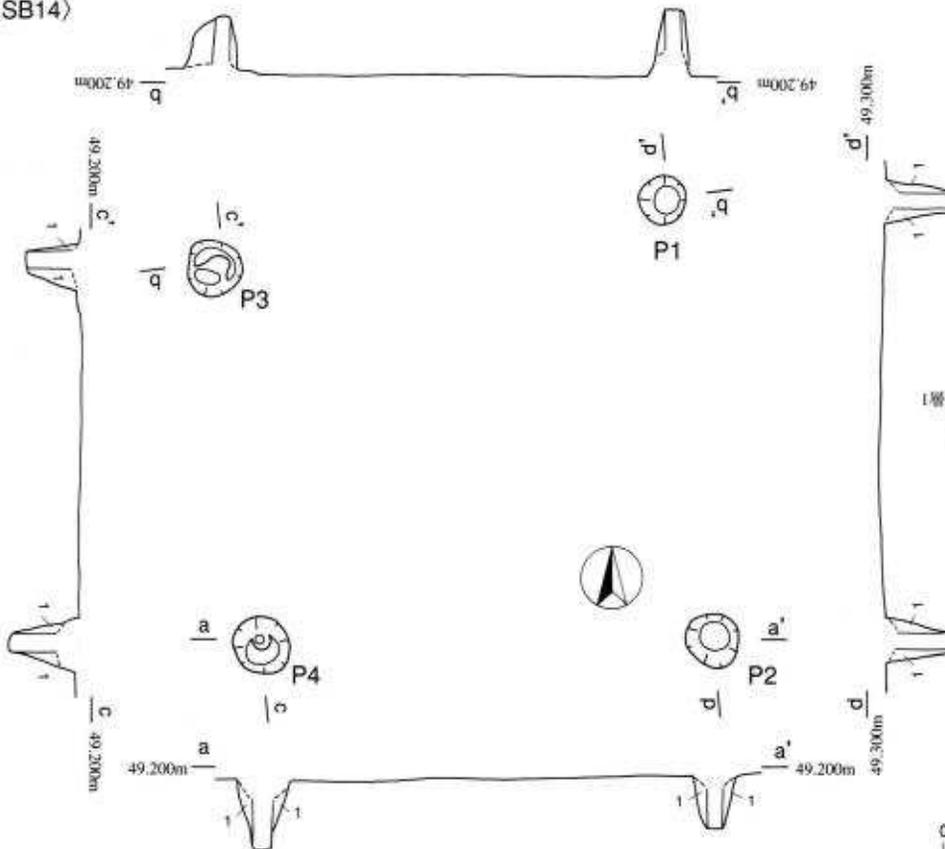
第93図 SB011平面・エレベーション・土層断面図 (S=1/60)

(SB13)



- 1層：10YR5/4～4/6（にぶい黄褐色土）明黄褐色土（地山）ブロック含有。
- 2層：10YR5/4～6/8（にぶい黄褐～明黄褐色土）焼土・カーボン含有。
- 3層：10YR5/4～4/6（にぶい黄褐色土）1層に地山ブロックを含まない層。

(SB14)



- 1層：10YR5/4～4/6（にぶい黄褐～褐色土）明黄褐色土（地山）ブロック含有。



第94図 SB013, 14平面・エレベーション図 (S=1/60)

遺物出土状況

細片のみの遺物しか出土していない。

15. 掘立柱建物から出土した遺物（第95図）

a) SB01 (1)

甕形土器 (1) 内外面磨耗が激しいが、口縁外面にはかろうじて、擬凹線が施されていたことがわかる。頸部は、「く」の字に屈曲し、体部は時計と逆回り横方向にケズリ調整が施されている。

b) SB03 (6)

壺形土器 (6) 内外面磨耗が激しく調整不明である。底部とはうまく接点が見つからず接合ができなかったが、検出状況からも同一個体であることがわかっており、図上復元している。

c) SB04 (2~5)

鉢形土器 (2) 口縁と底片が欠損する。内外面磨耗が激しく調整不明である。

甕形土器 (5) 残存率も低く、径はあくまで推定復元に近いものと判断していただきたい。無文の有段口縁甕で、口縁内外面は横方向にナデ、体部外面はハケ調整、内面は、頸部の屈曲部からやや下がったところから、ケズリ調整が施されている。

底片 (3・4) おそらく両者とも甕の底部と考えられる。

d) SB05 (7~9)

甕形土器 (7) 擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁部のみ残存し、擬凹線は残りが悪く、実際にどれほどの凹凸があったかは不明である。

高坏・器台形土器 (8) 内外面剥離が激しく、厚さも原型を留めるかは不明である。

砥石 (9) 片側のみ磨面をもち、被熱を受けている。図における下端部分は欠損しており、左端は断面にも被熱が及んでいる。

e) SB06 (10~15)

甕形土器 (13・15) 13は径はあくまで推定復元に近いものと判断していただきたい。口縁内外面は横方向にナデ、内面頸部は「く」の字に屈曲し、体部は横方向にケズリ調整が施される。15は、復元した器形からは甕と思われるが、残りが悪く不明瞭である。

高坏・器台形土器 (10・11・14) 10、11は接合はしないものの同一柱穴 (P1) から出土しており、同一個体と思われる。14は高坏、器台いずれかの脚裾部と考えられる。両者とも内外面磨耗が激しく調整不明である。

不明棒状鉄製品 (12) 全体が錆で厚く覆われており、旧形状を伺うことが困難である。

f) SB07 (16~26)

高坏・器台形土器 (16~19) 16、17は、接合はしないが、同一柱穴 (P2) から出土しており、同一個体の可能性が高く、おそらく高坏であろう。18、19も同様で、同一柱穴 (P3) から出土しており、接合はしないが同一個体である可能性が高い。脚裾部は、外面縦方向のミガキ調整で、内面には横方向のハケ調整がみられる。

甕形土器 (22・23) 23は内外面磨耗して調整不明である。22は外面縦方向のハケ調整、内面縦方向のケズリ調整がみられる。

壺形土器 (20・24~26) 24、25は同一柱穴 (P4) から出土しており、同一個体である可能性が高い。口縁端部丸く、内外面頸部には、横方向のナデが施されている。26は有段口縁をもつ短頸直口壺である。口縁内外面は横方向のナデが施されている。

g) SB10 (27・28)

甕形土器 (27) 擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁外面の擬凹線は、明瞭な凹凸がみられる。

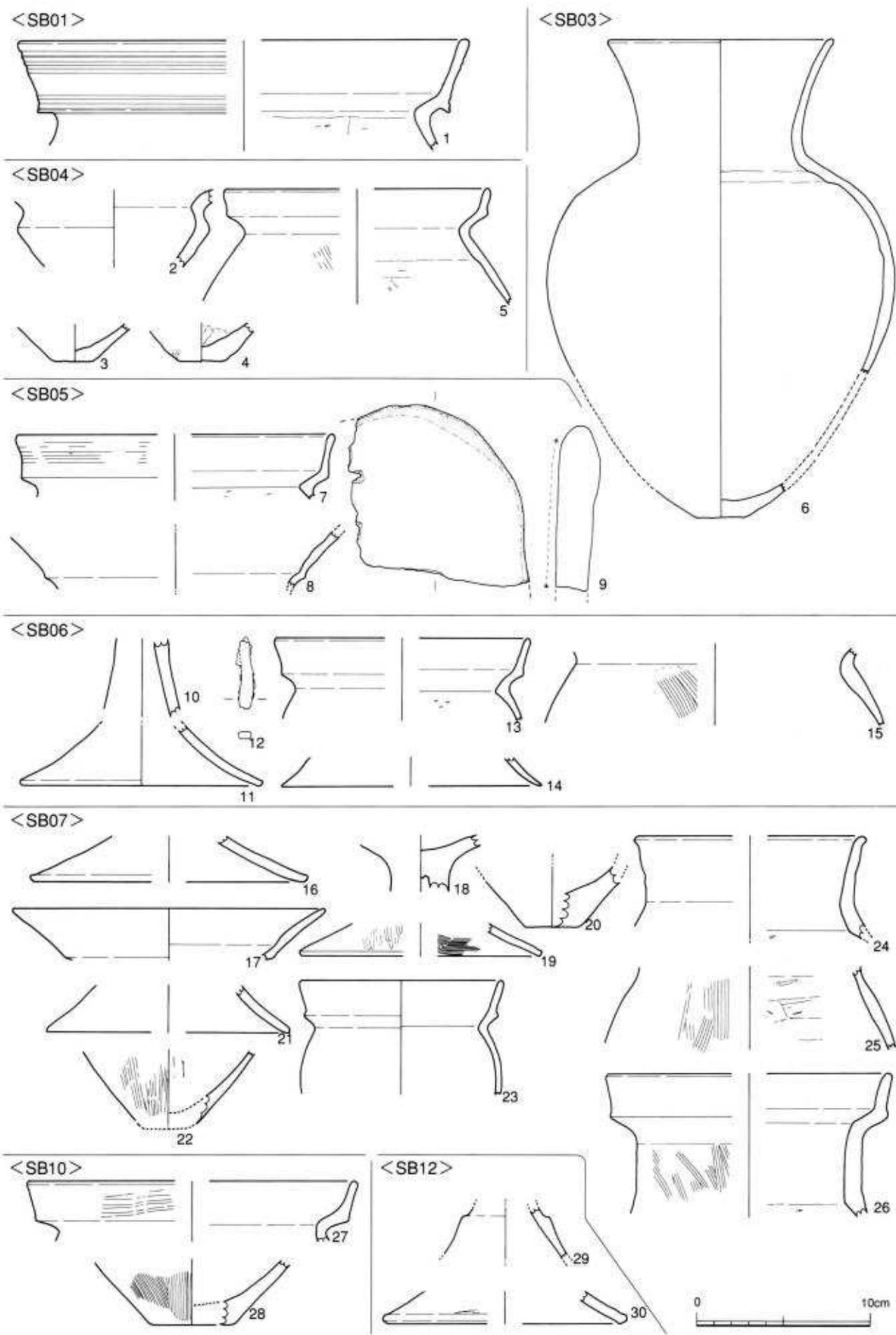
底片 (28) おそらく壺の底部と思われるが、確証はない。外面縦方向のハケ調整が施される。

h) SB11 (30)

高坏・器台形土器 (29・30) 29は、脚裾部分で高坏か器台かは不明である。

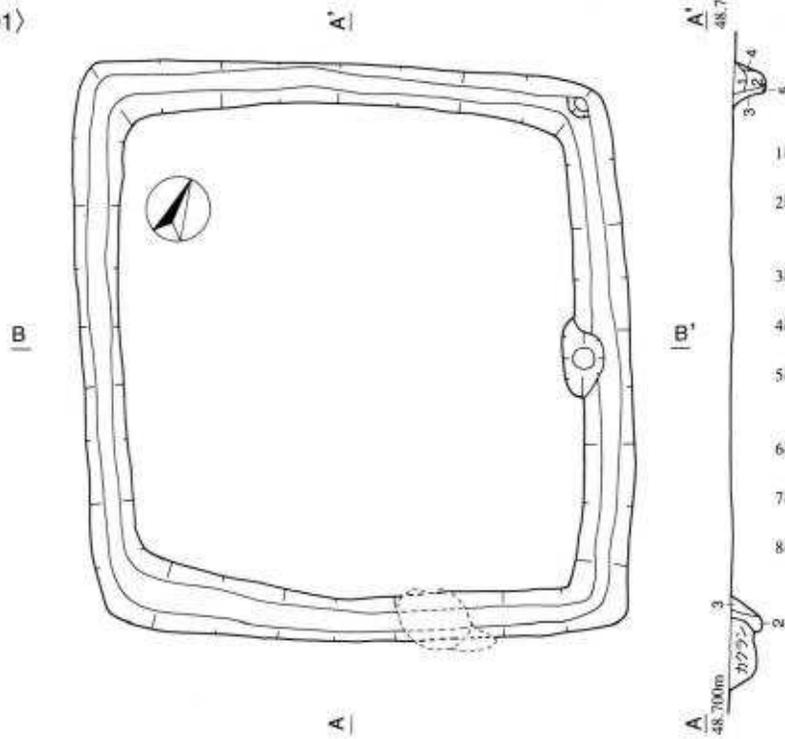
i) SB12 (29)

高坏・器台形土器 (29・30) 29は、脚有段部分で高坏か器台かは不明である。



第95図 掘立柱建物跡出土土器 (S=1/3)

〈SX01〉



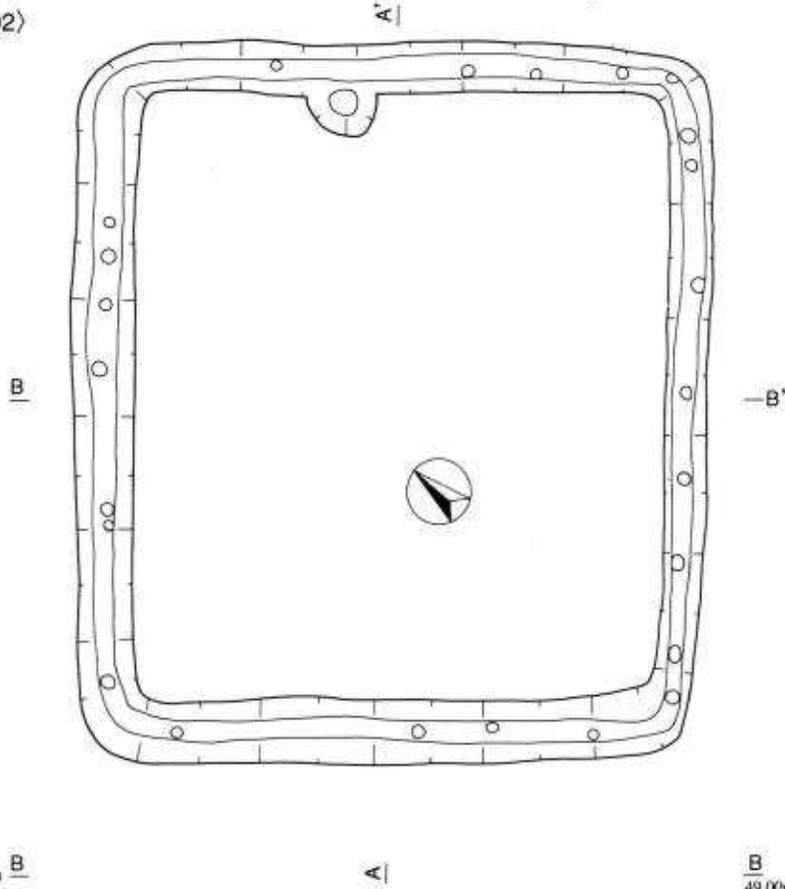
- 1層：10YR4/2～4/3 (灰黄褐色～にぶい黄褐色土)
明黄褐色土(地山)粒を少含有。カーボン中含有。
- 2層：10YR4/1～4/2 (褐灰～灰黄褐色土)
灰黒味強。明黄褐色土(地山)粒を僅含有。
カーボン中多含有。
- 3層：10YR5/4～4/4 (にぶい黄)褐色土)
明黄褐色土(地山)粒を多含有。堅緻。
- 4層：7.5YR5/6 (にぶい)明褐色土)
明黄褐色土(地山)主体。堅緻。
- 5層：7.5YR4/4～4/6 (褐色土)
赤褐色土(地山)主体。褐灰土(地山)少含有。
堅緻。
- 6層：7.5～10YR4/4 (褐色土)
赤褐色土(地山)多含有。
- 7層：7.5～10YR5/4 (にぶい)黄)褐色土)
3層と類似。
- 8層：10YR4/1～4/2 (褐灰～灰黄褐色土)
軟質。

48.700m B



B' 48.700m

〈SX02〉



- 1層：10YR4/1～3/1 (黒褐(灰)色土)
黒色味強。カーボン多含有。軟質。
- 2層：7.5YR4/2 (灰)褐色土)
1層と3層の中間残移層。カーボン含有。
- 3層：7.5YR4/3～4/4 (褐色土)
明褐色土(地山)粒を多含有。堅緻。
- 4層：7.5YR4/6 (明)褐色土)
明褐色土(地山)主体。堅緻。
- 5層：7.5YR4/5/2～5/3 (灰褐色土)

49.00m B



B' 49.00m

A' 49.00m

第96図 方形周溝遺構(SX01,02)平面・土層断面図(S=1/40)

第3項 方形周溝状遺構

1. SX01 (第96図)

遺構

SX01は遺跡の南西側、SB12の西側に位置する(第6図参照)。規模は3.0m×3.0mと正方形を呈する。溝幅は30cm程度で、コーナ部はやや広く40cm程度の幅をもつ。溝の形状は逆台形で、深さは30~40cmに収まる。1、2層はカーボンを含んだ堆積土で、3~5層はしまり良く掘り方と思われる。木質痕が残らないため不明瞭であるが、板塀のようなものが周溝に付設されたのではないかと想像する。また、東側中央、セクションがちょうどかかったところに、柱穴がみられるが、この遺構に伴うものかは不明である。

遺物出土状況

周溝内より、有段口縁の破片が、1点出土している。

2. SX02 (第96図)

遺構

遺跡の北西側の平坦面、SB11の西側に位置する(第6図参照)。規模は3.4m×3.8mとSX01に比し、やや大きめである。溝幅は20~30cmで、SX01に比しやや細めである。溝の形状は逆台形で、深さは20~30cmに収まる。また周溝内には、6~7cm程度の小さい穴がみられ、杭列がめぐったことを想像させる。土層は基本的に水平堆積であり、もしSX01同様、板塀のようなものがあつたとすれば、抜き取られて遺構内に土が堆積したことになる。もしくは、SX01にはみられなかった杭列がみられることが、類似遺構でも異なった構造をもつのだろうか。さらに、北東側周溝に柱穴がみられ、この遺構に伴うものかは不明であるが、SX01と同様、1つのみ、内側寄りにみられる柱穴をもつといった、類似性を考慮に入れると、方形周溝状遺構に伴うものであることも検討しなければならない。

遺物出土状況

周溝内より、破片であるが、有段口縁の甕が1点、器種不明の底片、高坏もしくは器台の脚裾部が1点出土している。

3. 方形周溝状遺構から出土した遺物 (第97図)

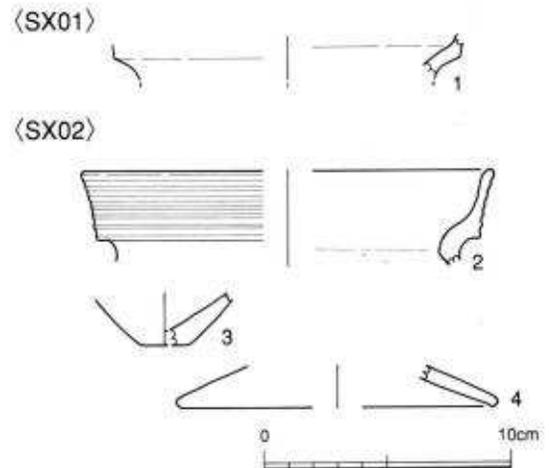
a) SX01

不明土器 (1) 壺もしくは甕の口縁の有段部分になる箇所破片と思われる。

b) SX02

甕形土器 (2) 擬凹線を施す有段口縁の甕である。破片であり、反転復元で図化しており、口径は不明瞭である。口縁外面の擬凹線には、明瞭な凹凸がみられる。

底片・脚片 (3・4) 3は、壺もしくは甕の底部と思われるが、残りが悪くどちらともいえない。内外面剥離が激しく調整不明である。4は高坏もしくは器台の脚である。外面は磨耗して調整は不明である。内面は、横方向のナデ調整である。



第97図
方形周溝状遺構 (SX01) 出土土器 (S=1/3)

第4項 土坑

1. 遺構 (第98図)

a) SK04

遺跡の南西端、標高の下がったところに位置する。(第6図参照)。形状は不定形、規模は、長軸長1.3m×短軸長1.1mである。深さは25cm、下底面にピット状の穴が二つみられる。これらの柱穴に伴うかは不明瞭である。

遺物出土状況

1層から、有段口縁の甕が1点出土している。

b) SK05

遺跡の中央の高台、SB06の北東側に位置する（第6図参照）。規模は0.9m×0.9mと方形である。掘り込みの深さは、約20cmで、床面は平坦をなす。

遺物出土状況

1層内、ほぼ中央部から、壺の底部と、高坏もしくは器台の有段脚が1点出土している。

c) SK06

遺跡の東側SB05の中に位置する（第88図参照）。規模は長軸長0.8m×短軸長0.73mで、ほぼ円形を呈す。掘り込みの深さは約20cmで、床面は平坦をなす。堆積土は、中間の2層目にあたる部分が炭層で、焼土塊の混入もみられる。その下3層は地山崩壊土、4層は一次堆積土でかなりしまりが良い。他の土坑では、このような炭層はみられず、配置的な問題で用途の違いがでているのであろうか。

遺物出土状況

おそらく高坏の坏部片と思われるものが、1点出土するのみである。

d) SK07

遺跡の南西端に位置し、SK04の北西に隣接する（第6図参照）。規模は長軸長0.9m×短軸長0.73mで、楕円形を呈する。掘り込みの深さは約20cmである。堆積土は基本的に褐色を呈し、1層のみが軟質で、下層はすべて、しまりが良い。

遺物出土状況

土坑の中ではもっとも遺物がみられた遺構である。1層でも上方から出土しており、土器、礫及び炭化材がみられる。土器は完形になるものではなく、欠損したものが投げこまれたものと思われる。

e) SK08

遺跡の北西側の平坦面、SB11の北東側に隣接する（第6図参照）。規模は長軸長0.8m×短軸長0.7mで、隅丸方形を呈する。掘り込みの深さは約20cmである。1層には、カーボン、焼土がみられる。

遺物出土状況

細片が1層から出土しているのみである。

f) SK09

遺跡の北東側、建物がなくSB11とSB13の間に位置する（第6図参照）。規模は長軸長1.6m×短軸長1.2mで、ほぼ楕円形を呈す。掘り込みの深さは、約25cmである。2層には、カーボン、焼土がみられる。

遺物出土状況

主に2層から細片の土器が出土している。

g) SK10

遺跡の北側、道路状遺構（波板状遺構）に近接し、周囲には弥生時代の遺構はみられない（第6図参照）。規模は0.8m×0.8mで、方形である。掘り込みの深さは、約15cmで、底面は皿状を呈す。

遺物出土状況

遺物の出土はみられなかった。

h) SK11

SX02の南側に位置する（第6図参照）。規模は長軸長1.7m×短軸長1.4mと楕円形を呈す。掘り込みの深さは、深いところで30cm程度みられ、底は平坦面をもつ。覆土並びに堆積状況は、SK09と類似する。

遺物検出状況

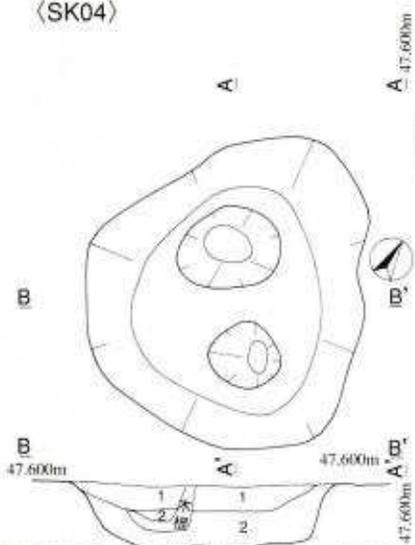
1層から土器の細片が出土しているが、図化不可能であった。

2. 土坑から出土した遺物（第99図）

a) SK04 (1)

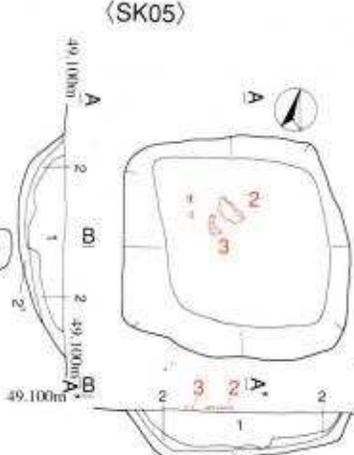
壺形土器 (1) 煤の付着はなく、復元した口径、傾きから、壺の有段口縁部分と思われる。

(SK04)



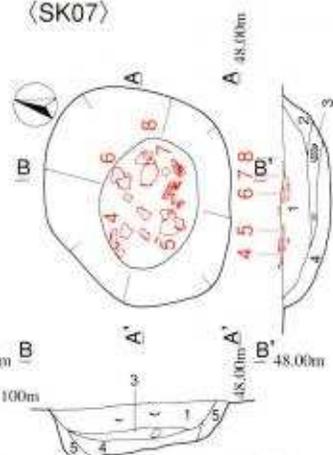
- 1層：10YR4/3-4/6 (暗〜にぶい黄褐色土) カーボン多含有。軟質。
 2層：7.5YR4/6 (褐色土) カーボン少含有。
 2'層：2層に越山ブロック含有。
 3層：10YR4/3 (にぶい黄褐色土) 焼土ブロック・カーボン含有。

(SK05)



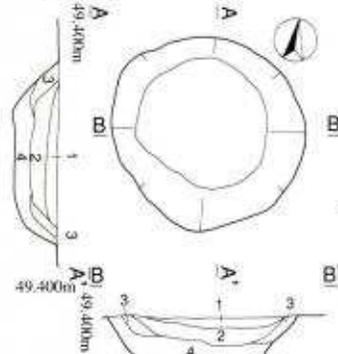
- 1層：10YR4/3-4/6 (暗〜にぶい黄褐色土) カーボン、土器含有。軟質。
 2層：7.5YR5/6-10YR4/6 (褐色土) カーボン少含有。
 2'層：2層に比し、明るく、堅固。

(SK07)



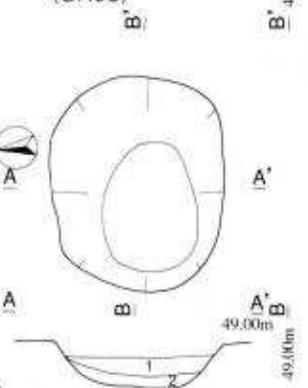
- 1層：7.5-10YR4/4 (褐色土) カーボン多含有。土器含有。軟質。
 2層：7.5YR4/4 (褐色土) カーボン少含有。
 3層：7.5YR4/4 (褐色土) 灰白色ブロック含有。
 4層：7.5YR4/4 (褐色土) しまり良い。
 5層：7.5YR4/4 (褐色土) 地山崩壊土。

(SK06)



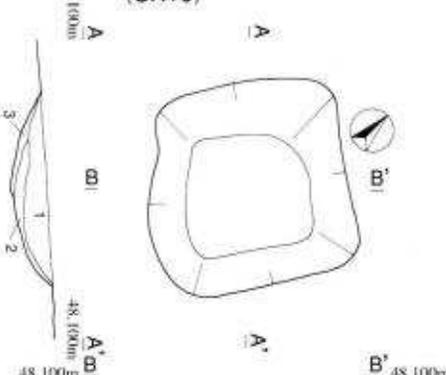
- 1層：10YR5/4-4/3 (にぶい黄褐色土) カーボン多含有。軟質。
 2層：10YR2/2 (黒褐色土) 炭層。焼土ブロック含有。
 3層：10YR4/4-5/4 (にぶい黄褐〜褐色土) 地山崩壊土。
 4層：10YR4/6 (褐色土) カーボン少含有。堅固。

(SK08)



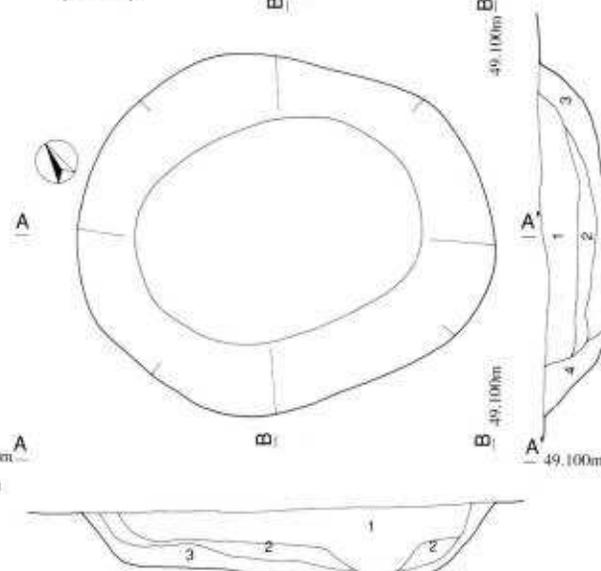
- 1層：10YR5/4-4/3 (にぶい黄褐色土) カーボン、焼土含有。土器含有。軟質。
 2層：10YR5/4-6/8 (にぶい[明]黄褐色土)
 3層：10YR5/4 (にぶい黄褐色土) 1層に比し、軟質。剛直。

(SK10)



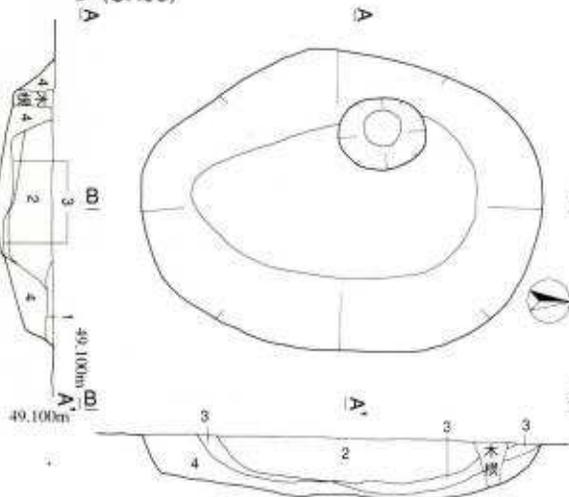
- 1層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄) 褐色土) カーボン多含有。軟質。
 2層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄) 褐色土)
 3層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄) 褐色土) 地山崩壊土。

(SK11)

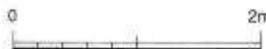


- 1層：10YR5/4-3/4 (にぶい黄褐〜暗褐色土) カーボン多含有。土器含有。
 2層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄褐〜褐色土) カーボン少含有。
 3層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄褐〜褐色土) 2層に比し明るく。
 4層：10YR5/4-3/4 (褐色土)

(SK09)



- 1層：10YR5/4 (にぶい黄褐色土) カーボン中含量。土器含有。軟質。
 2層：10YR5/4-3/4 (にぶい黄褐〜暗褐色土) カーボン、焼土含有。
 3層：10YR5/4 (にぶい黄褐色土) 中層残存層。
 4層：10YR5/4-4/6 (にぶい黄褐〜褐色土) しまり良い。



第98図 土坑 平面・土層断面・遺物出土状況 (S=1/30)

b) SK05 (2・3)

壺形土器 (2) 壺の底部と考えられる。底面は残存しないが、土器は底面近くまで残存するものと考えられる。外面は板ナデもしくはケズリ調整を行った後、ミガキ調整が施されている。内面は上方向にケズリ調整が施される。

高坏・器台形土器 (3) 高坏もしくは器台の有段脚の部分と考えられる。外面は、磨耗しており、不明瞭であるが、おそらくミガキ調整が施されている。内面はナデ調整である。

c) SK06 (9)

高坏形土器 (9) 細片であるが、おそらく高坏の坏部の屈曲部であるだろう。

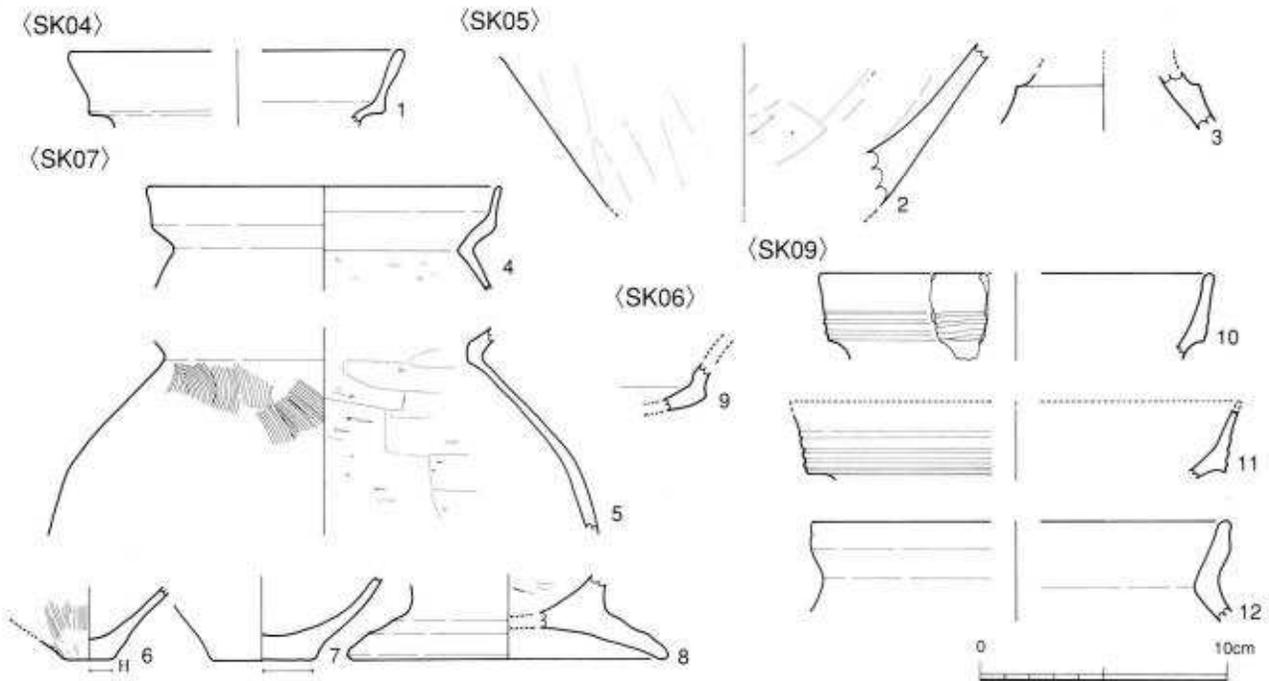
d) SK07 (4~8)

甕形土器 (4・5) 4は外面磨耗が激しいが、無文の有段口縁の甕と思われる。口縁は内外面横方向にナデ、内面頸部は、「く」の字に屈曲する。また、体部内面には、単位は不明瞭であるが、時計逆回り横方向に、ケズリ調整が施されている。5は口縁及び、体部最大径から下が欠損する。外面は斜め方向にハケ調整が施され、内面は時計逆回り横方向にケズリ調整が施される。

底片・台付 (6~8) 6は甕の底部と考えられる。面する部分をもとに図化すると、左右立ち上がりの角度が違い、ゆがんだ土器になるのであろうか。7は直径4cmの底面をもちふくらみをもって立ち上がることから、小型壺の底部と考えられる。内外面磨耗が激しく、調整不明である。8は壺もしくは甕の台部と考えられる。外面は、稜が残るほどの明瞭な横方向のナデが施され、内面は、横方向にケズリ調整が施される。

e) SK09 (10~12)

甕形土器 (10~12) 10は細片であり、口径は推定である。口縁外面には、3条の明瞭な凹凸をもつ擬凹線が施される。11は、口縁外面に4条の擬凹線がみられ、凸面の間隔は、1条めのみ広い。12は無文のやや立ち上がる口縁で、器壁が厚く、口縁端部丸い。



第99図 土坑出土土器 (S=1/3)

第2節 C遺跡の遺構と遺物

第1項 竪穴住居跡

1. SI01 (第100図～第108図)

(1) 遺構 (第100図～第102図)

形態

遺跡内の東端、緩傾斜面に立地し、傾斜方向に主軸を合わせて作られている。平面は方形を呈し、長軸長7.6m、短軸長約6.8m、床面積は約52㎡を測る。また、周囲には3条の溝がみられ、周溝を含めると、主軸長10.2m、短軸長9.6mを測る。谷側には周堤が明瞭にみることができ、旧地形から約80cmの高さまで盛土がみられる。平坦な床面を作るために盛土し、壁周溝を掘り込んだものと思われる。壁高は、山側で地山面の高さから60cm、谷側で確認できた高さから約10cmを図る。支柱は4本で、P1～P4が該当する。柱間寸法は3.5mで均等な配置である。柱穴は直径60cm～70cmで、床面からの深さは50cm～60cmに収まる。柱根は、P4を除いて明確に確認できた。

施設等

住居の中央に方形の土坑(SK01)があり、それと連結した形で排水溝(SD01)が壁周溝を突き抜けて谷側に向かっている。おそらく床面外は、A遺跡SI02同様、周堤をトンネル状に掘り込まれていたものと考えられる。またもう一本、土坑からみられる溝があるが、問仕切りであろうか。SK01の埋土は、3層は一次堆積土と考えられ、SD01同様である。6層は炭層である。これらの状況もA遺跡SI02の土坑に類似する。SD01の床面の高さは、土坑から離れるに従い深くなる。図化できなかったが、P3の南西側に焼床があり、礫が集中している。炉跡としての可能性が高い。また、竪穴の周囲には、外周溝がめぐり、溝は3条巡るため、山側から1条目として説明を行う。1条目は、山側に形状に合わせて6.8mの長さのもつ。2条目は、谷側を除いてコの字状に巡る。3条目との切り合い及び山側と谷側の繋がりが不明瞭であり、西側は竪穴の壁にぶつかるものと谷側に向かうものがみられる。東側は合流し、谷側へと向かい、幅広になる。

遺物出土状況

第102図が遺物出土状況である。床面遺物は浅黄色を、覆土中遺物は黒色で示している。

竪穴内の遺物は、ほとんどが床面直上遺物で、直接伴う床面遺物は1～12と個体数は少ない。二次的堆積土の可能性が考えられる覆土中遺物は除いて、床直上・床面遺物は、同時性をもつ可能性の高い一括遺物として捉えられる出土状況を示すと考えられる。竪穴内から出土した遺物は、図化できたもので110点あり、A遺跡SI02に引き続き遺物量が多い。広口壺(13)はほぼ完形であり、破片が散乱せず、まとまって出土している。散布する土器としては、高坏1点のみが、離れた壁周溝同士から出土し、接合している。また、2条目から3条目の間のテラス面からも良好な遺物が出土しており、有段口縁壺(20)、擬凹線を施す有段口縁の甕(23)がみられる。中央土坑であるSK01からは遺物の出土はなく柱穴内からは、P1、P2、P3の柱根部分から、土器が出土している。P1は甕の破片で周溝内遺物と接合している(92)。P2からは、有段無文の口縁の甕(27)、擬凹線を施す有段口縁の甕(28)、底片(29・31)が出土している。P3はP2と同一個体である(27)と高坏もしくは器台の脚(33)が出土している。竪穴内床直上遺物は、器種はほとんどみられるが、高坏は坏部が多くみられるのに対し、脚が少ない。また、これらの器種組成は、住居使用時のまますすのではなく、住居廃絶時に選択し、遺棄したものと考えられる。

(2) 遺物 (第103図～第108図)

a) SI01 床面出土土器 (1～12)

壺形土器(1・2) 1はやや垂下する口縁端部片である。2は、有段口縁をもつ壺である。内外面磨耗が激しく、調整不明である。おそらく短頸になるものと思われる。

甕形土器(3・4) 3は擬凹線を施す有段口縁の甕である。4は接点はないものの、3の底部と考えられる。口縁外面には、凹凸の明瞭な擬凹線が施され、内面は横方向のナデ調整である。頸部外面は、横方向に一条ナデ、

ハケ調整が消されている。内面は、屈曲部下から5mm程度あけ、横方向にケズリ調整が施される。底部は外面ハケ調整で、内面上方向にケズリ調整が施される。

高坏形土器 (9~12) 9~12は有段鉢状になる高坏坏部である。口径は12が小さめであるが、それ以外はほぼ同様な量量と思われる。内外面磨耗が激しく調整不明であるが、かろうじて、9の内面に横方向のミガキ調整が確認できる。

鉢形土器 (5) 底部欠損する。口縁はやや受け口状を呈し、頸部内面はやや突出する。また、外面には焦げが付着し、煮沸具に使われたようである。外面の調整は、単位は不明であるが、ミガキ調整の可能性が高く、内面は、口縁は横方向のナデ調整、体部はおそらくケズリ調整と考えられる。

底片 (6・7) 6は壺の底部と考えられる。底面の器壁は薄く、ハケ調整が施されている。7はおそらく甕の底部であろう。

蓋形土器 (8) 両端欠損するが、薄い作りの蓋と思われる。

b) SI01 床直上出土土器 (13~26)

壺形土器 (13~15・19・20) 13は短頸直口で、体部が張る壺である。全形がわかる資料である。外面の調整を順にみていくものとする。底部は上方向にケズった後、ハケ調整を行い、その上から幅広い単位でミガキ調整が施されている。体部から口縁にかけては、ハケ調整を行った後、口縁は横方向に、体部はナナメ方向に、ミガキ調整が施されている。内面は丁寧にナデられているため、不明瞭であるが、ケズリ調整を行った後、横方向にナデられているものと思われる。なお、外面には赤彩が施されている。14、15は有段下に屈曲部をもつことから、有段口縁をもつ壺の口縁と思われる。15は、外面に強い横方向のナデ調整がみられる。20は有段口縁をもつ小型の壺である。外面及び口縁内面には、ミガキ調整が施されており、体部内面には、ケズリ調整らしい痕跡がみられるが不明瞭である。12と同様に外面には、赤彩が施されている。19は細頸壺と思われるが、口縁及び底部は欠損する。内外面ともに磨耗が激しく調整不明である。

蓋形土器 (16・17) 17の上部は、欠損するため、無孔か有孔か、不明である。おそらくどちらも壺用の蓋であろう。

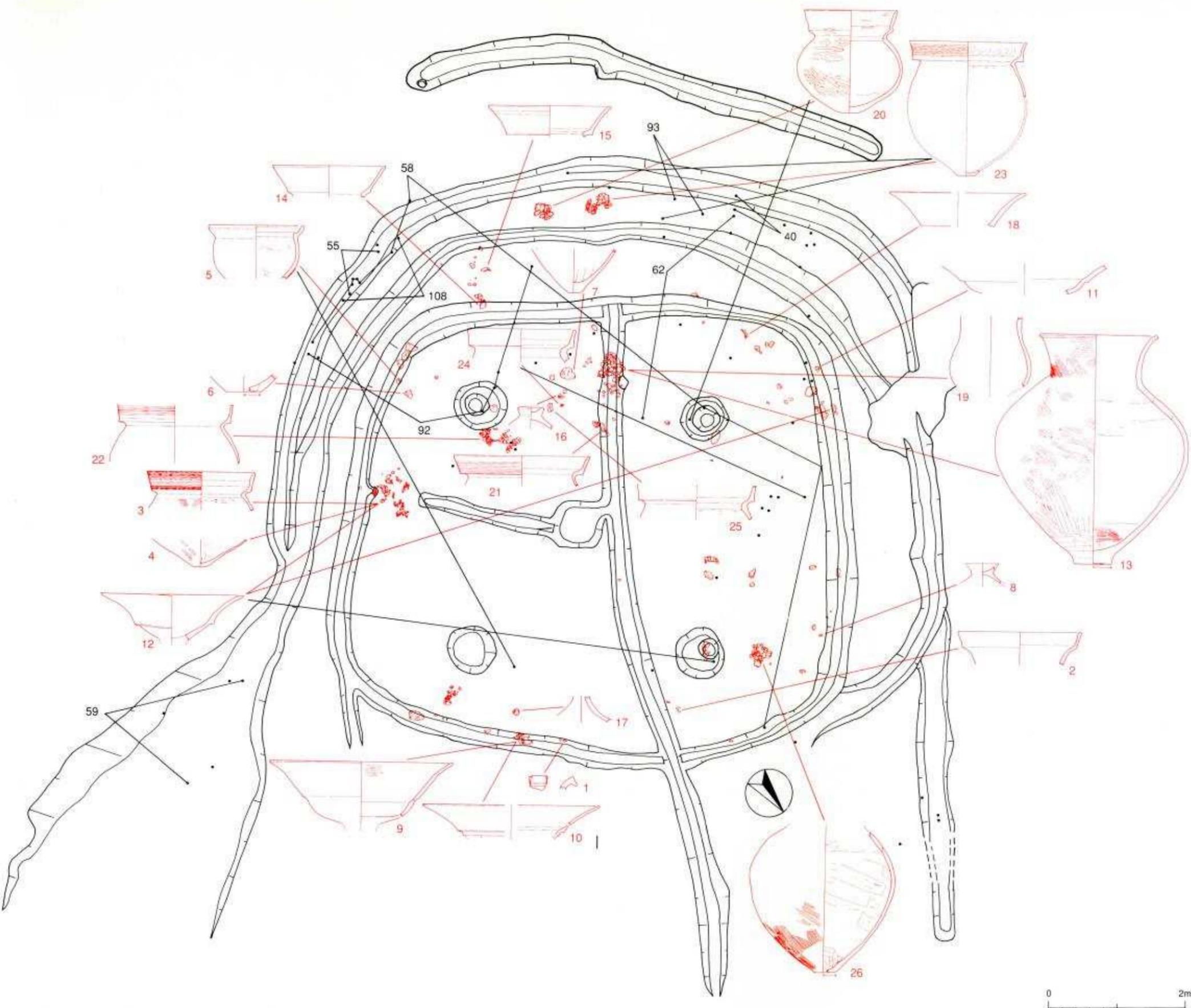
甕形土器 (21~26) 21~23は擬凹線を施す有段口縁をもつ甕である。21の口縁外面は、明瞭な凹凸の擬凹線が5条みられ、焦げの付着がみられる。22は、口縁端部及び体部下半が欠損する。口縁外面は、擬凹線が4条施されており、口縁内面は、横方向のナデ調整である。23は、体部下半がないものの、図化復元してある底部とは同一個体と考えられる。口縁外面は21同様で、内面には指頭圧痕が残る。24、25は無文の有段口縁をもつ甕である。口縁内外面は横方向にナデ、24の内面には、強いナデにより、稜がみられる。両者とも、擬凹線は施されるものと比し、口縁は器壁が厚い。26は口縁は欠損するが、形状から甕の体部と考えられる。体部外面はハケ調整、内面はナナメ方向のケズリ調整で、ケズリ調整は頸部までは至らず、体部上半までである。なお、底面には焼成後の穿孔がみられる。

c) SI01 内柱穴出土土器 (27~33)

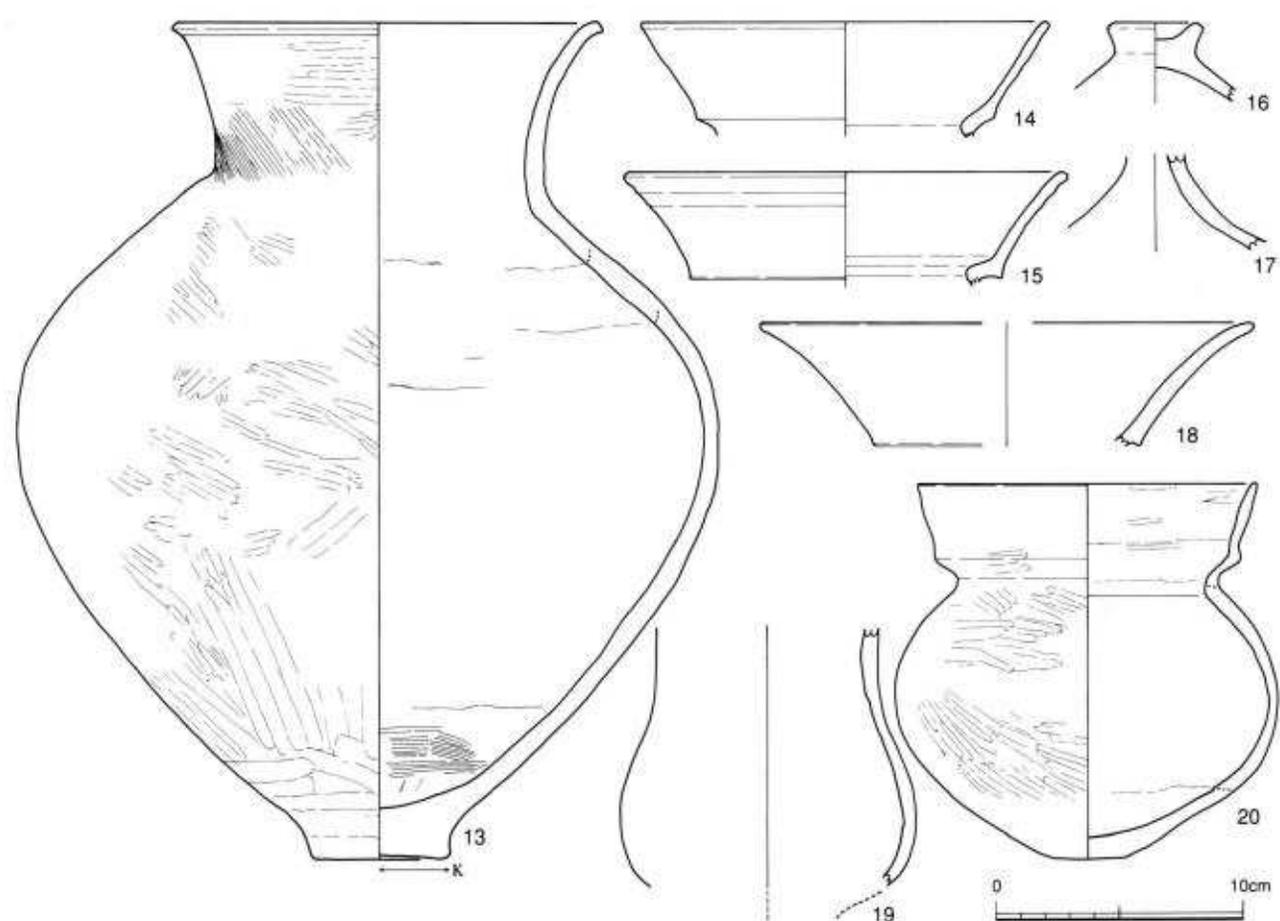
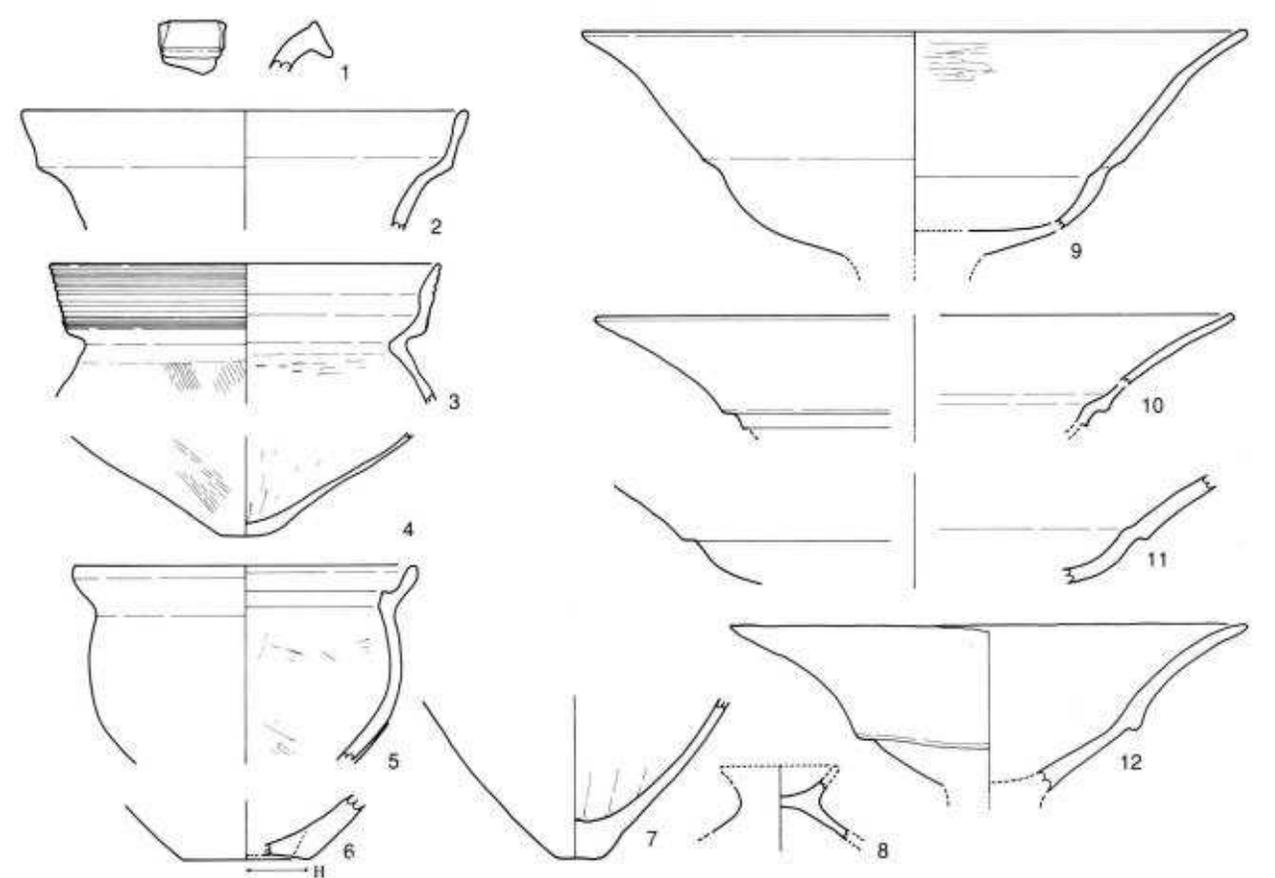
甕形土器 (27~30) 27は無文の有段口縁の甕である。口縁は直立し、口縁端部は丸い。内外面横方向にナデられている。体部外面は縦方向のハケ調整で、頸部は、横方向にナデ消されている。内面は、時計回り横方向のケズリ調整が施される。28は、擬凹線を施す有段口縁の甕である。口縁は直立し、端部丸く、やや器壁は厚みをもつ。外面は明瞭な凹凸の擬凹線が施され、内面には連続した指頭圧痕が施されている。接点はないものの、29は28の同一個体と思われる。底面にはハケ調整が施されている。30は体部下半しか残存しないが、形状より甕と考えられる。底面は、安定した平面を持たない。外面の調整は、板ナデもしくはナデ調整で、内面は、単位は不明瞭であるが、ケズリ調整であることは確認できる。なお、胎土が他のものと比し、粗く、搬入品の可能性も考えられる。

底片 (31) 31は甕の底部であろうか。外面は上方向のケズリ調整の後、ナデ調整が施されている。

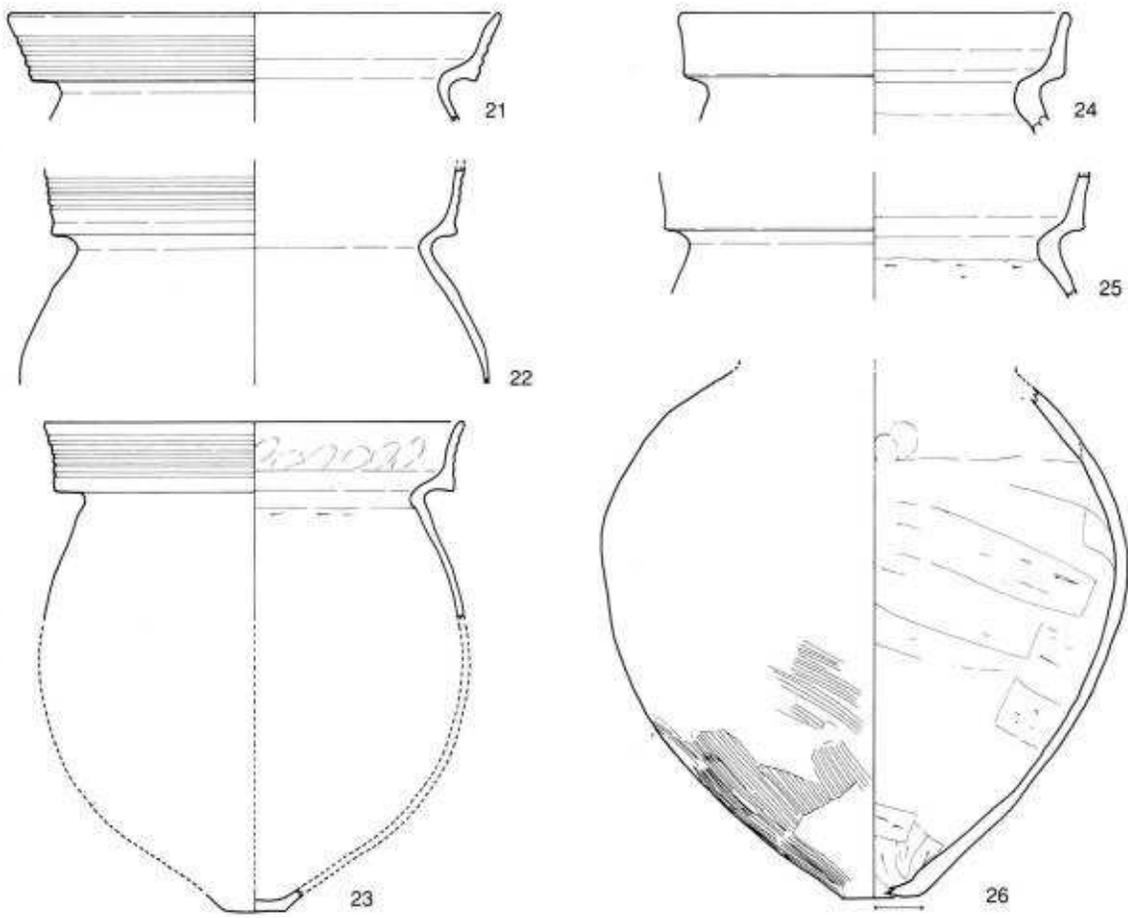
高坏及び器台形土器 (32・33) 32は、有段口縁をもつ鉢状の高坏である。内外面磨耗が激しく、調整不明であるが、外面にかすかに赤彩の痕跡がみられる。33は、高坏もしくは器台の脚である。外面は縦方向のミガキ調整であり、内面裾部はナデ調整で、脚柱内面には、稜がみられる。なお、内外面に煤の付着がみられる。転用品として使用されたのであろうか。



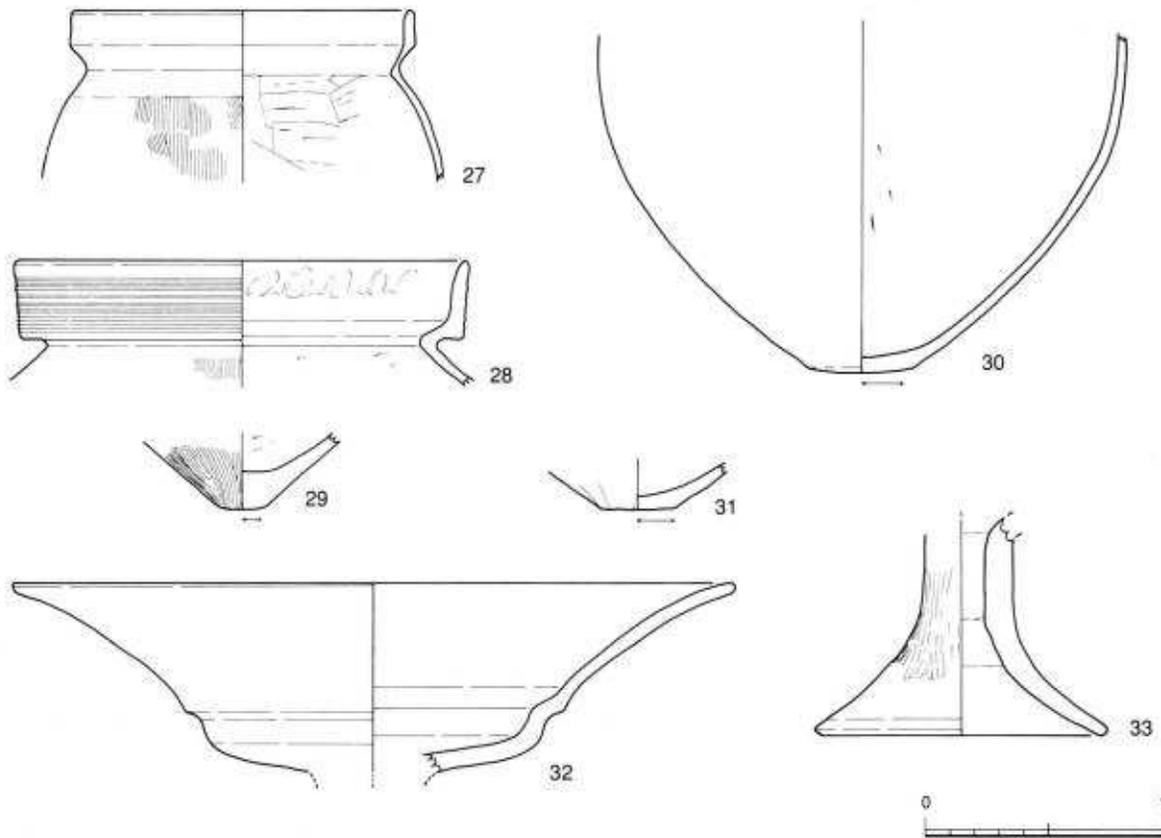
第102図 SI01 遺物出土状況 (S=1/60)



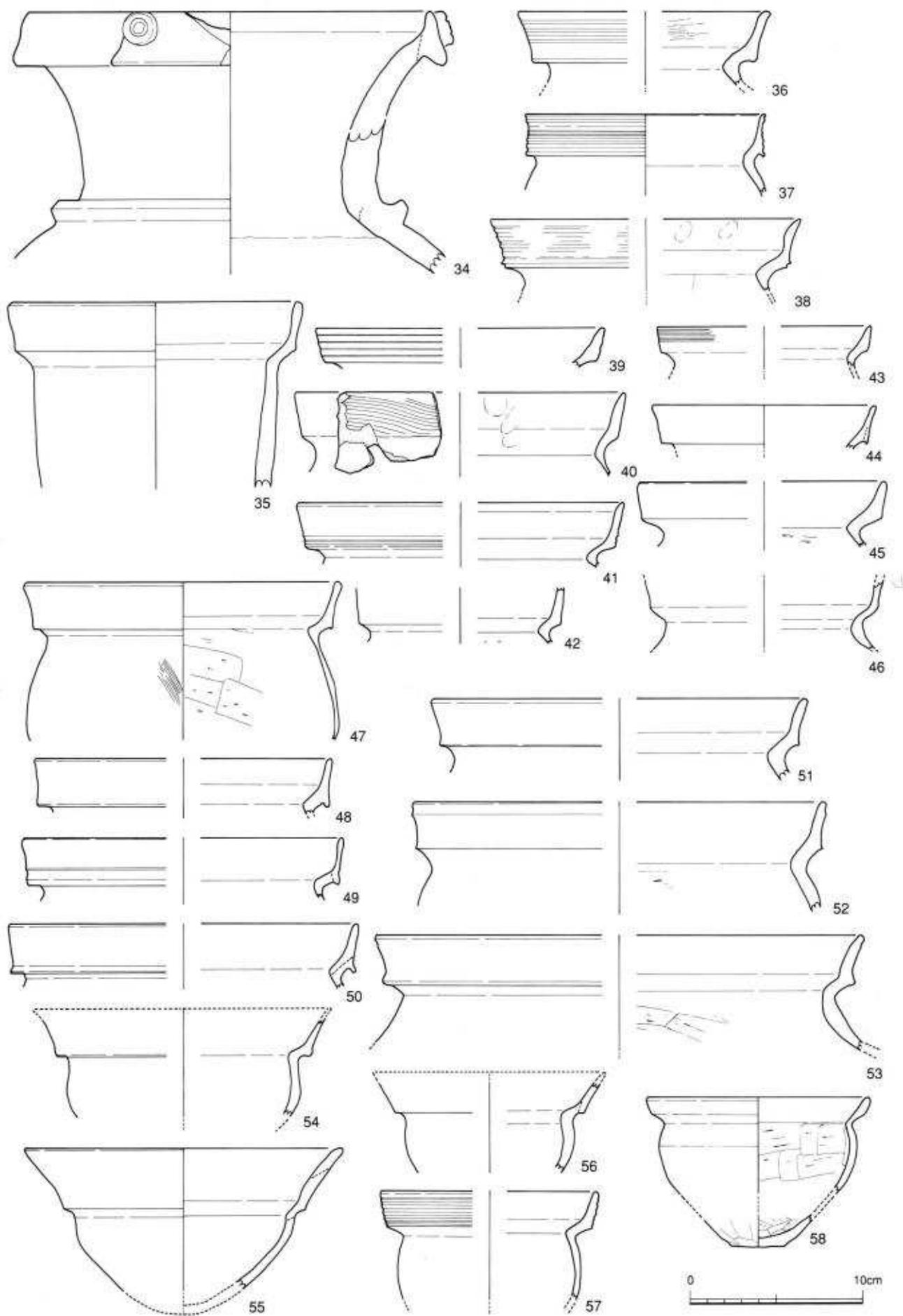
第103図 SI01床直上出土土器1 (S=1/3)



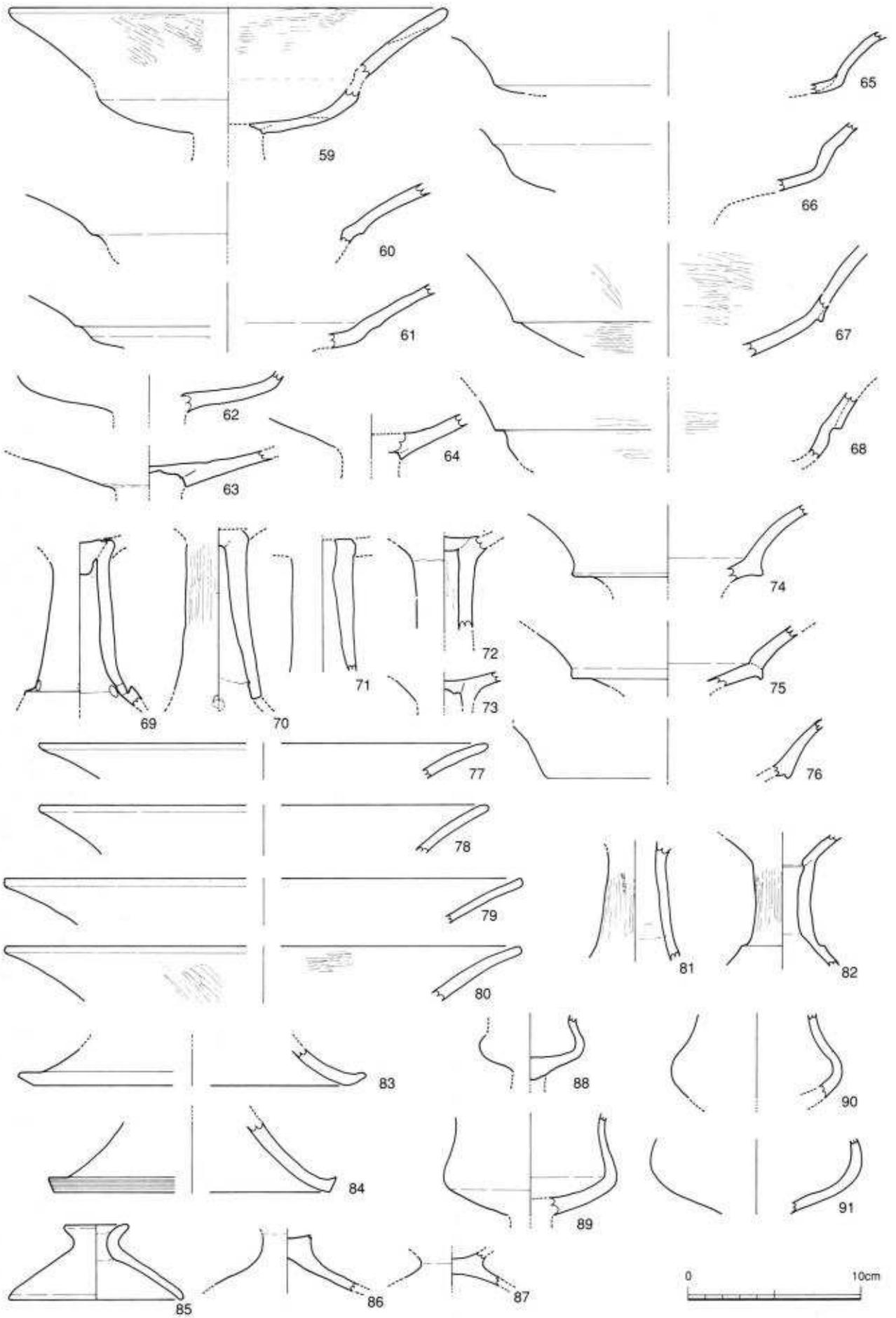
第104図 SI01床直上出土土器2 (S=1/3)



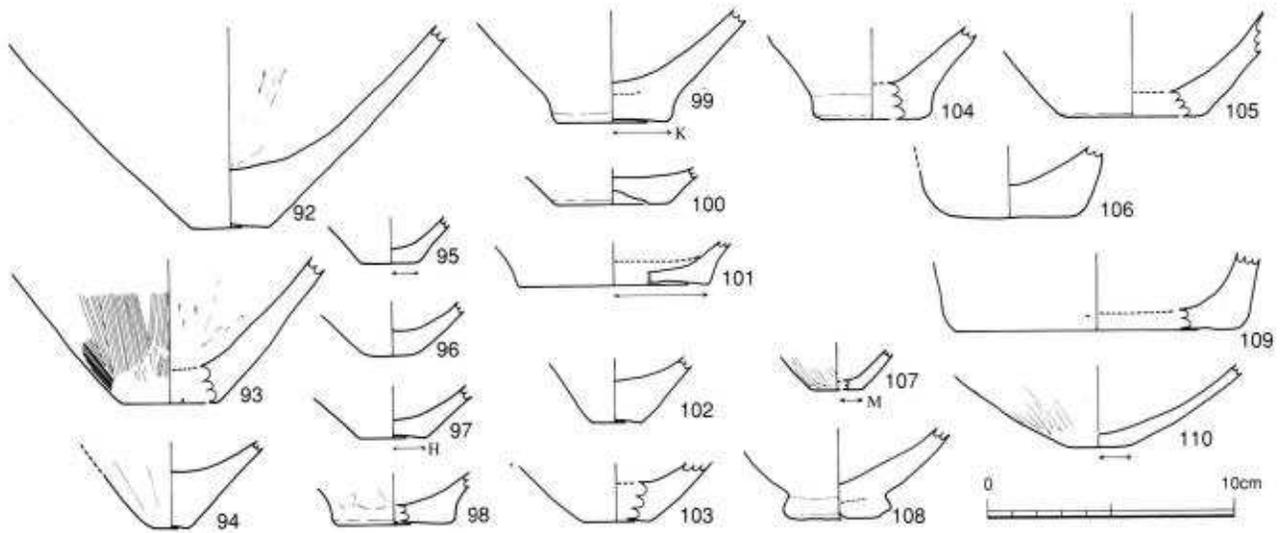
第105図 SI01内柱穴出土土器 (S=1/3)



第106图 SI01出土土器1 (S=1/3)



第107图 SI01出土土器 2 (S=1/3)



第108図 SI01出土土器 3 (S=1/3)

d) SI01 出土土器 (34~110)

壺形土器 (34~36・46) 34は、広口壺で体部が欠損する。なお図面は、接点がないものの同一個体とみなし、図上復元を行っている。口縁は、上下端に拡張し、面をもち、円形浮文が一つみられる。残存範囲が少ないため、実際に何単位つくかは不明瞭である。またこの浮文の面には竹管状の刺突がみられる。頸部には、逆台状の貼付突帯が一周する。35は、長頸の有段口縁壺である。内外面剥離が激しく、調整不明である。36は擬凹線を施す有段口縁壺である。口縁外面には、板目によるものと思われる、数条の細い沈線が施され、内面には横方向のミガキ調整が施されている。46はゆるい立ち上がりのみをみせるだけで、受口になる。また、口縁外面には赤彩が施されている。

甕形土器 (37~45・47~53) 37~41、43は擬凹線を施す有段口縁をもつ甕であるが、擬凹線及び口縁の形状はさまざまであり、口縁のみ個別に説明を行う。37は、口縁外面下端もやや突出し、頸部との境は、明瞭である。口縁外面には、明瞭な凹凸の擬凹線が施され、焦げの付着がみられる。38は、やや外反ぎみで、先端先細りである。磨耗が激しいため、擬凹線は部分的に残存するのみである。また、口縁内面には指頭圧痕がみられる。39は板状工具の痕跡であろうか、均一な間隔で細い条線が4条、口縁外面にめぐり。40は、有段部に明瞭な屈曲はみられない。口縁外面は39同様、板状工具の痕跡であろうか。39よりも細い条線が口縁外面にみられる。41は、口縁外面、下方にのみ擬凹線が2条施されている。43は、復元口径は約12cmと小型である。口縁外面には、板ナデであろうか。何条も筋がみられる。内面は横方向のナデ調整である。42、44、45、47~53は無文の有段口縁の甕である。47~50は、下端に突出するほど段が明瞭である。それに比し、42は屈曲をもつのみで明瞭な段はもたない。51~53は、比較的大型のもので、無文の有段口縁をもつ甕である。52は、口縁外面に強いナデによる稜がみられる。

鉢形土器 (54~58) 54~56は無文の有段口縁をもつ鉢であり、54は口縁端部、底部が欠損する。55は底部は欠損するものの、口径1/2は残存する。内外面剥離が激しく、調整不明であるが、おそらくどちらともミガキ調整と思われ、外面には煤の付着もみられる。57は、小型の擬凹線を施す有段口縁をもつ甕でもよかったかもしれない。口縁外面には、明瞭な凹凸をもつ擬凹線が施され、内面は横方向のナデ調整である。体部内面は、単位は不明瞭であるが、ケズリ調整と思われる。58は、口縁端部やや受け口状になり、外面体部上半まで横方向にナデられている。体部内面は時計逆回り横方向のケズリ調整が施される。

高坏・器台形土器 (59~84) 59~61、65~68は有段口縁をもつ鉢状の高坏である。59はもっとも残りが良く、口縁外面にナメから縦方向、内面に横方向のミガキ調整がみられる。62~64は、高坏坏部の接合部分である。69~73は、高坏の脚ですべて充填法であることがわかる。また、69、70は有段の脚で、69には4方向の透孔がみられ、70もおそらく同様であると思われる。74、75は傾きから器台の可能性が高い。両者とも突出する段を持つ。76~81は、どちらとも判断つかない。81の外面調整は、ハケ調整の後、縦方向のミガキ調整が施

されている。82は、有段脚で、器台と考えられる。外面には縦方向のミガキ調整が施され、内面にはミガキ調整及び赤彩がみられる。おそらく外面にも赤彩はあったものと思われる。83、84は、おそらく高坏の脚であろう。83は、外面に跳ね上がり、面をもつ。外面には赤彩が施されている。84は、脚裾部に面をもち、板状工具による擬凹線が施されている。

蓋形土器 (85~87) 85は有孔の蓋形土器であり、86、87は無孔の蓋形土器である。85は外面おそらくミガキ調整が施され、内面はナデ調整と思われる。

小型壺形土器 (88~91) 88~90は、おそらく、脚がつくものと思われる。88は小型であり、脚との接合部分が残存する。90は、おそらく外面に赤彩が施されていたものと思われる。91は、有段口縁をもつ小型壺の体部下半と思われる。

底片 (92~108) 92~98は甕の底部と思われる。すべて外面には、煤の付着がみられる。92、93は内面縦方向のケズリ調整である。99~101、104~106、109は壺の底部と思われる。甕と比し、底径が大きい。ただ、109は壺の底部としたが、どのような器形がつくのかは不明瞭である。107、108、110は鉢もしくは壺の底部と思われる。107は外面縦方向のミガキ調整がみられる。108は円盤据置法で作られ、屈曲をもつものと思われる。110は、外面ケズリ調整の後、縦方向のミガキ調整が施され、煤が付着する。内面は単位は不明瞭であるが、ミガキ調整と思われる。102、103は器種の限定はできなかった。

2. SI02 (第109図~第113図)

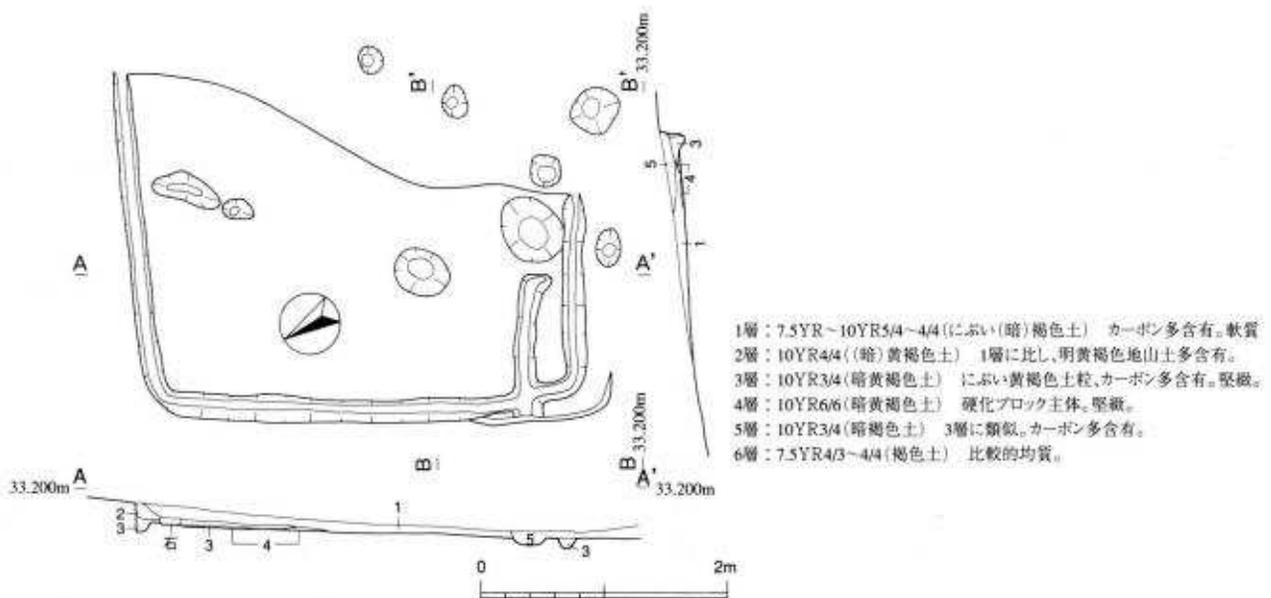
(1) 遺構 (第109図~第110図)

形態

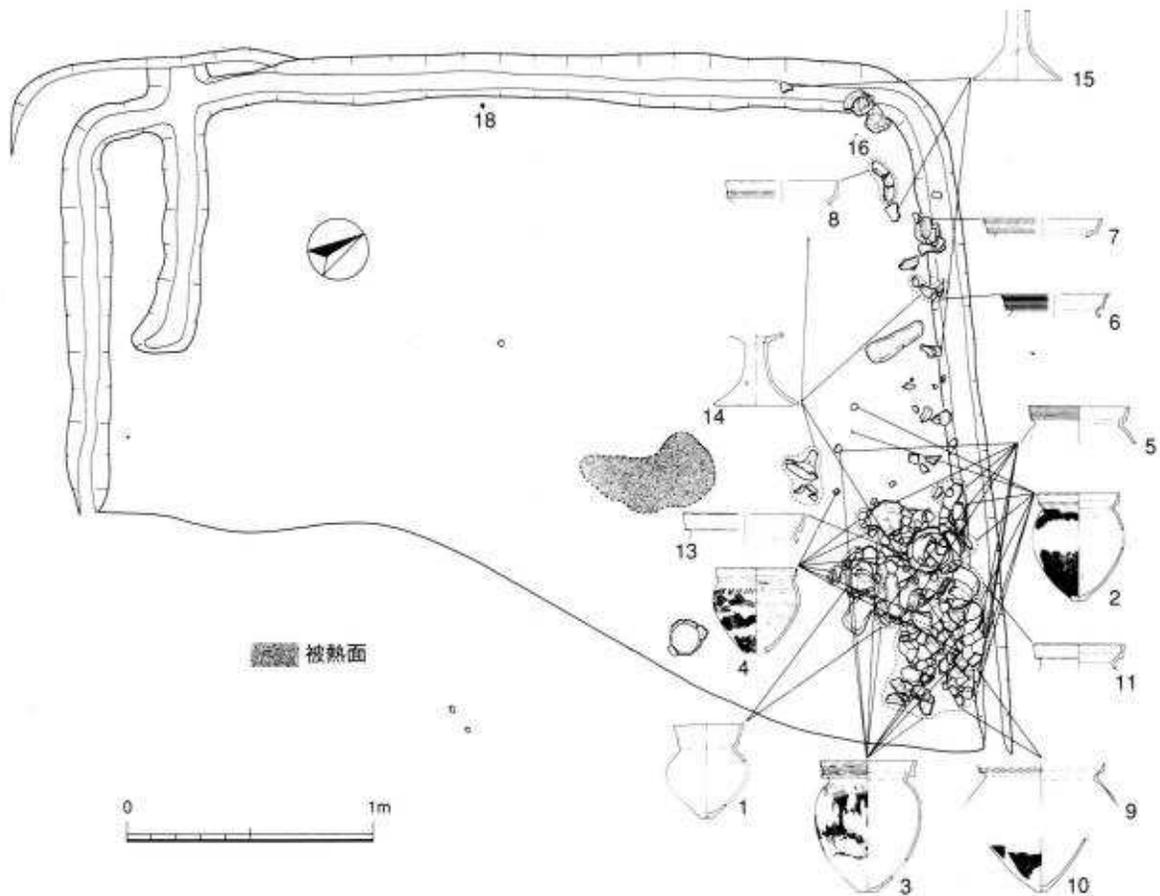
遺跡の南東端、緩傾斜面に立地し、SI01同様、傾斜方向に主軸を合わせている。平面形は、谷側が流失してしまい不明瞭であるが、方形であると想定する。主軸長(北側2.7m、南側1.8m残存)×短軸長3.6mを測る。緩傾斜面を平坦にするため、L字に掘り込まれている。おそらく、谷側の流失がなければ、谷側には周堤をもっていたものと思われる。山側の壁高の高さは、約20cmと浅い。堆積土層は、4層は貼床で、全面に硬化面はみられない。3層が一次堆積土でほとんどの遺物を含有し、1層が二次的堆積土と考えられる。土層断面で示す6層の溝は、SI02に直接伴うものではなく、後世に掘削されたものと思われる。支柱穴として考えられるものは、住居内にはみられず、第109図にみられる大きめの柱穴からは、古代の遺物が出土しており、直接SI02に伴うものではないと考えられる。また住居外にもそれらしいのは見つからなかった。

施設等

壁周溝は、15~20cmの幅に収まり、深さは20~25cmである。住居内には、第110図にみられるように被熱面がみられる。落ち込み等はみられない。炉床であろうか。



第109図 SI02 平面・土層断面図(S=1/40)



第110図 SI02遺物出土状況 (S=1/30)

遺物出土状況

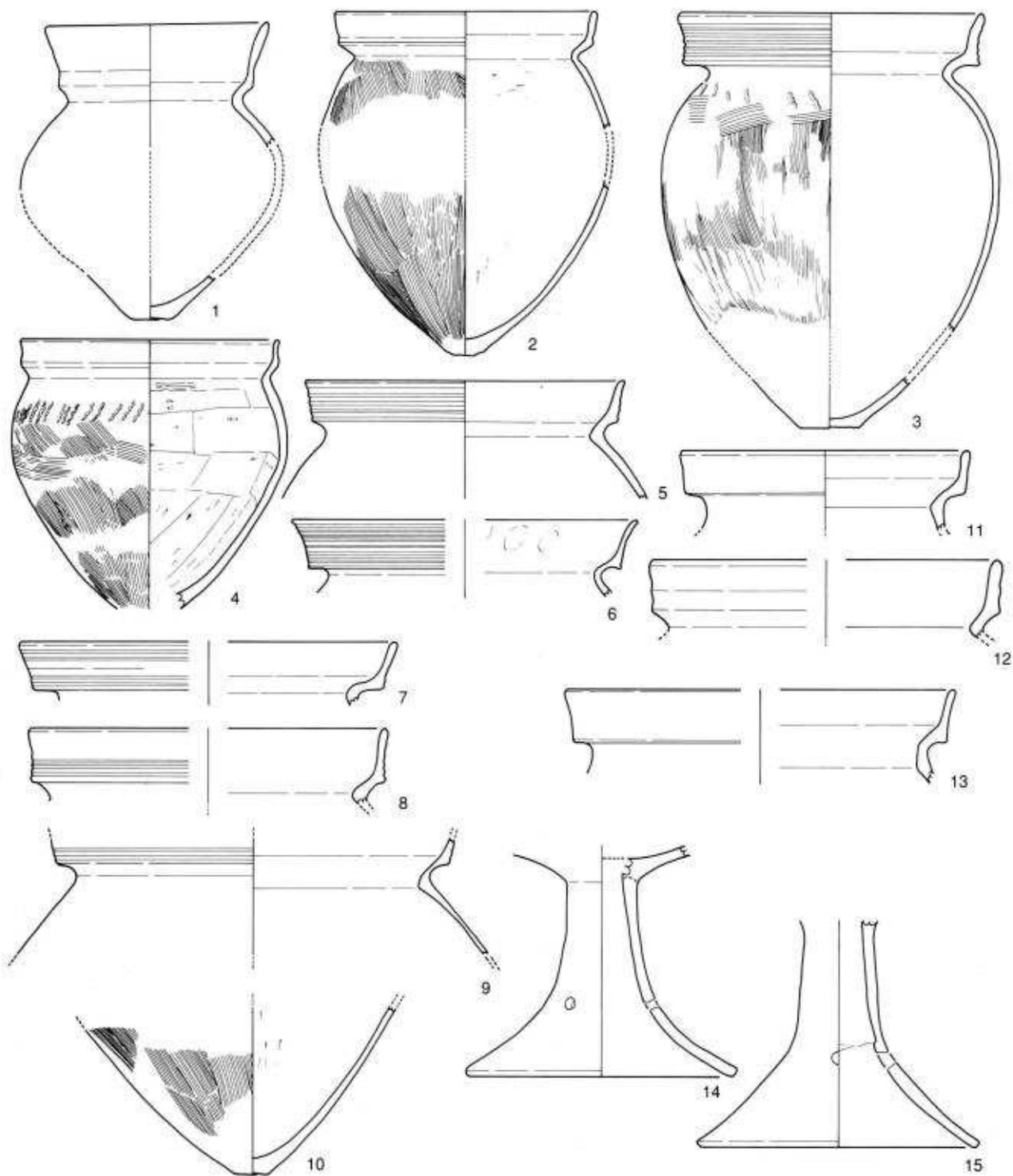
遺物はほとんど、床面から重なるようにして、住居の北側に集中してみられる。南側の壁周溝は後世の掘削がみられるため、遺物の出土がみられないのであろうか。出土した遺物は、20 cm程度の礫3点と土器がみられる。土器は、甕が大半を占め、次に高坏の脚、壺がみられる。完形に近いものでは、2~4がみられる。これらは、一箇所で完形近くでているというよりは、1m範囲内に分散してみられる。高坏の脚二点も同様で、破片が分散して出土している。これらは、使用時の器種構成を示すのではなく、住居廃絶時に破損品を投棄したものと思われる。

(2) 遺物 (第111図~第112図)

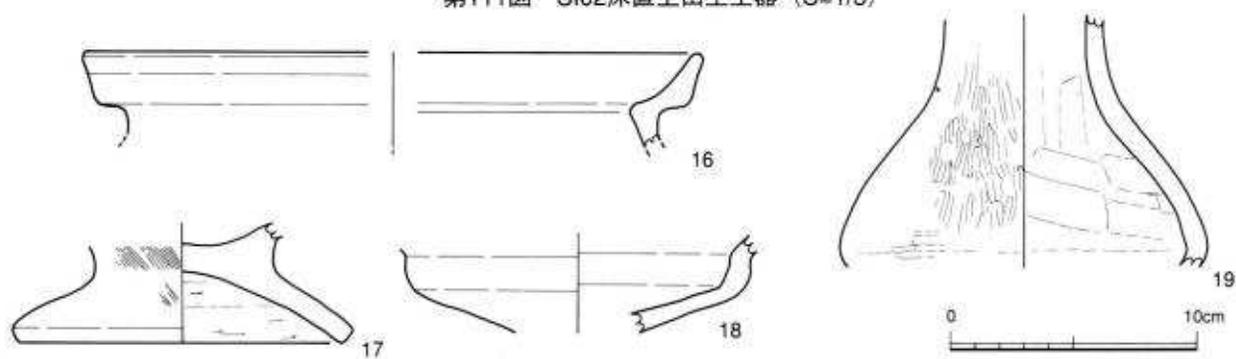
a) SI02床直上出土土器 (1~15)

壺形土器 (1) 有段口縁をもつ小型壺である。体部破片が復元できなかったが、口縁と底部は同一個体と考えられ、図上復元している。内外面とも磨耗が激しく、調整不明である。

甕形土器 (2~10) 2、4、11~13は無文の有段口縁をもつ甕である。その中で、全形がわかるものは、2と4の二点であり、その他は口縁部のみ残存する。2は体部が欠損するため、図上復元している。口縁内外面横方向にナデ、体部外面は縦方向にハケ調整、内面は単位まではわからないが、ケズリ調整が施されている。4は2よりは口縁部は拡張しない。体部外面は縦方向から斜め方向のハケ調整が施され、その上から体部上半に二枚貝による連続した刺突が施されている。また、口縁から刺突が施される体部上半までは、横方向にナデ調整が施されている。内面は、体部下半は上方向に、体部上半は時計逆回り横方向に、ケズリ調整が施されている。11は、口縁内外面横方向にナデ、頸部は「く」の字状に屈曲する。12の外面には、横方向の強いナデにより稜がみられる。13は、口縁はやや外反ぎみに立ち上がり、頸部には面をもつ。3、7~9は、擬凹線を施す有段口縁の甕である。3は底部との接合しないが、同一個体と考えられ、図上復元している。体部外面は縦方向にハケ調整を施



第111図 SI02床直上出土土器 (S=1/3)



第112図 SI02出土土器 (S=1/3)

し、体部上半には二枚貝による連続した刺突が施されている。体部内面は、残りが悪く不明瞭であるが、ケズリ調整であると思われる。口縁外面には、おそらく肩部の刺突と同一工具と思われるもので、擬凹線が施されている。なお擬凹線は、凸面が狭く凹面が広く、明瞭な凹凸がみられる。口縁内面は横方向のナデ調整である。7は、明瞭な凹凸がみられ、二枚貝調整の可能性も考えられるが、その他に関しては、残りが悪く不明瞭である。また、6はやや外反気味に立ち上がり、端部先細りである。口縁内面には指頭圧痕がみられる。9は大型の甕で、おそらく10は9の底部と思われる。口縁には2条の明瞭な凹凸の擬凹線がみられ、頸部は「く」の字に屈曲する。底部は、外面縦方向のハケ調整で、内面は上方向のケズリ調整である。

高坏・器台形土器 (14~15) 14は坏部との接合部である充填部分が欠損する。内外面剥離が激しく、調整不明である。透孔は3方向に穿たれている。14は、おそらく高坏であろうと思われる。透孔は4方向に穿たれている。

b) SI02 出土土器 (16~19)

甕形土器 (16) 有段無文の口縁をもつ甕である。口縁は比較的短く、器壁は厚みをもつ。内外面横方向のナデ調整が施される。

台付 (17) 壺もしくは甕に付く台部と思われる。外面はナナメ方向のハケ調整で台部内面は、指ナデ後、時計回り横方向のケズリ調整が施されており、逆さにして整形を行ったとも考えられる。

高坏形土器 (18) おそらく高坏坏部の段の部分と思われる。内外面磨耗が激しく、調整不明である。

壺形土器 (19) 直口細頸壺である。体部最大径から下半部が欠損するため、台の有無は不明である。外面は縦方向のミガキ調整が施され、内面は、板工具によるナデ調整であろうか。

第2項 掘立柱建物跡

1. SB01 (第113図)

遺構

SB01は、遺跡の平坦面の南側、SB02、3に隣接した所に位置する(第7図参照)。布掘建物は、遺跡内には3棟あり、SB01は1棟離れたところにある。規模は1間2.4m×2間4.4mを測る。セクションは南側は縦断面を、北側は横断面を図化し、エレベーション図は断面図がない部分を図化している。形状は、柱穴部分のみが深くなるタイプで、溝の床面は、柱が位置する部分のみ50~60cmほど掘り込みは深く、整地面からの高さも踏まえると、西溝は80cm程度の差をもつ。また柱の下底面は硬化していることから、柱の位置を確定することができた。溝の規模は、長軸長(南側4.9m、北側4.8m)×短軸長(南側0.6m、北側0.5m)を測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの柱穴部分の深さは、1.1mを測り、柱穴の下端は30~40cmに収まる。桁の柱間寸法は主柱穴間で、両側とも約2.2mと均一がとれている。堆積土層は、1層は一次堆積土、2~4、6、7層は人為的埋土で、5層は腐柱層と考えられる。南側は柱穴部分には、明瞭な腐柱層がみられ、柱根が残存していたことがわかり、逆に北側は、下底面の5~1層は枕木的なものを示すのだとしたら、床面より10cm上はすべて埋土であり、柱は抜き取られた可能性が高い。また、両溝とも柱穴間の掘り方部分には、20~25cm程度の整地面が設けられてあり、北側には、整地面の上面に礫がみられる。

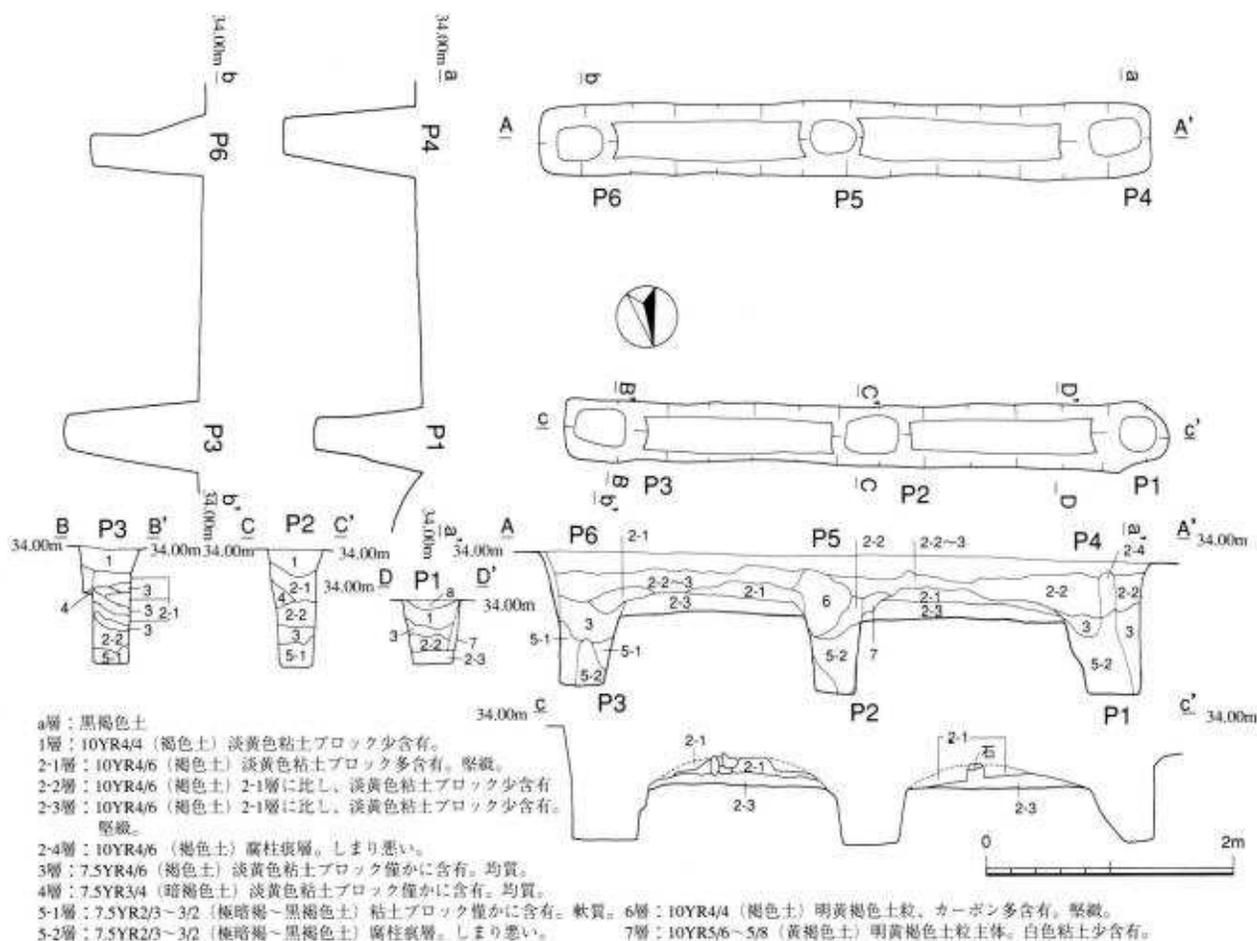
遺物出土状況

埋土の中から確認できたものは、細片1点だけであり、おそらく壺もしくは甕の口縁部と思われる。

2. SB02・03 (第114図)

遺構

SB02、03はSB01と一部切合いを持ちながら、西側に位置する(第7図参照)。SB02の規模は、1間2.4m×2間4.3mを測る。柱間寸法は、P1-P2、P4-P5間は1.7m、P2-P3、P5-P6間は2.6mと長い。柱穴の大きさは、すべて40cm程度であり、柱穴の床面の高さは、P1、P2、P4、P5は5cm程度の差で収まるが、P3は40cm、P6は20cmと掘り込みが深い。柱間の間隔と深さが関連しているのであろうか。SB03の規模は、1間2.8m×2間4.0mを測る。柱間寸法は、すべて2.0mと均一に作られている。柱穴の大きさは、SB02と同様、40cm程度であり、



第113図 SB01平面・土層断面図（S=1/60）

柱穴の床面の高さは、5 cm内外に収まる。では、SB02、03をめぐる周溝について触れよう。堆積土層では、方形区画になる東側コの字部分は同一土層であり、中央の溝から西側のコの字部分はほぼ同一土層を示すことから、これらの周溝は同時に機能していた段階があったとしても、廃絶時期が異なる可能性が高い。そして、南北に走る中央の溝は、SB03の柱穴をきっているため、SB03機能時には、中央の溝はなかったことになる。換言すると、SB03が作られた後、周溝は掘削され、SB02に周溝が伴う可能性が高い。その際に西側のコの字部分の周溝は伴うのであろうか。A遺跡の状況などをみていると疑問であるが、榎田氏の観察によると、壁立ち状のものを想定しており、間仕切りになる可能性も考えられる。なお、この周溝がSB02に伴うものとするれば、SB01はSB02の周溝を切っているため、SB02後に作られたことになる。よって築造順序は、SB03→SB02→SB01と想定できる。

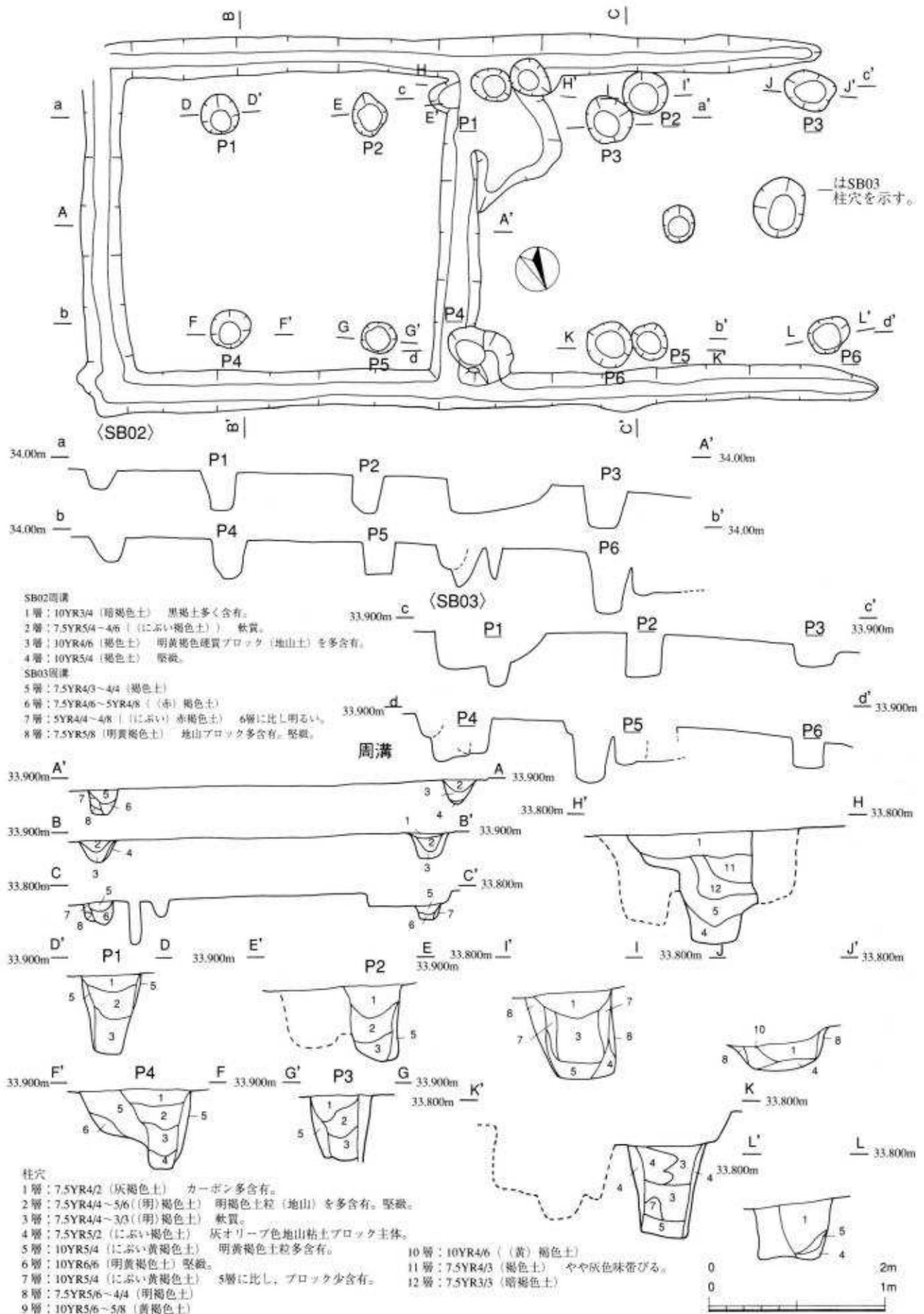
遺物出土状況

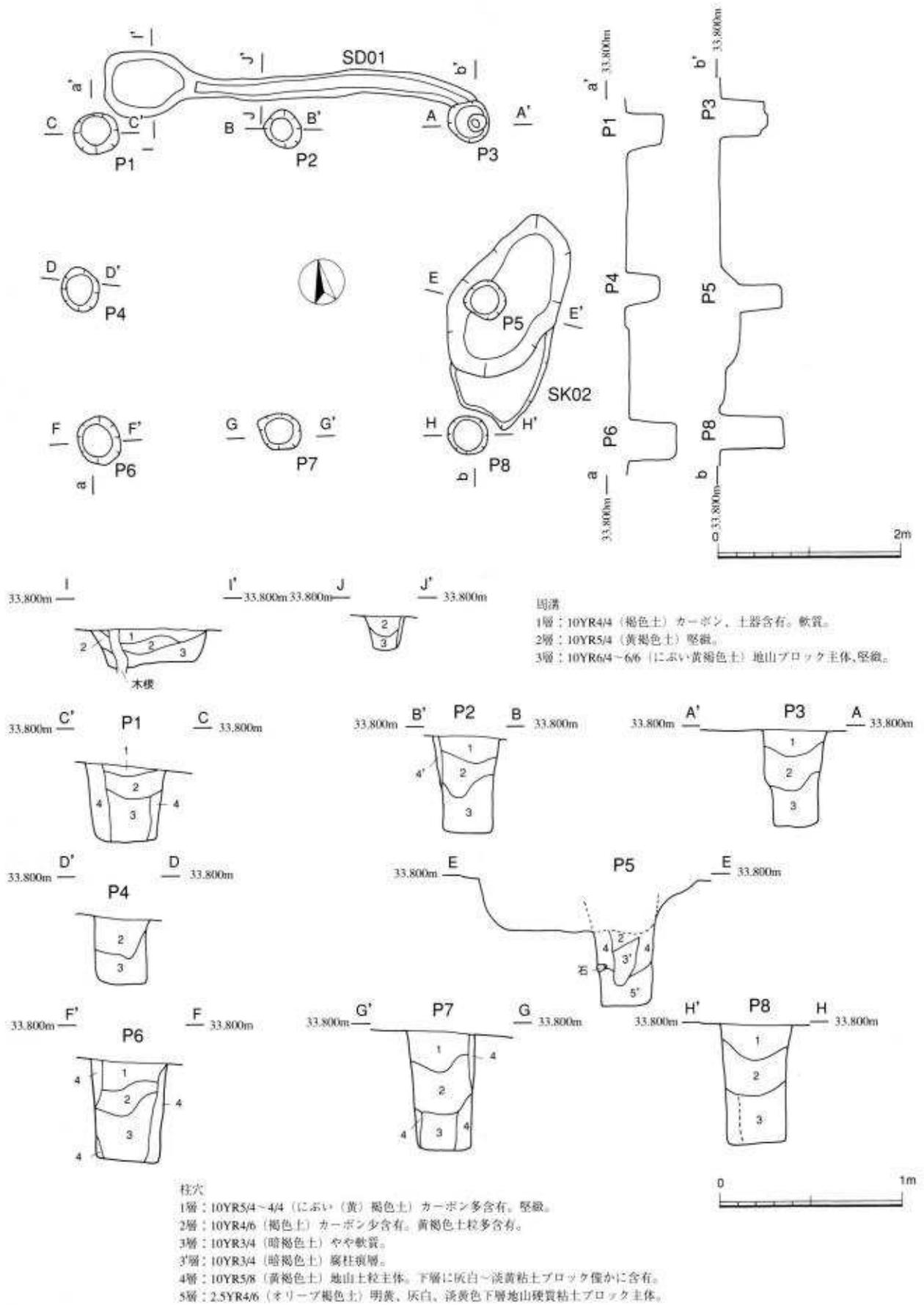
SB02、03とも柱穴からの出土はなく、南西側に位置する周溝から、数点ばかり、土器の破片が出土しているのみである。

3. SB04（第115図）

遺構

遺跡の南端、他の遺構とは、離れた箇所に位置する（第7図参照）。規模は、2間3.4m×2間4.0mで北側に長さ4mの溝を伴う。A遺跡に比し、規模は小さいが、A遺跡SB01、SB03などが類似した形状のものとしてあげられる。柱穴の大きさは30～40 cmで、柱穴の床面からの高さは、P6がもっとも深く、全体的に南側P6—P8の並びの方が深い。柱穴の堆積土層は、P5のみ柱根と思われる柱腐層がみられる。その他の柱穴は柱部分は埋土であるため、抜きとられたものと想定する。これらの観察から、榎田氏はP5の柱の腐蝕により、建物の廃絶を





第115図 SB04 平面・エレベーション図 (S=1/60)、柱穴土層断面図 (S=1/30)

予想している。また、P5 にみられる土坑は、建物廃絶後の遺構で礎の廃棄がみられる。

なお、P1-P3 側に付随する溝は、P1 側の端でふくらみをもつが、堆積土層は、上面の1層を除いて、同様である。

遺物出土状況

周溝内1層より、高坏もしくは器台の坏部と思われる破片が1点出土している。

4. SB05

遺構

SB05 は SI01 の南西、遺跡の平坦面東側に位置する。(第7図参照)。同様に、布掘建物である SB06 と隣接する。規模は1間 2.4m×2間 4.2m を測り、桁は SB01 に比し、若干短い。セクションは縦断面を図化し、エレベーション図は横断面を図化している。形状は、柱穴部分のみが深くなるタイプで、溝の床面は、柱が位置する部分のみ、40 cm 程度掘り込みは深い。また柱間には、15 cm 程度の高さで整地面が確認でき、整地面上面から柱穴床部分からは、最大 70 cm の比高差をもつ。柱の下底面には粘土の纏及び、すべての柱において隆起した硬化部分がみられたことから、柱の位置を確定することができた。溝の規模は、長軸長(東側 4.9m、北側 5m)×短軸長(0.6m) を測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの柱穴部分の深さは、0.9m がもっとも深い。柱穴の下端は長軸長 65~75 cm×短軸長 40 cm に収まる。なお、土層断面から推定する柱径は、直径 25 cm 程度である。桁の柱間寸法は主柱穴間で、両側とも約 2.1m と均一がとれている。堆積土層は、柱穴部分の確認面から断面図を作成しているため、一次堆積土は図化しておらず、基本的にすべて埋土で構成されている。1~3、5層は掘方埋土で、4層は腐柱層と考えられる。土層断面図の黒色部分は、前述した柱根部分の粘土の纏である。これらの観察から、この建物はすべての柱が抜き取られず、残存していたものと考えられる。

遺物出土状況

西、東両側の掘方部分より、土器の細片が3点出土している。

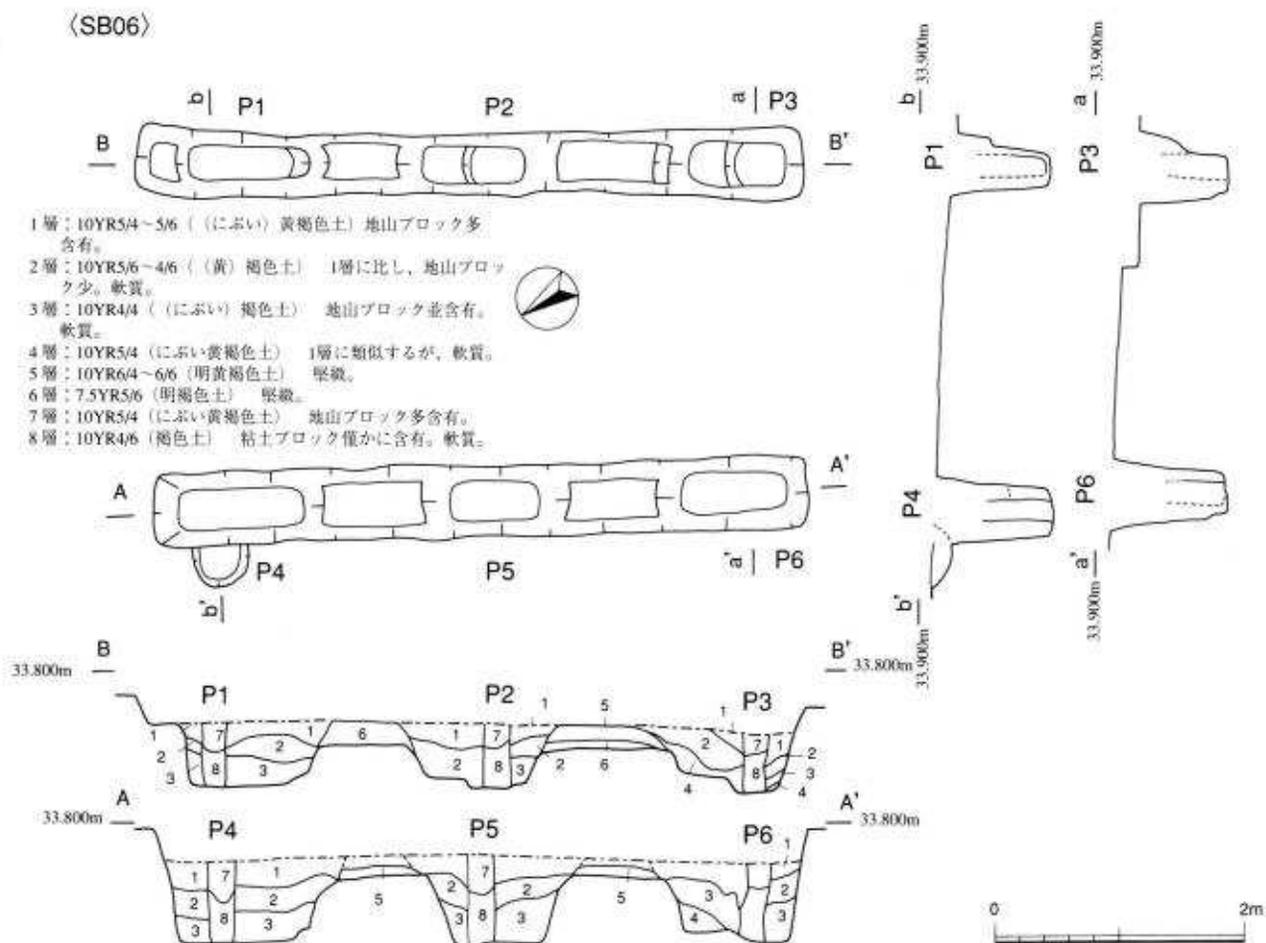
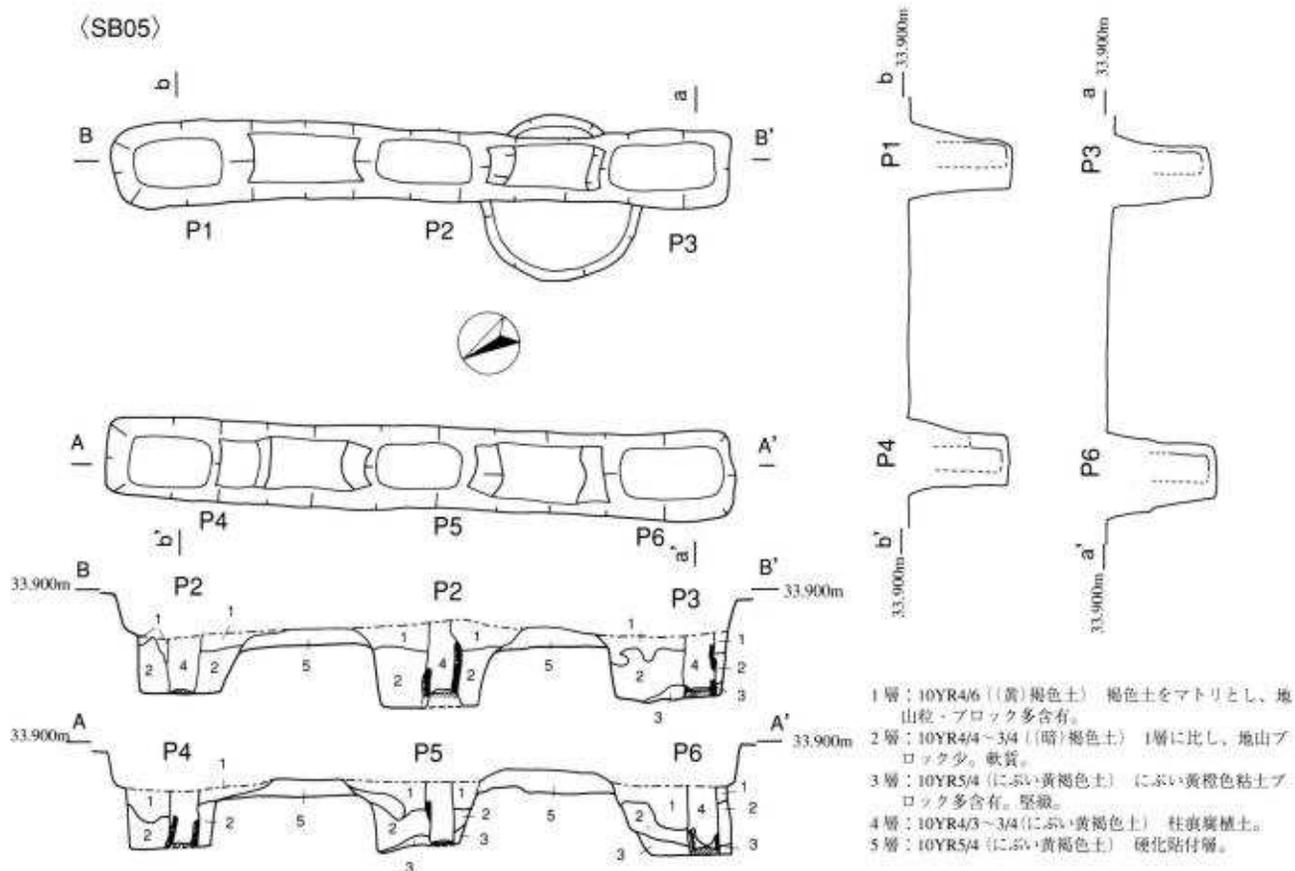
5. SB06

遺構

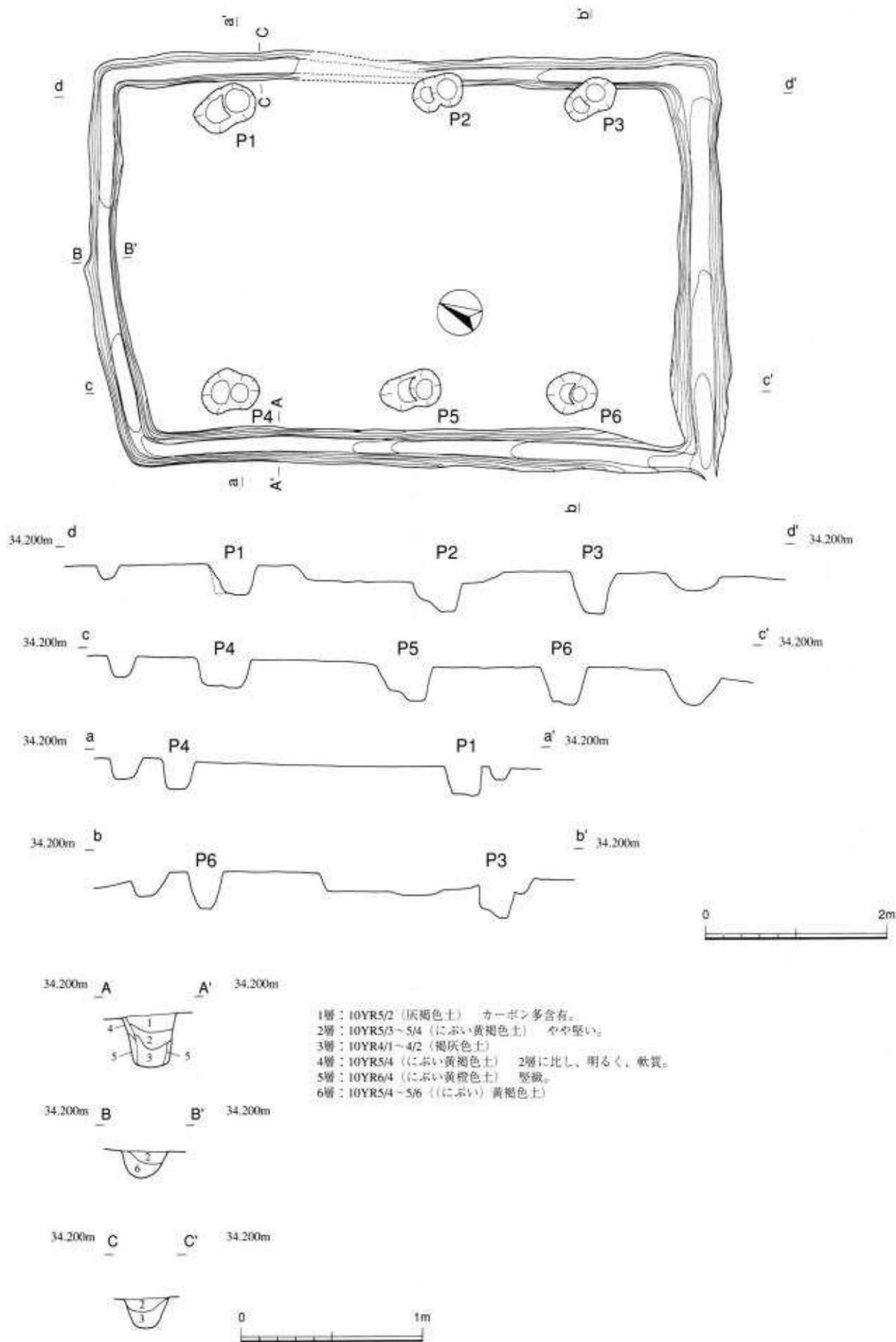
SB06 は遺跡の平坦面東側、布掘建物である SB06 の北東側に隣接する(第7図参照)。規模は1間 2.6m×2間 4.3m を測り、梁は3棟の布掘建物の中でもっとも長い。セクションは縦断面を図化し、エレベーション図は横断面を図化している。形状は、SB01、05 同様、柱穴部分のみが深くなるタイプで、溝の床面は、柱が位置する部分のみ東側は 30 cm、西側は 50 cm ほど掘り込みは深い。また柱間には、15~20 cm 程度の高さで整地されている。なお、西側の柱間部分の整地面上面は、掘り方1層との区別がつきにくい同色・同質の層がみられる。これは1層に比し、より硬化した部分が確認されており、点線範囲はおそらく、柱穴部分の掘り方を埋める前に、整地されていたものと推定する。整地面上面から柱穴床部分の差は、最大 70 cm で、谷側にあたる東側は比較的 50 cm と浅い。柱の位置は、土層及び下底面には硬化部分がみられたため、確定することができた。溝の規模は、長軸長(東側 5.3m、西側 5.2m)×短軸長(東側 0.45m、西側 0.5m) を測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの柱穴部分の深さは、0.9m がもっとも深い。中には、柱穴の下端は水平ではなく、柱が位置する箇所が下がる柱穴もみられる(P2、P3、P6)。なお、土層断面から推定する柱径は、直径 20 cm 程度である。桁の柱間寸法は主柱穴間で、東側は P1-P2 間 2.2m、P2-P3 間は 2.1m、西側は 2.1m と柱間の長さに違いをみせる。堆積土層は、柱穴部分の確認面から断面図を作成しているため、一次堆積土は図化しておらず、基本的にすべて埋土で構成されている。1~4、5、6層は掘り方埋土で、7、8層は柱部分を示し、7、8層は、柱を抜き取った後、埋めた層と考えられる。

遺物出土状況

遺構検出時に、土器の細片が1点出土している。



第116図 SB05, 06平面・エレベーション・土層断面図 (S=1/60)



第117図 SB07 平面・エレベーション図 (S=1/60), 周溝断面図 (S=1/30)

6. SB07 (第 117 図)

遺構

SB07 は遺跡の北側、もっとも標高の高いところに位置し、前方後方墳と重複がみられる (第 7 図参照)。規模は 1 間 3.2m×2 間 3.9m を測る。建物を全周するタイプは遺跡群の中で唯一である。柱穴の輪郭が 8 字状を呈し、床面の高さが異なることから、建替えが考えられる。

柱穴の大きさは約 30 cm と思われ、柱穴の床面からの高さは、P1、P4 は他の柱穴に比し 10 cm 浅く、北の梁側は、南の梁側の柱に比し、掘り込みが浅い。柱間寸法は、P2-P3 間、P5-P6 に比し 1.6m、P1-P2 間、P4-P5 間が長く、また東側の並びは西側の並びに比べ短い。建物を全周する周溝は、南西コーナーに向かうに従い、深くなっており、榎田氏はこの溝に関しては、排水機能ではないかと推測している。周溝堆積土は、1 層を抜かして、比較的しまり良く、1 層は 1 次堆積土と考えられる。ただし、建替後は、周溝に P2、P3 がかかっているため、伴わないものと思われる。

遺物出土状況

周溝内 A-A' ラインの南側で、緑色凝灰岩の碎片がまとまって 1 層内から出土している。緑色凝灰岩は、A 遺跡 SI02 で出土した管玉に色ともに近似した材質である。玉作りの可能性も考え、宮田氏にみてもらった結果、未成品等の痕跡がみられず、碎片であると聞いている。緑色凝灰岩の碎片廃棄は、建替え後～前方後方墳築造時までに行われたと思われる。なお、柱穴から遺物の出土はみられないが、SX01 墳丘上でみられた遺物 (第 120 図参照) は、SB07 に近似した時期のものと思われる。

第 3 項 古墳

1. SX01 (第 118 図～第 120 図)

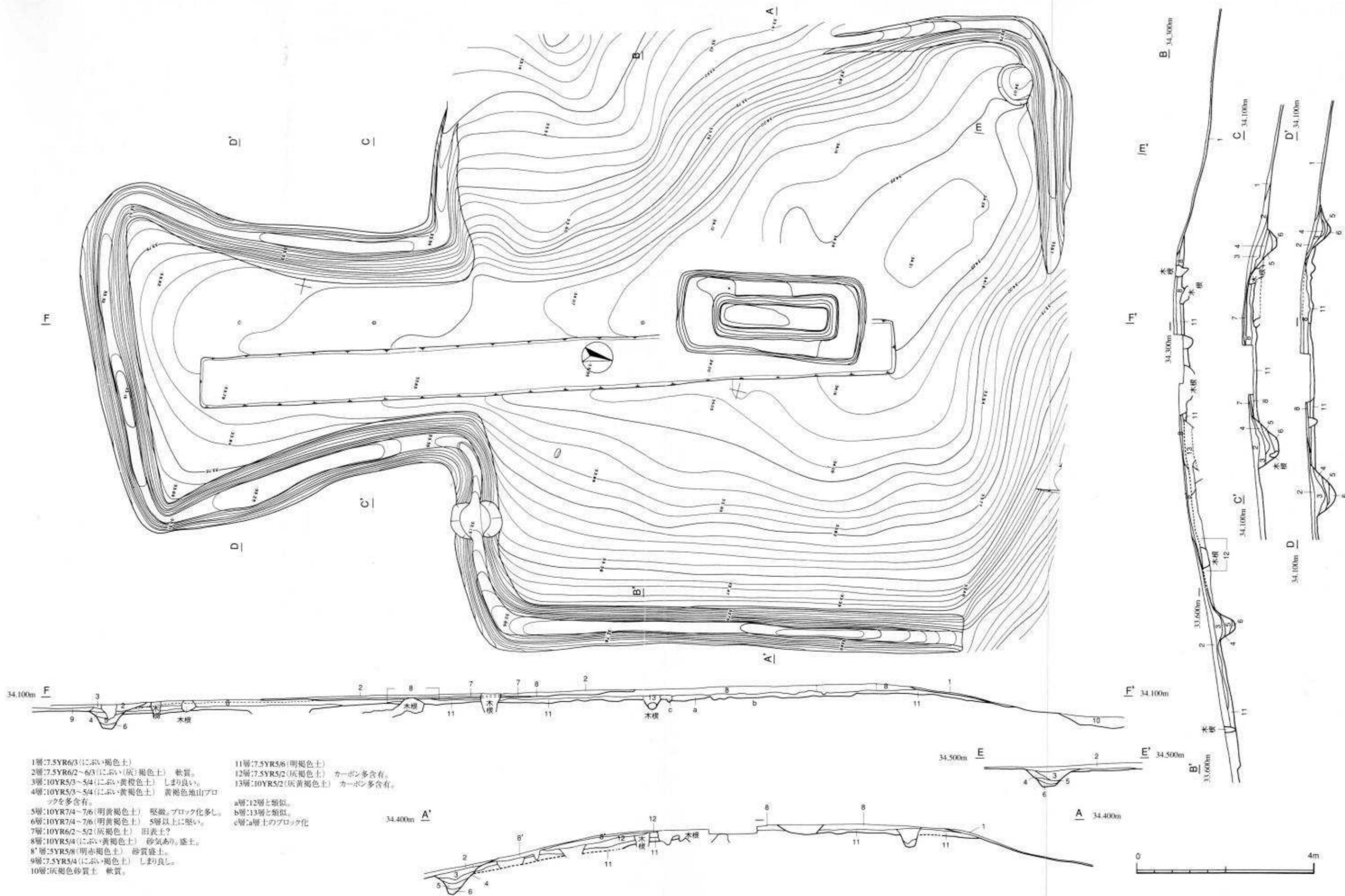
(1) 遺構 (第 118 図～第 119 図)

遺跡の北側、もっとも標高が高く、A、B、D 遺跡を望むところに位置し、1 基のみ単独でみられる。ただし、榎田氏の指摘では、尾根先端部調査区外の部分に方墳 1 基が存在する可能性があるとの意見を聞いている。墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりからの計測値で、全長 21m、前方部長 7.5m、後方部長 13.5m、前方部前縁幅 7m、くびれ部幅約 2.5m を測る。主軸はほぼ南北を向き、周溝は、均質な幅でうねりの少ない下底面をもつ。なお、図上で周溝がめぐるらない、後方部南西側と北東側は周溝部分が流失してしまっているが、実際には、全周するものと思われる。堆積土層は、1 層は表土、2 層・7 層は旧表土、周溝堆積土は 3～6 層で、盛土として考えられるものは 8・9・11・12 層である。盛土及び封土は、かなり流失したものと考えられ、主体部の深さは、削平された数値である。周溝堆積土は、5、6 層が 1 次堆積土であり、3、4 層はマウンドにかかるため、二次的堆積土と考えられる。主体部の検出作業は、色調が盛土と同色であり質感のみの判断で、困難を擁した。主体部は、後方部中央、ほぼ主軸を合わせて 1 基確認されている。墓壙規模は、主軸長 4.2m×短軸長 1.8m の長方形で、段掘りで設けられた掘り方は、上端部で、長軸長 2.9m×短軸長 1m を測る。横断面は、基本的に逆台形、北側は平坦な面を有し、中央部から南側に行くに従い皿状を呈し、平坦面が狭くなる。棺床では、長軸長 2.4m×短軸長 (北側平坦部 0.6m) を測り、床面から残存する高さは 0.45m である。長軸では、北側の方が床面が高く、前述したように、北側がもっとも平坦面を有することから、北側が頭部を示す可能性が高い。主体部の堆積土層からは、7 層が唯一木材痕跡としてあげられるだろうか。明確な木棺痕跡らしきものがみられず、棺床にも痕跡は残っていない。横断面中央部の土層断面には、硬質の粘土ブロックがみられ、埋葬した際の土であろうか。また、断ち割りを行った際、硬化面がみつかり、掘り方を示すものと考えられる。

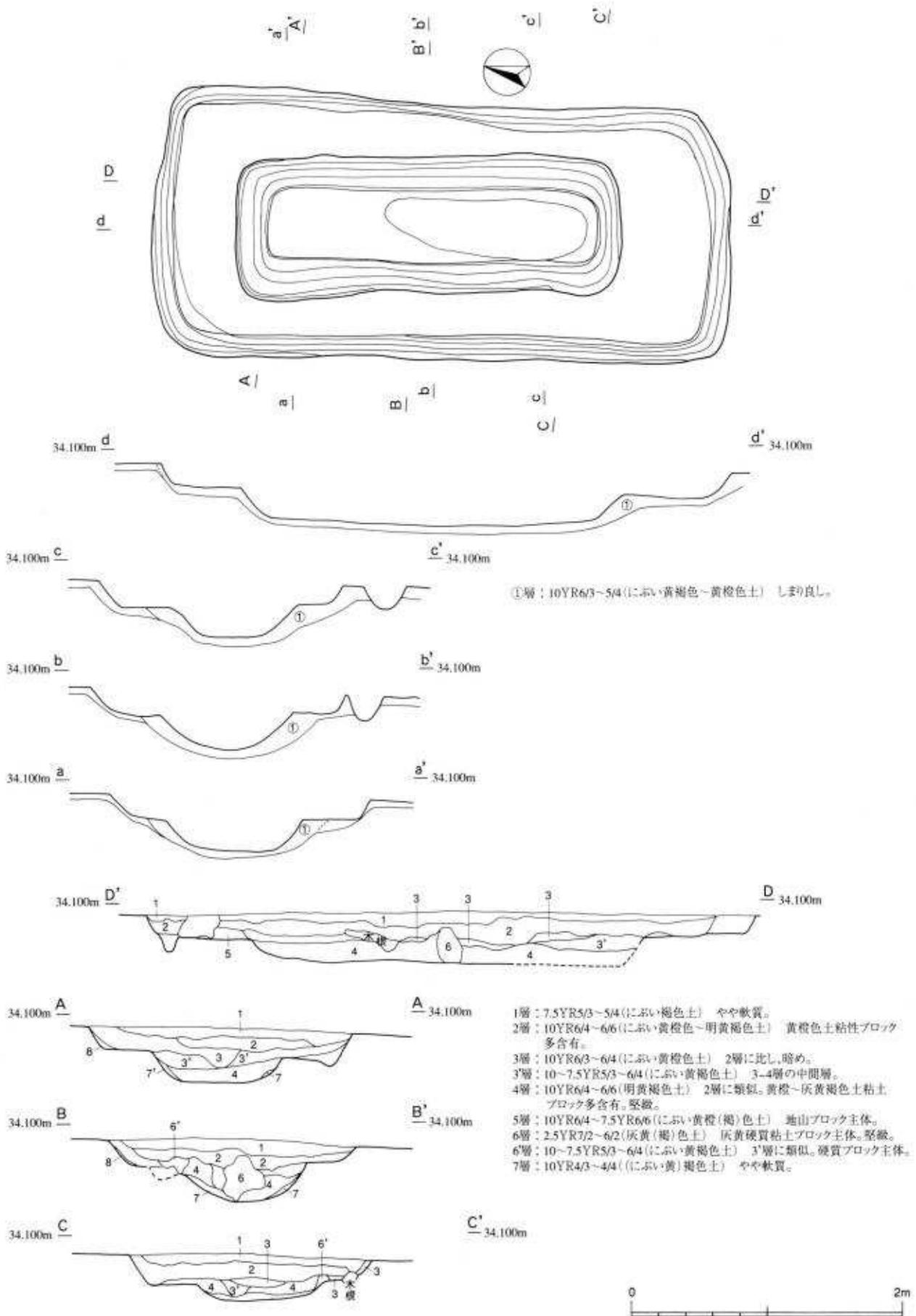
なお、棺の構造は、木棺痕跡が榎田氏の話によると、箱型もしくは割竹形も考えられるが、舟形に近いものが、想定できるのではないかともお聞きしている。

遺物出土状況

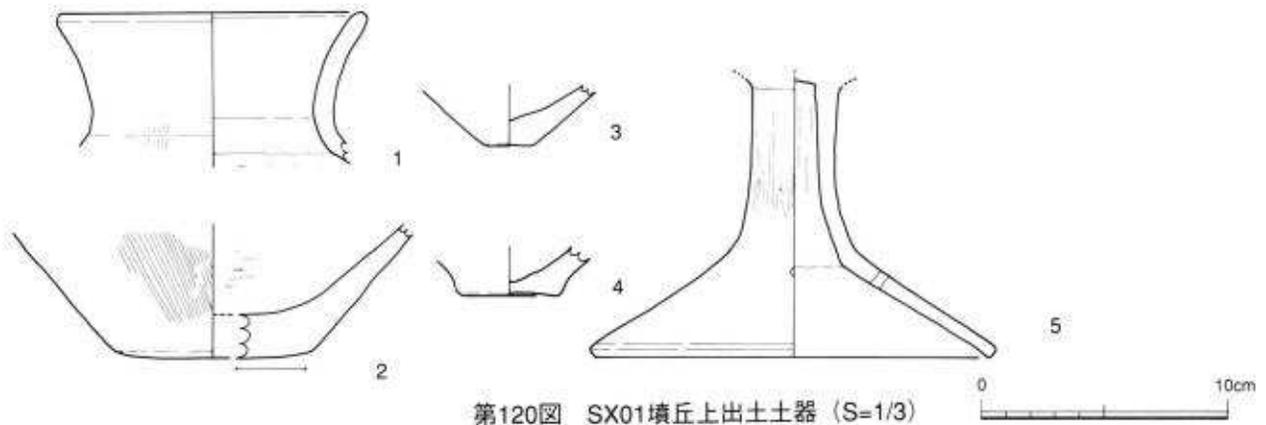
盛土及び、周溝部分の流失がみられるためであろうか。周溝内、主体部からの遺物の出土はみられなかった。なお、後方部墳丘上において、遺物の出土がみられた (第 120 図参照)。しかし、これらすべて、SX01 築造以前に SB07 が存在することなどを加味すると、築造以前の遺物と考えられる。



第118図 SX01平面・土層断面図 (S=1/80)



第119図 SX01 主体部平面・土層断面図(S=1/40)



第120図 SX01墳丘上出土土器 (S=1/3)

(2) 遺物 (第120図)

a) SX01 墳丘上出土土器 (1~5)

壺形土器 (1・2) 1は直口短頸壺で体部欠損する。外面は縦方向のハケ調整の後、横方向のナデ調整が施され、ハケ調整は若干残るのみである。口縁端部丸く、内面は横方向のハケ調整の後、横方向にナデ、一部であるが、体部にさしかかる箇所で、横方向のケズリ調整が確認できる。2は、外面縦方向のハケ調整で、底面にもハケ調整が施されている。内面は、横方向のケズリ調整である。

底片 (3・4) 3は、おそらく甕の底部であろう。内外面の調整は、磨耗が激しく不明である。4は、小型壺もしくは鉢の底部と思われる。

高環形土器 (5) 脚部のみ残存する。坏との接合は、充填法ではなく、挿入法であろうか。剥離している上面には、棒状工具による筋状の刻みが、放射状にみられる。接合しやすくするためであろう。脚の調整は、外面脚柱部は縦方向のミガキ、裾部はおそらく横方向のミガキ調整と思われる。内面は、絞り痕が何条かみられ、開脚部より、ナデ調整がみられる。また、透孔は2つもしくは4つ穿たれていたものと思われる。



SX01 周溝掘削状況 (北方から)

第3節 D遺跡の遺構と遺物

第1項 竪穴住居跡

1. SI02 (第121図～第124図)

(1) 遺構 (第121図～第122図)

形態

遺跡の北西、I区内、緩傾斜面に立地し、傾斜方向に主軸を合わせて作られている(第8図参照)。平面は隅丸方形を呈し、長軸長7m、短軸長約6.8m、床面積は約36.5㎡を測る。ちょうどA遺跡SI02Bと規模が類似する。壁高は、山側で地山面の高さから80cm、谷側で確認できた高さから約10cmを測る。本来、谷側には、周堤が巡り、壁高は高かったものと考えられる。主柱は4本で、P1～P4が該当する。柱間寸法は、P1～P4、P2～P3間は3mで、P1～P2、P3～P4間は3.4mと南北側がやや広い。柱穴は直径50cm～70cmで、床面からの深さは50cm～60cmに収まる。柱根はP4を除いて、硬化面が確認できたかどうかは、調査所見にないため不明瞭であるが、それ以外は、柱穴床面に向かい先窄まりなので、ほぼ底面が柱根部分と思われる。床面は、谷部に行くに従い若干低くなるものの、ほぼ水平に作られている。住居内の堆積土層は、1、2層は二次的堆積土で、床面直上層5～7層は、一次堆積土であり、主に遺物はこの層に含有する。壁周溝は、全周し、20～25cm程度の幅で、深さは10～20cm内に収まる。堆積土は、調査の際、どこまでが掘削できるのか苦慮している。南東側(山側)は、床面から地山面をだしていくと、7層は掘削できる壁周溝の最下底の堆積土である。しかし、その上層には地山もしくはそれに近似した土がみられ、溝床面が、潜り込む形になる。この状況は、谷側半円ではみられず、周溝壁はまっすぐ立ち上がるのである。この現象は文章化していないが、A遺跡SI01内の壁周溝と同様にみられた。石野氏の論拠で「壁周溝が周壁の土留材の下部を埋め込むための小溝」という視点に立てば、竪穴の構造に関わる問題である可能性が考えられる。

施設等

住居の中央に方形の土坑(SK01)があり、それと連結した形で排水溝(SD01)が壁周溝を突き抜けて谷側に向かっている。おそらく床面外は、A遺跡SI02、C遺跡SI01同様、周堤をトンネル状に掘り込まれていたものと考えられる。SD01の幅は、30～40cmで、床面からの高さは、土坑から離れるに従い深くなるため、排水溝と想定され、谷部に注ぎ込む形で掘削されているのであろう。SK01は、95cm×95cmの方形を呈する。いままで報告してきた竪穴住居の中央土坑の中で20cmともっとも浅い。堆積土は、1層は一次堆積土と考えられ、3、4層はカーボン材及び焼土を含む。A遺跡SI02、C遺跡SI01の土坑にも、最下底に炭層はみられるため「使用時のもの」もしくはすべて廃棄行為の行われている住居であるため「廃棄時のもの」どちらかであろう。床面下は、a～d層が該当する。A層は竪穴住居の張床に該当し、5～10cmの厚みで作られている。b～d層は床面整形埋土ではなく、土質から、風倒木痕跡の可能性が高い。

遺物出土状況

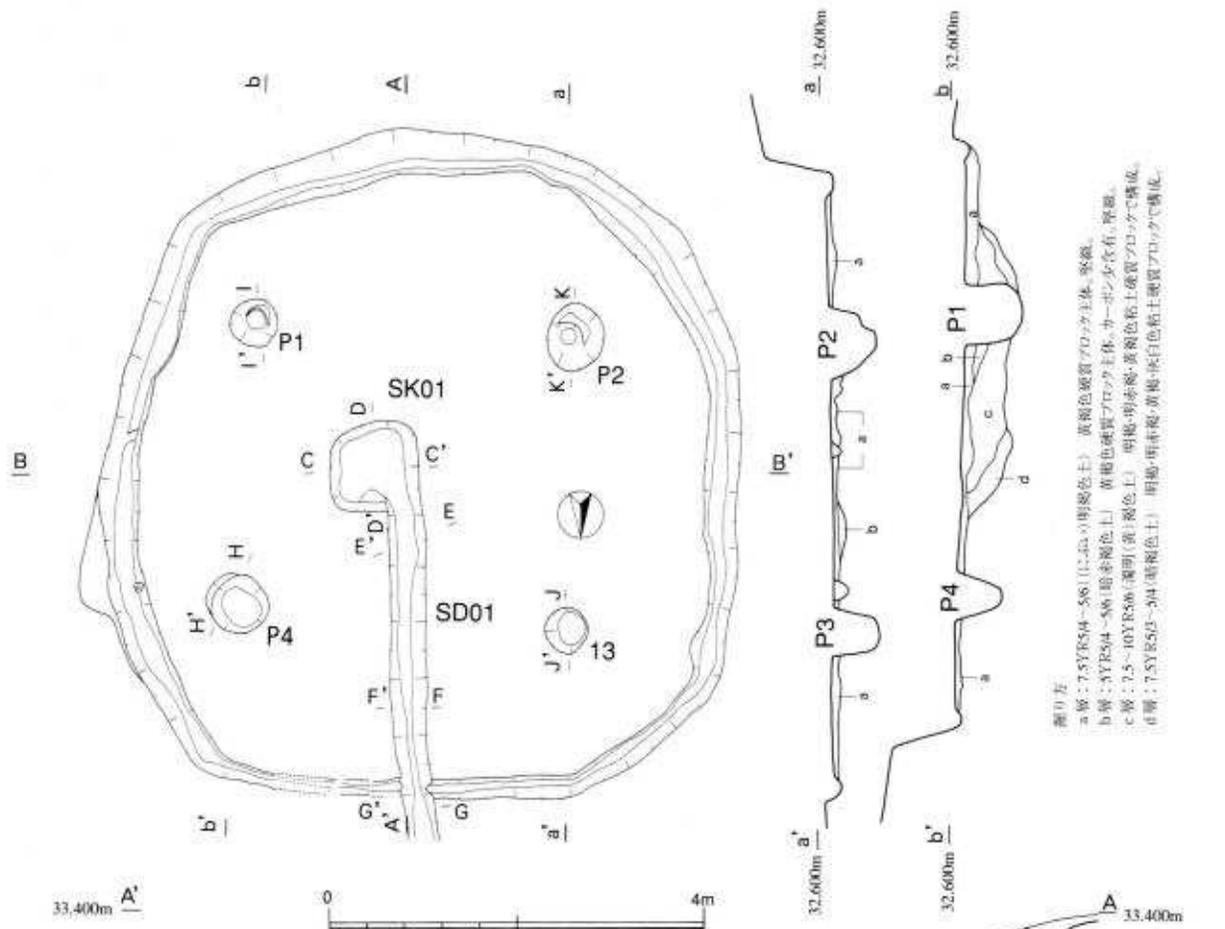
第122図が床面遺物出土状況である。遺物の出土はほとんど床面からであり、同時性をもつ可能性の高い一括遺物として捉えられる出土状況を示すと考えられる。完形近くに復元できたものは、甕2点、高坏1点、小型壺1点と数少ない。甕は2点とも南東側(山側)P2付近で検出されており、(1)の周囲には、15cm程度の礫が10点以上みられる。この周囲に炉跡があった可能性が高い。床面出土の高坏は2点あり、どちらも広範囲に破片は分散するが、(5)に関しては、主だった破片は、北東側P4付近でみられる。小型壺(3)は、完形で谷側P3付近に出土している。いずれも、破片以外は、主柱穴の枠外から出土していることは興味深い。

なお、柱穴及び土坑から出土遺物はみられなかった。

(2) 遺物 (第123図～第124図)

a) 床直上出土土器 (1～8)

甕形土器 (1・2) 両者とも無文有段口縁の甕である。1は底が欠損するが、ほぼ器形を捉えられる。内外面に煤の付着がみられる。1は、体部外面は、縦方向のミガキ調整で、内面は時計逆回り横方向のケズリ調整であ

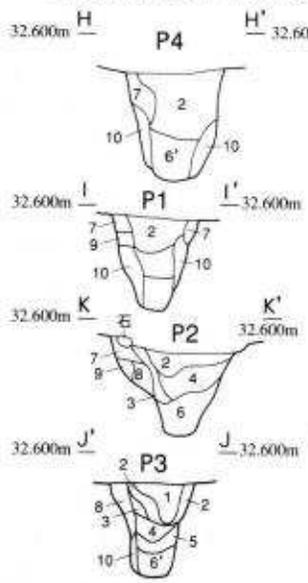
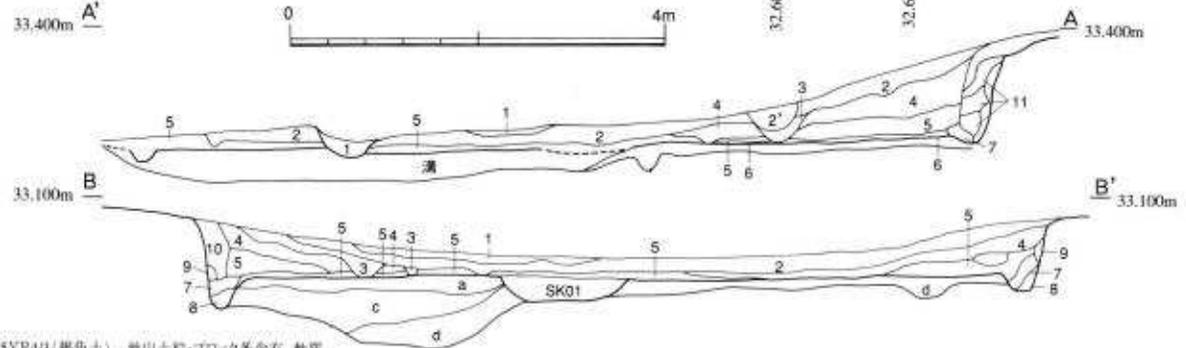


掘り方
 a層：7.5YR5/4-5/6(にぶい)明褐色土) 黄褐色硬質ブロック主体、堅緻。
 b層：5YR5/4-5/6(暗赤褐色土) 黄褐色硬質ブロック主体、カーボン材含有、硬緻。
 c層：7.5-10YR5/6(暗明)黄褐色土) 明緻、明赤褐色、黄褐色粘土硬質ブロックで構成。
 d層：7.5YR5/3-2/4(暗褐色土) 明緻、明赤褐色、黄褐色、灰白色粘土硬質ブロックで構成。

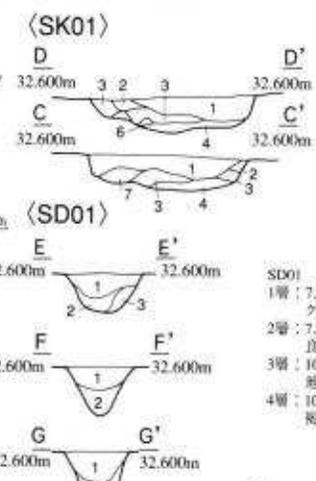
1層：7.5YR4/3(褐色土) 地山土粒・ブロック多含有、軟質。
 2層：5YR2/1-3/1(黒(褐)色土) 軟質。
 3層：2層に比し、暗め。
 4層：7.5YR4/2(灰褐色土) カーボン材少含有。
 5層：7.5YR4/6(褐色土) 4層に類似、やや暗め。

6層：7.5YR7/8 黄褐色土硬質ブロックとにぶい褐色土比率、床面貼り床敷層土。
 7層：7.5YR4/2-4/4 5層に比し、やや暗く軟質。
 8層：10YR5/4(にぶい)黄褐色土) 地山粒・ブロック多含有、軟質。
 9層：10YR6/8(明)黄褐色土) 地山粒・ブロック主体、硬質層土。
 10層：7.5YR4/3(褐色土) 5層に比し、やや暗い、堅緻。

11層：地山様土層。



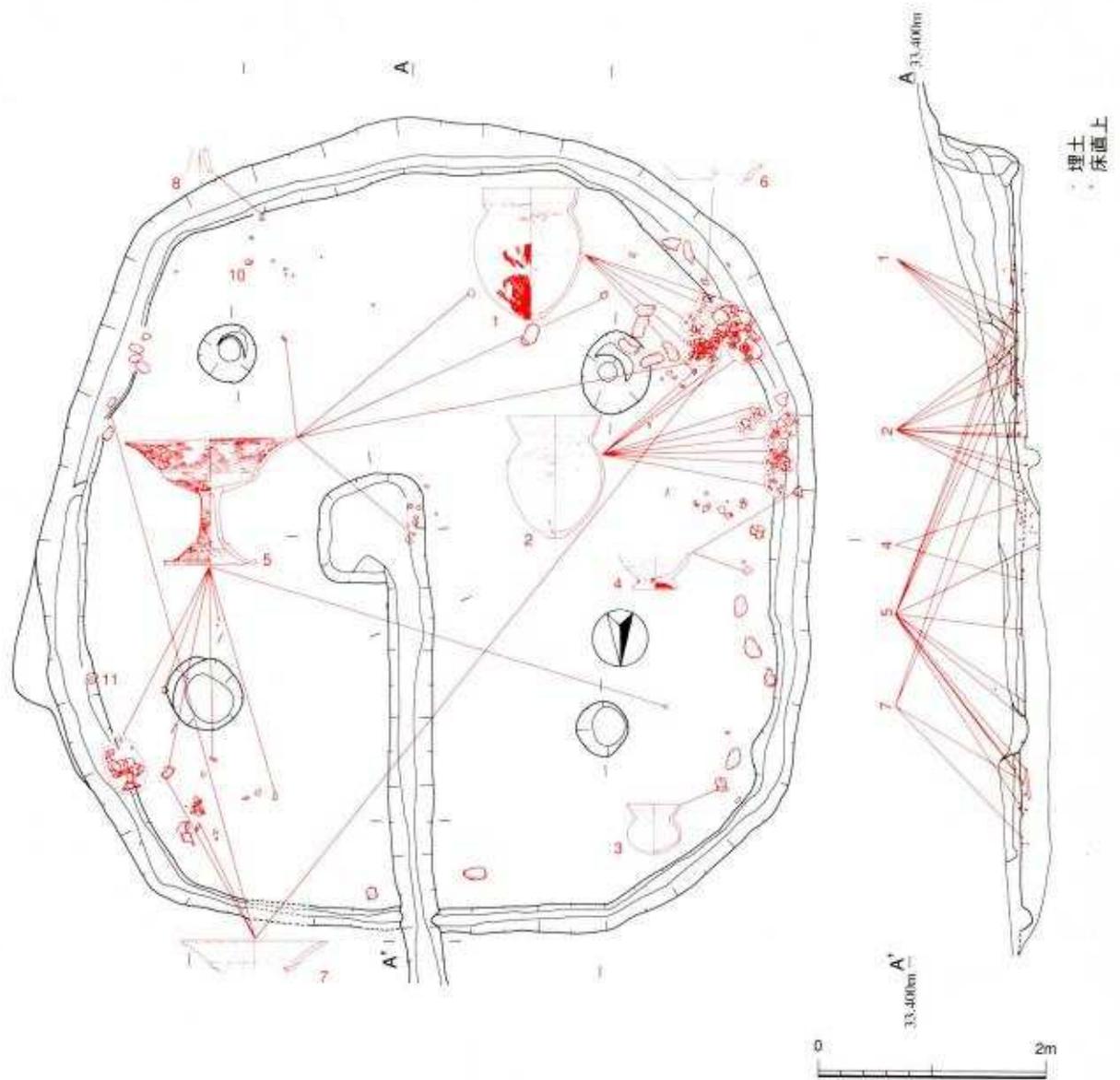
柱穴
 1層：7.5YR4/3(褐色土) 地山土粒・ブロック多含有、軟質。
 2層：7.5YR5/4-5/6(にぶい)明褐色土) 軟質。
 3層：7.5-5YR5/2-5/4(にぶい)赤褐色土) 褐色土硬質ブロック多含有。
 4層：7.5YR5/2-5/4(にぶい)灰褐色土) 地山ブロック並含有。
 5層：10YR5/6-6/8(明)黄褐色土) 明黄褐色硬質ブロック主体、掘り方崩壊層。
 6層：7.5YR6/2-6/3(濁灰褐色土) 地山ブロック集合体。
 7層：7.5YR5/2-5/3(灰褐色土) 灰褐色土粒主体。
 8層：5YR4/6(赤褐色土) しまり良い。
 9層：5YR5/3-5/4(にぶい)赤褐色土) 軟質。
 10層：5YR5/6(明赤褐色土) 地山ブロック集合体。
 11層：7.5YR5/3(にぶい)褐色土) にぶい黄褐色地山土粒・ブロック多含有。



SK01
 1層：7.5YR4/3(褐色土) 黄褐色土粒・ブロック多含有、軟質。
 2層：7.5YR5/6(明褐色土) 比較的均質。
 3層：7.5YR4/2(暗)灰褐色土) カーボン材多含有、硬土ブロック少含有。
 4層：7.5YR3/3(暗)灰褐色土) カーボン・粘土ブロック多含有。
 5層：7.5YR4/6(褐色土) 1層に比し、暗くしまり良い。
 6層：黄褐色硬質ブロック塊。

SD01
 1層：7.5YR5/6(明褐色土) 黄褐色土粒・ブロック多含有。
 2層：7.5YR4/2-4/3(灰)褐色土) 暗くしまり良い。
 3層：10YR5/4(にぶい)黄褐色土) にぶい黄褐色地山粒・ブロック多含有、暗くしまり良い。
 4層：10YR5/4(にぶい)黄褐色土) 3層に比し、褐色味強い。

第121図 SI02 平面・エレベーション図(S=1/80), 土層断面図(S=1/60), 柱穴等土層断面図(S=1/40)



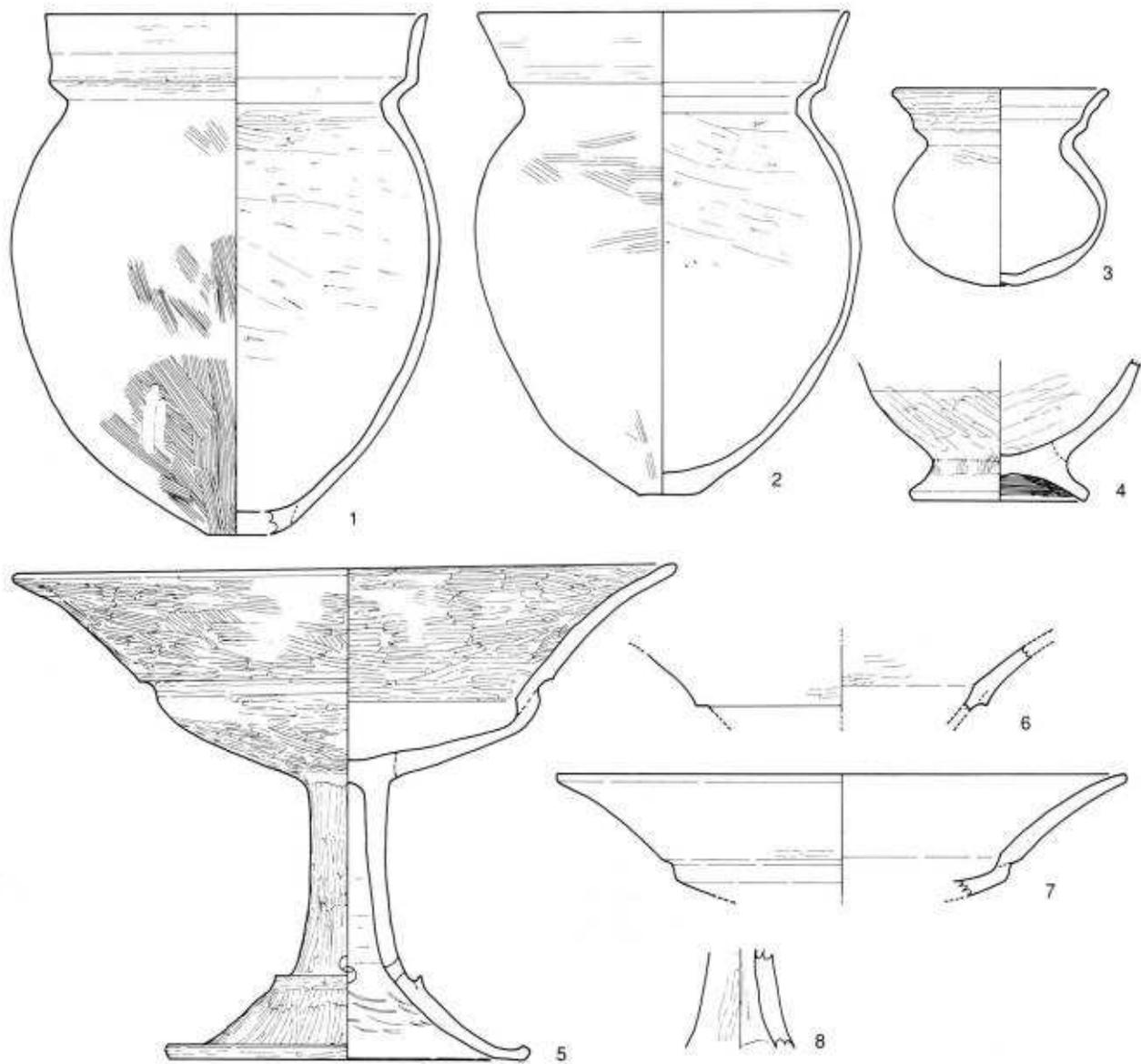
第122図 SI02遺物出土状況図 (S1=1/60)

る。ただし内面底部付近は摩滅が激しく不明瞭である。口縁から頸部内外面にかけて、横方向のミガキ調整が施されている。2は、表面の残りは悪いが、調整は看取できる。体部外面上半部は横方向に、底部は縦方向に、ハケ調整が施されている。内面体部上半は、時計回り横方向にケズリ調整が施され、下半部はおそらくケズリ調整と思われるが、不明瞭である。口縁は、薄く外反し、外面はかすかに条線が残る程度で、基本的には内外面ナデ調整と思われる。

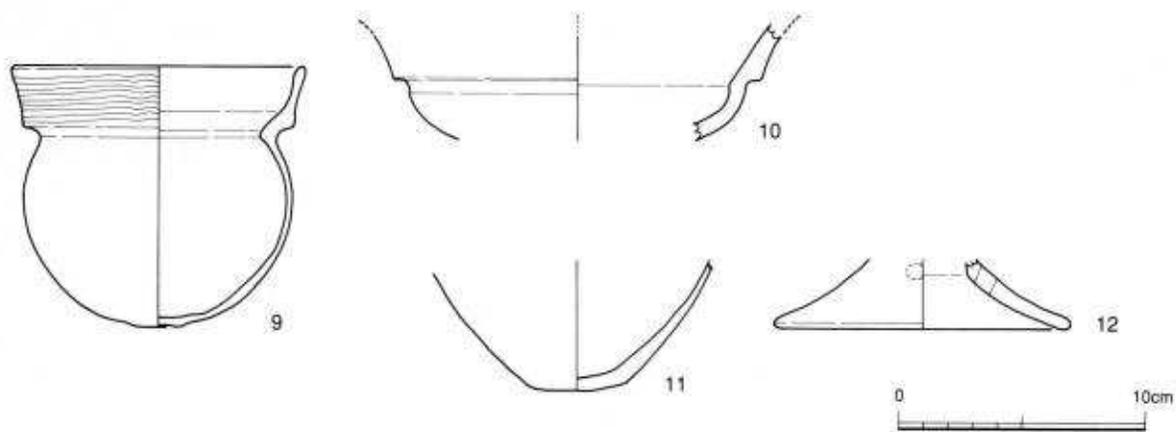
壺形土器 (3) 有段口縁をもつ小型壺である。体部外面は横方向のミガキ調整、内面は単位は不明であるが、ケズリ調整と思われる。口縁内外面は横方向ミガキ調整である。なお、外面および口縁内面には、赤彩が施されている。

台付 (4) 鉢もしくは壺が上に付くものと思われる。体部外面はケズリ調整の後、縦方向のミガキ調整、内面も斜め方向にミガキ調整が施されている。台部外面は、接合部縦方向にハケ調整の後、裾部まで横方向にナデ調整が施されている。内面は、横方向にハケ調整が施され、裾部5mm程度、横方向にナデられている。

高坏・器台形土器 (5~8) 5は有段口縁をもつ高坏で八割方残存し、全形がわかる資料である。坏部内外面は横方向にミガキ調整が施され、脚柱部外面は縦方向のケズリ調整の後、同方向にミガキ調整が施される。内面は、部分的に横方向のケズリ調整が看取される。裾部は有段で、脚柱部と接合する面と、裾部の面は横方向にミガキ調整が施され、その間は、縦方向のミガキ調整が施される。内面裾部は、板のあたりであろうか、短い単位



第123图 SI02床直上出土土器 (S=1/3)



第124图 SI02出土土器 (S=1/3)

で筋の痕跡がみられ、床面に屈曲する部分までは、横方向のハケ調整がみられる。坏部との接合は充填法で、透孔は4方向に穿たれている。なお、外面には部分的に赤彩痕跡がみられ、坏部内面には部分的に煤の付着がみられる。7もほぼ5同様の器種と考えられる。6は、坏部有段部分のみが残存する。傾きを考慮すると、器台である可能性が高い。内外面横方向のミガキ調整である。8は、高坏もしくは器台の脚と考えられる。内面には、数条の絞り痕が残り、外面は縦方向のミガキ調整が施される。

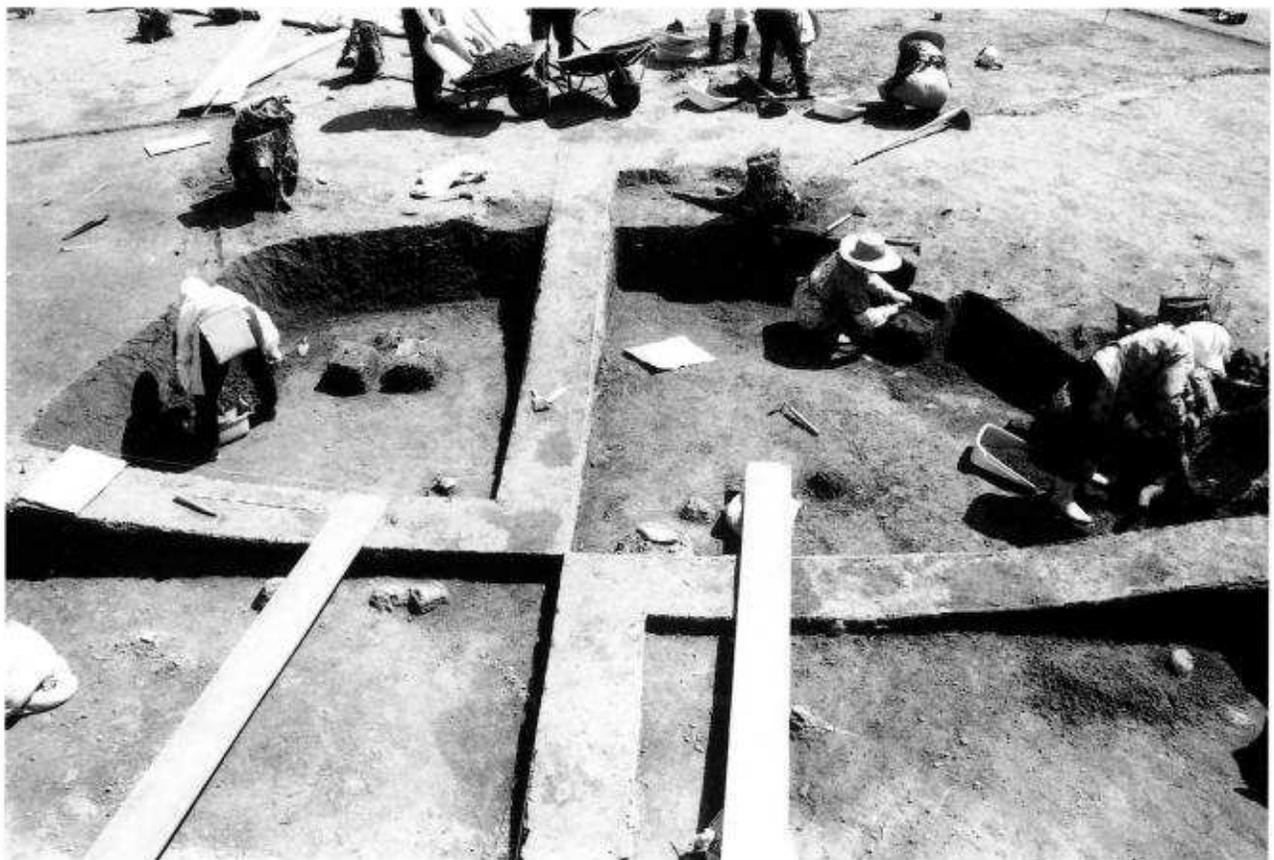
b) SI02 出土土器 (9~12)

壺形土器 (9) 擬凹線を施す有段口縁をもつ小型壺である。内外面は磨耗して調整不明瞭であるが、体部外面はおそらくミガキ調整と思われる。口縁は、端部丸みをもち、外面には擬凹線が施されるが、擬凹線は細い筋であり、木目沈線の可能性が高い。

鉢形土器 (10) 有段口縁をもつ鉢である。口縁及び底部が欠損するため、脚が付くかどうかは不明であるが、図化復元した口径を考慮すると、平底である可能性が高い。内外面、磨耗して調整が不明瞭であるが、おそらく内外面ともミガキ調整であろう。

底片 (11) 壺もしくは甕の底部である。底面は広いものの、平底ではなく、不安定な自立をみせる。調整は、内外面磨耗して調整不明瞭である。

高坏・器台形土器 (12) 高坏もしくは器台の脚と考えられる。脚柱部が欠損し、おそらく有段状を呈する脚を想定する。欠損部には、一部透孔の痕跡がみられる。外面の調整は単位は不明瞭であるが、ミガキ調整が施されており、また、赤彩が施されていることが看取できる。



SI01 調査風景 (北方から)

第2項 古墳

1. 古墳の立地 (第125図)

I区内、方墳2基が確認されている。平坦面の長軸上、北東—南西方向に軸を同じくして作られている。両墳は、14mの間隔をおいている。第125図は、両墳の現況コンター図である。本来のマウンドは流出しているものと思われる。標高地でいえば、2号墳の方が高い位置に作られている。なお、調査所見の中で櫻田氏は、C遺跡の方角を意識して造墓していることを述べている。

2. SX01 (第126図～第129図)

(1) 遺構 (第126図～第127図)

墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりからの計測値で、長軸長8.8m×短軸長約8.4mを測る。主軸はほぼ北東—南西を向き、周溝は全周し、均質な幅でうねりの少ない下底面をもつ。周溝幅は、上端で1~1.2m、下端で0.2~0.4mを測る。形状は、南西側(山側)が断面三角形に近い形状をし、北東側(谷側)が逆台形を呈す。よって、山側は下端0.2m、谷側は0.4mを測る。また、周溝の床面の高さは、山側は高く、谷側は低いといったように、高さに関係なく、視覚的に掘削されているものと思われる。堆積土層は、1層は旧表土、周溝堆積土は2~5層で、盛土として考えられるものは4層である。なお、周溝堆積土である4、5層は盛土及び地山崩壊土と考えられる。前述したように、盛土及び封土は、かなり流出したものと考えられるので、主体部の深さは、削平された数値である。

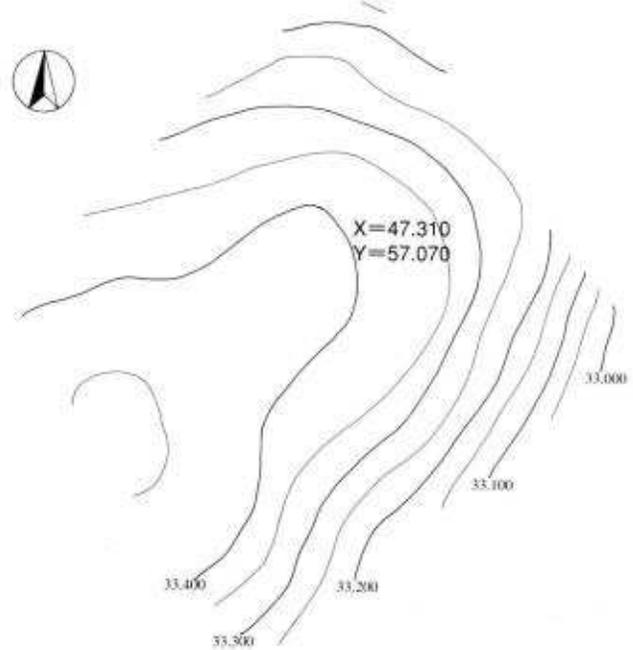
主体部は、墳丘上から3基確認されており、順を追って説明する。

遺物出土状況

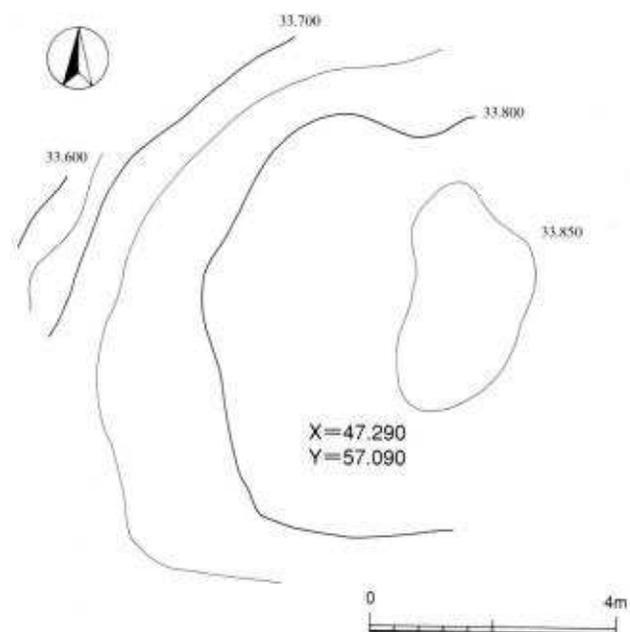
周溝内から壺形土器3点、高坏1点、管玉1点が出土している。すべて床面から浮いた状態で出土している。これらが、どの層について出土したかは不明であるため、浮いた状態で出土していることを考慮すると墳丘上にあったものが転倒したものと想定する。ただし、管玉は、封土が流出した際のものとも考えられる。

壺(1、2)と管玉(5)は南東側の周溝から出土している。(1)は、ほぼ完形で横倒し状態で出土している。(2)は、碎片になって、ひとまとまりに出土している。小型壺(3)は南コーナー部から出土しており、破碎しており、口縁及び底部が欠損する。高坏(4)は、南西側周溝中央で出土している。ほぼ完形で、横倒し状態で出土している。

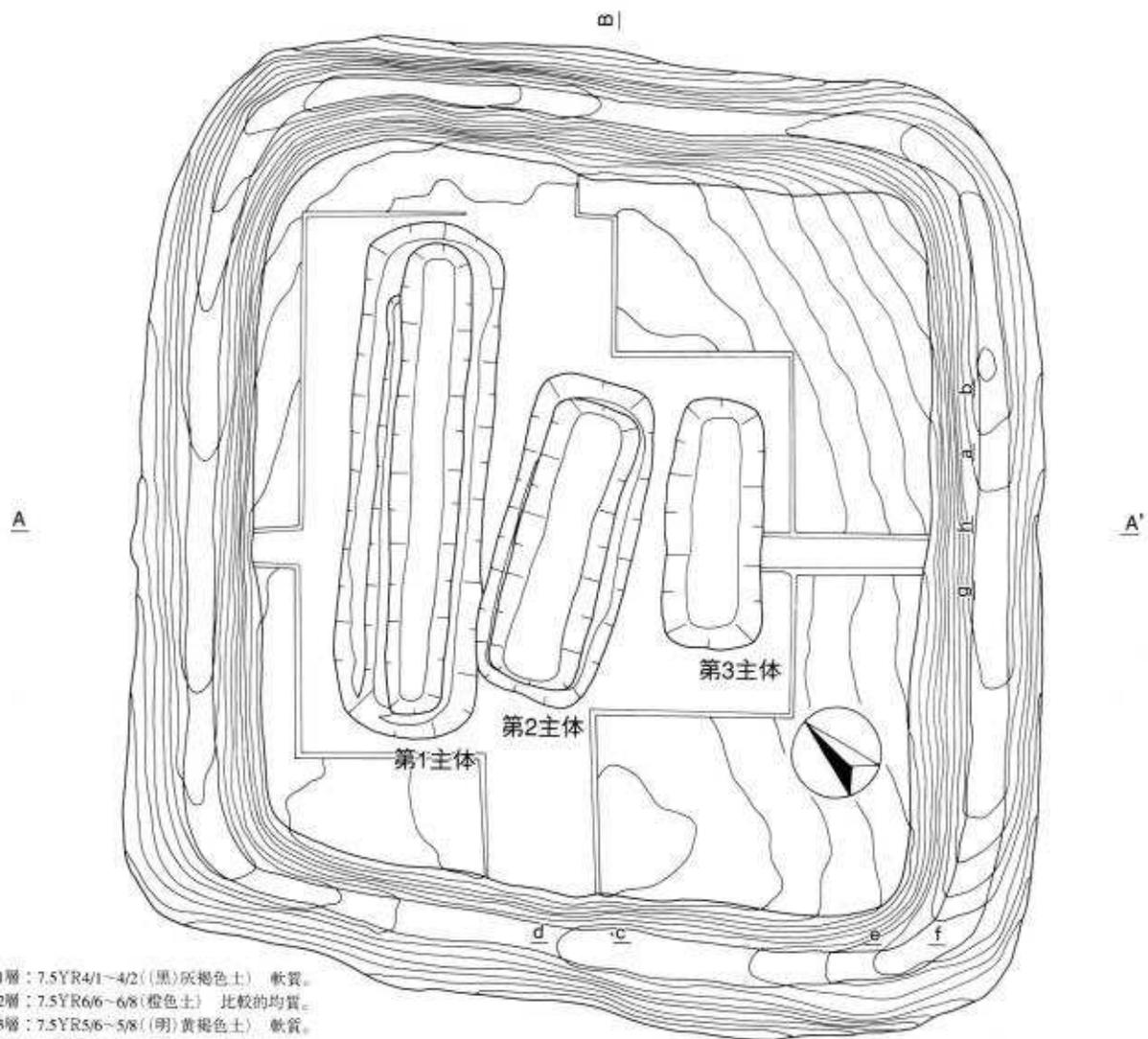
SX01



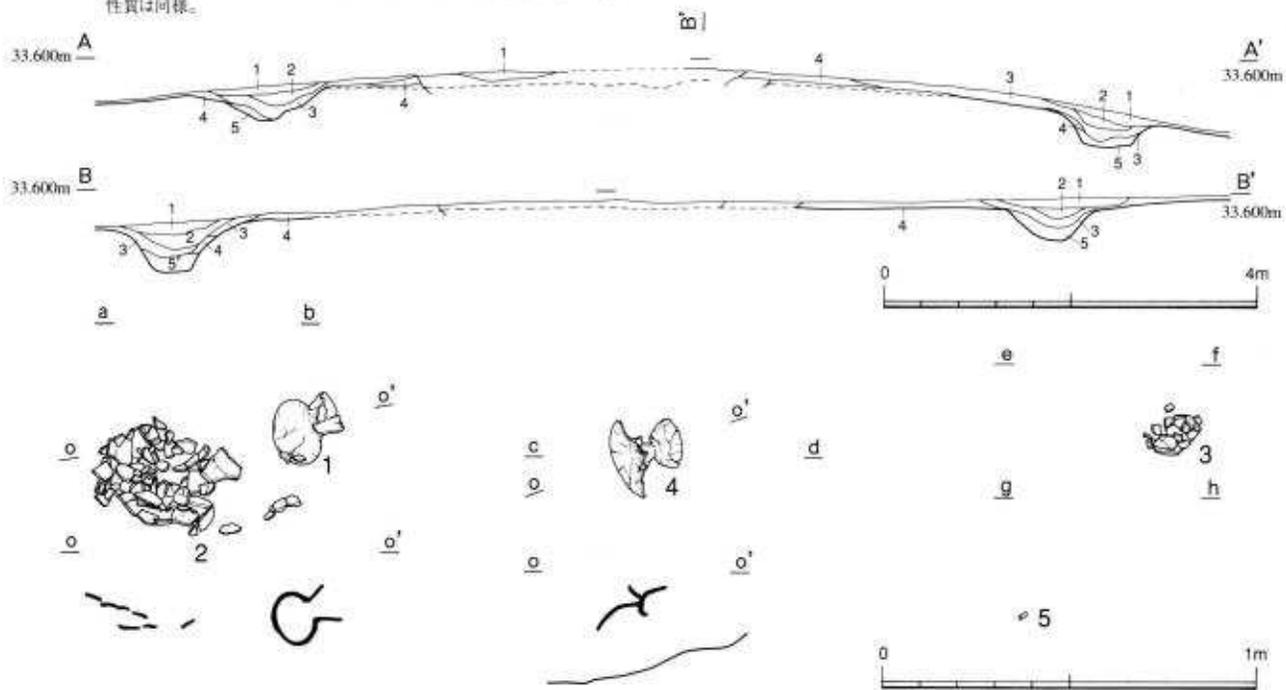
SX02



第125図 SX01,02 現況コンター図 (S=1/120)



- 1層：7.5YR4/1-4/2(黒)灰褐色土) 軟質。
- 2層：7.5YR6/6-6/8(橙色土) 比較的均質。
- 3層：7.5YR5/6-5/8(明)黄褐色土) 軟質。
- 4層：7.5YR6/6-6/8(橙色土) 2層に類似。
- 5層：7.5YR7/6-6/6(橙色土) 2cm程度のカーボン多含有。
- 5層：7.5YR5/4-5/0(にがい)明)褐色土) 5層との違いは色調差の違いのみ、性質は同様。



第126図 SX01平面・土層断面図 (S=1/80), 周溝内遺物出土状況 (S=1/20)

a) 第1主体部

主軸を墳丘と同じくし、北側に位置する。三主体の中でもっとも大きいものである。墓壙規模は、主軸長 5.6 m×短軸長 1.5m、段掘りで設けられた棺部は、長軸長 5m×短軸長 0.7m を測る。横断面は、皿状を呈し、床面は両端はやや上がるものの、基本的に平坦に作られている。床面から残存する高さは 0.5m である。堆積土層は、木棺痕跡が土に見られないため、あくまでも想定である。5層が底板及び人体を含む層と考えられ、おそらく2層が陥没した蓋板の形状を示すのではないかと推測される。6層は棺床の崩壊土、3、4層は掘り方埋土、1層は封土が埋没したものであろう。いずれにせよ、精美な形状をもつ割竹形木棺が、使用されたものと考えられる。

遺物出土状況

方形板刃先 (6) 1点、刀子 (7) が1点出土している。両者ともほぼ床面近くから出土しており、(6) は、南西側、(7) は中央部北側に寄って出土している。これらの遺物の距離間は 1m を測り、おそらく刀子は人体の脇に置かれ、方形板刃先は人体にはかからない頭部もしくは足元に置かれたものと考えられる。また、方形板刃先から、長軸における壁の立ち上がりは 1m であり、刀子から反対側の壁への立ち上がりは、2.7m である。これはあくまでも推測にしか過ぎないが、おそらく、方形板刃先がみられる方が頭位を示しているのではないかと推測される。

b) 第二主体部

主軸は、墳丘とは異にし、やや東に振れ、墳丘の中央に位置する。1号主体部と一部重複するものの新旧関係はつかめなかった。墓壙規模は、主軸長 3.6m×短軸長 1.5m、段掘りで設けられた棺部は、長軸長 3m×短軸長 0.9 m を測る。横断面は、皿状を呈し、床面はやや南西側が上がる。床面から残存する高さは 0.45m である。堆積土層は、木棺痕跡が土に見られないため、あくまでも想定である。5層が蓋板から底板含有層と考えられ、4層は棺床の崩壊土もしくは掘り方埋土、1~3層は封土が埋没したものであろう。棺の形態は、組み合わせ箱形木棺というよりは、割竹形に近いものを想像する。

遺物出土状況

直刃鎌 (8)、ヤリガンナ (9)、礫が1点ずつ出土している。すべて床面からやや浮いた状態で出土しており、(8)、(9) は北東側に散乱して出土しており、(8) は三個体に (9) は二個体に破損している。礫は北東寄り、南側から出土している。礫と鉄製品の散乱箇所との距離間は 1.5m を測る。また、礫から長軸における壁の立ち上がりまでの距離は 1m である。これはあくまでも推測にしか過ぎないが、礫はおそらく頭部、鉄製品は足元に散乱しているのではないかと推測される。

c) 第三主体部

主軸は、第一主体部とはほぼ同様、主軸を墳丘と同じくし、墳丘の東よりに位置する。墓壙規模は、長軸長 2.6 m×短軸長 (南西側 1m、北東側 0.9m) を測る。若干、南西側の方が幅広である。横断面は、逆台形を呈し、床面はやや南西側が上がる。床面から残存する高さは 30 cm で三主体のうちもっとも浅い。棺の形態は、調査における土層断面の観察でも痕跡の把握はできなかった。また、副葬品の出土はみられなかった。

(2) 遺物

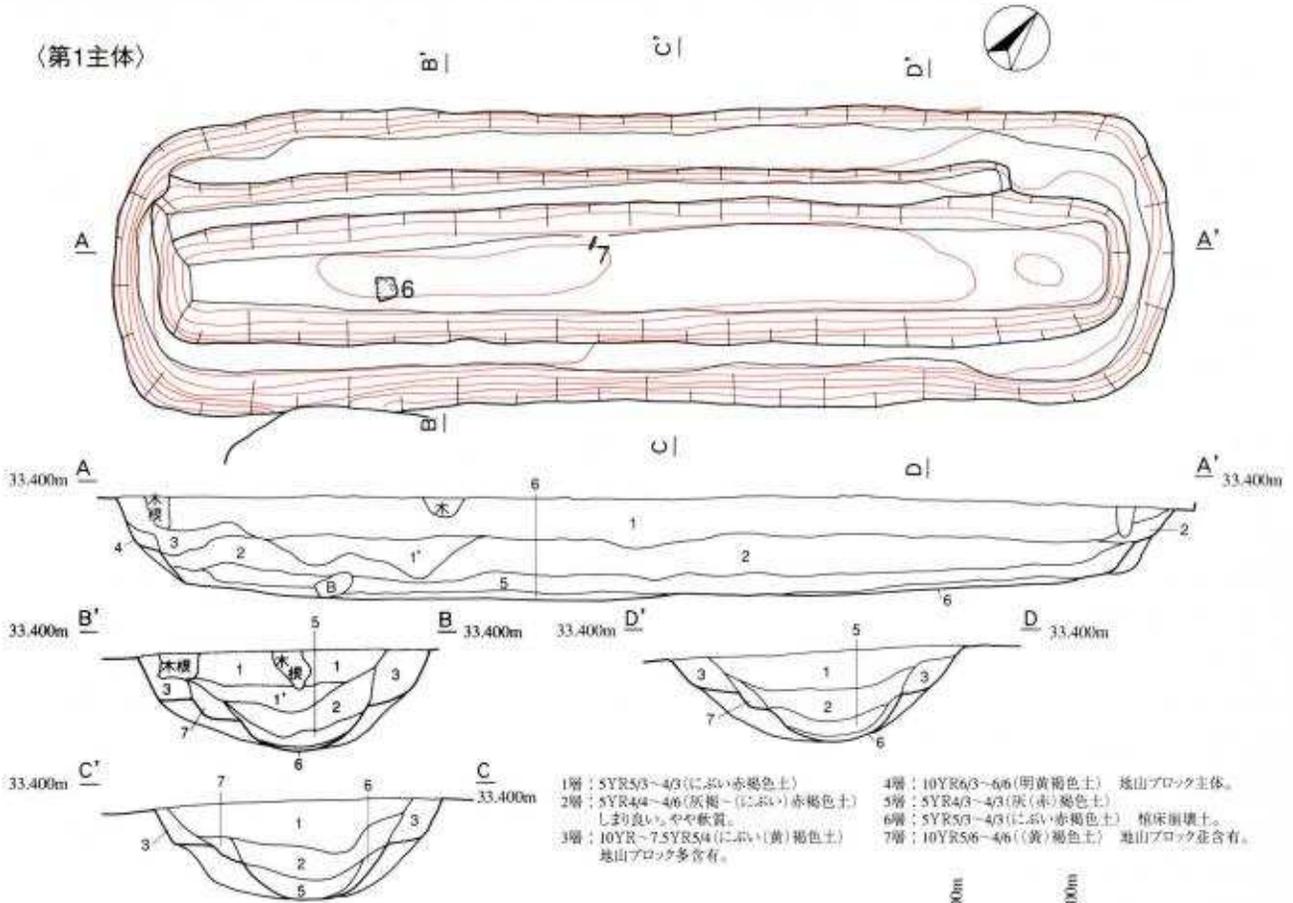
安、高橋両氏から土器に関しては、ご教授いただいております。時期的には、漆町 7~8 群併行と伺っている。

a) SX01 周溝内土器 (1~5)

壺形土器 (1~3) 1は直口細頸壺で、口径は長めである。頸部上片と体部は土器がもろく復元できなかったため、図上復元を行っている。底部は欠損する。おそらく供献の際、人為的に底部を穿ったものと思われる。体部外面横方向のハケ調整、内面は指押さえ及び指ナデが看取される。なお、外面に赤彩が施されている。2は広口壺である。口縁部及び体部下半欠損する。内外面磨耗が激しく調整は不明瞭であるが、かろうじて、外面横方向のハケ調整と、内面頸部と体部の接合部に指押さえ痕がみられる。3は小型壺である。口縁及び底部が欠損するが、底部はおそらく丸底と思われ、人為的に底部を穿ったものと思われる。内外面風化が激しく、調整不明瞭である。

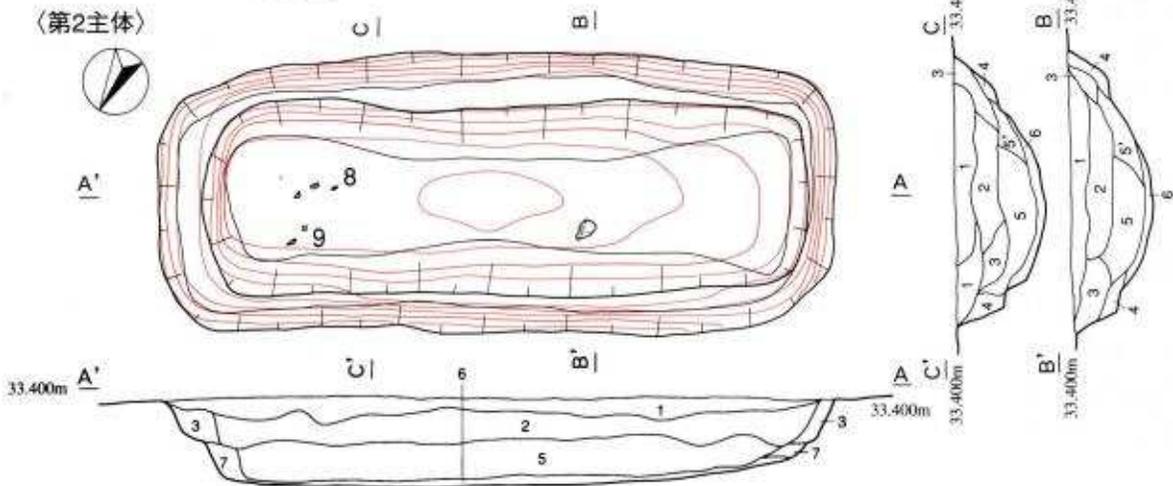
高坏形土器 (4) 坏部はやや内湾し、坏部は明瞭な屈曲がみられる。脚は、開きが大きく、4方向に透孔が穿たれている。薄い作りで、内外面磨耗して調整は不明瞭である。しかし、図化されていないが、坏部との接合部直下に板工具による横方向のナデ調整が 2 cm 程度の幅でみられる。

〈第1主体〉



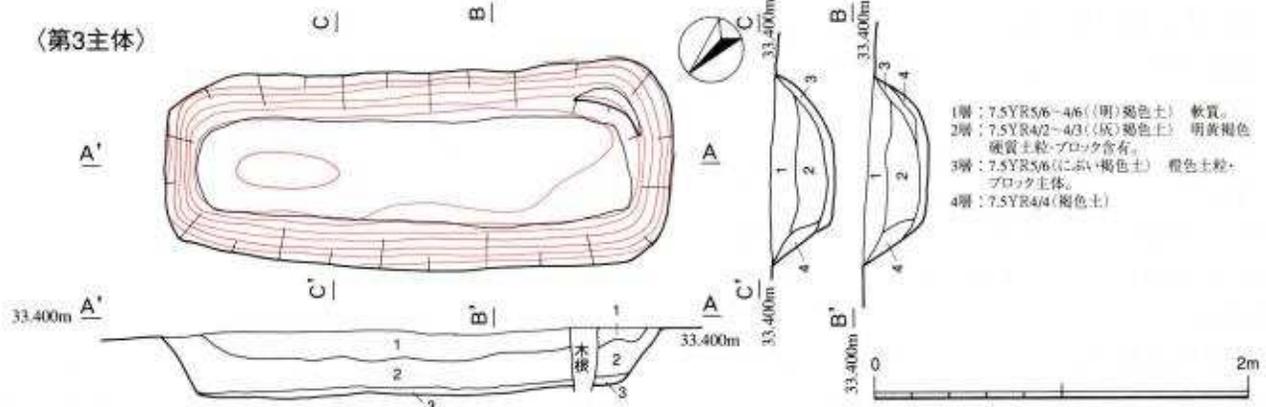
- 1層：SYRS3-43(にぶい)赤褐色土)
- 2層：SYR44-46(灰褐色(にぶい)赤褐色土) しまり良い、やや軟質。
- 3層：10YR-7.5YR54(にぶい)黄褐色土)
- 4層：10YR63-66(明黄褐色土) 地山ブロック主体。
- 5層：SYR43-43(灰(赤)褐色土)
- 6層：SYRS3-43(にぶい)赤褐色土) 棺床積土。
- 7層：10YR56-46(黄)褐色土) 地山ブロック並含有。

〈第2主体〉



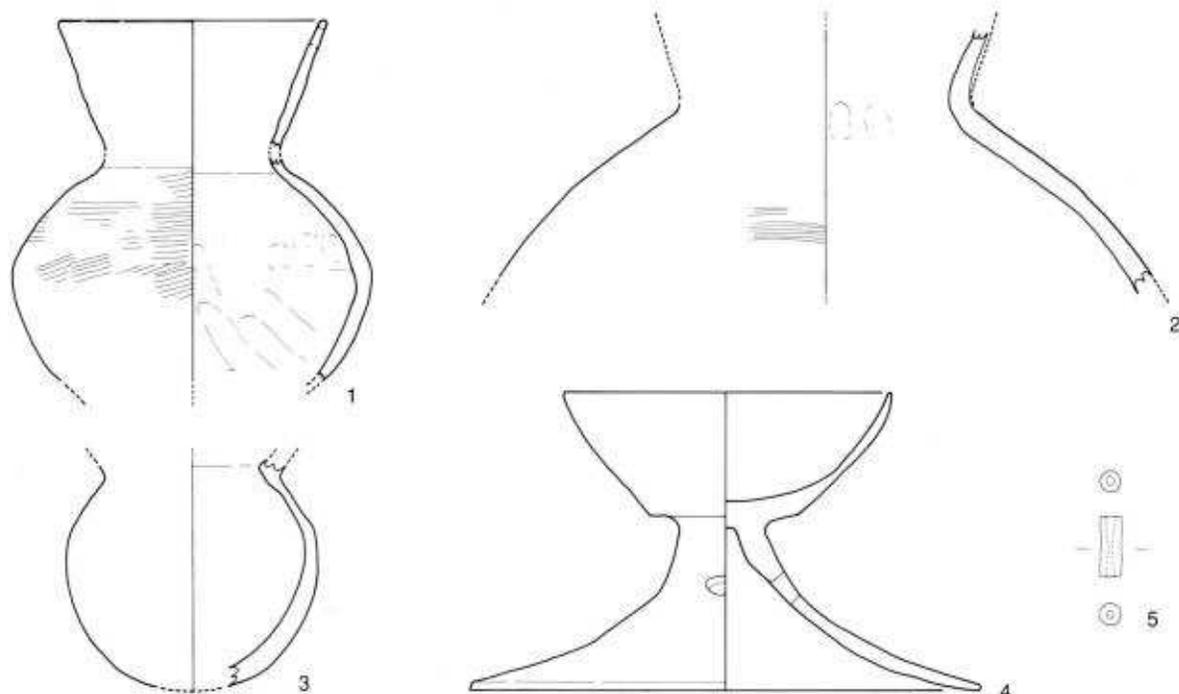
- 1層：7.5YR54(にぶい)褐色土) 棕色硬質粒・ブロック多含有。堅硬。
- 2層：7.5YR44-46(褐色土) 1層に類似し、比し軟質。
- 3層：SYR54-7.5YR54(にぶい)赤褐色土) 2層に比し、地山ブロック多含有。
- 4層：SYR44-46(にぶい)赤褐色土) 軟質。
- 5層：5-7.5YR53-54(褐色土) 軟質。褐色土粒・ブロック少含有。
- 6層：10YR54(にぶい)黄褐色土) 明黄褐色土粒・ブロック多含有。
- 7層：7.5YR56(明褐色土) 明褐色土ブロック主体。
- 5層：5層に比し堅硬。

〈第3主体〉



- 1層：7.5YR56-46(明)褐色土) 軟質。
- 2層：7.5YR42-43(灰)褐色土) 明黄褐色硬質土粒・ブロック含有。
- 3層：7.5YR56(にぶい)褐色土) 棕色土粒・ブロック主体。
- 4層：7.5YR44(褐色土)

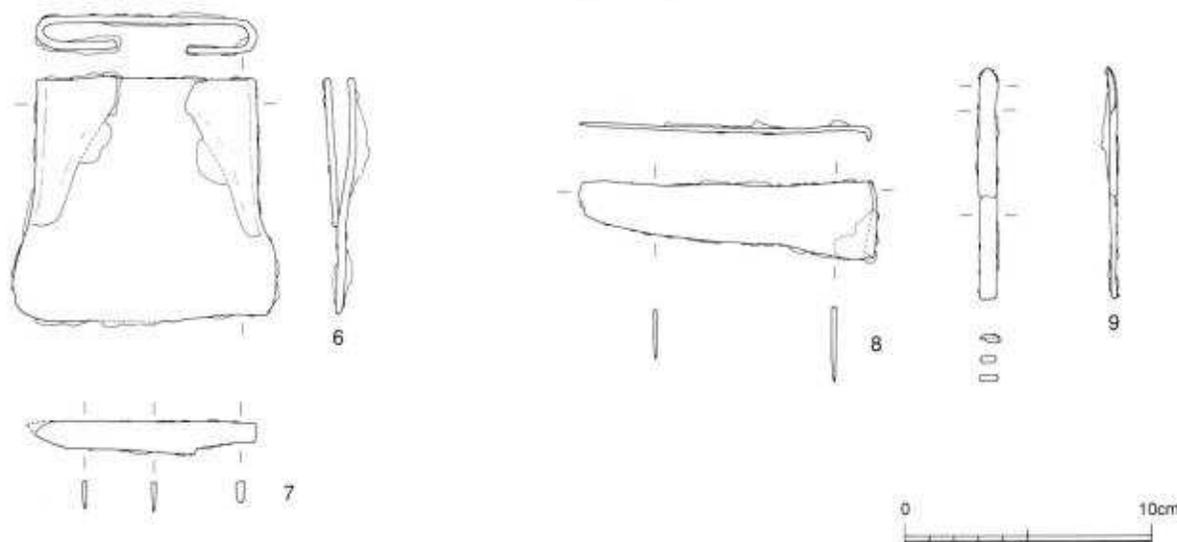
第127図 SX01 主体部平面・土層断面図 (S=1/40)



第128図 SX01周溝内出土土器 (S=1/3)

(第1主体)

(第2主体)



第129図 SX01主体部内出土土器 (S=1/3)

管玉 (5) 緑色凝灰岩製で淡く青みが弱い。穿孔は両側から、同様の深さで行われている。

b) SX01 主体部内出土鉄製品 (6~9)

6は、方形板刃先である。ほぼ完形であり、県内の出土例の中では最大のものである。刃幅に対して器高が長い特徴をもち、使用頻度が低かった可能性が想定できる。7は、刀子である。刃部先端を欠損するが、全体的に残りが良く、旧形状をほぼ残している。関は、刃側の片関で、ほぼ直角の角関である。形状、造りなどは弥生的で、古い要素を残している。なお、柄部は錆びぶくれのため、厚みが増していることを了承されたい。8は、直刃鎌である。先端に向かって、幅を減じ、背面はゆるやかな反りをもつ。刃部を下にしたとき、折り返しが左側に付き、着柄角度は、90度前後と思われる。金沢市畝田遺跡出土資料と類似する。9は、ヤリガンナである。刃部は、ほぼ柄部と同様の幅であり、棒状素材を鍛打することにより製作されている。

3. SX02 (第130図～第132図)

(1) 遺構 (第130図～第131図)

墳丘規模は、周溝内側の立ち上がりからの計測値で、長軸長9.4m×短軸長約8.2mを測り、やや台形を呈す。主軸はSX01同様、ほぼ北東―南西を向き、周溝は全周し、均質な幅でうねりの少ない下底面をもつ。周溝幅は、上端で0.95m～1.2m、下端で0.1～0.6mを測る。形状は、北東側(山側)が、断面三角形に近い形状をし、南西側(谷側)が、逆台形を呈す。よって、山側は下端0.1m、谷側は0.6mを測る。また、周溝の床面の高さは、山側は高く、谷側は低いといったように、高さに関係なく、視覚的に掘削されているものと思われる。堆積土層は、1層は旧表土、周溝堆積土は2～5層で、盛土として考えられるものは2層である。なお、周溝堆積土である、4、5層は盛土及び地山崩壊土と考えられる。6～10層は、SK01の堆積土である。前述したように、SX01同様、盛土及び封土は、かなり流出したものと考えられるので、主体部の深さは、削平された数値である。

確実に主体部として考えられるものは、1基のみで、SK01の6層は2層とほぼ同様であり、盛土との前後関係は不明瞭である。よって、墓壙かどうかの判断はつかなかった。規模は、長軸長1.8m×短軸長約1mである。

遺物出土状況

周溝内から壺形土器1点が出土している。壺(1)は床面近くから出土し、横倒し状態で出土しているが、口縁部分のみ分散する。また、墳丘上面北西隅で、礫集中がみられた。

a) 主体部

主軸は墳丘とはややずれ、若干北側に振れる。墳丘の中央に1基のみ作られている。墓壙規模は、主軸長4.5m×短軸長1.8m、段掘りで設けられた棺部は、長軸長3.9m×短軸長0.8mを測る。横断面は、皿状を呈し、床面は両端はやや上がるものの、基本的に平坦に作られている。床面から残存する高さは0.6mとSX01と比較すると残りは良い。堆積土層は、木棺痕跡が土に見られないため、あくまでも想定である。6層が底板及び人体を含む層と考えられ、おそらく5層が陥没した蓋板の形状を示すのではないか。7層は整地層、4は地山崩壊土、3層は掘り方埋土、1、2層は封土が埋没したものであろう。いずれにせよ、精美な形状をもつ割竹形木棺が、使用されたものと考えられる。

遺物出土状況

副葬品というものは、棺内から出土していない。みられたのは、1、2層より器台2点・礫1点、棺床から甕の口縁である。器台(3)は、墓壙1層内B-B'ライン付近から、脚部分を上に逆さ状態で出土している。器台(2)は、調査所見がないため不明瞭であるが、破片が1、2層にわたって分散していたものと思われる。どちらも前述したように、1、2層は封土と考えられるため、墳丘上に供献したものが、棺内に陥没したものと推定する。甕(4)は、月影期のものと考えられ、墓壙掘削時の混入の可能性が高い。

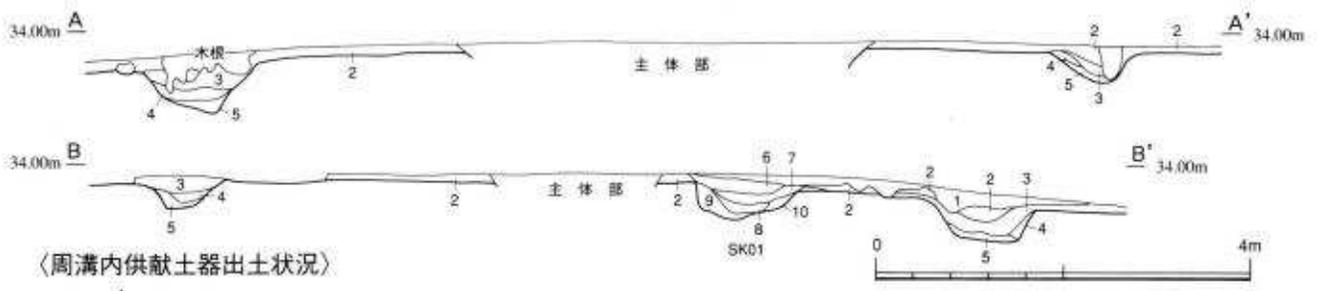
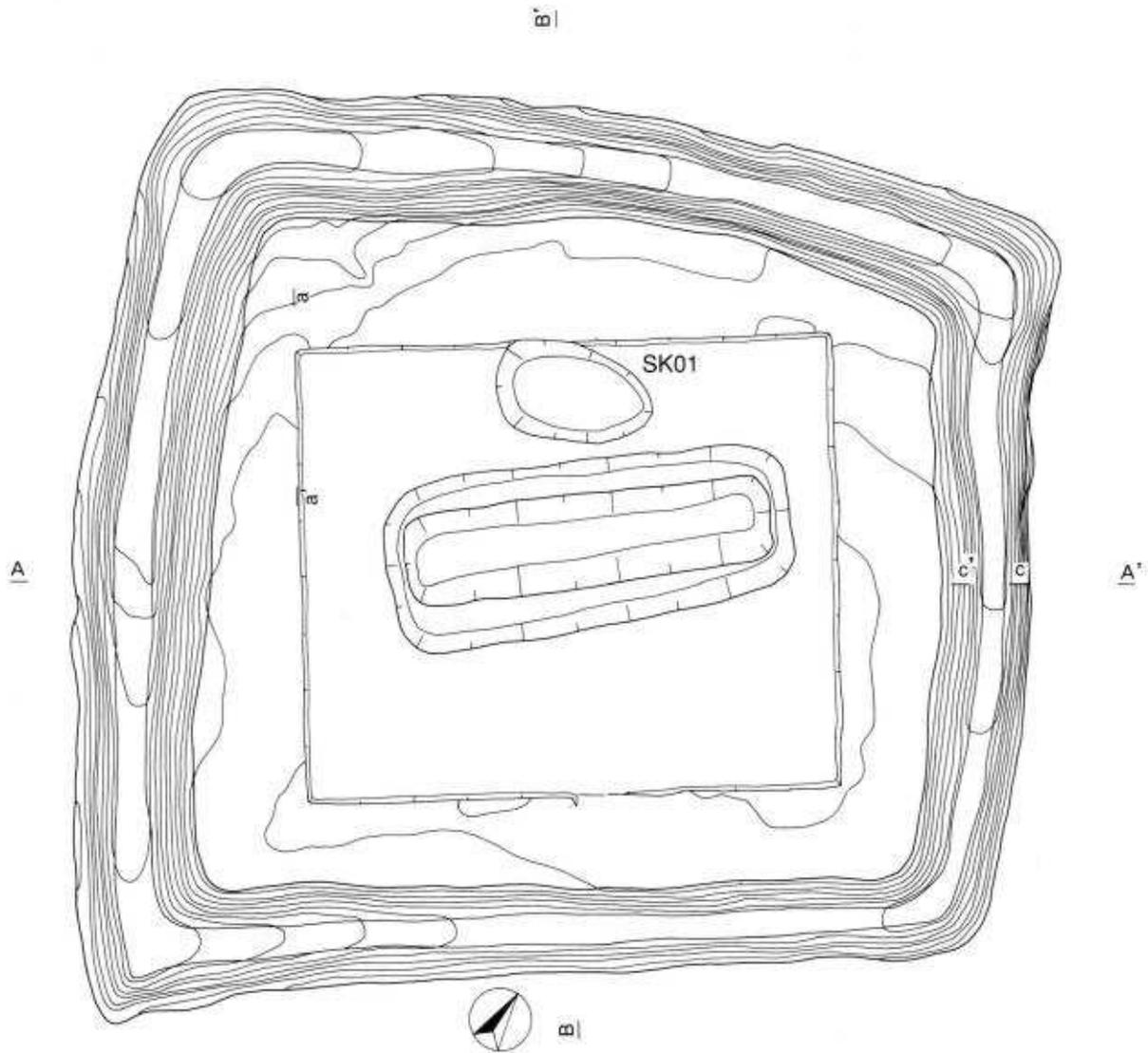
(2) 遺物

安、高橋両氏から土器に関しては、SX01同様、ご教授いただいております、時期的にも、漆町7～8群併行と伺っている。

壺形土器(1) 有段口縁をもつ広口壺である。底部は破碎を受けており、おそらく供献の際、人為的に底部を穿ったものと思われる。内外面摩滅が激しく、調整は不明瞭であるが、外面体部はハケ調整、内面体部上半には、連続した指押さえ痕がみられる。口縁部から頸部にかけては、内外面横方向のナデ調整である。

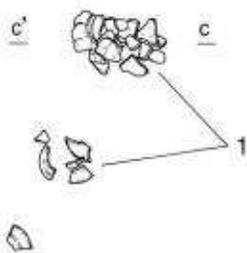
器台形土器(2・3) 2は、図面では脚裾部が欠損しているが、実際には復元不可能であった土器片は存在する。坏部は半分しか残存せず、脚部は全周する。坏部の調整は、磨耗が激しく不明瞭であるが、おそらくミガキ調整であろう。脚外面は、ミガキ調整が施されており、接合部から1.5cm程度の範囲には横方向、その下部は縦方向にみられる。脚内面には、明瞭な粘土接合痕が残る。なお、透孔は直径1.2cm程度の穴で、3方向に穿たれている。3は、坏部1/2、裾部が一部欠損するのみで、ほぼ全形が看取できる。2と比し、口径はやや大きく、浅めである。脚部分は同様な形状、調整を行っていると思われ、2ではみられなかった裾部外面は、横方向にミガキ調整が施されていることがわかる。また、脚内面の調整は、部分的に砂流の動きがみられるが、基本的には、横方向のナデ調整と考えられる。

甕形土器(4) 口縁部の一部がみられるのみである。内外面、磨耗が激しく調整は不明瞭である。



〈周溝内供献土器出土状況〉

33.200m c' c 33.200m

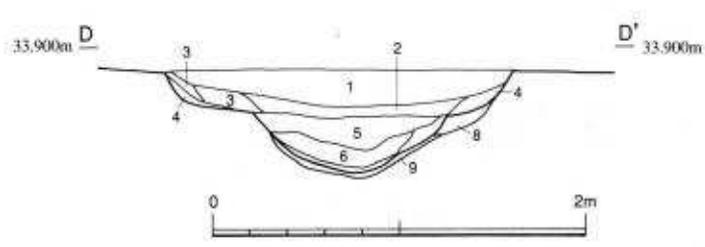
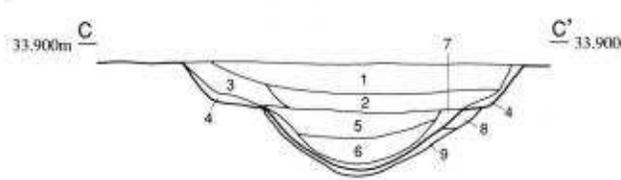
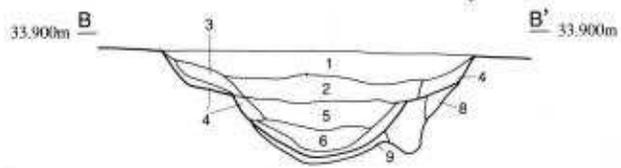
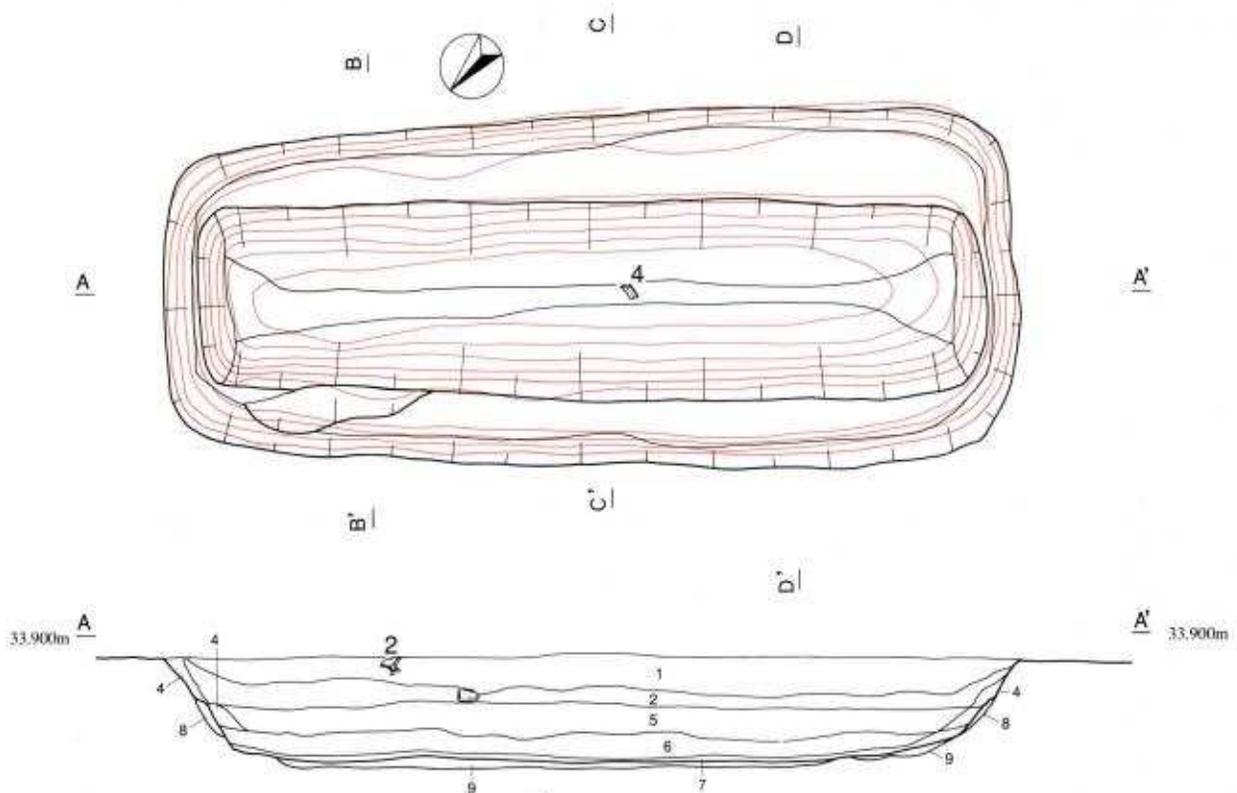


0 1m

- 1層：7.5YR5/3(にぶい褐色土) 軟質。
- 2層：5YR4/2~4/3(灰褐色~にぶい赤褐色土) 褐色土粒・ブロック少含有。軟質。
- 3層：7.5YR5/4~5/6(にぶい明褐色土) しまり良い。
- 4層：5YR5/4~5/6(にぶい明褐色土) 3層に比し、やや赤味をもつ。
- 5層：7.5YR6/4~5/4(にぶい橙(褐)色土) 橙~浅黄橙色土粒・ブロック主体。

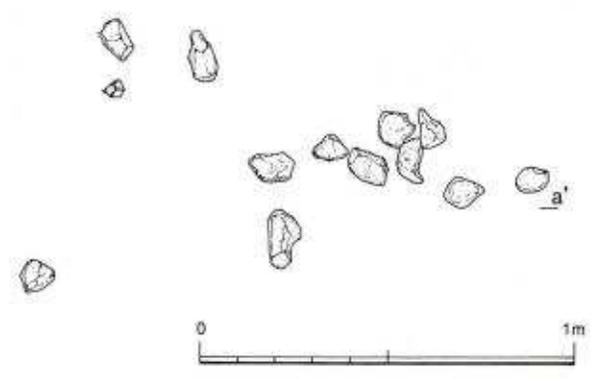
- 土坑 (SK01)
- 6層：2層と同一。
- 7層：5YR4/2~5/2(灰褐色土) 軟質。
- 8層：5YR4/1~4/2(褐灰~灰褐色土) 軟質。
- 9層：5YR4/3(にぶい赤褐色土) 軟質。
- 10層：5YR5/6(にぶい赤褐色土) しまり良い。

第130図 SX02平面・土層断面図 (S=1/80), 周溝内遺物出土状況 (S=1/20)

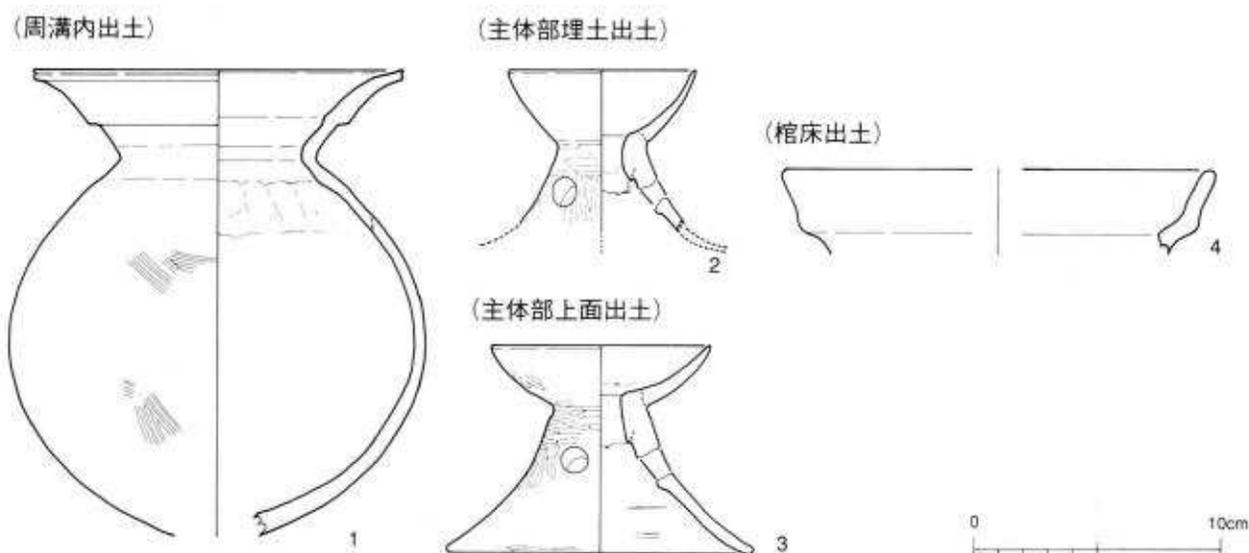


- 1層：7.5YR4/6(褐色土) 橙色土粒少含有。
- 2層：7.5YR4/3(褐色土) 1層に比し、やや暗め。橙色土ブロック多含有。
- 3層：7.5YR5/4~4/6(にぶい)褐色土) しまり良い。
- 4層：7.5YR5/6(明褐色土) 地山壁前壤土、堅緻。
- 5層：7.5YR4/4(褐色土) 3層に比し、やや暗め。軟質。
- 6層：7.5YR4/3~4/2(褐色土) 2層に比し、ブロック少含有。軟質。
- 7層：10YR5/4~5/6(にぶい)黄褐色土) 明黄褐色土~黄褐色土粒・ブロック主体。
- 8層：7.5YR4/4(褐色土) 堅緻。
- 9層：10YR5/4~5/6(にぶい)黄褐色土) 7層に比し、堅緻。

〈墳丘上礫出土状況〉



第131図 SX02主体部平面・土層断面図 (S=1/40)、墳丘上礫出土状況 (S=1/20)



第132図 SX02 出土土器 (S=1/3)

第3項 土坑

1. SK01 (第133図～第134図)

(1) 遺構 (第133図)

遺跡の西南端、SX02の西南に位置し、谷部にかかりはじめている所でもある。規模は、長軸長約2m×短軸長約0.7mで不定形な溝状の形状をなす。主軸は、方墳同様の主軸をもつ。樫田氏は、方形周溝墓の溝の可能性も考慮し、周囲の精査を丹念におこなっているが、この遺構しかみつかっていない。溝状の土坑は、長軸側の床面は、南側の谷部にいくに従い、緩傾斜を呈する。土坑の残存する深さは、均一して10cm程度であるが、遺物の出土状況を考慮すると、南西隅は、最低でも30cm程度はあったものと思われる。堆積土層は、単純で1、2層で形成されており、軟質である。土器は、SX01、02に類似した時期と考えられ、方墳に何等かの関係をもつ可能性が高い。

遺物出土状況

遺物は、壺の体部、高坏、器台が1点ずつ出土している。遺物はすべて、床面から浮いており、1層に含有するものと思われる。壺の体部(1)は、南西端から出土しており、底部を下にして出土している。おそらく、谷部にはいる部分であるため、完存した壺の口縁は流出したと思われる。土坑の中央でみられるのが、器台(3)であり、坏部を逆さにして出土している。高坏(2)は北東側で、脚をしたにした状態で、坏部の一部が移動しているもののほぼ原型の状態出土している。

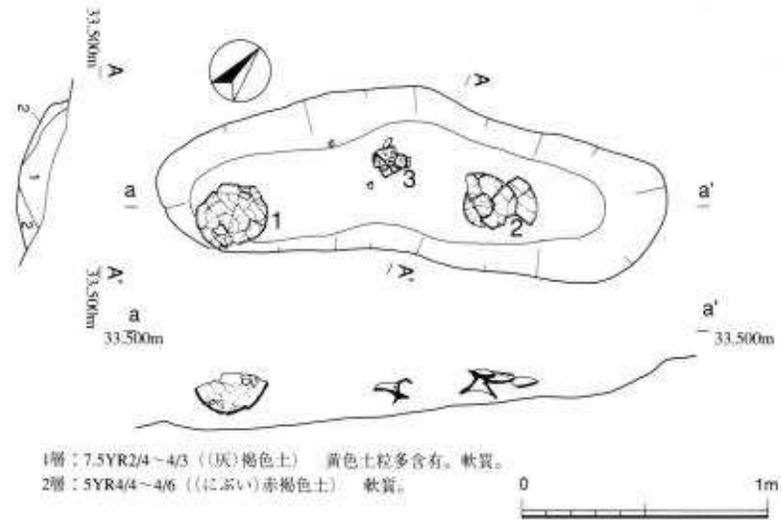
(2) 遺物 (第134図)

壺形土器(1) 底部と頸部上が欠損する。おそらく、有段口縁をもつ壺であろう。出土状況から、底部を下にして出土しているため、底部は人為的破損の可能性が高い。体部外面は荒いハケ調整で、体部最大径は横方向に施されている。内面は、体部下半外面に比し細かいハケ調整が施されている。体部上半には3cm間隔で粘土接合痕がみられる。

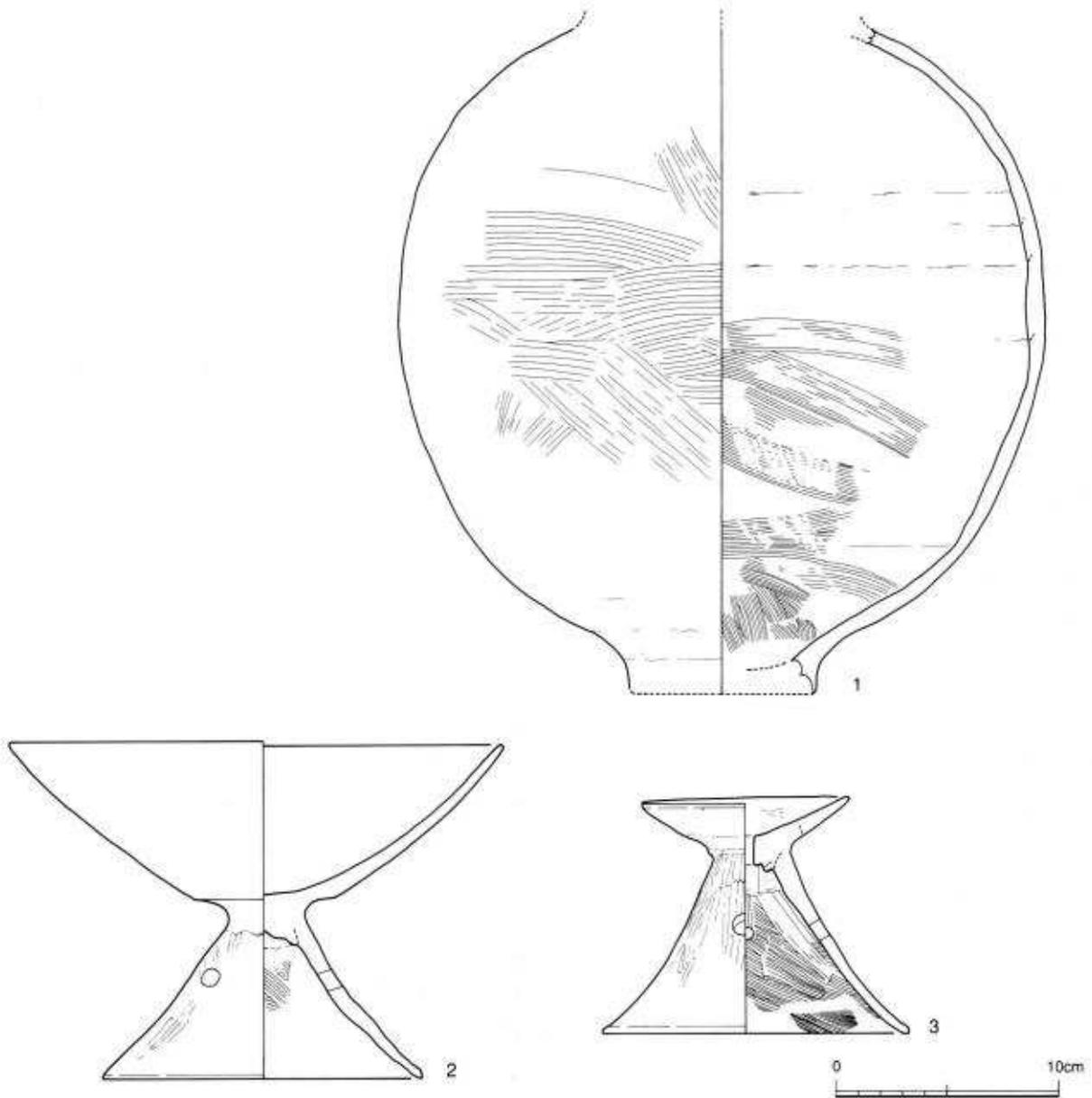
高坏形土器(2) 東海系高坏である。坏部は内外面磨耗が激しく、調整不明である。坏部は、外面縦方向のミガキ調整で、内面はハケ調整である。坏部との接合は充填法で、脚内面には、粘土接合痕がみられる。透孔は、直径0.9cmで、3方向に穿たれている。なお、外面には赤彩が施されている。

器台形土器(3) 比較的残りが良い。坏部は浅く、皿状である。脚から坏部には内傾接合で作られており、粘土接合痕がみられる。坏部内外面は横方向にミガキ調整が施されている。脚外面は縦方向にミガキ調整、内面は接合痕直下は横方向に、その下からは上方向にケズリ調整が施され、その後、斜め方向にハケ調整が施されて

いる。器台の筒径及び透孔は同一径で0.8 cmを測る。また透孔は4方向に穿たれている。



第133図 SK01平面・土層断面図・遺物出土状況 (S=1/30)



第134図 SK01 出土土器 (S=1/3)

第4節 包含層等出土遺物と土器観察表

本節では、第1節～第3節の中で、触れることのできなかつた、遺構及び包含層出土遺物に関して、補足的に説明を行うこと及び本節における記載遺物の観察表を、載せるものである。

第1項 包含層等出土遺物

1. A遺跡の遺構と遺物（第135図～第137図）

埋谷及び包含層遺物を器種ごとに説明を行う。詳細な出土地点は、観察表を参照されたい。

埋谷は、旧表土に覆われており、その面には時期不詳の波板状遺構が複数作られていた。当初、ドットでの取り上げを行ったが、あまりの土器の量に断念し、層毎の取り上げを行っている。G遺跡（湧水地）との通路的役割もあり、基本的には繋がるものであるためか、同時期の土器が出土している。なお、掲載土器はすべての個体ではなく、抽出していることを了承されたい。

壺形土器（1～17） 1～3、7は擬凹線を施す有段口縁をもつ短頸直口壺である。1は、拡張はあまく口縁は直立する。口縁外面には、2条の擬凹線が施される。2、3は、同様な口径をもち、3の方が、頸部は短い。口縁外面には、明瞭な凹凸のある擬凹線が施されており、口縁内面は横方向のナデ調整である。2の頸部外面には、ヘラ状工具による、3本線がみられる。7は内外面磨耗が激しく調整不明瞭である。口縁外面は浅い凹凸の擬凹線がみられる。頸部内外面及び口縁内面はナデ調整が施され、残存する体部上半には横方向のケズリ調整がみられる。4～6、8～12、17は無文の有段口縁をもつ壺である。4は口縁外面横方向のナデ調整により、数条の稜がみられる。頸部外面はハケ調整の後、横方向にナデ調整が施される。5は、口縁内外面横方向のナデ調整が施され、内外面に稜がみられる。6は、全形のわかる資料である。ただし、底部は接合できなかつたため、図上復元している。口縁内外面は横方向にナデ調整を行い、外面は中央に稜が残る。体部外面は縦方向のハケ調整、内面は時計回り横方向のケズリ調整である。外面体部上半から頸部にかけては、横方向のナデ調整が施されている。8は、他のものに比し、口縁下端部が外に突出する。体部ハケ調整の後、上部は横方向にナデ消されている。口縁内外面は横方向にナデられている。外面摩滅して調整不明である。内面口縁から頸部にかけては横方向で、体部にかかる部分より横方向のケズリ調整がみられる。11は有段部分があまく頸部は屈曲するのみである。外面はかろうじて縦方向のハケ調整、内面は頸部より少し間隔をあけた所から、横方向のケズリ調整が施されている。11は、破片であり口径は復元にしかすぎない。外面は摩滅して調整不明で、内面は横方向のナデ調整である。なお、外面には、径1.2cm程度の扁平な浮文が付く。12は想定する頸部はやや長めになる。頸部外面にかろうじて縦方向のハケ調整が看取できる。13は大型壺の頸部である。外面には、断面逆台形の形状で、面に板状工具による刻みが施された突帯が、全周するものと思われる。17は、法量は違うものの形状は、10に類似する。14～16は、直口短頸壺である。14、16は口縁外面にやや面をもち、擬凹線が施されている。14の外面は、体部板状工具で縦方向にナデられた後、頸部は縦方向にミガキ調整が施されている。15、16は外面縦方向のハケ調整が施され、15は頸部屈曲部まで、16は頸部上方のみ、横方向にナデ調整が施されている。

甕形土器（18～25） 18～23は擬凹線を施す有段口縁をもつ甕である。18、21の口縁は直立し、それ以外は外反ぎみで、屈曲をもつ。その中でも19は下に突出する。口縁外面に施される擬凹線は、18は乱れた線であり、残りは直線的に描かれている。また、21は体部上半に連続した刻みをもち、痕跡から二枚貝の可能性が考えられる。おそらく、口縁外面も同一幅をもつため、同一工具で施された可能性が高い。24は、有段する口縁はやや内傾気味で端部丸い。外面には波状文が施されている。25は有段無文の口縁をもつ甕である。口縁下頸部は突出し、内外面横方向にナデられている。

器台形土器（26） 有段部を坏部にもち、外面に面をもつ。内外面、磨耗して調整不明である。

高坏形土器（27～34・37～42） 27～29は有段をもつ高坏坏部である。27は有段下にふくらみをもち、鉢状を呈す。外面赤彩が施されている。30～34、37～41は中空で、棒状から開くもの（30、40、41）、緩やかに外反するもの（31、34、37～39）、有段化するもの（32、33）がみられる。柱実のもの（42）がみられる。調整不明なものもみられるが、基本的に外面脚柱部は縦方向に、裾部は横方向にミガキ調整が施されている。また、脚

内面を中空にする際、棒状工具で圧して整形しているものも(30、39)中にはみられる。

小型土器(35~36・43~49) 35は有段口縁をもつ鉢である。外面体部縦方向のハケ調整の後、横方向にミガキ調整が施されている。口縁内外面も横方向である。36は蓋穴結束用付鉢である。口縁、底部は欠損する。ただし、口縁部はさほど伸びないものと思われる。対でみられ、穴径は約0.9cmである。押水町冬野遺跡出土のものに類似するものと思われる。44~49は精製品ではなく、かなりゆがみが激しい土器である。44~47は類似した形態のもので、口径が体部最大径より窄まるという点では壺になるのであろう。49は、一つだけ特殊な器形で、口径が狭く器壁が厚い。

台付・底片(50~66) 50は上に甕もしくは壺が付くものと思われる。51は内面及び外面ミガキ調整が施されており、台付鉢であると思われる。52~54は、広口球胴壺の底片の可能性が高い。55~66は壺もしくは甕の底片と考えられる。58、59、61、62は底面に焼成後の穿孔がみられる。

その他(67~69) 67は断面丸く、大型の土器に付く把手と思われる。甕形土器の把手と類似する。68は指を横方向に摘める様につくられた把手と思われる。69は蓋形土器である。

石製品(70~72) 70は、砥石である。下縁部は破損しており、上下縁部以外砥面がみられる。側面は角柱状に成形した際の剥離面や、切断の際の筋切痕が残存する。また砥面には、鉄によるものと思われる筋状の痕跡がみられる。71は、小松市八日市地方遺跡の凹石と報告するものと同様である。碟面中央表裏の対応する位置に凹みがみられる。凹み範囲は直径3cm程度であり、中央部に摩滅部分が円形に看取される。72は、先端を三角錐状に調整されており、先端に剥離がみられる。錐とも考えられるが、確定はできない。なお、全体的に被熱を受けている。

鉄製品(73) 73は、不明棒状鉄製品である。下端を欠損し、下部は表面が剥離している。下端は現状で尖って見えるが、旧形状を残しているかは不明瞭である。断面の形状は円形である。

2. C遺跡の遺構と遺物(第138図)

すべて、遺構検出の際に、管玉以外はドットで取り上げられた遺物である。なお、管玉に関しては、表採資料である。なお、管玉及び石製品は、時期不詳であることを了承されたい。

壺形土器(74・75) 短頸直口壺である。外面縦方向にナデた後、口縁部は横方向にナデられている。内面はやや外傾する箇所から横方向にケズリ調整が施されている。75は、無頸壺であろうか。内面横方向にミガキ調整が施されている。

甕形土器(76~79) 無文の有段口縁をもつ甕(76、77)と明瞭な凹凸がみられる、擬凹線を施す有段口縁をもつ甕(78、79)がみられる。

底片・脚(80~94) 80は、底面が広く球胴壺の底部と思われる。81~84は壺もしくは甕の底部である。85~87、89~93は高坏の脚であり、緩く外反するものが多くみられる。94は、器台脚の有段部と考えられる。外面ミガキ調整を施した後、擬凹線が施されている。内面は横方向のナデ調整である。

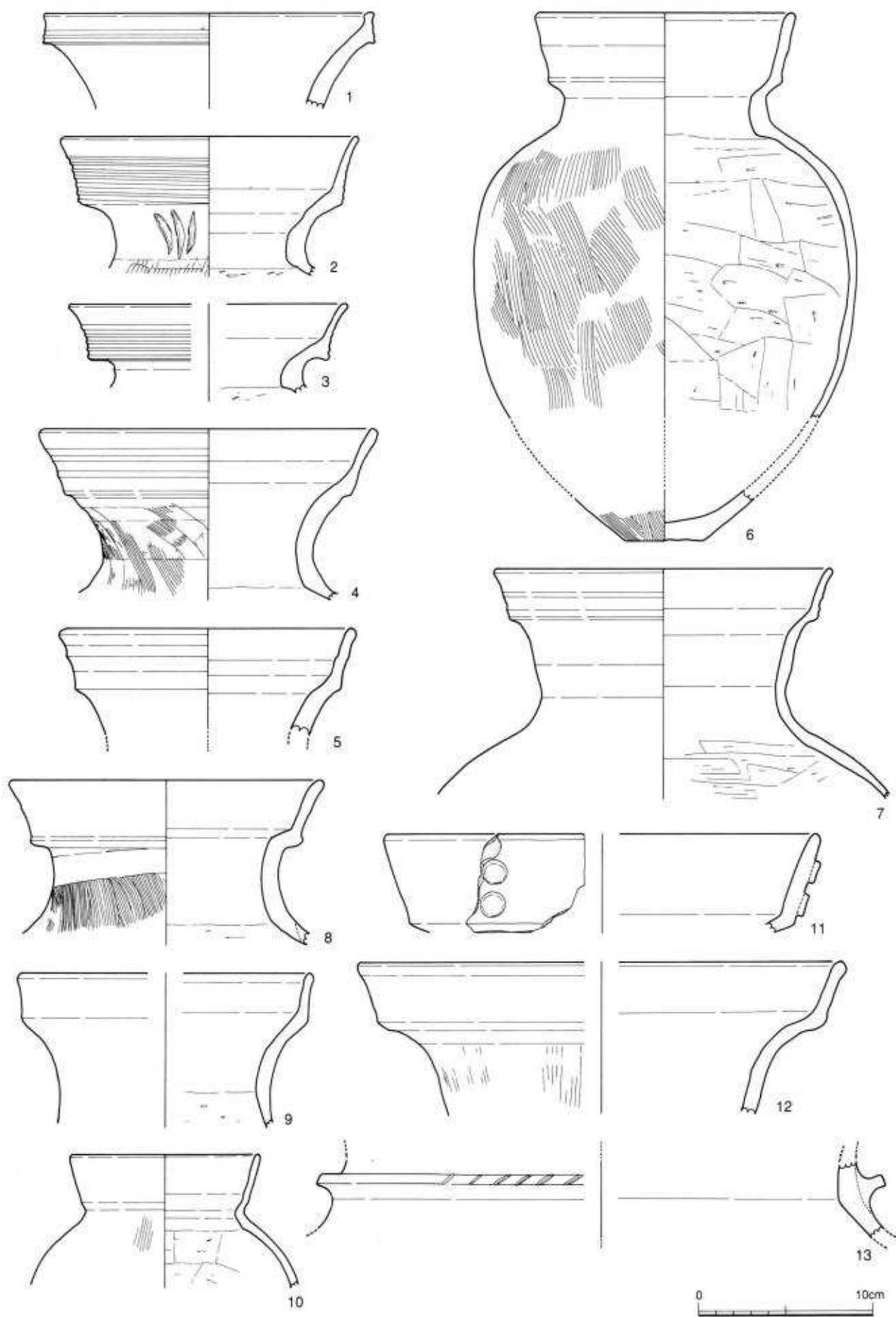
石製品(95~97) 95は、側面及び中央部を加工し、環状を呈したものと考えられ、半分しか残存しない。また掲載していない裏面には、中央部には部分的に摩滅している箇所、及び平坦面に磨面がみられる。96は砥石であり、上下縁部以外砥面として利用されているが、すべて面的に使用されておらず、加工の際の剥離面が残存する。

管玉(97) 緑色凝灰岩製で、淡く青みが弱い。

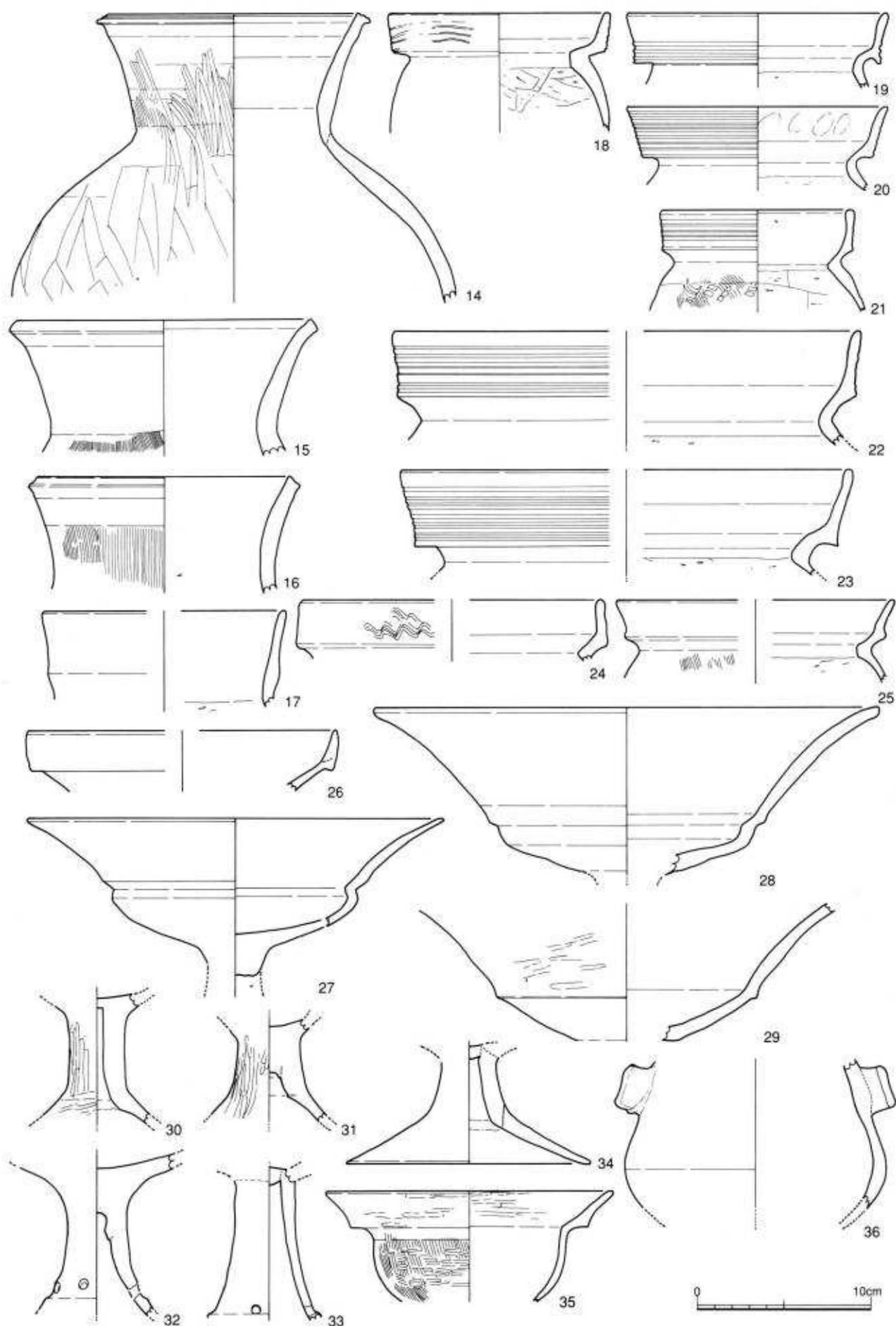
3. D遺跡の遺構と遺物(第139図)

C遺跡と同様、すべて遺構検出の際に、ドットで取り上げられた遺物である。なお、98は、SX02周溝上面から出土。100は遺構全体図SX01東側、L字状の遺構がみられる上面から出土している。よって、98に関しては、SX02の供献土器である可能性が高く、100がみられたL字状の落ちこみ付近には、方墳と同時期のなんらかの遺構があった可能性が高い。

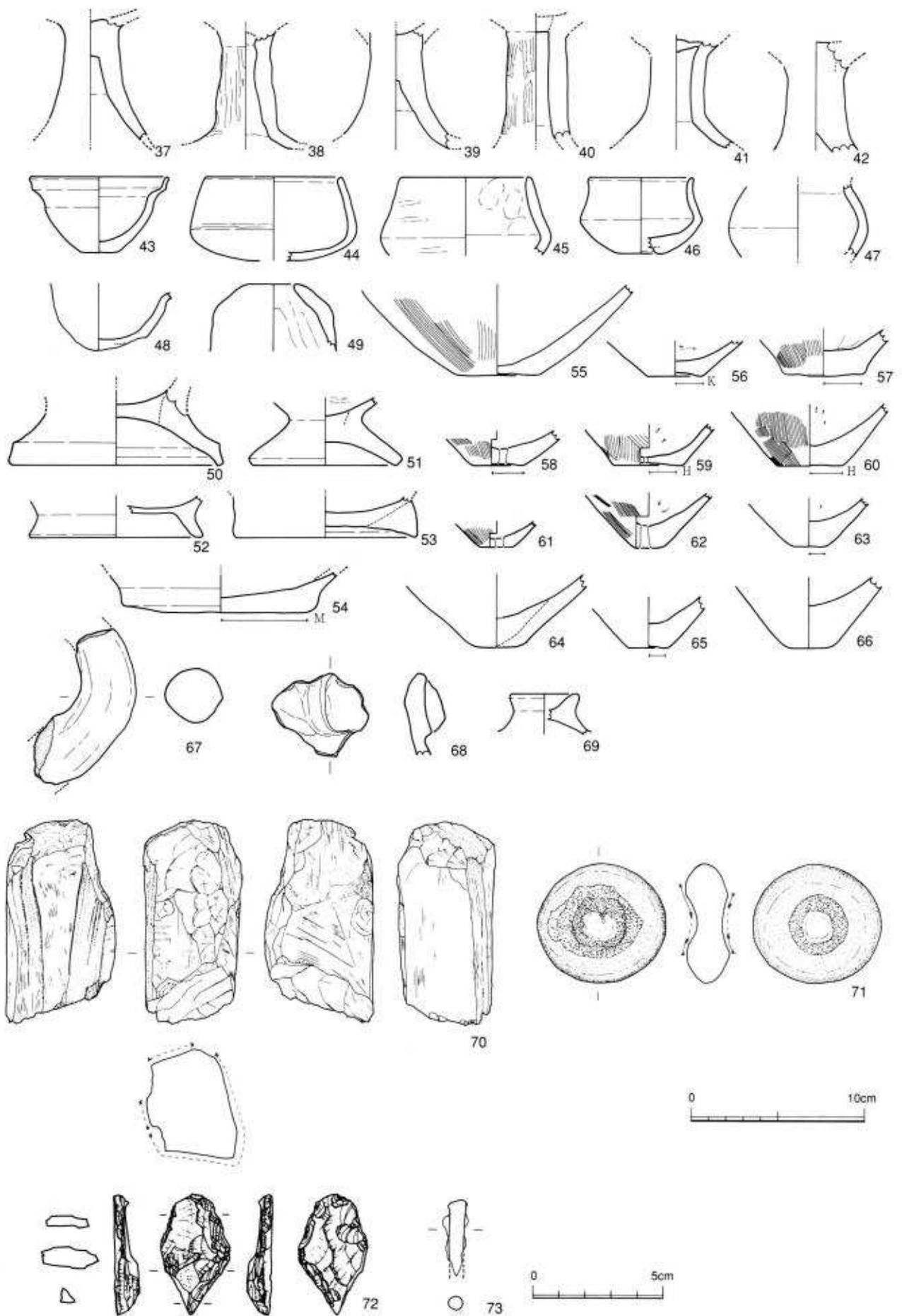
壺形土器(98・99) 体部は球胴の形状で、丸底を呈す。口縁は欠損するが、おそらく直口する口縁が付くものと考えられる。体部外面の調整は横方向のミガキ調整で、内面はおそらくナデ調整であろう。頸部と、下



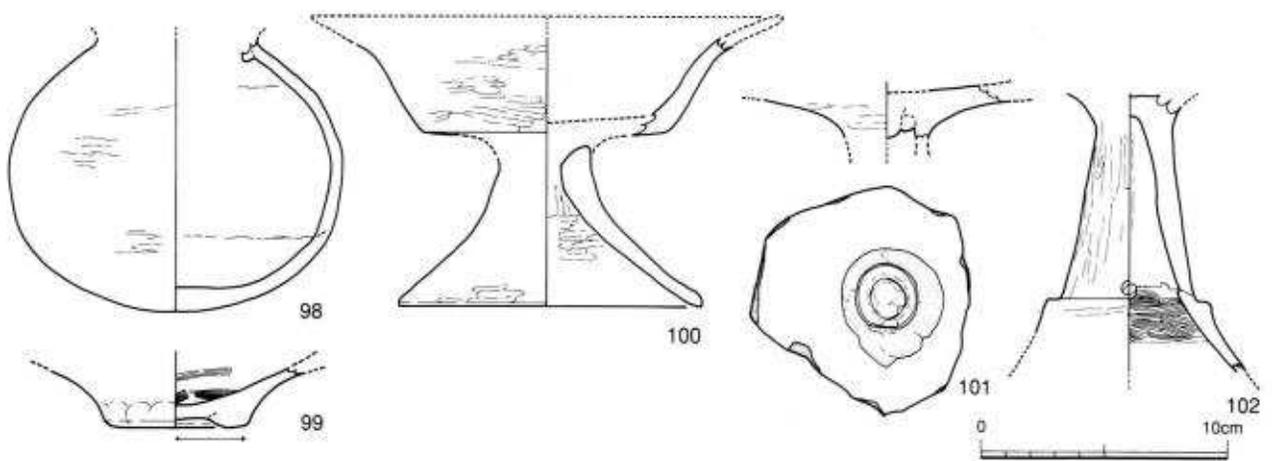
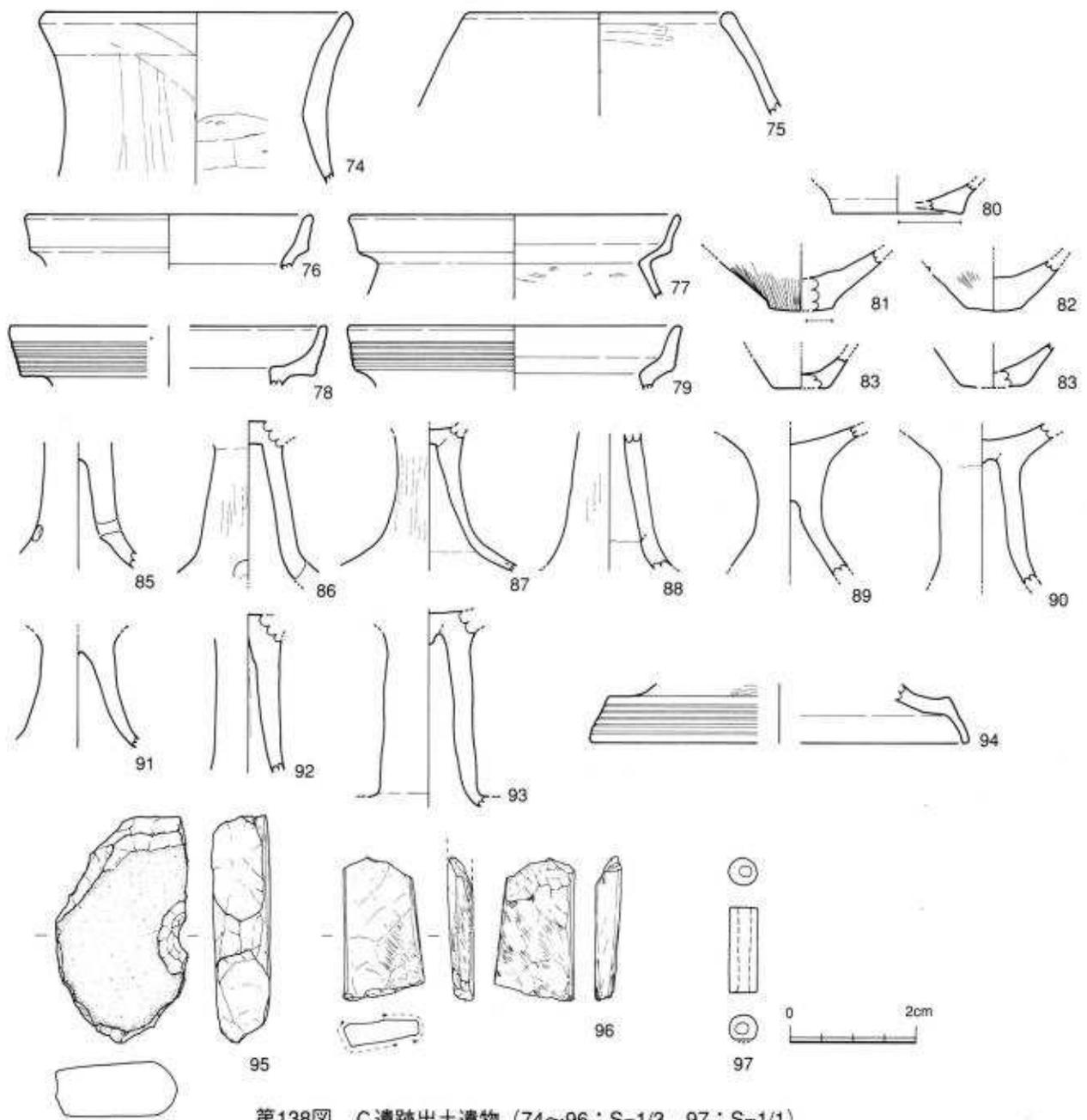
第135図 A遺跡出土遺物1 (S=1/3)



第136図 A遺跡出土遺物2 (S=1/3)



第137圖 A遺跡出土遺物3 (37~71 : S=1/3, 72・73 : S=1/2)



半部に粘土接合痕がみられる。時期は、漆町7~8群併行と思われる。99は球胴壺の底部である。外面底面との接合部には、軽い指押さえ痕がみられ、内面は横方向のハケ調整である。なお、底面は低い上げ底を呈す。

高坏形土器 (100~102) 100は口縁が欠損し、坏部と脚は接合復元できなかったため、図上復元している。坏部は、ほぼ水平な坏底部をもち、口縁はおそらく欠損する箇所から外反するものと思われる。坏部外面は横方向のミガキ調整で、内面もおそらくミガキ調整であろう。脚外面も同様に横方向のミガキ調整であり、内面は、上部横方向のケズリ調整の後、裾部まで、横方向のミガキ調整が施される。なお、外面及び坏部内面には赤彩が施されている。時期は漆町7~8群併行と思われる。101は、高坏坏部と脚との接合部である。外面は横方向のミガキ調整、赤彩が施されている。坏との接合は図のように、円形状の粘土を充填した後、脚内面に、粘土紐を巻くことにより補強を行っている。なお、粘土紐の部分には、棒状圧痕はみられなかった。102は高坏の有段脚である。外面脚柱部は縦方向に施され、段から裾部にかけては、横方向にミガキ調整が施されている。内面には、有段部分に粘土接合痕がみられ、そこからハケ調整が施されており、その後、裾部は横方向にナデ調整が施されている。なお、坏部とは接合法で、透孔は4方向に穿たれている。101、102の時期は、SI02同様の時期であると考えられる。

4. G遺跡の遺構と遺物 (第140図~第141図)

遺構図が紛失してしまい、事実報告は控えた。しかし、樫田氏の調査日誌をもとに遺構の概要を記し、出土遺物の説明を行う。G遺跡では、弥生時代後期の遺構として、第II章で前述したように、湧水溝と土坑2基、テラス面が確認されている。

湧水溝は、A遺跡から、B遺跡の方向に検出している。7層に分層でき、時間幅は、3、7層：弥生、2層が古代併行である。古代の層の下底面には礫層がみられ、弥生時代とは別の面に下底があったことが看取できる。また、溝の最下底には、礫層がみられ、V字の溝状を呈するのは、弥生時代比定の層以降であり、弥生時代以前の状況は幅広で床面に礫が広がったものと思われる。

大型土坑及びテラス面は、湧水溝の右岸で検出された。大型土坑は、湧水溝に隣接した形でみられ、土坑下方(湧水溝側)には、土器が集中する2つピット上の落ち込みがみられ、その中から、良好な残りの壺(108)と甕(105・106)がみられた。

なお、1、2号土坑以外の土器の詳細な出土位置に関しては、観察表を参照されたい。

a) SK01 (103~110)

壺形土器 (103・104・108) 103、104は直口短頸壺である。103は口縁部にやや凹みがみられる。外面は、凹む箇所は横方向、その下頸部は縦方向のハケ調整がみられる。108は、体部半分、底部と頸部から上が欠損する。外面下から上へ順にハケ調整が施され、内面はあたりの弱い横方向のケズリ調整が施されている。

甕形土器 (105~107・109) 105、106は擬凹線を施す有段口縁をもつ甕である。実際には、穴の中には、体部破片もみられたわけだが、軟質で復元不可能であり、底部はみられなかった。また、体部破片は、1個体のものであり、106が体部までであったものと考えられる。105の口縁外面は、棒状工具を結束したものであろうか。凹面は丸い。内面には、中間に稜をもち、上方に連続した指頭圧痕がみられる。106は、105の擬凹線とは様相を異にし、凹凸面は同じ幅で、屈曲の明瞭な擬凹線が施されている。口縁内面は、105同様、指頭圧痕がみられるが、間隔が広く施されている。107、109は無文有段口縁をもつ甕である。109は口縁下頸部の屈曲はあまく緩やかに立ち上がる。両者とも、外面体部は斜め方向のハケ調整、内面は横方向のケズリ調整、口縁から頸部にかけては、内外面横方向のナデ調整が施されている。

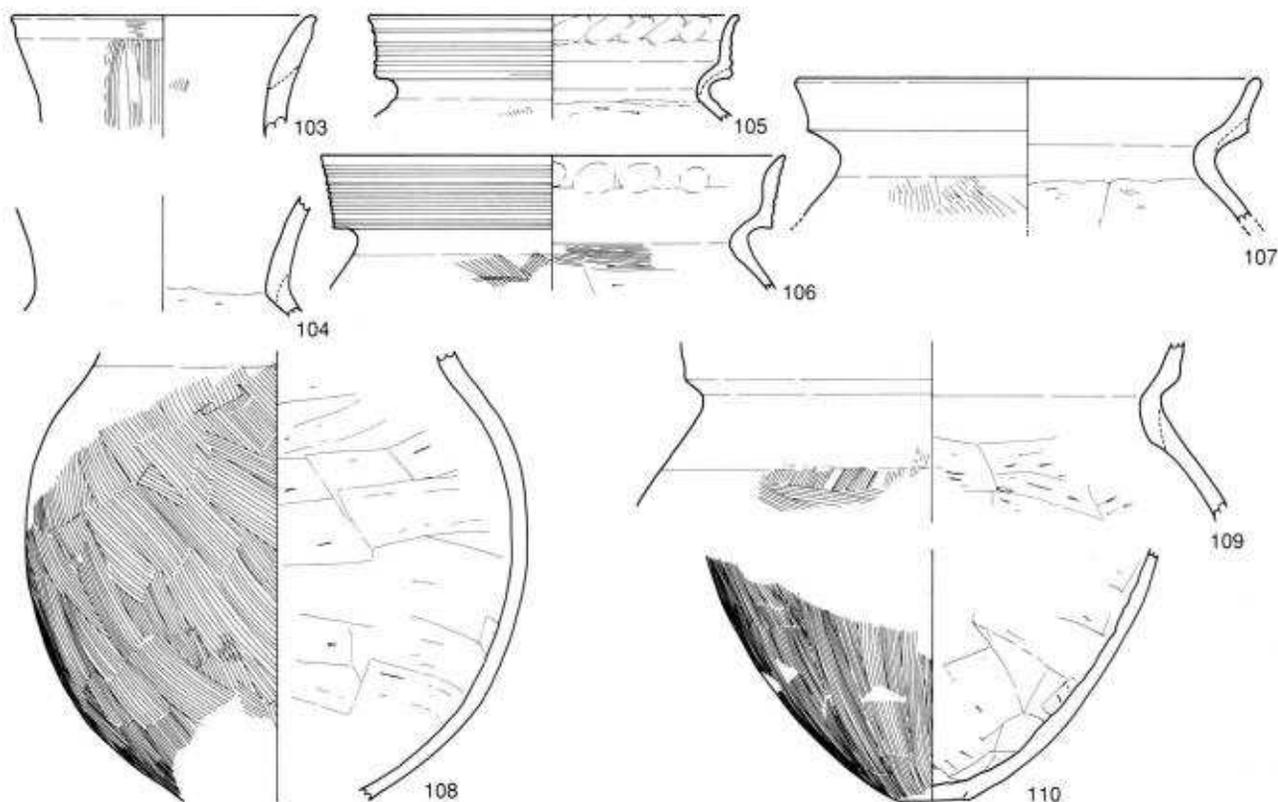
底片 (110) 内外面に煤の付着との使用痕はみられない。甕形土器の底部と思われ、109と同一個体の可能性も考えられる。外面縦方向のハケ調整、内面横方向のケズリ調整がみられる。底面の器壁は薄い。

b) SK02 (111~117)

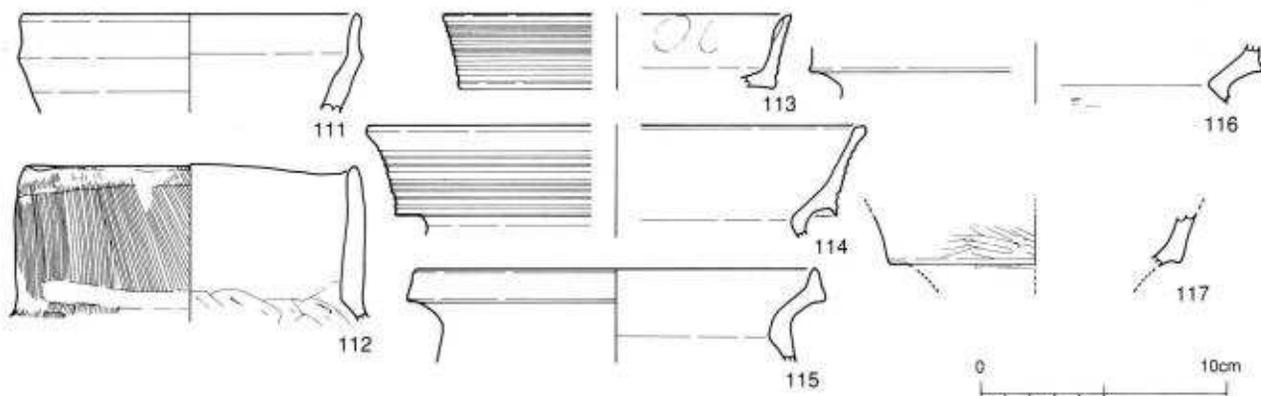
完形に近いものはなく、細片ばかりである。すべて反転復元で図化を行っている。

壺形土器 (111・112) 111は有段口縁をもつ壺である。立ち上がりの屈曲はあまい。磨耗が激しく、内外面調整は不明である。112は、直口短頸壺である。体部は欠損し、頸部から上のみが残存する。ゆがみの激し

〈SK01〉



〈SK02〉



第140図 G遺跡出土遺物1 (S=1/3)

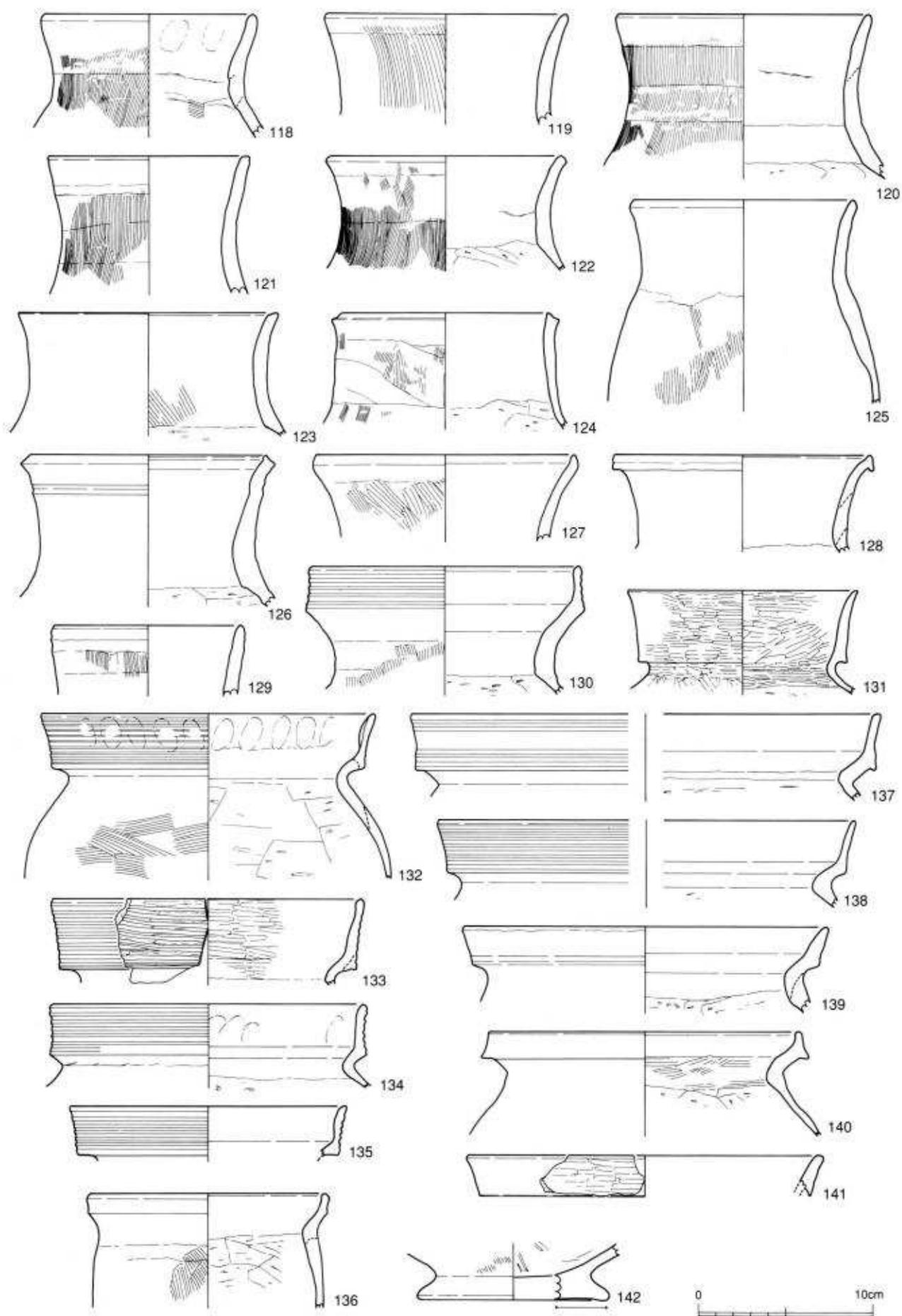
い土器である。外面は縦方向にハケ調整が施され、1条頭部に横方向の指ナデがみられる。内面は、横方向のナデ調整で、外に張り出し、体部に入る箇所からは、斜め方向のケズリ調整がみられる。

甕形土器 (113~116) 113、114は擬凹線を施す有段口縁をもつ甕である。口縁外面の擬凹線は、113は凹凸が緩く、114は凹凸が明瞭にみられる。両者とも外反して立ち上がり、113は端部やや先細りであり、口縁内面に明瞭な指頭圧痕がみられる。115、116は有段無文の口縁をもつ甕である。115は、口縁立ち上がりはあまく、どちらかという断面三角形状である。116は口縁が欠損し、どれほど拡張するかは不明瞭である。

器台形土器 (117) 有段部分しか残存せず、天地に苦慮したが、おそらく内外面とも横方向のミガキ調整が施されていると思われ坏部片とした。

c) その他の出土遺物 (118~142)

壺形土器 (118~131) 118~130までは、短頸壺であり、口縁が直口するもの (118~123、125)、口縁が外反するもの (128)、有段化した口縁外面に擬凹線を施すもの (130)、口縁端部つまみ上がるもの (124、126、127) とおおまかに区分できる。口縁が直口するものは、やや外反角度、器壁が違うものの、外面縦方向のハケ



第141図 G遺跡出土遺物 2 (S=1/3)

調整、内面頸部から上は横方向のナデ調整、張り出す体部からはケズリ調整と、ほぼ同様な調整が施されている。126は、頸部上半に一条の沈線がみられ、つまみ上げられた口縁端部は、内面に突出をもつ。また、124は実際には押し撫でることにより、内面側に先端尖っている。131は無文の有段口縁をもつ壺であり、口縁部の有段は明瞭な屈曲をもつ。口縁から頸部にかけては、内外面横方向の丁寧なミガキ調整が施されている。

甕形土器 (132~140) 擬凹線を施す有段口縁をもつもの (132~135、137、138)、無文の有段口縁をもつもの (136、139、140) に分けられる。擬凹線が施されるものの中には、明瞭な凹凸をもつ二枚貝調整の可能性が考えられるもの (133~135)、板状工具の可能性が高いもの (132)、磨耗して凹凸が浅く不明瞭なもの (137、138) がみられる。132は、口縁内外面に指頭圧痕がみられ、これは両側とも凹みをもつため、おそらく両端からつまむことによりつけられたものと思われる。133は擬凹線の施文後、口縁内外面に、横方向のミガキ調整が施されている。煤の付着もなく精製品である。同じように無文の有段口縁をもつものにも、バラエティがみられる。136は口縁端部があまり立ち上がらず、頸部から体部にかけてはさほどの張り出しはみられない。調整は、体部外面縦方向のハケ調整、内面横方向のケズリ調整で、口縁から頸部近くまで横方向にナデられている。

器台形土器 (141) 外面横方向に丁寧なミガキ調整が施されている。おそらく器台の坏部有段部と思われ、粘土剥離面から口縁部分が残存するものと思われる。

台付 (15) 大型の部類と思われる。おそらく上には壺がくるものと思われる。外面ハケ調整、内面にはケズリ調整がみられる。また、底面にはハケ調整がみられる。

第2項 観察表

- 1.本章で掲載した全て遺物に対し、掲載順にまとめた観察表である。
- 2.番号は掲載番号を示している。
- 3.器種は大別にて表記している。
- 4.色調は、煤付着及び黒斑部分をはずし、均一した箇所を観察している。なお、内外面の差が激しいものに関しては、両面掲載している。
- 5.胎土は、含有物を細別認識はできなかつたため、大半を占める主体的なものを在地とし、黒色角柱体（角閃石か輝石）、石英が多く含有するものに関してのみ記載した。なお、在地?と掲載しているものは、丘陵部上の胎土とは質が異なるが、低地（梯川下流域）で見られるものと類似するものを示している。
- 6.焼成は、良好もしくはやや不良で大別した。
- 7.計測値は、径・高・長・厚・幅すべてcmを単位とし、重量はgを単位とする。
また（ ）は残存値を示し、[]は復元値を示す。

A 遺跡 SI01 出土遺物

土 器															
番号	遺構名	取り上げ番号	器 種	色 調	胎 土	焼 成	口 径	最大径	底 径	器 高	器 厚	脚 柱 径	脚 径	接合の種類	備 考
1	A 床面	床 g2	瓶形土器	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	12.6				146.3				
2	A 床面	床 g1 + 2	罐	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	[31.2]			[28.0]	[35.0]				
3	A 床面	床 j, 床 f	罐	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	16.3			[16.0]	[19.05]				
4	A 床面	床 d	罐	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	18.4	21.6	2.6	16.1	27.9	0.6			
5	A 床面	床 e	罐	不明	不明	不明	[17.6]	[20.8]	[3.5]	[15.4]	29.4				
6	A 床面	床 i2	壺	10YR8/3 浅黄褐色	粗密	良好			4.6~5.1		[3.6]	1.3			
7	A 床面	床 c1	罐	10YR8/4 浅黄褐色	粗 (在地)	良好			2.0		[4.7]	1.1			
8	A 床面	床 i1	罐	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					[4.2]				
9	A 床面	床 11, 床 e3, 67B	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (黒色角柱体含有)	良好	28.4				(8.0)		3.2		
10	A 床面	床 12 + 1	高坏	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好	[33.1]				(4.5)				
11	A 床面	床 a	高坏	5YR7/6 褐色	粗密 (在地)	良好	21.0~ 21.5				14.7		3.9	12.0	
12	A 床面	255, 270, 398, 399, 607, 695, 998, 床 e2 + 3, 床 12 + 3, 床 j1	器台	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	15.0	22.5			(5.0)				
13	A 床面	床 k2	鉢	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	11.9				7.5		5.0~5.5		
14	A 床面	床 k1	鉢	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					(5.3)		[8.7]		
15	A 床面	床 c	壺	5YR7/6 褐色	粗密 (在地)	良好	11.8	14.1	1.7	9.6	12.0	0.4			
16	A 床面	床 h	壺	10YR8/3 に近い黄褐色	密 (在地)	良好	10.5	11.4	2.7	8.1	10.3	0.5			
17		742	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[16.8]				(4.55)				
18		618	罐	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地?)	良好					(4.95)				
19		1007	罐	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	やや不良	[17.8]				(3.75)				
20		526	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[16.5]				(5.85)				
21		259	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[15.1]				(3.95)				
22		206	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[12.7]				(4.6)				
23		94	罐	5YR4 淡褐色	粗密 (在地)	良好	[11.7]				(2.85)				
24		123	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[15.0]				(2.65)				
25		207	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗 (在地)	良好	[16.7]				(3.5)				
26		226, 229, 230, 661, 663, 707	鉢	7.5YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	9.7		3.8~4.2		8.0	1.3			裏面なし
27		770	壺 or 壺	10YR8/3 浅黄褐色	粗 (在地)	良好					(4.75)				
28		185	壺	N4 / 灰色	密 (在地)	やや不良					(3.1)				
29		790	鉢	2.5YR8/3 淡黄色	密 (在地)	良好	[16.0]				(3.1)				
30		163	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[24.0]				(5.5)				赤彩あり
31		262, 370	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地? 黒色角柱体含有)	良好					(6.3)		[4.6]		
32		749	鉢	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好	[18.0]				(5.0)				
33		746	鉢	5YR8/4 淡褐色	密 (在地)	良好	[18.6]				(3.5)				
34		334	小型土器	7.5Y4/1 灰色	粗密 (在地? 黒色角柱体含有)	やや不良	[2.4]				(3.5)				
35		349	小型土器	N3 / 緑灰色	粗密 (在地, 黒色角柱体含有)	やや不良					(3.4)				
36		91	鉢	10YR8/3 浅黄褐色	密	良好			4.3		(1.85)				
37		817	蓋	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					(2.2)				
38		825	蓋	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(2.9)				
39		401	蓋	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(3.3)				
40		160	高坏	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好					(8.1)		3.0		穴埋法 透孔 4 方向
41		836	高坏	5Y4/1 灰色	密	やや不良					(5.9)		2.6		接合法
42			高坏 or 器台	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地, 黒色角柱体含有)	良好					(6.1)		3.9		カケラシ内
43		290	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密	良好					(3.8)		3.4		
44		703	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地?)	良好					(5.1)		3.5		接合法
45	B 床面	937, 938, 床直上 3 + 11 + 14	高坏 or 器台	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(8.5)		3.4	12.0	
46	B 床面	床直上 17	鉢	2.5YR8/3 淡黄色	粗密 (在地)	良好	8.5	11.7	3.0		7.5	0.95			
47	B 床面	床直上 19	罐	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好			1.5		(6.5)				
48	B	25	罐	7.5YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好	[13.0]				(2.4)				
49	B	13	罐	10YR7/2 に近い黄褐色	粗密 (在地)	良好	[14.8]				(3.7)				
50	B	299, 893	罐	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[15.7]	17.2		[13.4]	[11.7]				
51	B	488, 542	罐	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[13.7]				(5.65)				
52	B	497	罐	内 2.5Y4/1 灰白色 外 2.5Y7/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	やや不良	[18.3]				(4.7)				
53	B	169	罐	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好	[11.1]				(2.0)				
54	B	168	小型土器	2.5YR8/2 灰白色	密 (在地, 黒色角柱体含有)	良好	[7.6]		1.3		5.0	0.75			
55	B	48	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	やや不良	[26.0]				(5.5)				
56	B		蓋	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					(2.9)				D ヘルト
57	B	48	蓋	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(1.85)				
58	B	1006	蓋	7.5YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	やや不良					(1.9)				
59	B	85	合付鉢	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(3.1)				
60	B	69	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					(6.9)		3.8		
61	B	70	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好					(4.5)		[2.7]		接合法
石 器															
番号	遺構名	取り上げ番号	器 種		石 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考					
62	A 床面	床 S-15	砥石		An	34.9	17.5	9.3	6.50						
63	A 床面	床 S-9	砥石		An	21.9	14.9	12.8	4.85						
64	A 床面	床 S-12	磨石		Gr	17.85	15.2	6.2	2,481.8						
65	A 床面	床 S-6	凹石		Qu	17.85	10.25	6.65	1,266.0						
66	A 床面	床 i2	磨石		An	8.4	4.3	1.9	97.24						
鉄 器															
番号	遺構名	取り上げ番号	器 種			最大長	最大幅	最大厚	重量	備 考					
67		367	板状鉄製			14.85			76.2	刃幅 0.95cm, 刃厚 0.62cm, 身部長 1.0cm, 身部厚 1.05cm, 装部径 2.2×2.0cm, 装部厚 0.4cm					
68		237?	棒状鉄製品			(3.05)	0.5	0.33	1.40						
69		457	棒状鉄製品			(2.3)	0.75	0.4	1.62						
70		814	棒状鉄製品			(2.5)	0.34	0.34	0.9						

A 遺跡 SI02 出土遺物 1

番号	遺物名	層名	取り上げ番号	群種	色調	陶土	焼成	口径	最大径	高さ	胴部径	高さ	口の厚さ	脚径	脚径	底部の種類	備考
1	A 床直上		922,925,1294,1297,1299	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[26.1]			[16.8]	[19.0]					シフト A21ト レー-6-72
2	A 床直上		1444,1445	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.9]			[9.9]	[7.7]					
3	A 床直上		1434	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好	[15.6]				[4.3]					
4	A 床直上		1309,1312,1425,1429	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[14.0]	[20.0]		[12.0]	[19.9]					
5	A 床直上		1356,1358,1361	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[14.8]			[13.6]	[14.1]					
6	A 床直上		1253	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[12.7]			[11.2]	[10.05]					
7	A 床直上		1447,1457,1458	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好	[12.0]				[6.2]					
8	A 床直上		1308,1309,1310	蓋	10YR8/6 黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.8]			[13.6]	[13.25]					
9	A 床直上		1256	蓋	10YR8/6 黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.4]				[6.25]					13と類似
10	A 床直上		1312,1318,1319,1320,1322,1323,1331,1333,1339,1341,1342,1322	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	[13.8]				13.2	[14.8]				
11	A 床直上		1479	蓋	7.5YR8/5 淡黄褐色	粗密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	12.5			11.2	[8.6]					
12	A 床直上		1316	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[12.5]				[6.25]					
13	A 床直上		1284,1291	蓋	7.5YR8/6 淡黄褐色	密(在地)	良好	[15.2]				[5.4]					
14	A 床直上		1311,1312,1316,1317,1319	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	12.7			12.0	[9.6]					
15	A 床直上		1288	蓋	10YR8/6 黄褐色	粗密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	[12.6]			[12.0]	[6.7]					
16	A 床直上		1381,1389	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	11.3				[7.2]					
17	A 床直上		1006,1373,1374,1375	蓋	10YR8/6 黄褐色	密(在地)	良好	11.4				11.5	[7.8]				
18	A 床直上		1373	蓋	7.5YR8/6 淡黄褐色	密(在地?)	良好	[14.6]			[12.0]	[4.75]					
19	A 床直上		1385,1388,1391	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.6]	14.2		[12.1]	[8.05]					
20	A 床直上		778,784,1222,1461	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗(在地)	良好	[14.0]			[11.7]	[4.5]					
21	A 床直上		1473,1474,1478	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[15.6]			[12.8]	[5.7]					
22	A 床直上		1389	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[14.0]			[12.3]	[5.4]					
23	A 床直上		1274	鉢	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地?)	良好	[10.0]				[7.7]					
24	A 床直上		1415,1416,1417	台付鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.4]				7.4		[4.2]	[7.1]		
25	A 床直上		1367	台付鉢	10YR8/3 淡黄褐色	粗(在地)	良好			[6.0]		[8.1]				接合法?	
26	A 床直上		1328,1329,1334	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[14.3]		4.3		6.25	0.4				
27	A 床直上		1460,1466,1467,1468	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗(在地)	良好			4.0		[6.8]	0.8				外周黒色
28	A 床直上		1455,1469	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好			2.8		[6.2]	0.2				
29	A 床直上		1378	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[28.0]				[7.5]					
30	A 床直上		1481	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好					[6.9]					充填法
31	A 床直上		1310	小型高坏	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[13.6]				[8.0]		2.8			
32	A 床直上		1431	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地, 黒色角柱体含有)	良好					[10.6]				[15.4]	
33	A 床直上		1395	高坏	2.5Y7/2 灰黄色	密(在地)	良好					[11.2]					接合法? 透孔なし
34	A 床直上		1340,1341	小型高坏	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[9.6]				12.1		2.65	[11.6]		充填法? 外周赤彩
35	A 床直上		1025,1031,1034,1284,1286,1289,1290	鉢首	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[12.4]				[16.3]				3.7	13.2
36	A 床直上		1393	鉢首	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好					[7.5]				3.4	
37	A 床直上		1254	台付鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好			6.1		[2.6]					
38	A 床直上		816,973,1020,1021,1362	台付鉢 or 蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好			10.2		[3.3]					
39	A 床直上		1394	把手	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好		最大長 1.95	最大幅 5.3							
40	A 床直上		154,480,676,677,678,1037,1440	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				3.0~3.5		[11.4]	2.2			
41	A 床直上		1409	蓋?	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好				2.5~2.8		[8.1]	2.2			
42	A 床直上		1293	蓋 or 蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				3.1		[6.6]	1.4			
43	A 床直上		1332	蓋?	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				2.9		[2.6]	1.0			
44	A 床直上		1414	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				4.2		[4.1]	0.96			
45	A 床直上		1432	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				3.9		[7.7]	1.45			
46	A P1			蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[15.6]				[6.4]					
47	A P1			蓋	10YR7/4 C, 5L 黄褐色	粗(輸入?)	良好				[5.4]	[3.65]	1.4				
48	A P6			蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[16.9]			[14.0]	[8.1]					
49	A P2			蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好					[2.7]					
50	A P2			高坏 or 蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好					[5.8]					
51	A P7			高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好	[26.0]				[6.1]					内面赤彩
52	SK01		14	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[15.0]				[6.9]					
53	SK01		2	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好					[6.8]					
54	SK01		28,32	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[14.8]				[5.3]					
55	SK01	最下, 4層	31	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	15.6			12.6	[4.9]					
56	SK01		28,30	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好					[3.2]					
57	SK01		15,21	鉢	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	18.5		2.6		[10.0]	0.45				
58	SK01	最下層	13,26	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好		[13.2]			[8.3]					
59	SK01		3,6,36	小型蓋	2.5Y8/2 灰白色	粗密(在地)	良好			3.2		[11.8]	0.3				
60	SK01		20	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[29.0]				[4.8]					
61	SK01		1	蓋台	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好					[4.65]				15.4	
62	SK01		27	台付蓋 or 蓋	10YR8/6 黄褐色	粗(在地)	良好					[5.3]				11.2	
63	SK01		5	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好					[6.8]			3.5		
64	SK01	上面		蓋 or 蓋	N4/灰色	密(在地)	??不良				[4.2]	[2.85]					
65	SK01		25	蓋 or 蓋	10YR7/4 灰黄色	密(在地)	良好				[3.1]	4.1	0.8				
66	SK01	1層内		蓋	2.5Y8/3 淡黄褐色	粗(在地)	良好				[6.0]	[3.28]	1.7				
67	SK01	4層		小型蓋	2.5Y7/2 灰白色	粗密(在地)	良好				2.7	[1.4]	0.7				
68	SK01		8	蓋?	2.5Y8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好				[3.4]	[2.9]					
69	SK01		9	小型土器	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好		7.2	1.3		[5.5]	1.25				
70	SK01	1層内?		高坏 or 蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好					[3.4]				[21.0]	
71	SK01		21	高坏 or 蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地, 黒色角柱体含有)	良好					[3.1]				[19.6]	
72			475	蓋	7.5YR7/4 C, 5L 橙褐色	粗密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	[12.0]				[4.5]					
73			147	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地)	良好	[9.5]				[3.3]					
74			776	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[27.7]				[4.95]					
75			724	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[17.2]				[3.2]					
76			209,234	蓋	10YR8/2 灰白色	粗密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	[14.0]			[12.3]	[4.1]					
77			508,511,512,513,516,523,561,1453	蓋	10YR8/4 淡黄褐色	粗(在地)	良好	[20.0]				[18.0]	[5.6]				
78			1024	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[17.0]				[3.9]					
79			698	蓋	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好	[18.5]			[16.2]	[5.0]					
80			683	鉢	2.5Y5/1 黄灰色	密(在地?)	??不良					[5.2]					内外周黒色
81			1133	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗密(在地)	良好	[15.3]				[7.5]					
82			37	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密(在地, 黒色角柱体含有)	良好	[30.0]				[7.8]					
83	外周溝		629, 外周 216	蓋台?	7.5YR7/8 黄褐色	密(在地)	良好	[27.4]				[6.0]					
84			1083	把手付鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密(輸入?)	良好		[10.8]			[4.4]					
85			789	小型鉢	10YR8/3 淡黄褐色	粗	良好	[8.6]			2.5	[4.8]	1.35				
86			37	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密(在地)	良好					[4.5]					充填法

A 遺跡 SI02 出土遺物 2

土器																	
番号	遺構名	層名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径	底径	頸部径	高さ	底の厚さ	脚柱径	脚径	底部の種類	備考
87	Ⅱ区	床面上	722	鉢台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(5.4)					透孔 4 方向
88				高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地, 褐色角柱体含有)	良好					(5.9)		2.6		接合法	
89			1552	高坏 or 钵台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(3.8)					
90			1036	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(8.0)		3.1		充填法	透孔 3 方向
91			505	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好					(11.0)		3.9		充填法	
92			997	高坏 or 钵台	10YR7/4 に近い黄褐色	密 (在地) 褐色角柱体含有	良好					(3.1)					透孔あり
93			866	壺	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好			[8.6]		(3.65)					
94			906	小型鉢	2.5Y8/2 灰白色	密 (在地)	良好					[3.0]					
95			1023	小型鉢	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					[4.8]					
96			114	小型壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					2.7					0.7
97			1110	不明	2.5Y8/3 淡黄色	粗密 (灰地)	良好					2.8					(2.1) 1.0
98			766	不明	N4/灰色	粗密 (在地)	やや不良					3.1					(2.1) 0.75
99			291	不明	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					1.4					(2.4) 0.2
100			626	不明	5Y5/1 灰色	粗密 (在地)	やや不良					[2.8]					(2.8) 1.05
101			892	小型鉢	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					3.2~3.4					(3.7) 1.35
102			71	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					3.0					(4.0) 0.85
103			1108	壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (石灰, 褐色角柱体多含有)	良好					4.0					(1.4) 0.8
104			1088	不明	2.5Y8/2 灰白色	粗 (在地)	良好					3.9					(2.95) 0.85
105			863	壺 or 鉢	10YR8/6 黄褐色	密 (在地)	良好					2.0~2.5					(3.05) 2.0
106			1202	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地, 褐色角柱体含有)	良好					[4.0]					(5.3) 1.5
107	Ⅱ区	床面上		不明	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好					3.1~3.8					(4.85) 1.6
108			836, 1057, 1066	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					3.5					(3.65)
109			1120	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地, 褐色角柱体含有)	良好					[3.4]					2.0
110			570	壺	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好					(2.8)					(2.6)
111			286	壺	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好					(2.0)					(2.8)
112			1215	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(4.2)					(4.2)
113	外周溝	外周 414	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[17.1]				(5.3)					(5.3)
114	外周溝	外周 514	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[13.0]				[12.2]					(9.5)
115	外周溝	外周 363	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地, 褐色角柱体含有)	良好		[13.3]				[11.8]					(7.4)
116	外周溝	外周 423	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[14.7]				(6.1)					(6.1)
117	外周溝	外周 164	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地?)	良好		[17.0]				(2.85)					(2.85)
118	外周溝	外周 234・241・335	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地, 褐色角柱体含有)	良好		[17.2]				[15.3]					(3.7)
119	外周溝	外周 538	壺	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	やや不良		[13.8]				(3.85)					(3.85)
120	外周溝	外周 184	壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)	良好		[17.2]				(4.4)					(4.4)
121	外周溝	外周 587	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[16.7]				(9.0)					(9.0)
122	外周溝	外周 580	小型鉢	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好		[12.2]				(5.8)					(5.8)
123	外周溝	F アセ内	鉢	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好		[9.6]				(6.0)					(6.0)
124	外周溝	露土上	台付鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[9.0]		[5.3]		(5.2)					(5.2)
125	外周溝	外周 220	小型鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						[6.0]					(4.3)
126	外周溝	外周 204	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[10.0]	[11.0]			(4.9)					(4.9)
127	外周溝	外周 139-520-521・524・525・526・527・528-544-530	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[30.0]				(8.7)		[4.5]			充填法?
128	外周溝	外周 405	高坏	2.5Y8/4 淡黄色	密 (在地)	良好						(3.5)					(3.5)
129	外周溝	F アセ内	小型高坏	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						(3.5)					(3.5)
130	外周溝	外周 495-519-523-544	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地?)	良好						(1.9)		[3.8]			(1.9)
131	外周溝	外周 481	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好						(2.9)					(2.9)
132	外周溝	D アセ内	高坏	7.5YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						(5.5)					充填法
133	外周溝	外周 408	高坏 or 钵台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(5.8)					(5.8)
134	外周溝	外周 248	高坏 or 钵台	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地?)	良好						(6.1)					(6.1)
135	外周溝	外周 224	高坏 or 钵台	N4/灰色	粗密 (在地)	やや不良						(3.8)					(3.8)
136	外周溝	外周 242	鉢台	10YR7/2 に近い黄褐色	密 (在地)	良好		[26.5]				(9.2)					(9.2)
137	外周溝	外周 419	鉢台	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)	やや不良						(5.5)					(5.5)
138	外周溝	外周 585	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好			19.2	6.6		(17.25)					0.8
139	外周溝	外周 592・593・594	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好				4.6		(10.08)					1.35
140	外周溝	外周 583	不明	2.5Y8/3 淡黄色	密 (在地)	良好				2.5		(5.6)					1.4
141	外周溝	外周 215	不明	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好				2.0		(5.6)					0.9
142	外周溝	外周 130	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					[5.2]	(2.65)					(2.65)
143	外周溝	外周 232	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						7.6					(1.85) 1.6
144	外周溝	外周 172	壺	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好						(6.5)					(2.4)
145	外周溝	外周 348	不明	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)	良好						[3.4]					(4.45)
146	外周溝	外周 235	不明	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						[4.2]					(5.3)
147	外周溝	E アセ内	外周 94	不明	2.5Y5/1 黄灰色	密 (在地)	やや不良					[2.3]					(2.5)
148	外周溝	外周 230	小型壺 or 鉢	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好						2.0					(2.6) 0.7
149	外周溝	外周 407	小型壺 or 鉢	2.5Y8/3 淡黄色	密 (在地)	良好						2.1					(1.5) 0.6
150	外周溝	E アセ内	台付鉢	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好						(3.3)				[4.3]	(3.3)
151	外周溝	外周 357	小型土器	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好				2.0		(3.1)					0.95
石器																	
番号	遺構名	層名	取り上げ番号	器種	色調	石材もしくは胎土	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考						
152	A 床面上		1407	磁石		Sh	23.0	5.8	5.45	1,141.6							
153	A 床面上		1403	磁石		Rh	17.5	4.65	3.4	286.7							
154	A 床面上		1538	磁石		Sn	8.1	7.1	3.35	264.19							
155	A 床面上		1484	磁石		Qu	7.3	5.6	3.4	209.5							
156			504	磁石		Sn	6.0	6.11	2.1	170.25							
157	A 床面上		1263	磁石		An	16.7	9.6	3.85	895.7							
158	外周溝	外周 446		磁石		Rh	[8.5]	[5.7]	2.7	153.01							
159	SK01		11	磁石		Sn	10.0	8.4	5.05	591.5							
160	SK01		33	磁石		Sn	9.38	8.0	3.4	308.7							
161	SK01		26	磁石		Qn	12.1	8.65	6.6	952.3							
玉類																	
番号	遺構名	層名	取り上げ番号	器種	色調	石材もしくは胎土	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考						
162			866	管玉	7.5Y7/2 灰白色	Gt	1.3	0.65		0.785							
163			769	管玉	7.5Y7/2 灰白色	Gt	1.08	0.3		0.12							
164	外周溝	外周 186		管玉	7.5GY7/1 明緑灰色	Gt	0.82	0.28		0.07							
165	外周溝	外周 140		管玉	10G7/1 明緑灰色	Gt	0.43	0.25		0.04							
166	外周溝	外周 83		管玉	10GY7/1 明緑灰色	Gt	0.9	0.4		0.05							
167				丸玉	淡青色	ガラス	0.4	0.52		0.075							
168			1060			(蜜) 水晶	4.25	2.1		28.48							
169			1277	土玉	10YR7/2 に近い黄褐色	粗密 (在地, 褐色角柱体含有)	2.8	3.6	0.8	26.20							焼成良好
170			1379	土玉	10YR8/3 に近い黄褐色												

A 遺跡 SI03 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径値	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1		50	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好				[12.0]	(11.7)					A414 と同一個体
2		36,38,42,46	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗 (在地)	良好	[19.7]				(4.5)					
3		6	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地?)	良好			[2.3]		(1.2)	0.6				
4		50	鉢	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好					(5.85)					
5		17,41	高坏 or 钵台	10YR8/3 淡黄褐色	密	良好					(4.25)					
6		12	高坏 or 钵台	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好					(2.7)		[12.0]			
7		50	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好			2.8		(5.6)	1.0				A412 と同一個体
8		1,2	壺	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好		[3.4]			(3.9)	1.7				布目程度あり

A 遺跡 SB 出土遺物

土器																
番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径値	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	01	P7	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好	[25.6]			[21.6]	(6.3)					
2	04	P5	鉢	7.5YR7/6 褐色	密 (在地?)	良好		[11.0]			(5.0)					
3	04	南側周溝	壺?	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)	良好			[2.5]		(1.9)	0.85				底部が成形時よりずれている。
4	04	P6	壺?	N4/灰色	粗密 (在地?)	やや不良			[2.6]		(1.3)	0.85				同上状況
5	04	P6	壺	2.5Y7/2 灰黄色	密 (在地)	良好	[15.1]			[13.0]	(6.7)					
6	03	P5	壺	2.5Y8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[12.7]		3.1	[9.4]	(27.5)	1.0				
7	05	P3	壺	2.5Y7/1 灰白色	密 (在地、黒色角柱体含有)	良好	[18.0]				(3.5)					
8	05	P4	高坏 or 钵台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					(3.2)					
10	06	P1	高坏 or 钵台	5YR7/6 褐色	密 (在地?)	良好					(4.5)					
11	06	P1	高坏 or 钵台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(3.7)		[13.7]			
13	06	柱穴 4	壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[14.9]			[12.4]	(4.8)					
14	06	柱穴 4	高坏 or 钵台	2.5Y8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好	中心黒色				(2.3)		[15.0]			
15	06	柱穴 4	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好				[16.0]	(4.4)					
16	07	P2	高坏 or 钵台	10YR7/2 濃い黄褐色	密 (在地)	やや不良					(2.7)		[15.5]			
17	07	P2	高坏 or 钵台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好	[17.9]				(3.0)					
18	07	P3	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地、長石含有)	良好					(3.25)		3.4			
19	07	P3	高坏 or 钵台	2.5Y5/1 黄灰色	密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					(1.9)		[14.0]			
20	07	P3	壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					(3.5)					
21	07	P5	高坏 or 钵台	内 10YR8/3 淡黄褐色 外 N4/灰色	密 (在地)	良好					(2.7)		[14.0]			
22	07	東側土溝	壺	2.5Y7/1 灰白色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					(4.3)					
23	07	西側土溝	壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好	[11.9]			[10.0]	(6.6)					
24	07	P4	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[12.8]				(6.0)					
25	07	P4	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					(4.7)					
26	07	P4	壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)	良好	[16.0]			[13.2]	(6.0)					
27	10	P2	壺	2.5Y8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[18.6]				(3.5)					
28	10	P6	壺?	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地?)	良好			[5.0]		(3.75)					
29	12	P6	高坏 or 钵台	2.5Y6/1 黄灰色	密 (在地)	良好					(3.0)					
30	11	周溝	高坏 or 钵台	10YR5/1 褐灰色	密	良好					(1.9)		[14.0]			
石器																
番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径値	最大幅	最大厚	重量	備考				
9	05	P4	磁石		磁石			(9.4)	(9.7)	(2.4)	269.57					
鉄器																
番号	遺構名	取り上げ番号	器種													
12	06	P1	棒状鉄製品													

A 遺跡 SX 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径値	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	01		壺 or 壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	やや不良					(1.75)					
2	02		壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[16.5]				(3.85)					
3	02		壺 or 壺	5YR7/6 褐色	粗密 (在地)	良好			[2.2]		(2.1)					
4	02		高坏 or 钵台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好					(1.7)			[12.5]		

A 遺跡 SK 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大径値	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	04		壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好	[13.4]				(3.15)					
2	05	1	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					(6.8)					
3	05	2	高坏 or 钵台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好					(2.4)					
4	07	1	壺	2.5Y7/1 灰白色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好	[14.2]			[12.2]	(4.2)					
5	07	5	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好				[13.0]	(8.35)					
6	07	7	壺?	2.5Y6/1 黄灰色	粗密 (在地)	良好			[2.1]		(2.95)	0.9				
7	07	8	小型壺?	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地?)	良好			[4.3]		(3.4)	1.0				
8	07	9	台付壺 or 壺	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					(3.4)		[13.0]			
9	06		高坏?	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地) 黒色角柱体含有	良好					(1.95)					
10	09		壺	10YR7/2 濃い黄褐色	密 (在地)	良好	[15.6]				(3.5)					
11	09		壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					(2.8)					
12	09		壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好	[16.8]				(4.1)					

C遺跡 SI01 出土遺物 1

番号	遺物名	取り上げ番号	種類	色	質	胎土	胎皮	口径	最大径深	底径	頸部径	高さ	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	床面	005, 床直 33	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(2.3)					
2	床面	床直 21	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	やや不良		[18.0]				(4.8)					4 と同一個体
3	床面	床直 5	瓦	7.5Y3/1 オリーブ褐色	密 (在地)	やや不良		[15.8]		2.4	[13.0]		0.55				3 と同一個体
4	床面	床直 5	瓦	7.5Y3/3 オリーブ褐色	密 (在地)	やや不良		[15.8]		2.4	[13.0]		0.55				
5	床面	床直 1・2・4	鉢	内 10YR4/7 褐色 外 10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	やや不良		[13.8]				(8.0)					C16 と同一個体?
6	床面	床直 2	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好				(6.6)		2.75	0.5				C16 と同一個体?
7	床面	床直 7	瓦	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好				2.0		(6.2)	1.5				
8	床面	床直 23	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良						(2.66)					
9	床面	床直 28	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[27.0]				(9.0)					
10	床面	床直 28	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (黒色角柱体少量)	やや不良		[26.0]				(4.5)					
11	床面	床直 16	高坏	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好					[17.7]	(4.1)					
12	床面	床直 17・18	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(6.7)					
13	床直上	床上 1	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良		17.1	28.4	5.6	13.2	33.5	1.9				外面赤彩?
14	床直上	床上 37	瓦	10YR7/6 褐色	密 (在地)	良好		[16.4]				(4.7)					
15	床直上	床上 34	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[17.4]				(4.55)					
16	床直上	床上 12	瓦	7.5YR8/6 淡黄褐色	密 (在地?)	良好						(3.05)					つまみ径 3.0
17	床直上	床上 23	瓦	2.5Y8/4 淡黄色	密 (在地)	良好						(3.86)					
18	床直上	床上 9	瓦	7.5YR7/6 褐色	密 (在地)	良好		[19.5]				(5.0)					
19	床直上	床上 1	瓦	10YR7/4 濃い黄褐色	密 (在地)	良好					[12.0]	(10.3)					
20	床直上	床上 38・40	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密	良好		13.6	15.3	2.9	10.5	15.0	0.9				
21	床直上	床上 7	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[19.7]				[15.8]	(4.4)				
22	床直上	床上 16	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好						[16.4]	(8.8)				
23	床直上	407, 床上 39・80	瓦	10YR8/2~3/3 灰白色~淡黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[16.7]		2.5	[3.8]	[19.7]	0.45				
24	床直上	床上 13・33	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[15.4]				[13.45]	(4.9)				
25	床直上	床上 14	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	粗 (在地)	良好						[15.0]	(5.05)				
26	床直上	床上 20	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)	やや不良			21.1	26~32		[16.4]	(2.1)				焼成後の穿孔あり
27	P2・3		瓦	2.5Y6/1 黄灰色	密 (在地?)	やや不良		[11.4]				[12.6]	(6.9)				
28	P2		瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[18.0]		1.8	[5.8]		1.55				29 と同一個体
29	P2		瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[18.0]		1.8	[5.8]		1.55				28 と同一個体
30	P2		瓦	10YR8/6 黄褐色	粗 (掘入?)	良好				4.3		[13.6]	0.7				
31	P2		瓦?	N5/ 灰色	密 (在地)	やや不良				[3.0]		[1.9]	0.6				
32	P2		高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[29.0]				(7.6)					
33	P3		高坏 or 割台	5YR7/6~10YR8/4 褐色~淡黄褐色	密 (在地)	良好						(8.6)		3.0	11.3		蓋転写)
34		645,720,991	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗 (在地?)	良好		[13.0]			16.9	(12.1)					面上透光
35		485	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[16.2]				(10.6)					
36		392	瓦	7.5YR7/6 褐色	粗密 (在地)	良好						[10.0]	(4.3)				
37		787	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[14.0]				[12.6]	(4.7)				
38			瓦	2.5Y4/1 黄灰色	粗密 (在地)	やや不良		[18.0]				[14.0]	(4.15)				
39			瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[16.6]				(2.3)					南東斜面一括
40		87,416	瓦	2.5Y5/1 黄灰色	掘入?	やや不良		[18.9]				[16.7]	(4.86)				
41		799,801	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[18.7]				[15.7]	(3.5)				
42		489	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						[10.5]	(3.2)				
43		522	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好		[12.4]				[10.5]	(2.5)				
44		827,830	瓦	10YR7/2 濃い黄褐色	粗密 (在地?)	やや不良		[13.0]				(2.4)					
45		413	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地、黒色角柱体少量)	良好		[14.0]				[11.4]	(3.6)				
46		626	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好						[11.4]	(4.0)				
47		907	瓦	2.5Y7/6~5/1 褐色~赤灰色	粗密 (在地)	良好		[17.7]				[15.5]	(9.1)				
48		186	瓦	2.5Y7/1 灰白色	密 (在地)	良好		[17.0]				(3.2)					
49		624	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (黒色角柱体少量)	良好		[18.4]				(4.5)					
50		813	瓦	10YR7/2 C. 濃い黄褐色	粗密 (在地?)	良好		[20.0]				[18.2]	(3.6)				
51		229	瓦	5Y4/1 灰色	粗密 (在地)	やや不良		[21.4]				[19.1]	(4.7)				
52		59	瓦	N5/ ~10Y8/1 灰色~灰白色	粗密 (在地)	やや不良		[24.0]				[21.7]	(6.3)				
53			瓦	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好		[28.3]				[25.0]	(6.6)				
54		442	鉢	10YR8/3 淡黄褐色	密 (黒色角柱体少量)	良好						(6.5)					
55		385,452	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		18.4				[9.5]					
56			鉢	5YR7/6 褐色	密 (在地)	良好						(5.0)					南東斜面一括
57		800	鉢	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良		[12.4]				[10.0]	(6.2)				
58		79,196,347, 380,386,387, 391,450,451	鉢	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[12.7]	[11.0]	[3.2]	[11.0]	[8.5]	0.5				
59		945,953	高坏	2.5Y4/1 黄灰色	密 (在地)	やや不良		[25.4]				(7.3)		4.0			
60		503,504,511,566	高坏	内 5YR7/6 褐色 外 N5/ 暗灰色	密 (在地)	やや不良						(3.5)					
61		60	高坏	N3/ 暗灰色	密 (在地)	やや不良						(3.6)					
62		940	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良						(2.5)		4.2			
63		773	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(1.6)		3.8			
64		174	高坏	7.5YR8/4 淡黄褐色	粗密	良好						(2.6)					
65			高坏	7.5YR8/6 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(3.5)					
66		616,881	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(3.4)					
67		88,174	高坏	7.5YR7/6 褐色	密	良好						(5.9)					
68		429	高坏	7.5YR 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(3.9)					
69		351	高坏	5YR7/6 褐色	密 (在地)	やや不良						(9.5)		3.3			玄壇法
70		72	高坏	7.5YR8/4 淡黄褐色	密	良好						(10.0)		3.5			透孔 4 方向と推定
71		950	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良						(7.6)		3.5			
72		277	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)	良好						(5.25)		3.5			IV 区
73		252	高坏	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(1.5)					
74			割台	2.5Y8/3 淡黄色	密 (在地?)	良好						(4.45)					
75		341	割台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(3.5)					
76			高坏 or 割台	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	やや不良						(3.4)					
77		887	高坏 or 割台	7.5YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好		[26.0]				(2.0)					
78		454	高坏 or 割台	10YR8/6 黄褐色	密 (在地)	良好		[26.0]				(2.7)					
79		952	高坏 or 割台	2.5Y4/1 黄灰色	密 (在地)	やや不良		[30.0]				(2.7)					
80		101	高坏 or 割台	10YR7/3 C. 濃い黄褐色	密 (在地)	良好		[29.8]				(3.1)					
81		991	高坏 or 割台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(7.1)		3.3			
82		669	割台	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地?)	良好						(7.4)		3.5			
83		89	高坏	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好						(2.2)			18.0		
84		379	高坏	7.5YR8/4 淡黄褐色	密	良好						(4.0)			16.0		
85		378	瓦	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地?)	良好		[10.0]			2.5~2.6	4.3					つまみ径 3.6
86		405	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	良好						(3.25)					つまみ径 3.0
87		695	瓦	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)	やや不良				3.6							

C 遺跡 SI01 出土遺物 2

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
96	61		壺	10YR8/3 淡黄褐色	密		良好					2.5	(2.15)	1.05			
97	684		壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地? 黒色角柱体含有)		やや不良					2.7	(2.1)	0.65			
98	786,797,820		壺	10YR8/4 淡黄褐色	密		良好					14.5	(2.1)				
99	443		壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好					4.6	(4.5)	1.55			
100			壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		やや不良					4.0	(1.45)	0.6			
101	181		壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好					7.5	(1.75)				
102	136		不明	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好					2.1	(2.6)	1.6			
103	971		不明	5YR5/4-5YR3/1 に近い赤褐色~黒褐色	密 (在地)		やや不良					2.6	(2.25)				
104			壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好					4.2	(3.7)				
105	717		壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗 (裏入?)		良好					6.0	(4.2)				
106	210		壺	2.5Y8/4 淡黄色	粗密 (在地)		良好					5.9	(2.8)	1.3			
107	809		鉢	2.5Y8/2 灰黄色	密 (在地?)		やや不良					2.2	(1.65)				
108	796		鉢 or 壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗密		良好					5.8-4.2	(3.6)	1.2			
109	98		壺	10YR8/6 黄褐色	粗密 (在地)		良好					10.8	(3.1)				
110	384,394		鉢 or 壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好					1.6	(3.3)	0.55			

C 遺跡 SI02 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	床面上	77,89	壺	2.5Y7/1 灰白色	密 (在地)		良好	[11.0]		2.1	[8.0]	[15.0]	0.65				同上復元
2	床面上	8,70,79,80,81,82,84	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	13.1		1.7	11.4	[17.3]	0.85				同上復元
3	床面上	71,73,76,81,82,83,84,89	壺	10YR7/6 明黄褐色	密 (在地?)		良好	15.3	[17.2]	2.9	12.4	[20.9]	0.45				二枚貝刺突あり
4	床面上	72,73,74,75,80,82,85	壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地?)		良好	[12.9]				[12.2]	[13.6]				二枚貝刺突あり
5	床面上	71,73,79,81,82,83,86,89	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好	[15.9]				[14.2]	[5.96]				
6	床面上	56	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	[17.4]				[13.6]	[3.95]				
7	床面上	52	壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地、黒色角柱体含有)		良好	[19.0]				[3.0]					
8	床面上	49	壺	2.5Y8/4 淡黄色	密 (在地)		良好	[18.0]				[3.8]					
9	床面上	81,82	壺	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好				[18.0]	[5.85]					10 と同一個体
10	床面上	81	壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好			1.6		[8.5]	0.8				9 と同一個体
11	床面上	85	壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)		良好	[14.5]				[12.1]	[4.05]				
12	床面上	44	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	[17.5]				[16.0]	[3.95]				
13	床面上	80	壺	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好	[19.5]				[17.0]	[4.7]				
14	床面上	2,56,82,91	高坪	7.5YR8/4 淡黄褐色	密 (在地)		良好					(11.6)		3.6	13.25		充填法
15	床面上	50,57,47,177	高坪 or 器台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好					(11.4)		3.5	[14.0]		
16	1		壺	10YR8/3 淡黄褐色	密		良好	[22.8]				[21.5]	[3.8]				
17	45		台付	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好					(4.85)		13.0			
18	30		高坪	2.5Y8/3 淡黄色	密 (在地)		良好					(4.0)					
19	床面	663,664,667	壺	10YR4/1 緑灰色	密 (在地)		やや不良	[14.8]				[10.05]					

C 遺跡 SX01 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	壇丘上	15	壺	10YR8/3 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	[12.0]				[9.8]	[6.15]				
2	壇丘上	23	壺	5Y5/1 灰白色	粗密 (在地)		良好					[8.0]	[5.4]				
3	壇丘上	7,17	壺?	5Y5/1 灰白色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)		やや不良			1.6		(2.46)	1.0				
4	壇丘上	22	壺 or 鉢	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好			3.65		[2.0]	0.5				
5	壇丘上	8,5	高坪	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好					(11.2)		3.4	17.9		接合法?

D 遺跡 SI02 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1		40,41,42,43,44	壺	2.5Y7/2 灰黄色	粗密 (在地)		良好	17.0	[19.2]	[2.7]	14.7	[23.0]					同上復元
2		33,34,35,36,37,38,40,41,44	壺					16.4	17.0	2.5	12.7	21.35	1.0				
3		17	壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	[8.5]	9.5	1.6	[6.5]	8.75	0.5				外面・口縁内赤彩
4		21,32	台付鉢 or 壺	10YR8/6 黄褐色	粗密 (在地?)		良好					[6.35]		7.6			内外赤彩?
5		2,3,4,10,14,16,20,41,45,47,49,57	高坪	10YR8/4 淡黄褐色	密 (在地?)		良好	20.2				[1.8]		3.4	15.8		赤彩、透孔 4 方向
6		75	高坪?	10YR8/4 淡黄褐色	密		良好					(2.5)					
7		4,5,41,59	高坪	7.5YR8/6 淡黄褐色	密 (在地)		良好	[25.2]				(5.4)					
8		57	高坪 or 器台	10YR8/3 淡黄褐色	密		良好					(4.2)					
9			壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	密 (在地?)		良好	[11.5]	[11.0]	1.6	[9.7]	10.5	0.3				
10		55	鉢	7.5YR8/6 淡黄褐色	密 (在地)		良好					(4.2)					
11		1	壺 or 鉢	10YR8/3 灰白色	密 (在地)		良好			4.0		(5.25)	0.55				
12			高坪 or 器台	10YR8/3 淡黄褐色	密 (在地)		良好					(2.85)			[11.3]		透孔数は不明

D 遺跡 SX01 出土遺物

土 器																	
番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	周溝	1	壺	10YR8/6 黄褐色	密 (在地)		良好	(10.9)				[7.1]	(14.3)				
2	周溝	2	壺	7.5YR7/6 橙黄色	粗密 (在地?)		良好					(12.0)	(10.6)				
3	周溝	4	壺	10YR7/4 に近い黄褐色	密		良好	[10.2]				[7.1]	(9.1)				同上復元
4	周溝	3	高坪	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地?)		良好	13.0				12.0		3.5	20.6		透孔 4 方向、孔径約 1cm

鉄 器																	
番号	遺構名	取り上げ番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	刃部最大幅	刃部厚	柄部最大幅	柄部最大厚	重	量	備考				
6	第 1	1	方形鍔刀先	9.8	10.65	0.3						160.76					ほぼ完整
7	第 1	2	刀子	(8.95)				1.36	0.2	1.1		7.4		0.37			
8	第 2	2,4,7	直刀鏃	12.05						3.16		16.3		0.2			
9	第 2	1,5	ヤリカンナ	9.3				0.78		0.7		5.3		0.29			刃部長 1.5cm

D 遺跡 SX02 出土遺物

番号	遺構名	取り上げ番号	器種	色	質地	胎土	焼成	口径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚柱径	脚径	接合の種類	備考
1	周溝	1,2	壺	7.5YR8/6 淡黄褐色	粗密 (在地)		良好	14.9	[16.8]			8.0-8.3	[18.7]				
2	主持部上蓋		鉢台	10YR7/6 橙黄色	粗密 (在地)		良好	[8.8]				[6.55]		3.8-4.1	[12.4]		透孔 3 方向あり
2	壺坑フタ土		鉢台	10YR7/6 明黄褐色	粗密 (在地)		良好	[7.6]				8.4		3.6			透孔 3 方向あり
4	棺床		壺	10YR8/4 淡黄褐色	粗密 (在地)		やや不良	[17.5]				[3.4]					外面赤彩?

D 遺跡 SK01 出土遺物

番号	遺物名	取り上げ番号	器種	色	質	胎土	焼成	口径	最大径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚径	脚径	接合の種類	備考
1		1	甕	10YR7/6 黄褐色	密 (在地)	やや不良			[29.0]	[7.8]		[29.5]					
2		3	高坪	2.5Y7/2 灰黄色	密 (在地)	良好		21.7				14.8~15.0	3.5	14.5	充填法	透孔3方向 孔径0.9cm 外周彫り	
3		2	器台	7.5YR8/6 黄褐色	粗密~密 (在地)	良好		9.2				10.2~10.5	3.6	13.7		透孔4方向 孔径と透孔間一径0.8cm	

A 遺跡 包含層出土遺物 1

土器																		
番号	遺物名	Gr	取り上げ番号	器種	色	質	胎土	焼成	口径	最大径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	脚径	脚径	接合の種類	備考
1	埴谷			甕	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	[18.8]					[5.5]					
2	埴谷	M-6		甕	10YR8/2 灰白色	粗 (在地)	良好	16.4				10.8	[7.9]					
3	埴谷			甕	10YR7/2 に近い黄褐色	粗密 (在地)	良好	[15.8]				[10.7]	[5.1]					
4	埴谷	M-6		甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[18.8]				12.0	[9.7]					
5	埴谷			甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗 (在地)	良好	16.2					[6.1]					
6	埴谷	N-7	3	甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好	14.4			4.2~3.7		[30.0]	1.05				
7	埴谷	L-6	120,261,281,295,303	甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	19.0				14.0	[13.1]					
8	埴谷	M-6		甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好 (中心黒色)	[17.4]				[12.8]	[9.4]					
9	埴谷			甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗 (在地)	良好	[16.4]				[12.0]	[8.8]					
10	埴谷			甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[10.6]				[9.0]	[7.5]					
11	埴谷	L-6	148	甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (黒色角柱体多量 輸入?)	良好	[24.4]					[5.6]					
12	シノ7 A21			甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地? 黒色角柱体含有)	良好	[27.2]					[8.8]					
13	SI 02 付託			甕	10YR8/2 灰白色	粗 (在地、黒色角柱体含有)	良好						[4.4]					
14	SI 02 付託			甕	10YR8/2 灰白色	粗 (在地)	良好	15.6				11.2	[16.6]					
15	埴谷	L-6		甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[16.8]				[13.0]	[7.8]					
16	SI 02 付託			甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[14.3]					[6.75]					
17	埴谷	L-6		甕	2.5Y6/1 黄灰色	粗密 (在地)	良好?	[13.7]					[5.45]					
18	埴谷	M-6		甕	7.5YR8/6 黄褐色	密 (在地?)	良好	[12.8]				[10.4]	[6.8]					
19	埴谷	L-6	93,326	甕	10YR7/2 に近い黄褐色	密 (在地? 石英、黒色の角柱体含有)	良好	[14.8]				[12.2]	[4.0]					
20	埴谷			甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地? 黒色角柱体含有)	良好	[14.8]				[11.4]	[4.80]					
21	埴谷	M-1		甕	7.5YR7/4 に近い黄褐色	密 (在地?)	良好	[10.7]				[9.6]	[5.85]					二枚貝による割欠
22	埴谷	L-6	61,323	甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗 (在地、黒色角柱体含有)	良好	[26.7]				[23.6]	[6.5]					
23	埴谷	L-6	180,183	甕	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	[25.8]				[21.0]	[6.1]					
24	埴谷	G-9	1	甕	2.5Y6/1 黄灰色	粗密 (在地?)	やや不良	[17.0]					[3.6]					
25	埴谷			甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[15.8]				[13.4]	[4.45]					
26	埴谷	L-6	81	甕	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好	[15.8]					[3.5]					
27	埴谷			高坪	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好	[24.0]					[9.0]					
28	埴谷			高坪	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地、黒色角柱体含有)	良好 (中心黒色)	[29.0]					[9.5]					
29	埴谷	C-7	72	高坪	2.5Y8/2 灰白色	密 (在地? 黒色角柱体含有)	良好 (中心黒色)						[7.8]					面土還元
30	埴谷	M-7	8	高坪	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					[7.4]		3.2			充填法	棒状の押圧あり。
31	埴谷	M-6		高坪	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好					[5.9]		3.6			接合法	
32	埴谷	M-6		高坪	2.5Y8/3 黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好 (中心黒色)					[9.3]		3.4				
33	埴谷	L-6	336	高坪	10YR8/2 灰白色	粗密 (在地)	良好					[8.8]		3.4			充填法	透孔(3方向?)
34	埴谷	L-6	238	高坪	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地?) 石膏多。	良好					[7.8]		3.1	[14.0]		充填法	
35	埴谷	M-6		鉢	内 10YR8/3 浅黄褐色 外 黒色	密 (在地?)	良好	[16.4]	[11.1]			[6.3]						
36	埴谷	M-6		鉢	内 7.5YR8/6 浅黄褐色 外 7.5YR7/6 黄褐色	粗密 (在地)	良好		[15.1]			[10.4]						
37	埴谷	M-6		鉢	内 7.5YR8/6 浅黄褐色 外 7.5YR7/6 黄褐色	粗密 (在地)	良好		[15.1]			[10.4]						外周彫りあり
38	埴谷	M-6		高坪	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					[7.0]		3.1			接合法	
39	埴谷			高坪	7.5YR8/6 黄褐色	粗密 (在地)	良好					[6.9]		2.7				しぼり痕あり
40	埴谷	M-6	67	高坪	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好 (中心黒色)					[6.7]		3.0			接合法	
41	シノ7 A22			高坪	10YR8/4 浅黄褐色	密 (在地)	良好					[6.1]		3.3			充填法	
42	埴谷	M-6		高坪	7.5YR8/6 黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					[6.2]		3.1			充填法	
43	埴谷	M-6		小型土器	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好	[7.8]		2.0		[4.35]	0.7	3.2			接合法 (中央)	
44	埴谷			小型土器	5YR7/6 褐色	密 (在地? 石膏多)	良好	[6.7]				[4.8]						
45	埴谷			小型土器	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地、黒色角柱体含有)	良好	[7.0]	[9.6]			[4.48]						
46	埴谷	L-6		小型土器	10YR8/2 灰白色	密 (在地)	良好	[5.9]	[7.0]			[4.45]						
47	埴谷			小型土器	N5/灰色	密 (在地)	やや不良	[6.0]				[4.2]						
48	埴谷	H-3	3	小型土器	N6/灰色	密 (在地)	やや不良			0		[3.85]	0.7					
49	シノ7			小型土器	N3/暗灰色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	やや不良				[2.3]	[3.85]						
50	埴谷			台付	10YR8/3 浅黄褐色	粗 (在地、黒色角柱体含有)	良好					[4.3]			[11.0]			
51	埴谷			台付鉢	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好					[3.9]			8.2			
52	埴谷	M-6		台付	10YR8/3 浅黄褐色	密 (在地)	良好				[9.6]	[2.4]						
53	埴谷	L-6	332	甕	10YR8/2 灰白色	粗 (在地)	良好				9.7~10.3	[2.6]	0.85					
54	SI02 付託			甕	2.5Y7/2 灰黄色	粗 (在地)	良好			11.1		[2.3]	0.9					
55	埴谷			甕	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好			4.4		[5.2]	0.5					
56	埴谷			甕?	N5/灰色	粗密 (在地?)	やや不良			3.0		[2.05]	0.7					
57	埴谷			甕?	10YR8/2~7/1 灰白色	粗密 (在地?)	良好			4.2		[2.7]	1.5					
58	埴谷	M-6		甕?	2.5Y8/3 黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好			3.0		[2.0]						焼成後の穿孔あり。
59	埴谷	K-8	3	甕?	2.5Y8/2 灰白色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好			4.0		[2.35]						焼成後の穿孔あり。
60	埴谷	M-6	24	甕?	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好			3.6		[3.55]	1.2					
61	埴谷			甕?	2.5Y6/1 黄灰色	粗密 (在地)	良好			3.8		[1.5]						焼成後の穿孔あり。
62	埴谷	K-9	3	甕?	内 5Y6/1 灰色 外 7.5YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好			1.7		[3.15]						焼成後の穿孔あり。
63	埴谷	M-5	5	甕?	10YR7/4 に近い黄褐色	粗密 (在地)	良好			2.5		[2.8]	1.4					
64	埴谷	M-8		甕?	10YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地、黒色角柱体含有)	良好			2.2		[4.2]						
65	埴谷			甕?	2.5Y7/1 灰白色	粗密 (在地)	良好			2.0		[2.95]	1.35					
66	シノ1		34	甕?	内 2.5Y7/2 灰黄色 外 2.5Y7/4 浅黄褐色	粗 (在地、黒色角柱体含有)	良好			1.8		[4.1]	2.45					
67	埴谷	F-9	24	把手	10YR8/4 浅黄褐色	粗 (輸入?)	良好 (中心灰色)											
68	埴谷	M-7	5	把手	7.5YR8/4 浅黄褐色	粗密 (在地?)	良好											
69	埴谷	K-10	1	蓋	10YR8/3 浅黄褐色	粗密 (在地)	良好					[2.35]						
石器																		
番号	遺物名	Gr	取り上げ番号	器種	石 材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考								
70	埴谷			砥石	Rh	[10.7]	6.25	4.7	446.78									
71	埴谷			凹石	An	7.35	8.25	2.4	175.82									
72	埴谷	L-6	11	石鏝?	Aq	4.6	2.6	0.8	8.68									

A 遺跡 包含層出土遺物 2

鉄 器		番号	遺構名	Gr	取上げ番号	器 種	材 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考
73	埋込	L-6	217			不明形状鉄製品		12.85	0.67	0.53	2.94	

C 遺跡 包含層出土遺物

土 器																
番号	遺構名	取上げ番号	器 種	色 調	胎 土	焼 成	口 径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	胴径	脚径	接合の種類	備 考
74		1149	蓋	10YR8/4 浅黄褐色	粗密(在地、褐色角柱体含有)	良好	[14.0]				(8.0)					
75		448,649,698	無縁蓋	5Y3/1 オリーブ黒色	粗密(在地)	やや不良	[12.2]				(4.8)					
76		863,865	甕	5Y4/1 灰色	密(在地、褐色角柱体含有)	やや不良	[12.3]				(2.6)					
77		308	甕	10YR8/4 浅黄褐色	粗密(在地)	良好	[15.3]				(4.0)					
78		772	甕	5Y5/1 灰色	粗(在地?)	やや不良	[14.9]				(2.8)					
79		394,400	甕	5YR7/4 濃い褐色	粗密(在地、褐色角柱体含有)	良好	[15.4]				(3.0)					
80		1000	蓋	N3/褐色	密(在地)	やや不良				(5.1)	(1.45)					
81		823	甕?	N5/灰色	密(在地、褐色角柱体含有)	やや不良				(3.0)	(2.9)					
82		1309	甕?	2.5Y5/1 黄灰色	粗(在地)	良好				2.6	(2.4)	1.0				
83		538	甕?	10YR8/4 浅黄褐色	粗密(在地)	良好	[2.4]				(1.55)					
84		859	甕?	5Y4/1 灰色	粗密(在地)	やや不良	[3.0]				(2.0)					
85		968	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密(在地?)	良好					(5.85)		3.2		接合法?	
86		1005	高坏	10YR8/3 浅黄褐色	密(在地、褐色角柱体含有)	良好					(6.3)		3.2		接合法	透孔4方向
87		114	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					(6.6)		2.9		充填法及び接合法	
88		1229	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					(6.35)		3.1			
89		996	高坏	2.5Y5/3 黄褐色	粗密(在地)	良好					(7.0)		3.0		接合法	
90		1223	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					(7.6)		3.7		充填法	
91		568	高坏	5Y5/1 灰色	密(在地)	やや不良					(5.35)		3.4		接合法	
92		763	高坏	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					(7.5)		3.0		接合法	
93		1226	高坏	5Y5/1 灰色	密(在地)	やや不良					(9.2)		3.9		充填法及び接合法	
94		238	器台	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					(2.8)			[17.5]		
石 器																
番号	遺構名	取上げ番号	器 種	材 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考							
95		508	環石	Sh	10.5	(6.2)	2.6	242.57								
96		693	凹石	Sh	(6.5)	3.75	3.0	39.21								
玉 類																
番号	遺構名	取上げ番号	器 種	材 質	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考							
97	表層		管玉	10YR8/2 オリーブ灰色	Gt	1.38	0.45	0.4								

D 遺跡 包含層出土遺物

番号	地区	取上げ番号	器 種	色 調	胎 土	焼 成	口 径	最大口径	底径	胴部径	器高	底の厚さ	胴径	脚径	接合の種類	備 考
98	I区	266	蓋	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好		13.5	0	[6.5]	[11.0]	1.0				
99	II区	88	蓋	7.5Y4/1 灰色	密(在地?)	やや不良					[2.45]	0.6			充填法 or 輪台法	
100	I区	268	高坏	10YR2/4 濃い黄褐色	粗密(在地?)	やや不良	[19.1]		5.9		[11.7]		3.7	12.2	充填法	図上復元
101	II区	91	高坏	10YR2/3 濃い黄褐色	密(在地)	良好					[2.15]		3.5		充填法	
102	I区		高坏	10YR8/4 浅黄褐色	密(在地)	良好					[11.2]		3.1		接合法	透孔4方向

まとめ

前節までは事実報告であり、本節にて遺跡群における補足及び時期についての検討を行うものとする。

【A 遺跡】

遺跡内に展開する遺構の特徴的なこととしてあげられるのは、2個単位での細分が可能なものがあるということである。大型竪穴住居（SI01・SI02）は遺跡内に50mほど離れて作られ、基本的に平坦面よりやや下がったところに立地している。SI01は三回立て替え、SI02は二回立て替えが行われており、住居の敷地面積は類似するものの、施設はやや異なった形状をもつ。また、最終様相もSI01は焼失家屋、SI02遺物多量廃棄と異なる。では、この2棟は同時に建っていたのであろうか。出土遺物を検討してみよう。SI01Aの床面遺物は、山陰系甌1及び大型甕1、擬凹線を施す甕4、有段高坏3、結合器台1、有段小型壺2、鉢1、台付鉢1点がみられ、使用時の組成を考えさせる出方である。SI02Aの床直上及び柱穴土坑内遺物は直口短頸壺がめだち、次いで鉢・高坏がみられ、甕は口縁部しか残存しないものがみえるだけである。ここでは、詳細な土器編年の説明はひかえるが、最終段階のSI02出土遺物は相対的にSI01最終段階のものとは古相と考えられる。あくまでも想定に過ぎないが、竪穴住居跡はSI02→SI01と移行したものである。この想定を軸としてA遺跡の遺構変遷を検討する。

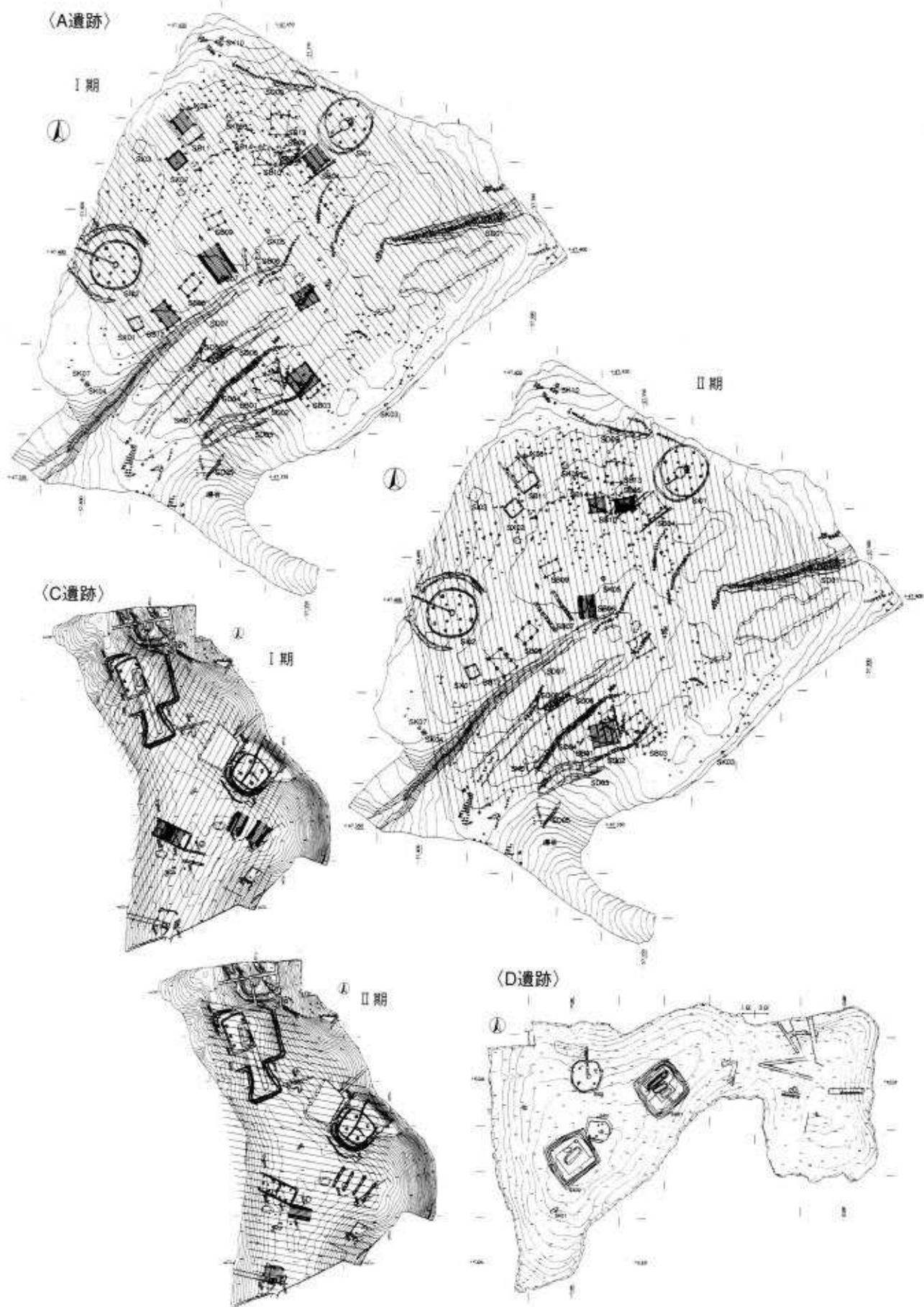
おおまかに、SI02、SI01の存続期間をI期・II期と区分し、それに追従する形で、掘立柱建物跡の変遷を浜崎氏の建物組成分類¹⁾を参照して検討するものとする。掘立柱建物跡は計14棟みられ、その中には布掘建物2棟を含む。高床式倉庫と考えられるものは、布掘建物2棟と「柱穴が太く、柱穴間隔、柱列がしっかりしているもの」としてSB05・SB08・SB09・SB12があげられる。正形状の床をもち、面積が25㎡を越えるものとしては、SB01・SB03の2棟があげられ、いずれも柱穴が小さい。この2棟に関しては、竪穴住居跡と機能的に重なる部分があるものと考えている。これらを出土遺物や廃絶状況、切り合い等組合せを検討し、I期、II期に区分すると、主軸が合う群が2パターンみられることがわかる。その中で主軸に沿わないものが、SB08・SB09・SB10・SB13とみられる。これらが、どちらの時期に該当するものであろうか。SB08はSB07・SB12と隣接し、同時並存が難しく、II期以降とし、SB09もSB07と隣接するため、同様にII期と仮定する。SB10はSB05と切り合いをもち、SB05より新しいため、SB05以降となり、またSB05はSB04とも切り合いをもつため、SB04→SB05→SB10の順序が想定できる。よって、SB10はII期以降と仮定する。SB13は切り合いも土器の検討もできず、まったく不明瞭なものであるが、現段階では、II期以降に伴うと仮定しよう。また、方形周溝状遺構(SX01・SX02)は、35mほど離れたところに作られている。これらは同様な役割があったものとし、一時期ずつ伴っていたものと思われる。出土遺物による詳細な時期や切り合いは確認できなかったが、SX02はSB11とほぼ同じ主軸をもつため、同様にI期のものとし、SX01はII期に伴うものと仮定する（第142、143図参照）。

結果、I期には、竪穴住居1・小型竪穴住居1・布倉1・倉庫1~2・方形周溝状遺構1・掘立柱建物3~4棟が並存していたものと思われる。II期には、竪穴住居1・布倉1・倉庫2~3・方形周溝状遺構1・掘立柱建物3~4棟が併存していたものと思われる。また、倉庫と掘立柱建物の比率に関しては、竪穴住居の建替えを考慮すると、第142図のように継続する建物はなく、布倉1・倉1・掘立柱建物が2棟ずつ構成されていたとも推察できる。なお、相対的に建物はI期→II期にかけて、縮小方向で施設としても簡易傾向であることが伺われる。

		I-1段階	I-2段階	II-1段階	II-2段階
A 遺跡	竪穴住居	SI02B →	SI01B → SI02A(廃)	SI01C →	SI01A(焼失)
	小型竪穴住居			SI03(廃)	
	掘立柱建物		SB03(廃)	SB01 → SB13 → SB14	SB10
		SB11 → SB04 → SB02 →			
	倉庫		SB07(廃) SB05A →	SB06 → SB05B → SB08 →	SB09
		SB12 →			
	不明	SX02 →		SX01 →	
C 遺跡	竪穴住居			SI01(廃)	
	小型竪穴住居		SI02(廃)		
	掘立柱建物	SB03 → SB07A →	SB02 →	SB04 → SB07B →	
倉庫	SB06 →	SB05 →	SB01 →		
D 遺跡	竪穴住居			SI02(廃)	
G 遺跡	湧水地				

* I、II期の細分はあくまでも推移をみやすく考えたもので、明確な時間差は示していない。なお、→は、基本的に継続を意味する。

第142図 遺溝の変遷想定図



第143図 主軸による遺跡変遷図 (S=1/1,200)

【C 遺跡】

A 遺跡に比し、丘陵の平坦面が狭く、建物数は少ない。では、これらを A 遺跡で捉えた時間軸に沿って検討しよう。SI01 は A 遺跡 SI02 同様、多量な土器廃棄が行われており、出土遺物から A 遺跡 SI02 と比し、やや後出に廃棄されたものと思われる。SI02 は A 遺跡 SI02 と同様な時期の廃棄と思われ、それぞれ廃棄時期がずれるものと思われる。掘立柱建物跡は計 4 棟みられ、A 遺跡同様、主軸が合う群が 2 パターンみられることがわかる。出土遺物が少なく廃棄時期が不明瞭であるため、主軸を中心に仮定せざるおえない。SB02 は SB03、SB01 と切り合いをもち、SB03→SB02→SB01 (布倉) という前後関係が成り立つ。SB02・03 はほぼ主軸は同じくして立てられているため、建替えの可能性が高い。また、それと主軸を合わせるものとして、布倉が 2 棟並立しており、これらが、1 棟ずつ併存していたものと思われ、これらを I 期とする。また SB01 (布倉) は SB04 と軸を同じくするため、おそらくセットになるのであろう。よって、これらを II 期と仮定する。SB07 は、どちらとも主軸を違えて離れたところに存在している。建替えが行われている等から、I 期～II 期にかけて存在していたものとして仮定しよう。

結果、細分して考えると、I 期は竪穴住居 1・小型竪穴住居 1・掘立柱建物 2・布倉 1 棟で構成され、II 期には竪穴住居 1・掘立柱建物 2・布倉 1 棟と縮小した形で構成されたものと推察する。

【D 遺跡】

竪穴住居 (SI02) 1 棟のみ検出されている。土器の出土は、完形のもの数が数点であり、柱穴にも土器廃棄がみられないことから、A 遺跡 SI02・C 遺跡 SI01 とは違い、A 遺跡 SI01 に類似した廃絶方法と思われる。おそらく、床面には、A 遺跡ほどの炭化材はみられなかったものの、3～4 層にはカーボン・焼土が多く含有することから焼失家屋である可能性も否めない。この住居の時間的位置付けには苦慮したが、A 遺跡 SI02 より新しく、A 遺跡 SI01 ほどは時期が下らないものと推察する。

以上、遺跡ごとに遺構構成を検討した。この遺構の変遷からみた I 期・II 期を現在の編年に沿わせると、おおよそ両者とも月影式という範疇にはいるものと思われる。I 期は甕の体部上半にみられる二枚貝による肩部の刺突、高坏脚の跳ね上がりをもつもの、擬凹線を施す有段器台など、前時期である法仏式の名残がみられる時期である。II 期は前時期の様相が払拭され、典型化した月影式の時期と考えられる。

当時期における八里向山遺跡群 (A・C・D・G 遺跡) はほぼ同時に存続する時期もみられながらも、継続幅が長いのは A 遺跡であり、建物構成の充実度合い、鉄製品の保有、施設において大規模なものがみられる等において A 遺跡の優位性が伺われる。当遺跡は縄文時代以降、突如、弥生時代後期末期に遺跡が形成される。この現象は近隣の河田山遺跡群にもみられ、梯川中流域の中で、低地から丘陵上へ当時期に移動する一群がみられるのであろう。また、紙面の都合上詳細な周辺の遺跡との関係に触れることができなかったが、安氏の論考による水系ごとの群は有益であると思われ¹⁾、当遺跡は鍋谷川流域である B 群に該当する。さすれば、低地にあたる千代オオキダ、千代・能美、千代デジロ A、一針 B・C 遺跡、牛島ウハシ、佐野 A 遺跡などの動向と関連・連動しているのであろう。低地にも集落が築かれている中、丘陵上への居住がなにを意味するのか、検討の余地は大いに残る。また、弥生期の集落の廃絶後、間において形成される古墳群と同時期に併行する千代・能美遺跡との関連も今後の課題としたい。

註

1. 浜崎悟司 1998「第 7 章 調査結果の検討」『石川県小松市八幡遺跡 I』(社) 石川県埋蔵文化財保存協会
2. 安 英樹 2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」『石川県埋蔵文化財情報』(財) 石川県埋蔵文化財センター

引用参考文献

- 楠 正勝 1996「第 5 章 まとめ」『西念・南新保遺跡 IV』金沢市教育委員会
- 田嶋明人他 1993「報告 北陸南西部」『日本考古学協会 1993 年度新潟大会 シンポジウム 2 東日本における古墳出現期過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 安 英樹他 1995「寺井町千代デジロ A 遺跡・大長野 A 遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 石川県立埋蔵文化財センター 1990「小松市高堂遺跡」
- 川畑 誠 2000「第 2 章 第 2 次の成果」『小松市平面梯川遺跡 第 2・3 次発掘調査報告書』(財) 石川県埋蔵文化財センター



写真1 A遺跡北西部分垂直全景（西方からの航空写真）

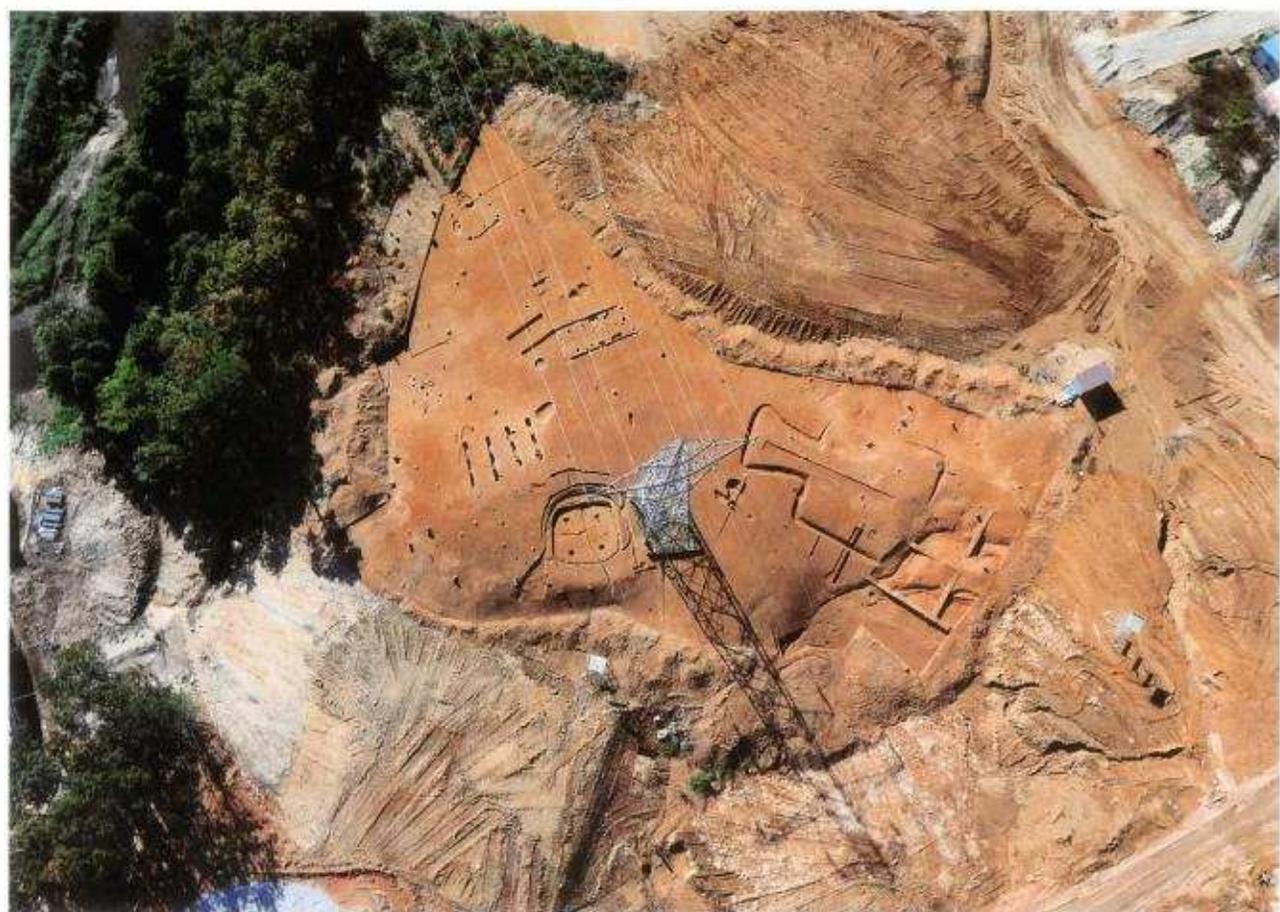


写真2 C遺跡垂直全景（東方からの航空写真）



写真3 D遺跡垂直全景（南方からの航空写真）



写真4 A遺跡 SI01 出土土器

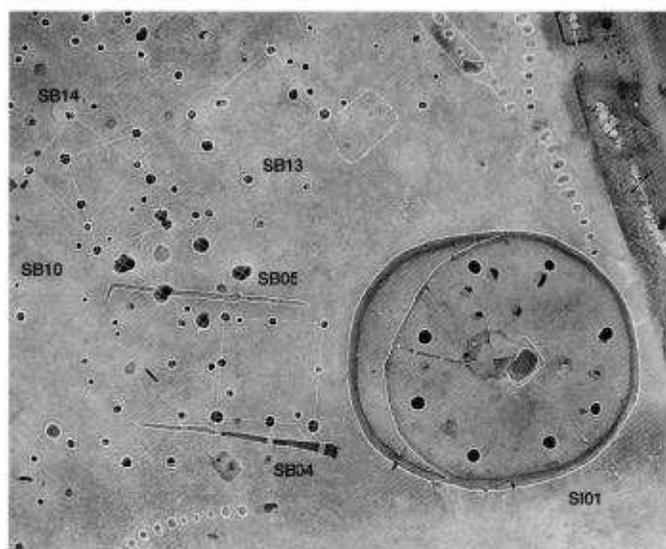


写真5 A遺跡 SI01 と周辺の掘立柱建築跡（南東方から）



写真9 A遺跡 SI01 床面 甕出土状況

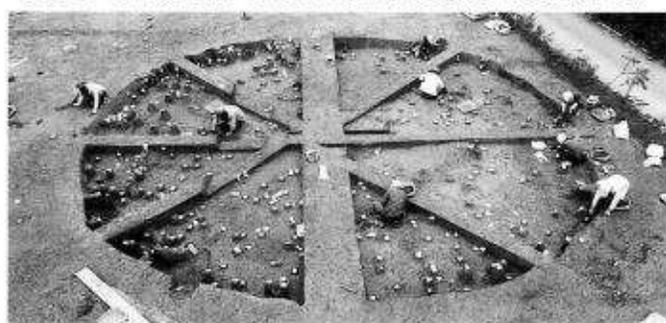


写真6 A遺跡 SI01 遺物検出状況（南方から）

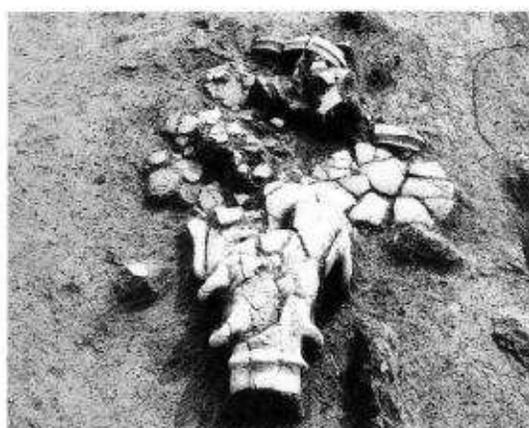


写真10 A遺跡 SI01 床面 山陰系甕出土状況

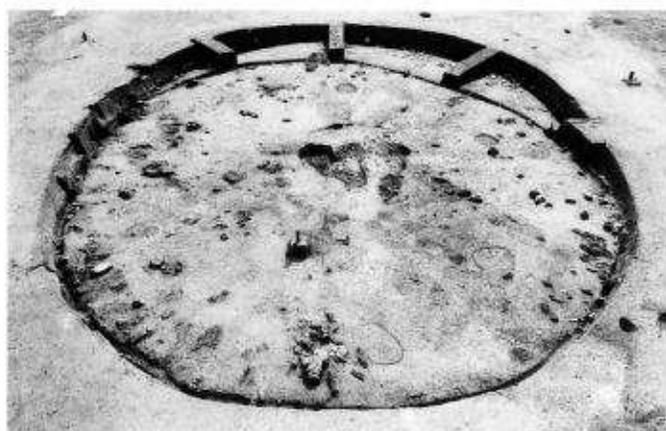


写真7 A遺跡 SI01 床面遺物検出状況（北東方から）



写真11 A遺跡 SI01 出土袋伏鉄鑿出土状況

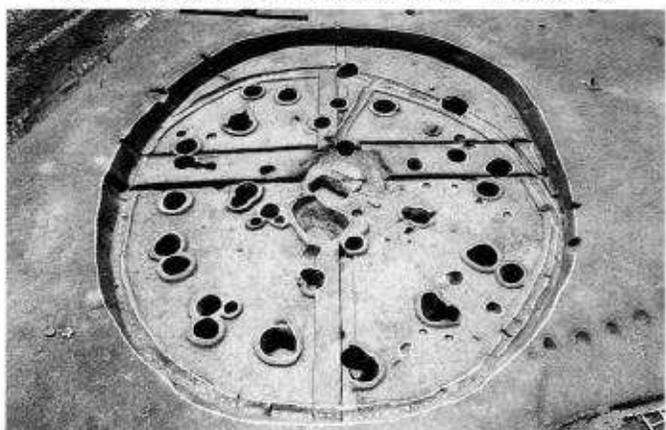


写真8 A遺跡 SI01 完掘状況（北東方から）



写真12 A遺跡 SI01 土層断面A-A'（東方から）



写真13 A遺跡 SI02 全景 (北西方から)



写真14 A遺跡 SI02 遺物出土状況 (西方から)



写真15 A遺跡 SI02 完掘状況 (北東方から)



写真16 A遺跡 SI02内 SK01 遺物出土状況

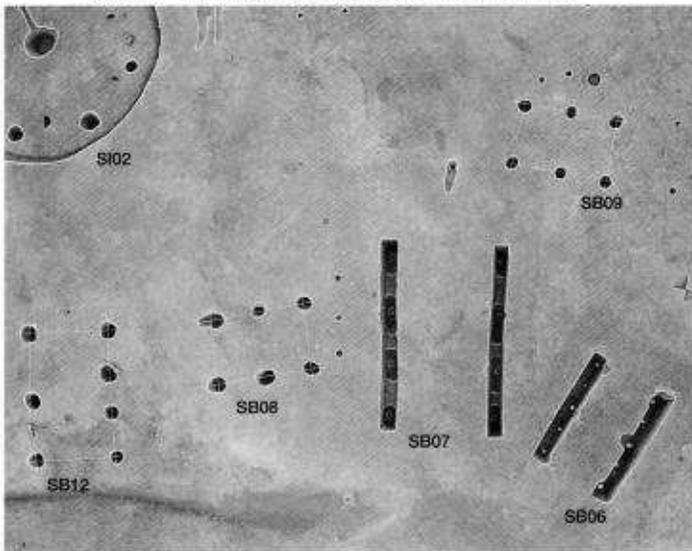


写真17 A遺跡 SI02 南東側 掘立柱建物跡群 (南東方から)

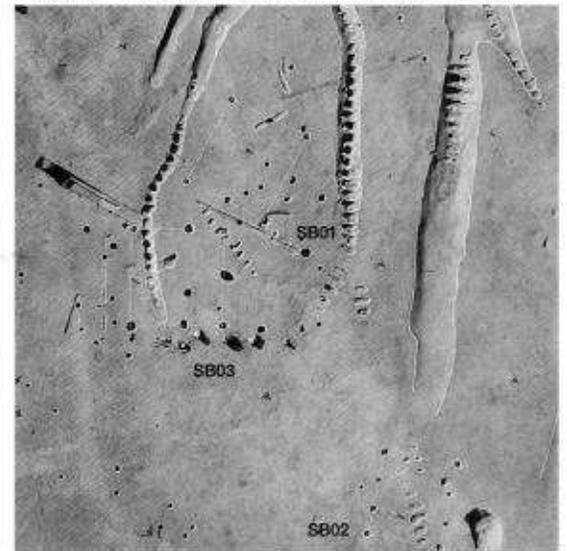


写真18 A遺跡 掘立柱建物跡群 (北東方から)



写真19 A遺跡 SB05 検出状況 (南方から)



写真20 A遺跡 SB03 完掘状況 (北方から)

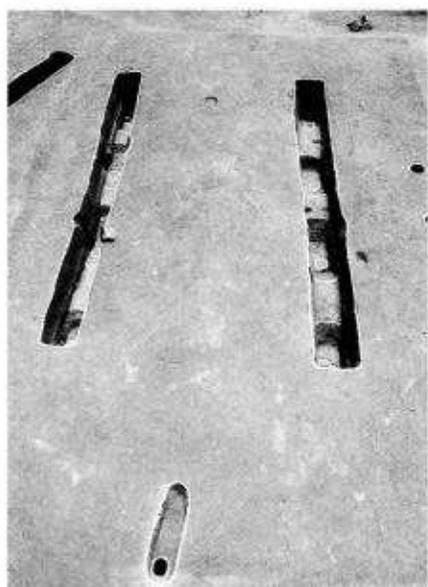


写真 21 A 遺跡 SB07 完掘状況(北東方から)

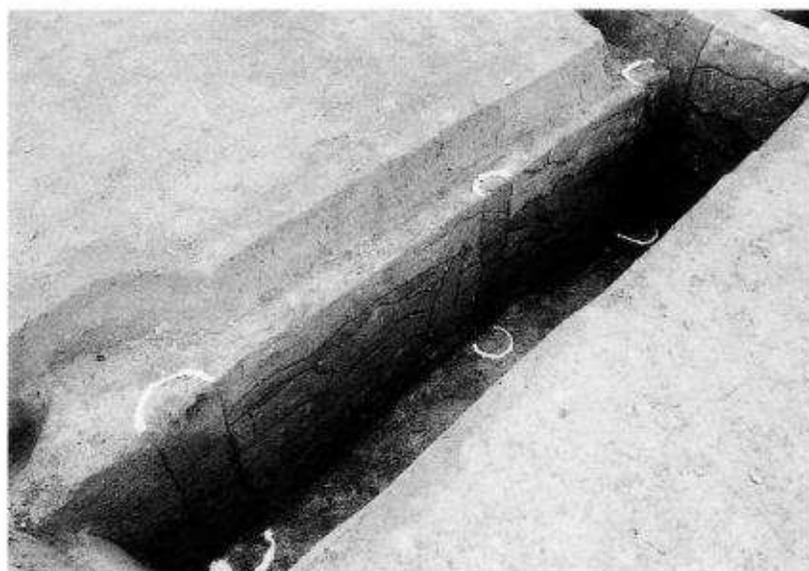


写真 22 A 遺跡 SB06 東側土層断面 (南東方から)



写真 23 A 遺跡 SB12 完掘状況 (南東方から)



写真 24 A 遺跡 SB11 周溝土層断面 a-a' (南西方から)

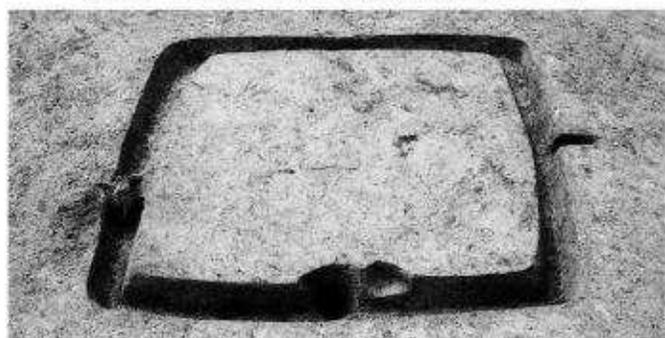


写真 25 A 遺跡 SX01 完掘状況 (東方から)



写真 26 A 遺跡 SX01 土層断面 B-B' (南東方から)

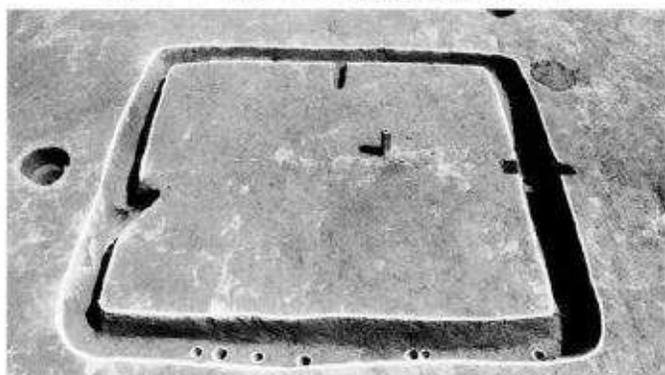


写真 27 A 遺跡 SX02 完掘状況 (北西方から)



写真 28 A 遺跡 SK07 完掘状況 (西方から)



写真 29 C 遺跡 SI01 完掘状況 (北東方から)



写真 30 C 遺跡 SI01 遺物出土状況 (北西方から)

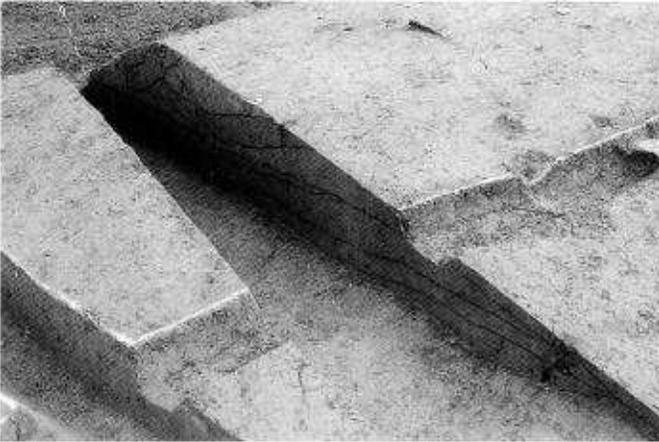


写真 31 C 遺跡 SI01 盛土土層断面 A-A' (北西方から)



写真 35 C 遺跡掘立柱建物跡 (西方から)



写真 32 C 遺跡 SI01 内 P2 遺物出土状況

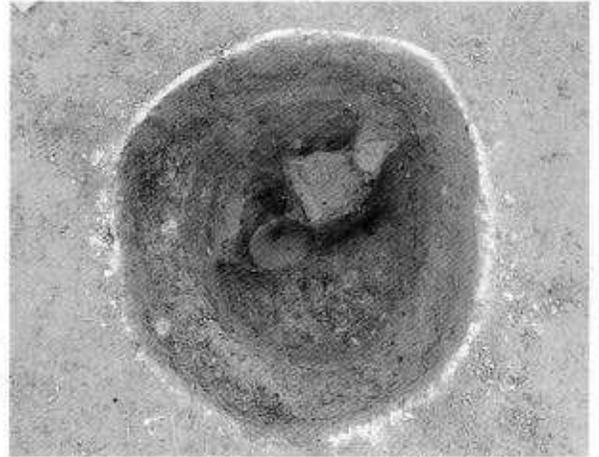


写真 33 C 遺跡 SI01 内 P3 遺物出土状況



写真 34 C 遺跡 SI02 遺物出土状況 (南東方から)

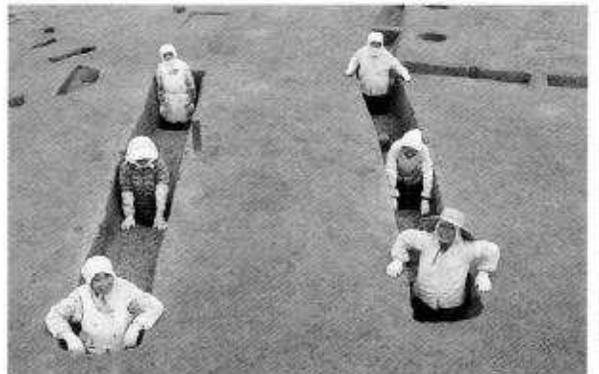


写真 36 C 遺跡 SB01 完掘状況 (東方から)

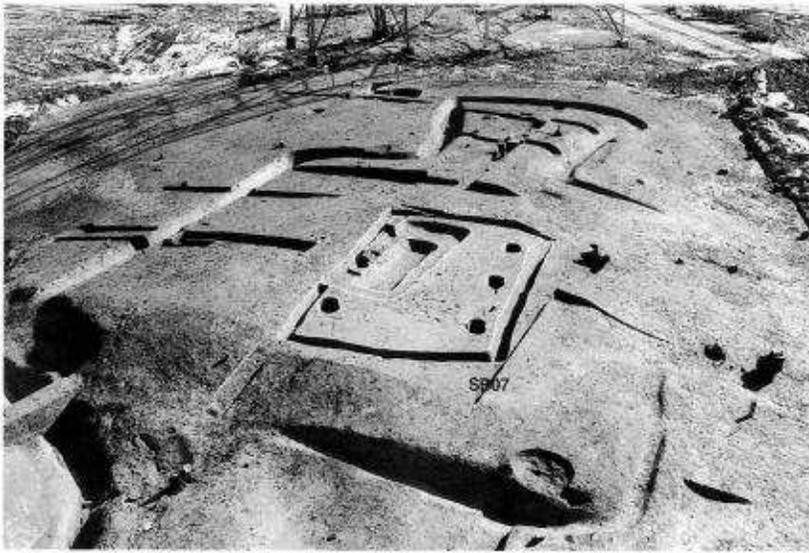


写真 37 C遺跡 SX01・SB07 完掘状況 (北西方から)



写真 40 C遺跡 SX01 東側周溝土層断面 A'-A



写真 41 C遺跡 SX01 東側周溝土層断面 B'-B

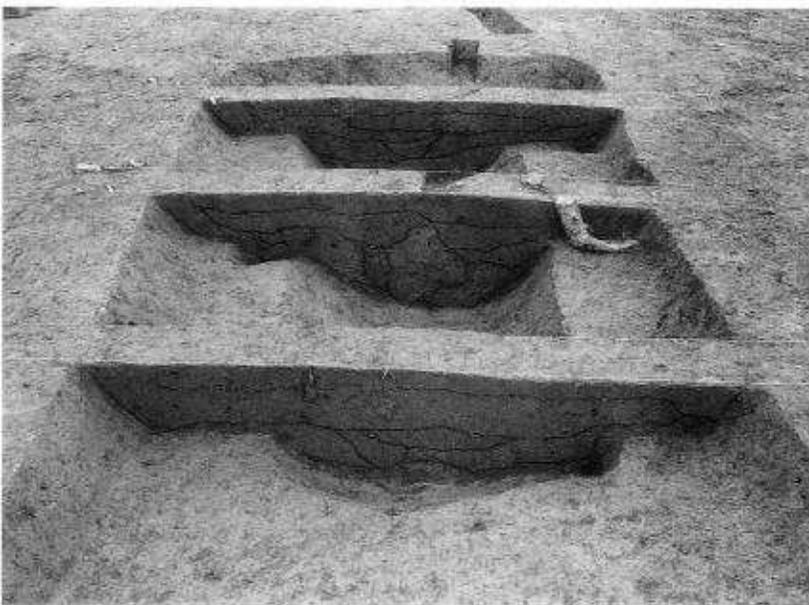


写真 38 C遺跡 SX01 主体部土層断面 (南方から)



写真 42 C遺跡 SX01 東側周溝土層断面 C'-C

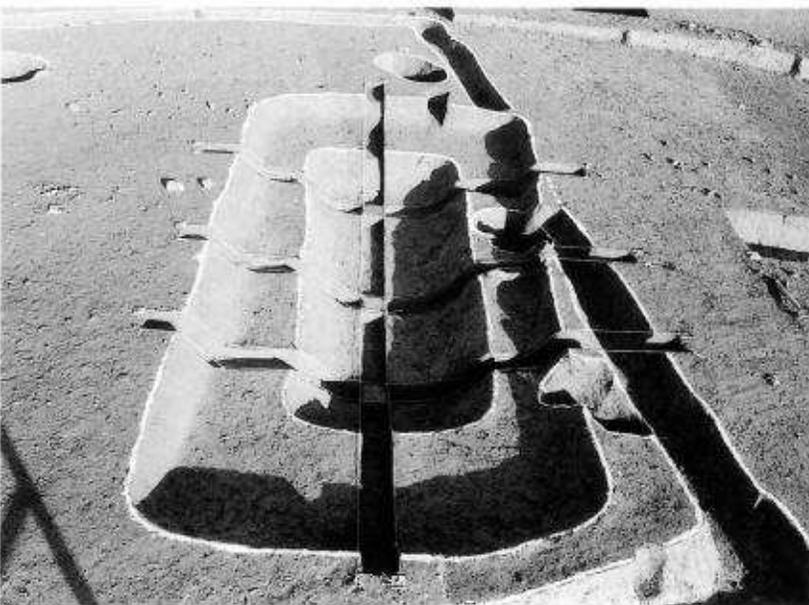


写真 39 C遺跡 SX01 主体部完掘状況 (南方から)



写真 43 C遺跡 SX01 西側周溝土層断面 C'-C



写真 44 C遺跡 SX01 西側周溝土層断面 D-D'



写真 45 D 遺跡 SI02 遺物出土状況 (北東方から)



写真 46 D 遺跡 SI02 土層断面 A-A' (西方から)



写真 48 D 遺跡 SX01 周溝内供献遺物出土状況 (南西方から)



写真 49 D 遺跡 SX01 完掘状況 (北東方から)



写真 47 D 遺跡 SI02 床面遺物出土状況



写真 50 D 遺跡 SX01 周溝内管玉出土状況



写真 51 D 遺跡 SX01 周溝内高坏出土状況



写真 52 D 遺跡 SX01 北側周溝 A-A' (北西方から)



写真 53 D 遺跡 SX01 周溝内供献遺物出土状況 (南東方から)



写真 55 D 遺跡 SX01 第1主体土層断面 (南西方から)



写真 54 D 遺跡 SX01 主体部完掘状況 (南西方から)



写真 56 D 遺跡 SX01 第2主体土層断面 (南西方から)

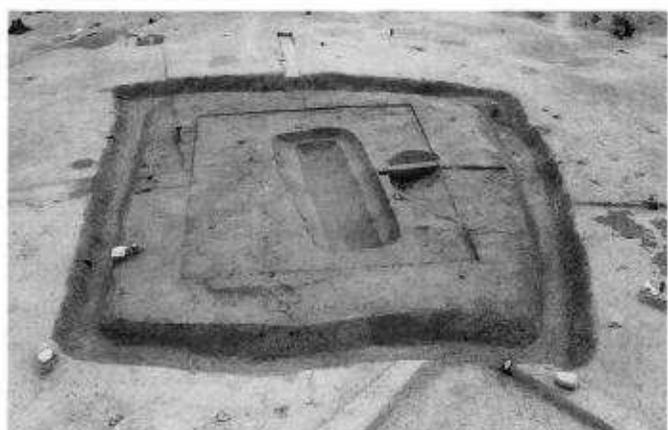


写真 57 D 遺跡 SX02 完掘状況 (北東方から)



写真 58 D 遺跡 SX01 第1主体上面遺物出土状況 (北西方から)



写真 59 D 遺跡 SX01 主体部完掘状況 (北東方から)

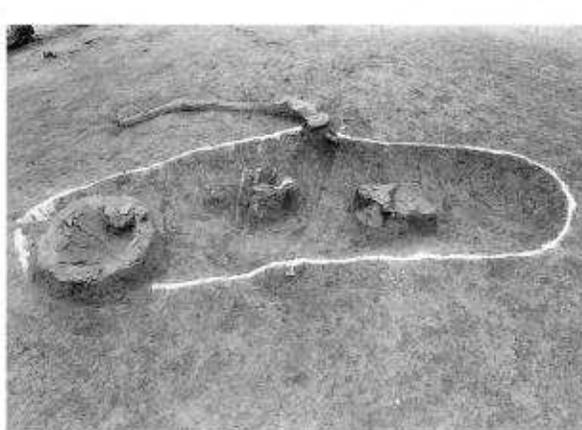


写真 60 D 遺跡 SK01 遺物出土状況 (南東方から)

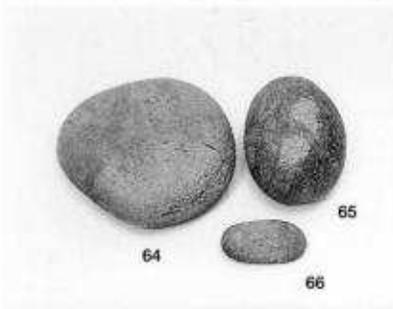
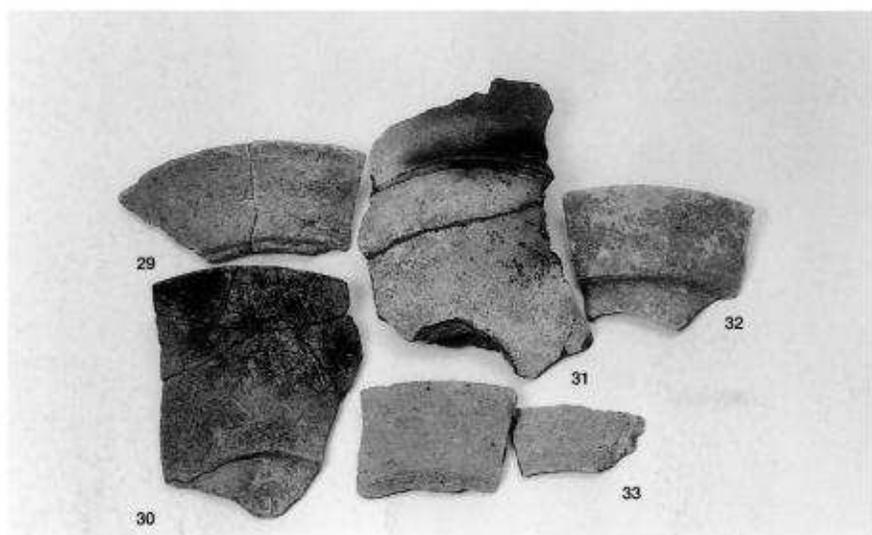
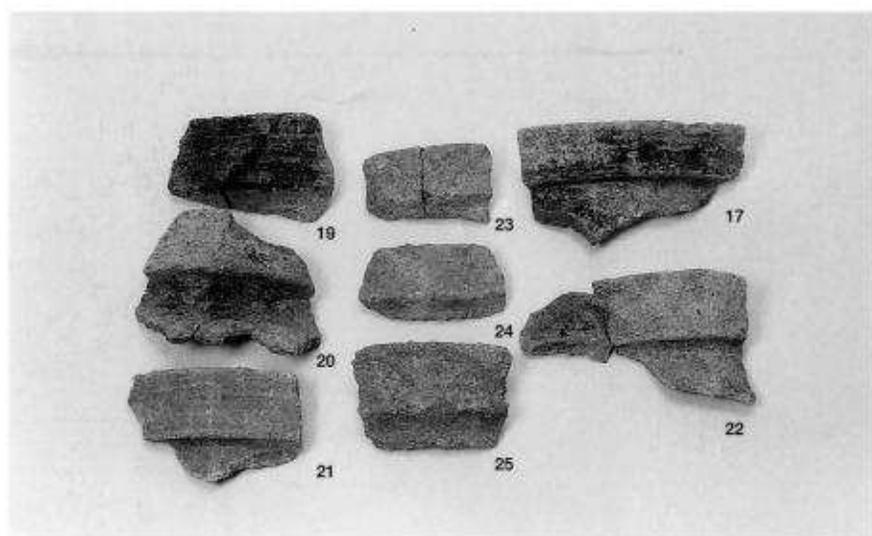


写真 61 A 遺跡 SI01 出土遺物

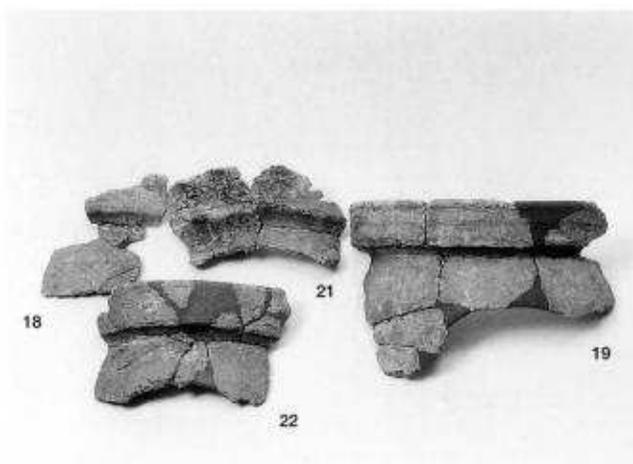


写真 62 A 遺跡 SI02 床直上出土土器

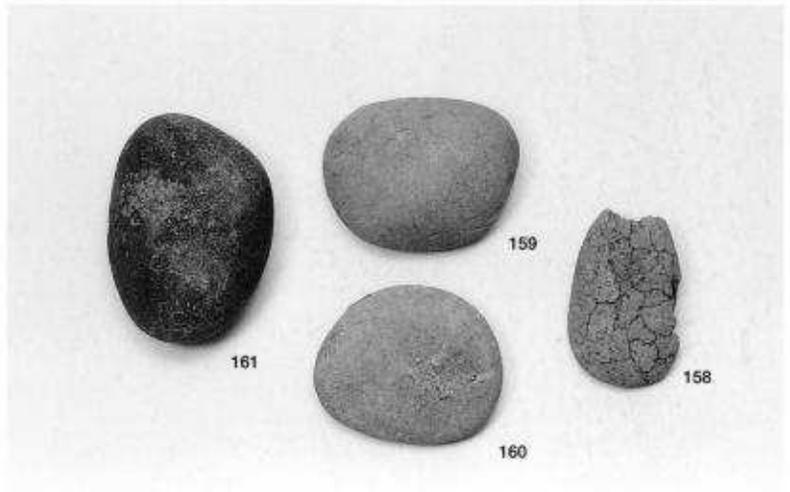
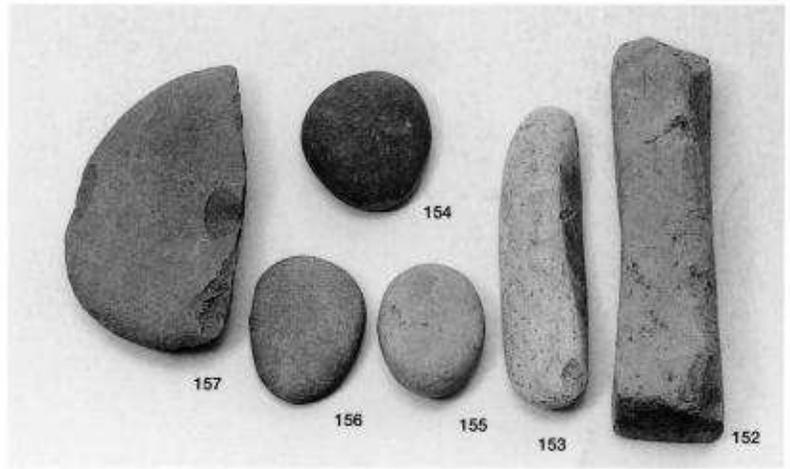
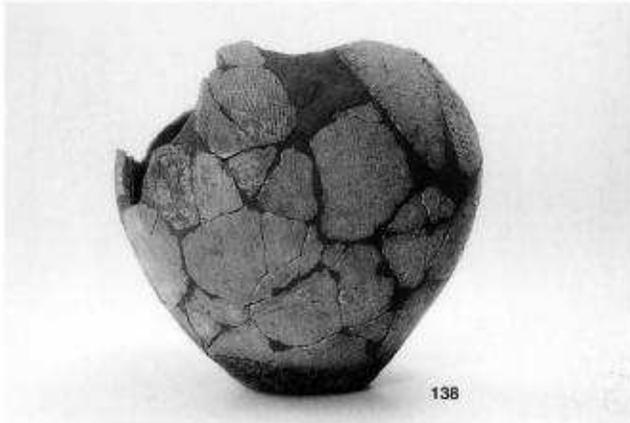
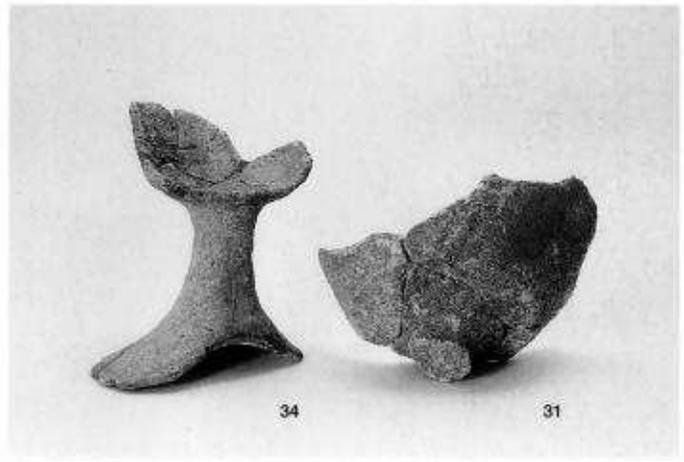


写真 63 A 遺跡 SI02 出土遺物 1

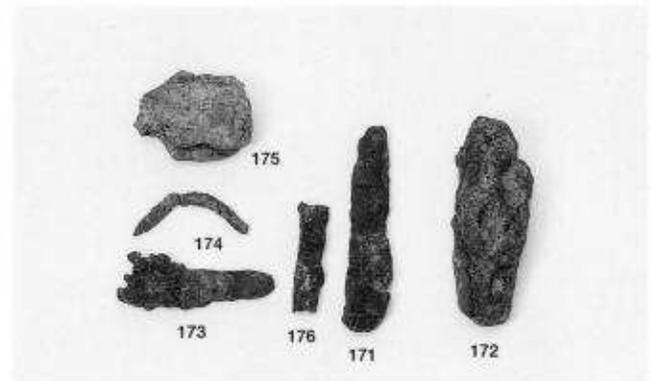
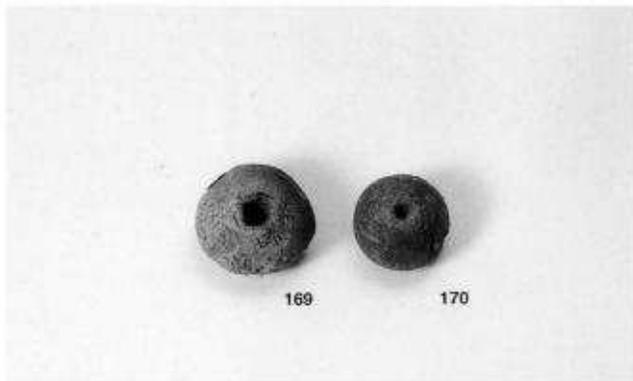
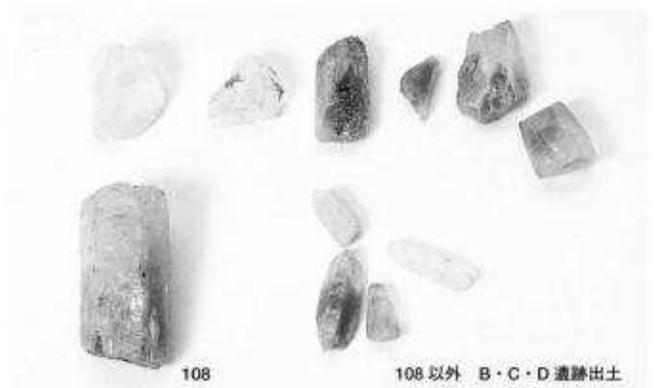
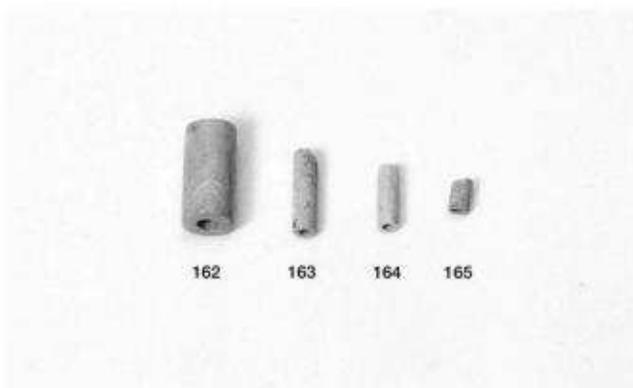


写真 64 A 遺跡 SI02 出土遺物 2



写真 65 A 遺跡 SI03 出土土器

写真 66 A 遺跡 SB03 P1・P4 出土石器



写真 67 A 遺跡 SB03 P3 出土炭化米



写真 68 C 遺跡 SI01 出土土器

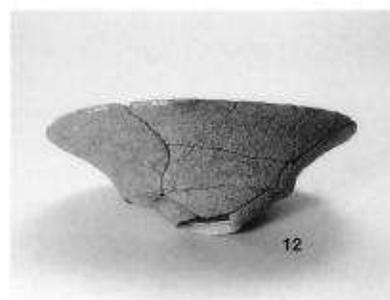


写真 69 C 遺跡 SI01 床直上出土土器



写真 70 C 遺跡 SI01 柱穴内出土土器

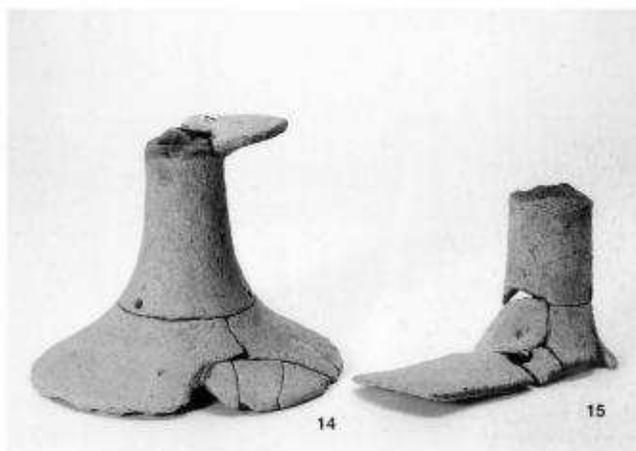


写真 71 D 遺跡 SI02 出土遺物



写真 72 D 遺跡 SI02 出土土器



写真 73 C 遺跡 SI02 出土土器

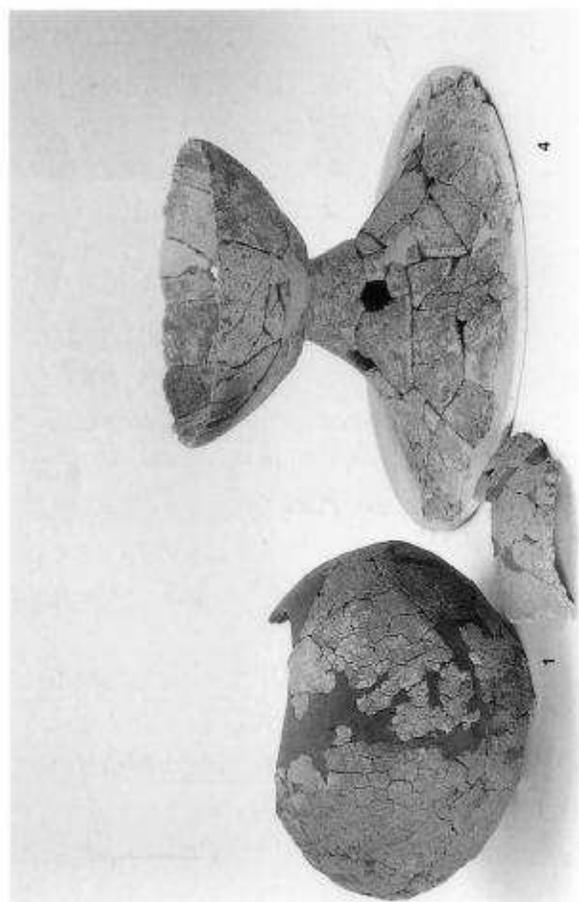


写真 74 D 遺跡 SX01 出土器

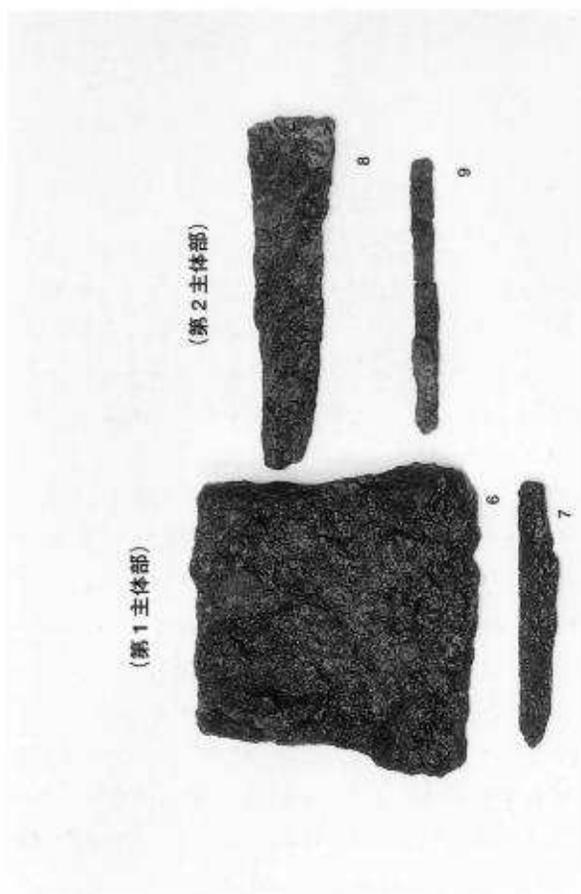


写真 75 D 遺跡 SX01 第1・第2主体部内出土鉄製品

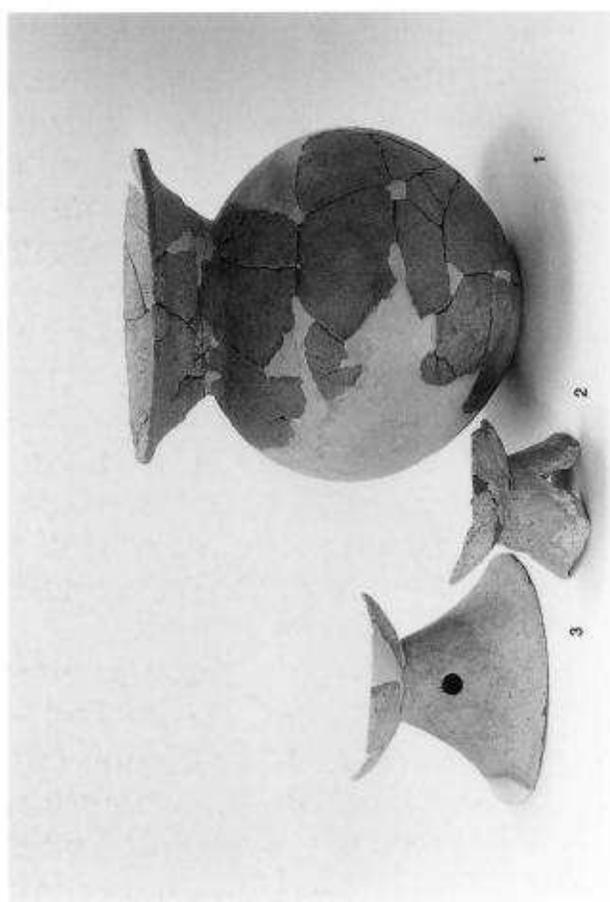


写真 76 D 遺跡 SX02 出土器

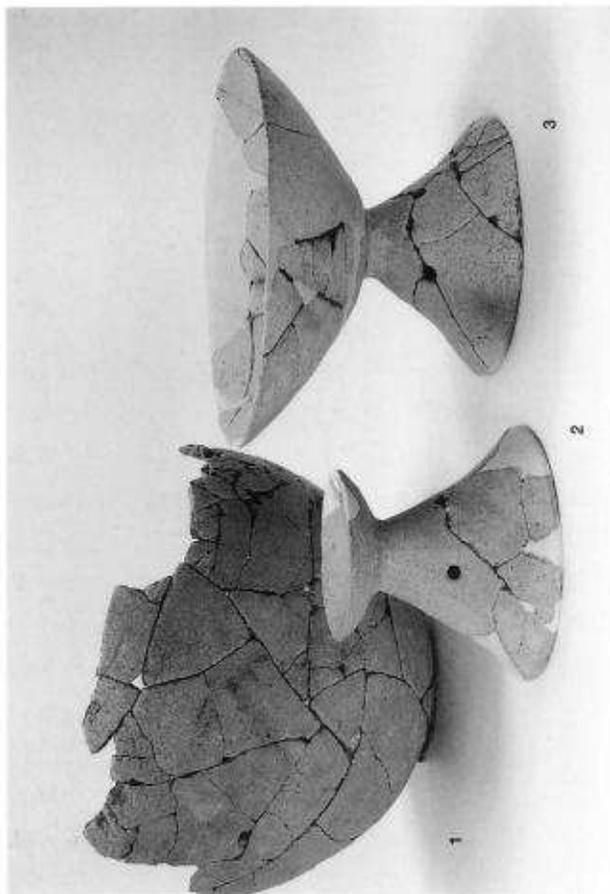


写真 77 C 遺跡 SK01 出土器